

下之宮高俣遺跡

下之宮高俣遺跡

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一六

群馬県伊勢崎土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2016

群馬県伊勢崎土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 下之宮高俣遺跡

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う  
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2016

群馬県伊勢崎土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



1-1区1面 近世屋敷全景(北より)



1-1区3面 中世館虎口遺構(西より)

## 序

国道354号玉村伊勢崎バイパスは、東毛広域幹線道路の一部として、大河川利根川の架橋である五料橋の交通渋滞緩和と、通行時間の短縮等をはかるものとして、新たに利根川に伊勢玉大橋を架橋して、建設された道路であります。玉村伊勢崎バイパスは、既に、平成26年8月に暫定2車線で供用が開始され、現在は更なる交通量の増加に対応するため、4車線化の工事が進められております。

下之宮高俣遺跡は、玉村伊勢崎バイパス建設予定地に在って、利根川の右岸、伊勢玉大橋の直ぐ西側に広がる遺跡です。遺跡は平成22年10月から平成24年4月にかけて、発掘調査を行いました。そして調査成果として、古墳時代前期の集落や、平安時代の畑、中世の館を含む遺構群、江戸時代の寛保2(1742)年の大洪水等の被災畑や天明3(1783)年の浅間山の大噴火により被災した屋敷や耕地、あるいはその後の耕地復旧にかかわる遺構群と、そして数々の出土遺物がありました。特に、天明3年の浅間山の大噴火で発生した泥流により被災した屋敷建物は、地域の建築史研究に、そして、良好な状態で確認された15世紀の所産と見られる館の構造は、地域に留まらず、全国的な城郭研究に資する資料となりましょう。

此の度、下之宮高俣遺跡の発掘調査成果をまとめ、埋蔵文化財発掘調査報告書として上梓することとなりました。発掘調査から報告書作成まで、ご指導、ご協力を賜りました群馬県伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、玉村町教育委員会生涯学習課、地元関係各位に感謝申し上げます。そして本報告書が今後地域の歴史を知るうえで広く活用されますことを願い、序とします。

平成28年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 中野三智男



## 例 言

- 1 本書は、平成22・23・24年度国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)に伴い発掘調査された下之宮高尨(しものみやたかま)遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 下之宮高尨遺跡は、群馬県佐波郡玉村町下之宮11-2、12-1・2、15-1・5-11、29-1・4-6、32-1-8、33-1、43、45、46、48-2、238、239、240、241、242、230・233・234、245、246、247番地に所在する。
- 3 事業主体は群馬県伊勢崎土木事務所である。
- 4 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
- 5 発掘調査の期間と体制は次の通りである。

調査期間 平成22年10月1日～平成23年3月31日(履行期間：平成22年9月1日～平成23年3月31日)

調査担当 調査部調査課 上席専門員 谷藤保彦、調査研究員 吉口晃敬

遺跡掘工事割請負 スナガ環境測設株式会社

委託 地上測量：株式会社測研

調査期間 平成23年7月1日～平成24年3月31日(履行期間：平成23年3月31日～平成24年3月31日)

調査担当 調査部調査課 上席専門員 石守 晃、主任調査研究員 笹澤泰史

遺跡掘工事割請負 スナガ環境測設株式会社

委託 地上測量：株式会社シン技術コンサル 航空写真撮影：技研測量設計株式会社

調査期間 平成24年4月1日～平成24年4月30日(履行期間：平成24年3月30日～平成25年3月31日)

調査担当 調査部調査2課 上席専門員 井川達雄、専門調査役 山下歳信

遺跡掘工事割請負 株式会社

委託 地上測量：アコン測量設計株式会社 土器洗浄・注記作業：山下工業株式会社

- 6 整理事業の期間と体制は次の通りである。

整理期間 平成25年2月1日～平成25年3月31日(履行期間：平成24年12月1日～平成25年3月31日)

整理担当 資料部資料2課 主任調査研究員 石田典子

整理期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日(整理履行期間：平成26年4月1日～平成27年3月31日)

整理担当 資料部資料1課 上席専門員 石守晃、資料2課 補佐(総括) 佐藤元彦

整理期間 平成27年11月1日～平成28年1月31日(整理履行期間：平成27年3月31日～平成28年3月31日)

整理担当 資料部資料1課 上席専門員 石守 晃

- 7 本書作成の担当者は次の通りである。

編 集 石守 晃、石田典子、佐藤元彦

本文執筆 第2章第1・2節は大本紳一郎が執筆したものに石守晃が加除筆した。4章第1節は生物考古学研究所、第2節は宮崎重雄、第3～5節はパレオ・ラボ、第5章第2節は村田敬一(群馬県文化財保護審議委員)が執筆し、その他本文は石守が執筆した。

デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)

遺物観察 縄文・弥生土器：谷藤保彦(上席専門員)・石坂 茂(専門調査役) 石器・石製品：岩崎泰一(資料統括)・石田典子(主任調査研究員) 土師器・須恵器：神谷佳明(専門調査役) 中近世陶磁器・土器：大西雅広(上席専門員)・藤巻幸男(専門調査役) 金属製品・製鉄遺物・炭化物：関邦一(補佐(総括))

遺物写真撮影 岩崎泰一・石田典子・津島秀章・石守 晃・神谷佳明・藤巻幸男・関 邦一

- 8 石材同定は飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)に依頼した。
- 9 発掘調査諸資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 10 発掘調査及び本書作成に当たり諸氏、機関よりご協力、ご指導、ご教示を得た。記して感謝の意を表します。  
(組織・個人別 五十音順 敬称略)

伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、玉村町教育委員会生涯学習課、玉村町下之宮地区自治会、  
秋本太郎、飯森康広、井沼千秋、千田嘉博、中島直樹、西谷徳雄、原 眞、原 幹雄、宮武正登、村田敬一、  
茂木 渉、八巻孝夫

## 凡 例

- 1 下之宮高塚遺跡の遺構平面図は世界測地系国家座標(座標第IX系)を用いて測量した。遺構図の中で使用した北方位はすべて座標北で、真北方向角は $+0^{\circ}24'20.82''$ である。
- 2 遺構図の中で使用した北方位は、すべて座標北を示している。
- 3 遺構の方位は、座標北を基準として主軸角度等の傾きを計測した。
- 4 遺構平面図の縮尺は、原則として以下を使用した。但し遺構によっては異なる縮率を用いたものもある。  
竪穴住居 1:80、炉 1:40、溝 1:250、土坑 1:80、ピット 1:60、畑・復旧畑・復旧溝群 1:250  
遺構断面図の縮尺は、竪穴住居・炉・竈・土坑・ピットは平面図に同じ。溝・畑・復旧畑・復旧溝群 1:120
- 5 遺物図の縮尺は以下の通りである。  
土器 1:3 1:4、石器・石製品 1:3 1:4、鉄製品 1:3
- 6 遺物番号は出土遺構ごとの連番で、番号は本文・挿図・表・写真図版とも一致する。
- 7 図中で使用したスクリーンパターンやマークは、以下のことを表す。  
遺構平面図 硬化面 粘土 炭化物 酸化鉄 ローム  
 灰黄褐色粘質土 灰褐色粘質土 視乱  
遺物実測図 内黒 粘土 酸化土砂  
石器実測図 ● 潰れ部 摩耗 すり面
- 8 本書では必要に応じて、浅間山A軽石(As-A)、浅間山B軽石(As-B)、浅間山C軽石(As-C)、浅間山板敷黄色軽石(As-YP)、榛名一二ツ岳渋川火山灰(Hr-FA)、榛名一二ツ岳渋川軽石(Hr-FP)などの主要テフラを略号のみで表記した。
- 9 1区の土層や土器の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。土層の色調番号の表記は、紙数の関係で割愛した。

# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査に至る経過	1
第1節 調査に至る経過	1
(1) 国道354号と玉村伊勢崎バイパス	1
(2) 試掘調査	4
(3) 発掘調査に至る経過	4
第2節 調査の方法	4
(1) 調査区の設定	4
(2) 調査面の設定	5
(3) 調査方法	6
(4) 標準土層	6
第3節 発掘調査の経過	7
第2章 地理的および歴史的環境	11
第1節 遺跡の位置と周辺の地形	11
(1) 地理的環境	11
(2) 地質的環境	11
第2節 遺跡周辺の歴史環境	14
(1) 旧石器時代	14
(2) 縄文時代	14
(3) 弥生時代	16
(4) 古墳時代	20
(5) 奈良・平安時代	20
(6) 中・近世	21
第3章 発見された遺構と遺物	23
第1節 1面の調査	23
(1) 1面の概要	23
(2) 1面上位面	23
(a) 1区	23
復旧溝群(23)、土坑(26)	
(b) 2区	29
復旧溝群(29)、復旧畑(31)	
(c) 3区	32
道路(32)、区画溝(32)、復旧溝群(33)、土坑(38)	
(d) 4区	38
道路(38)、溝(43)、復旧溝群(43)、集石(44)	
(e) 5区	44
道路(44)、溝(46)、復旧畑(46)	
(f) 1面の遺構外の出土遺物	48
(1) 1面下位面	48
(a) 1区	48
屋敷(48)、建物(49)、土塁(55)、井戸(63)、屋敷内の土坑(63)、屋敷内の出土遺物(63)、道路(63)、溝(63)、畑・区画溝(77)、竹藪(77)	
(b) 2区	80
畑(80)	
(c) 3区	80
道路(80)、集石(80)	
第2節 2面の調査	81
(1) 2面の概要	81
(2) 2面上位面	81
畑(81)、壑穴(82)	
(3) 2面中位面	82
畑(82)	
(4) 2面上位面	82
溝(82)、畑(86)、壑穴(82)、井戸(86)、土坑(87)、集石(87)	
(5) 2面の遺構外の出土遺物	89
第3節 3面の調査	94
(1) 3面の概要	94
(2) 館内の遺構群	97
土塁(97)、堀(106)、溝(122)、土坑・ピット(123)、虎口遺構(124)	
(3) 館外の遺構群	124
土坑・ピット(124)	
(4) 3面の遺構外の出土遺物	127
第4節 4面の調査	128
(1) 4面の概要	128
(2) 4面の遺構と遺物	128
溝(128)、畑(128)、土坑(128)	
(3) 4面の遺構外の出土遺物	128
第5節 5面の調査	135
(1) 5面の概要	135
(2) 5面の遺構と遺物	135
壑穴住居・溝状遺構群(135)、掘立柱建物(157)、壑穴遺構(161)、塹土(163)、土坑・ピット(163)	
(3) 5面の遺構外の出土遺物	167
第6節 縄文時代・弥生時代の遺物	167
第4章 自然科学分析	169
第1節 自然科学分析の委託	169
第2節 下之宮高俣遺跡出土中世人骨	170
第3節 下之宮高俣遺跡の馬歯	173
第4節 下之宮高俣遺跡出土木材および炭化材の樹種同定	175
第5節 下之宮高俣遺跡出土の灰の植物珪酸体	178
第6節 下之宮高俣遺跡出土の大型植物遺体	179
第5章 総括	183
第1節 概要	183
第2節 下之宮高俣遺跡の建築遺構	184
参考文献	



# 挿図目次

第1図	下之宮高野道跡と群馬県の地勢	1	第55図	1区111～117号畑	84
第2図	下之宮高野道跡位置図	2	第56図	1区5号溝の直跡と23・36・39・119号畑	85
第3図	試掘調査成果	3	第57図	1区2・3・20・30号溝と出土遺物	88
第4図	下之宮高野道跡の調査区	5	第58図	1区19・24号溝と199号土坑	89
第5図	下之宮高野道跡の標準土層	7	第59図	1区2・3号竪穴(上)、2号土塁上面と5号溝の直跡及び37・118号畑	90
第6図	周辺地形分析図	12	第60図	1区2号土塁上面の集石と5号溝の直跡	91
第7図	周辺道跡分布図	15	第61図	1区3・4号井戸と出土遺物	92
第8図	1-1区1面全体図	24	第62図	1区1号集石と2面の道構外出土遺物	93
第9図	1-2・3区、2-5区1面全体図	25	第63図	1-1区3面全体図	94
第10図の1	1区1・3-6号復旧溝群	26	第64図	1区2号土塁と5・11号溝	95-96
第10図の2	1区1・3-6号復旧溝群断面	27	第65図	1区2号土塁下下7・8号ピットと2号土塁出土遺物(1)	98
第11図	1区2号復旧溝群	28	第66図	1区2号土塁出土遺物(2)	99
第12図	1区7号復旧溝群	29	第67図	1区2号土塁の断面と出土遺物(3)	100
第13図	1区8・9号復旧溝群	31	第68図	1区5号溝出土遺物(1)	101
第14図	1区6～8号土坑と出土遺物	32	第69図	1区5号溝出土遺物(2)	102
第15図	2区1～3号復旧畑	33	第70図	1区10・11号溝出土遺物	103
第16図の1	2区1～3号復旧溝群平面	34	第71図	1区6・7・8・16号溝と出土遺物(1)	104
第16図の2	2区1～3号復旧溝群断面	35	第72図	1区6・8号溝出土遺物	105
第17図	3区1区画溝と1・2号復旧畑	36	第73図	1区12-15号溝	106
第18図	3区2区画溝と3号復旧畑	37	第74図	館内土坑出土遺物(1)	107
第19図	3区1号土坑と出土遺物	38	第75図の1	館内土坑・ピット(1)と出土遺物(2)	108
第20図	3区2号道路、3・4号区画溝、4・5号復旧畑と1号土坑	39	第75図の2	館内土坑・ピット土層断面(1)	109
第21図	4区1号道路と1・4・5号復旧畑	40	第76図	館内土坑・ピット(2)と出土遺物(3)	110
第22図	4区1号道路、1号溝と2・3・6・7号復旧畑	41	第77図	館内土坑・ピット(3)と出土遺物(4)	111
第23図	4区1号道路と8～10号復旧畑	42	第78図の1	館内土坑・ピット(4)と出土遺物(5)	112
第24図	4区1号集石	43	第78図の2	館内土坑・ピット(4)	113
第25図	5区1号溝と2号復旧畑	44	第79図の1	館内土坑・ピット(5)	114
第26図	5区1号道路、2号溝と3・4号復旧畑	45	第79図の2	館内土坑・ピット(5)土層断面	115
第27図	5区1号復旧畑	46	第80図の1	館内土坑・ピット(6)	116
第28図	1～5区1面道構外出土遺物	47	第80図の2	館内土坑・ピット(6)土層断面	117
第29図	1区1号屋敷A・M軒石上面	50	第81図の1	館内ピット(7)	118
第30図	1区1号屋敷A・M軒石下面	51	第81図の1	館内ピットの土層断面(7)と館内土坑出土遺物(7)	119
第31図	1区1・2号建物と土塁、及びダイドコロ	52	第82図	館内土坑・ピット(8)と出土遺物(8)	120
第32図	1区1号建物	53	第83図	館外の土坑とピット(1)と出土遺物(1)	125
第33図	1区2号建物	54	第84図	館外の土坑(2)	126
第34図	1区1号建物掘り方と3号建物	56	第85図	1区3面の道構外出土遺物	127
第35図	1区1号建物礎石	57	第86図	1区4面全体図	129
第36図	1区1号建物出土遺物(2)	58	第87図	1区40・41号畑	130
第37図	1区1号建物出土遺物(3)と2号建物出土遺物(1)	59	第88図	1区41・126～129号畑	131
第38図	1区2号建物出土遺物(2)	60	第89図	1区126～129号畑断面と4号溝	132
第39図	1区1号土塁北西部と出土遺物(位置は62頁第41図参照)	60	第90図	1区27・28・29号溝(1)	133
第40図	1区1号土塁南部(上)と土塁上集石(中)及び3号石組	61	第91図	1区28号溝(2)	134
第41図	1区1号道路と1号土塁	62	第92図	1区5面全景	136
第42図	1区1号土塁2号石組と1区1号井戸	64	第93図	1区1号住居と出土遺物	137
第43図	1区1号井戸出土遺物(1)	65	第94図の1	1区2号住居と出土遺物	138
第44図	1区1号井戸出土遺物(2)及び1～5号土坑と出土遺物	66	第94図の2	1区2号住居土層注記	139
第45図	1区1区画内出土遺物	67	第95図の1	1区3号住居と1号溝状道構群	140
第46図の1	1区1・17・18号溝と1号溝出土遺物及び1～5・22・27・30号畑土層断面	68	第95図の2	1区3号住居土層注記	141
第46図の2	1区17号溝出土遺物及び1～5・22・27・30号畑土層断面	69	第96図の1	1区3号住居掘り方と出土遺物(1)	142
第47図の1	1区18号溝及び6・7・24～26・28・29・31～34号畑	70	第96図の2	1区3号住居出土遺物(2)	143
第47図の2	1区18号溝及び6・7・24～26・28・29・31～34号畑土層断面	71	第97図の1	1区4号住居	145
第48図の1	1区1号溝及び8～18号畑	72	第97図の2	1区4号住居土層断面と出土遺物	146
第48図の2	1区8～18号畑土層断面	73	第98図	1区5号住居と出土遺物	148
第49図	1区(1-2区)19・20号畑	74	第99図の1	1区6号住居	150
第50図	1区(1-3区)21号畑	75	第99図の2	1区6号住居出土遺物	151
第51図	1区1号竹藪と出土遺物	78	第100図の1	1区7号住居	152
第52図	2区1・2号区画溝と1～11号畑、3区1号集石	79	第100図の2	1区7号住居出土遺物	153
第53図	1-1区2面全体図(左:上・中位面 右:下位面)	81	第101図	1区8号住居と3号溝状道構群及び出土遺物	155-156
第54図	1区101～110号畑	83	第102図の1	1区9号住居と3号溝状道構群	158
			第102図の2	1区9号住居掘り方と土層注記及び出土遺物	159
			第103図	1区9号住居と3号溝状道構群	160
			第104図	1区1号竪立建物と出土遺物	162

第105図	1区1号竪穴と出土遺物(1)及び1号焼土	164
第106図	1区1号竪穴出土遺物(2)	165
第107図	1区1号竪穴出土遺物(3)及び5面の土坑群	166
第108図	1区5面のピット群	167
第109図	1区5面の遺構外の出土遺物と縄文・弥生時代の出土遺物	168
第110図	第221号土坑出土人骨の南の萌出状態推定	172

第111図	中世鹿戸口遺構概要図	183
第112図	主家からの方位第129図	185
第113図	附属建物の配置形式	186
第114図	礎石実測断面図	187
第115図	柱間寸法図	189
第116図	復元平面図	189

## 本文写真目次

1-1区2面2期調査風景	8
1-2区1面台風被災状況	9
1-1区3面3期調査風景	10
写真1 カスリーン台風被災状況写真	13
写真2 1区128号土坑出土人骨(頭蓋骨)	170
写真3 1区128号土坑全景	170
写真4 1区128号土坑出土人骨(出土高咬合面観)	170
写真5 1区221号土坑出土人骨出土状況	171

写真6 1区221号土坑出土永久高咬合面観	171
写真7 1区221号土坑出土人骨出土状況	171
写真8 1区221号土坑出土顎上顎左切歯のエナメル質減形成	172
出土馬歯写真	173・174
図版1 下之宮高野遺跡出土材の光学顕微鏡 および走査型電子顕微鏡写真	177
図版2 下之宮高野遺跡出土の灰の植物珪酸体	181
図版3 下之宮高野遺跡から出土した大型植物遺体	182

## 表目次

表1 周辺遺跡一覧	17
表2 1区1面上位面復旧溝群一覧	27
表3 4区1面復旧堀一覧	40
表4 1区1面下位面As-A下堀一覧	76
表5 2区1面下位面As-A下堀一覧	76
表6 1区1面上位面計測値	76
表7 1区2面堀一覧	87
表8 3面館内土坑一覧	109
表9 3面館内ピット一覧	120
表10 3面館外土坑一覧	125
表11 3面館外ピット一覧	125
表12 4面As-B下堀一覧	132
表13 5面上位面一覧	166
表14 5面ピット一覧	167
表15 下之宮高野遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表	172

表16 切南計測値	174
表17 上白土南計測値	174
表18 下白土南計測値	174
表19 下之宮高野遺跡出土木材及び炭化材の樹種同定結果	175
表20 下之宮高野遺跡出土の灰の植物珪酸体	178
表21 下之宮高野遺跡から出土した種実遺体	179
表22 下之宮高野遺跡から出土した葉遺体	179
表23 主家からみた付属建物の建造位置(境町)	185
表24 玉村町の広間型	188
表25 伊勢崎市の広間型	188
表26 藤岡市の広間型	188
表27 客間における2間の柱間内法寸法と建造年代	190
表28 遺物観察表	191
表29 非掲載遺物集計表	219

## 写真目次

Pl. 1	1 1-1区東部1面(上側東)	2 1-1区中～南西部1面(上側東)
Pl. 2	1 1-2・3区1面復旧溝群(南より)	2 1-1区東部1面(北より)
	3 1区1号屋敷(上側東、As-A上面)	4 1区1号屋敷敷As-A清掃状況(南より)
	5 1区1・2号建物土塚遺存状況(北西より)	
Pl. 3	1 1区1号建物(西より)	2 1区1号建物南壁遺存状況(北西より)
	3 1区1号建物竈と排水井(北より)	4 1区1号建物竈と水渠(南西より)
	5 1区1号建物礎石(49)出土状況	6 1区1号建物ダイドコロ付近遺物出土状況
	7 1区2号建物全景(北西より)	8 1区3～5号土坑全景(南より)
Pl. 4	1 1区1号井戸付近全景(南より)	2 1区1号井戸底部砂材出土状況(西より)
	3 1区3号建物全景(西より)	4 1区1号土塼全景(西より)
	5 1区1号道路(南より、As-A上)	6 1区1号溝全景(北より)
	7 1区1号堀全景(南より)	8 1区1号堀足跡(南東寄り)
Pl. 5	1 1-1区中・北西部全景(東より)	2 1区32号堀と9号復旧溝群(横位) (北より)

	3 2区東部全景(西より)	4 2区1号復旧溝群と1号堀(榎石跡) (北東より)
	5 2-2区全景 (北東より)	
Pl. 6	1 2区1号復旧堀全景(南西より)	2 2区2号復旧堀全景(東より)
	3 3区全景(東より)	4 3区北西部(南西より)
	5 3区1号土坑全景(東より)	
Pl. 7	1 4区全景(東より)	2 4区2号復旧堀As-A残存状況(西より)
	3 4区2号復旧堀全景(南より)	4 4区5号復旧堀西部(南より)
	5 4区5号復旧堀東部(南より)	
Pl. 8	1 4区6号復旧堀(東より)	2 4区7号復旧堀(南より)
	3 5区全景(東より)	4 5区3号復旧堀(東より)
	5 5区1・2号道路、2号溝全景(南より)	
Pl. 9	1 1-1区東部・北部2面(上側東)	2 1-1区南西寄り2面(上側東)
Pl. 10	1 1区2・3号溝全景(西より)	2 1区19号溝全景(東より)
	3 1区23号堀全景(南より)	4 1区3号井戸全景(西より)
	5 1区4号井戸全景(東より)	

	6	1区2号壱穴全景(土側東)	3	1区6号住居掘り方全景(西より)
	7	1区2号土塁上土層断面(北東より)	4	1区7号住居遺物出土状況(南東より)
	8	1区2号土塁近世面表出状況ビ(東より)	5	1区7号住居焼土面分布状況(北西より)
PL.11	1	1-1区東部・北部3面(北西より)	6	1区7号住居全景(南東より)
	2	1-1区中・西南部3面(南西より)	7	1区7号住居掘り方全景(南西より)
PL.12	1	1区館北部(東より)	8	1区8号住居南半部全景(北より)
	2	1区館中央・中西部(東より)	1	1区8号住居北半部全景(南東より)
	3	1区館東部(西より)	2	1区8号住居南半部掘り方等全景(東より)
	4	1区館中南・西南部(東より)	3	1区9号住居遺物出土状況(南より)
	5	1区5号溝中部全景(西より)	4	1区9号住居全景(南より)
	6	1区5号溝西部と橋脚柱穴(東より)	5	1区9号住居掘り方全景(北より)
PL.13	1	1区5号溝・土塁上層断面(東より)	6	1区1号掘立柱建物全景(南より)
	2	1区5号溝南壁除土層断面(東より)	7	1区1号壱穴遺物出土状況(東より)
	3	1区10号溝(左)・11号溝(右)全景(西より)	8	1区1号壱穴遺物出土状況(東より)
	4	1区11号溝埋戻土層(西より)	PL.23	1区1号復旧溝・1号土坑・1号建物(1)・1～5区遺構外
	5	1区11号溝白磁皿出土状況(南東より)	PL.24	1号建物(2)
	6	1区12号溝全景(南より)	PL.25	1区1号建物(3)・2号建物・ミングラカ・建物一括・1号土塁・1号井戸
PL.14	1	1区2号土塁全景(南より)	PL.26	1面屋敷内・1・17号溝・6号土坑・2面2号溝・3・4号井戸・集石・洪水槽・遺構外
	2	1区2号土塁中部(北より)	PL.27	3面2号土塁・門
	3	1区2号土塁と土塁痕跡(手前)(東より)	PL.28	3面5・6・10・11号溝
	4	1区2号土塁中部礫崩落状況(西より)	PL.29	3面8・9号溝・40・45・57・58・62・122・128・141・148・195号土坑・33号ピット・遺構外
	5	1区2号土塁石列(北西より)	PL.30	5面1・2・3(1)号住居
	6	1区2号土塁突出部(北西より)	PL.31	5面3(2)・4・5・6(1)号住居
	7	1区2号土塁上層断面(北東より)	PL.32	5面6(2)・7(1)号住居
PL.15	1	1区館虎口全景(土側北)	PL.33	5面7(2)・8・9号住居・1号掘立柱建物
	2	1区館門(北より)	PL.34	5面1号壱穴住居(1)
	3	1区館門下部ピット(西より)	PL.35	5面1号壱穴住居(2)
	4	1区館北部土坑・ピット群(土側南)	PL.36	4面28号溝、5面遺構外、縄文・弥生時代
	5	1区館中央・中西部土坑ピット群(北より)		
PL.16	1	1区館南東部土坑ピット群(土側南)		
	2	1区館南東部寄りピット群(東より)		
	3	1区41号土坑周辺土坑・ピット群(東より)		
	4	1区106・107号土坑上層断面(西より)		
	5	1区148号土坑全景(南より)		
	6	1区306号土坑周辺土坑ピット群(北より)		
	7	1区52・53号土坑全景(南より)		
	8	1区29号溝全景(北西より)		
PL.17	1	1-1区東部4面全景(南より)		
	2	1区27号溝全景(北西より)		
	3	1区40号堀全景(西より)		
	4	1区41号堀全景(北より)		
	5	1-2区4面全景(南より)		
PL.18	1	1-1区中央・中部5面全景(南南東より)		
	2	1-1区南東隅部5面(西より)		
	3	1区1号住居掘り方全景(南より)		
	4	1区2号住居遺物出土状況(西より)		
	5	1区2号住居炭化材出土状況(南西より)		
PL.19	1	1区2号住居全景(西より)		
	2	1区2号住居掘り方全景(南より)		
	3	1区3号住居遺物出土状況(北より)		
	4	1区3号住居遺物出土状況(南西より)		
	5	1区3号住居全景(西より)		
	6	1区3号住居土坑1土層断面(西より)		
	7	1区3号住居掘り方全景(西より)		
	8	1区4・5号住居出土遺物(西より)		
PL.20	1	1区4号住居全景(北より)		
	2	1区4号住居掘り方全景(西より)		
	3	1区5号住居全景(北西より)		
	4	1区5号住居掘り方全景(南より)		
	5	1区5号住居床土・床下土層断面(西より)		
	6	1区6号住居遺物出土状況(西より)		
	7	1区6号住居灰遺存状況(西より)		
	8	1区6号住居中部部灰堆積状況(北東より)		
PL.21	1	1区6号住居全景(西より)		
	2	1区6号住居貯蔵穴付近(北東より)		

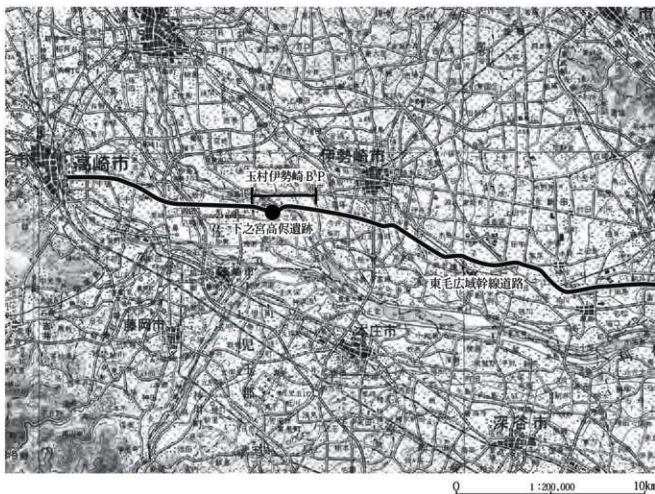
## 第1章 調査に至る経過

### 第1節 調査に至る経過

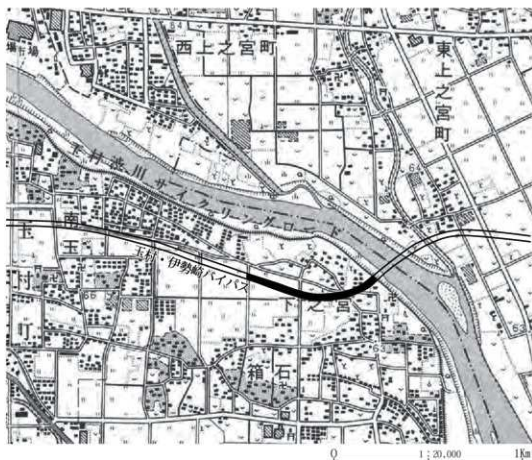
#### (1) 国道354号と玉村伊勢崎バイパス

一般国道354号(以下「国道354号」とする)は、北関東の東西を結ぶ主要幹線道路のひとつである。国道354号は、昭和49年(1974)11月に政令364号により、館林市-高崎市間の路線として指定された一般国道であり、その後、幾度かの路線変更を経て、現在は群馬県高崎市と茨城県牟田市を結ぶ、全長172.3kmの道路となっている。

一方、国道354号は、群馬県にとって、県南部に在る、西毛(群馬県西部)の高崎市と、中毛(同中南部)の伊勢崎市、東毛(同東部)の太田市及び館林市、そして県東端の邑楽郡板倉町を結ぶ幹線道路、東毛広域幹線道(東毛広



第1図 下之宮高俣遺跡と群馬県の地勢(S=1/200,000 国土地理院「宇都宮」平成18年発行を使用)



第2図 下之宮高橋バイパス位置図(S=1/20,000 国土地理院「伊勢崎」平成15年発行を拡大して使用)

幹道の一部として、これを構成している。

さて、幹線道路である国道354号は、昭和40代のモータリゼーションの到来により、各所々で出退勤時を中心とした交通渋滞を引き起こすようになる。その交通渋滞が頻発する箇所の一つに、一級河川利根川を渡河し、西の佐波郡玉村町の中心市街地(旧例幣使街道玉村宿)と、東の伊勢崎市域を繋ぐ五料橋があった。五料橋の渋滞は、玉村町中心市街地が、古くから西の高崎市と東の伊勢崎市、南の多野郡新町(現高崎市)や藤岡市と北の前橋市や勢多郡大胡町(現前橋市)を結ぶ、陸上交通の結節点であるのに対し、玉村町の中心市街地と北の前橋市方面や東の伊勢崎市方面への通行が、大河川の利根川により阻まれ、その渡河点が、上述の五料橋と、玉村町の中心市街地の北方に在る、群馬県道24号高崎伊勢崎線(以下「県道高崎伊勢崎線」とする)の架橋である福島橋の二箇所に限られたという要因のためであった。

このうち、福島橋は、東西を結ぶ県道高崎伊勢崎線、そして南北を結ぶ群馬県道11号前橋玉村線と群馬県道40号藤岡大胡線(以下「県道藤岡大胡線」とする)という3本

の主要地方道の渡河点であったため、交通渋滞が常態化していた。しかし、この方面の交通渋滞は、平成13年(2001)12月に、県道藤岡大胡線のバイパスの開通に伴って、福島橋の東600m地点に、新たに架橋された玉村大橋が通行できるようになったことで、交通渋滞の緩和が図られるようになった。しかし、玉村大橋の供用開始後も五料橋の渋滞が大きく改善されることはなかった。

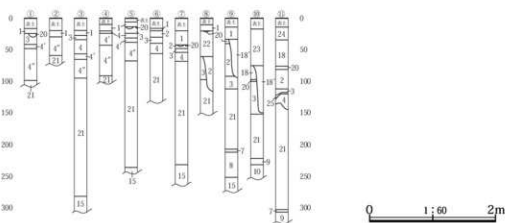
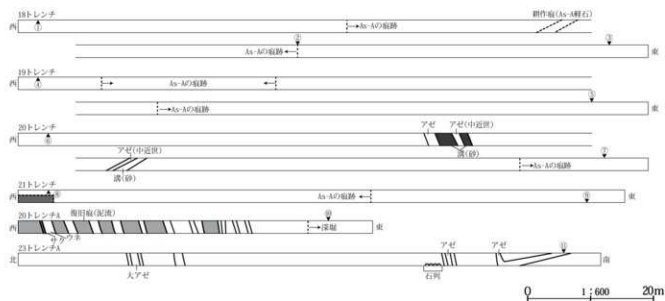
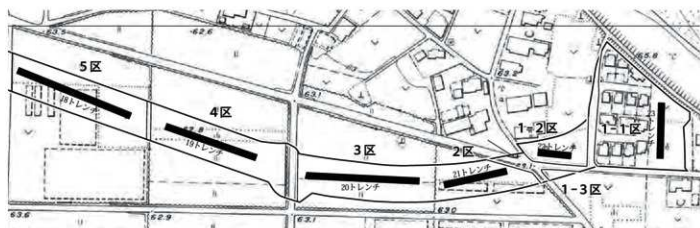
この五料橋の渋滞

に対して、国道354号(旧道)に並走するバイパス(玉村・伊勢崎バイパス)を建設し、五料橋の交通渋滞の緩和、交通量の増加、通行の円滑化を図る計画が立案された。この計画は、地域間連携や発展に貢献する広域幹線道路の一つとして建設中の、東毛広域幹線道路の一部としての機能も併せ持つものである。東毛広域幹線道路は、幾つかの事業を組み合わせて建設される高規格道路で、西毛の高崎市と県東端部の板倉町とを結ぶ、全長58.61kmの4ないし6車線の幹線道路である。事業期間は昭和37年度から平成29年度(1962.4～2018.3)であり、暫定2車線の区間もあるが、本稿執筆現在、全線で供用が開始されている。

このバイパスの一部となる玉村伊勢崎バイパスは、利根川への新たな架橋を伴うもので、西は既設の国道354号のバイパスである高崎玉村バイパスに接続し、東は県道高崎伊勢崎線のバイパス(韭菜塚区)へ接続するものである。玉村伊勢崎バイパスは、佐波郡玉村町福島(ふくじま)に所在する県道藤岡大胡線バイパスとの交差点を基点、玉村町東部を東進した後、新たに架橋された伊

勢玉大橋で利根川を渡河し、伊勢崎市上之宮町域を東西に横断して、同市田中町の群馬県道104号駒形柴町線との交差点を終点とする、全長3,030mの道路である。玉村伊勢崎バイパスは、既に平成26年(2014)8月31日暫定

2車線で供用が開始されているが、平成29年度(2017.4-2018.3)までに4車線化させる予定で事業が進められている。



第3図 試掘調査成果(玉村町都市計画区域図9平成19年作成使用)

## (2) 試掘調査

玉村伊勢崎バイパスの事業を担当する群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所(以下「伊勢崎土木」)は、群馬県教育委員会文化財保護課(以下「保護課」)に対し、埋蔵文化財の有無を問い合わせた。これに対し保護課は、当該事業地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、平成22年5月20日から同年6月4日にかけて、同バイパス建設予定地である佐波郡玉村町福島から下之宮に至る地域に対する試掘、確認調査を実施した。この調査は、遺構面の検出、遺構の有無、遺物出土の確認を目的としたもので、予定地内に幅1mのトレンチを23本設定して実施された。その結果、「ほぼ全域で、天明三年(1783年)の浅間山噴火に伴うAs-A軽石や泥流に覆われた水田や畑、復旧溝、中世から近世にかけての洪水層に覆われた水田や畑、As-A軽石層前後で営まれた水田跡等を検出した。また、13トレンチ以西では、古墳～平安時代にかけての住居跡等も確認した、という調査成果をまとめている。この成果により文化財保護課は「住居跡や水田、畑地が確認されたことから、本調査が必要と判断される」という判定を下し、関係機関に通知している。

このうち、その東部が玉村町№212遺跡に含まれる下之宮高塚遺跡は、区域内に18トレンチから23トレンチの6本のトレンチが設定され、試掘調査が実施された。このうち18トレンチが試掘調査の5区に、19トレンチが同4区に、20トレンチが同3区に、21トレンチが同2区に、22トレンチが同1区西部に、23トレンチが同1区東部に設定されている。これらのトレンチのうち、19～22トレンチは建設予定地の中央を縦断するように設定され、23トレンチは、当該区域にミニ田地在ったため、その東端部に路線に対して垂直な方向に設定されていた。なお、上記1～5区は、試掘調査段階で、調査時点で約100mおきに敷設された道路や農業用水路で区切られる区間を一つの区として、東から1～19区と、便宜上付したものであるが、後述する本遺跡の本調査においても、この区呼称は引き継がれている。

3～5区では、18トレンチは2.3m、19トレンチは1m、20トレンチは1.3mの深さまで掘削したが、表土下に圃場整備時の客土、以下、砂質土、シルト、粘質シルトが堆積し、55～88cm以下は、シルトや砂の互層から成る

水生堆積層が堆積していることを確認した。そして平面的には、18トレンチでAs-Aの痕跡やAs-A下の耕作痕、19トレンチではAs-Aの痕跡、20トレンチでは中・近世の砂で埋没した畑やAs-Aの痕跡を確認した。

一方、1・2区では、21トレンチで1.4～2.6m、22トレンチで2.5m、23トレンチで3.1mの深さまで掘削した。21トレンチ以東では、表土、圃場整備時の客土の下に、地表下10～95cmの位置にはAs-Aの純層が堆積し、東部では客土とAs-A純層の間にAs-A泥流土やAs-A混土が堆積している。As-A純層の下にはシルトや細砂層があり、更にシルトや砂の互層から成る水生堆積層が見られた。その下にAs-BやHr-FA或いはAs-Cなどを含む粘質土の堆積が確認されている。平面的には21トレンチではAs-Aの痕跡、22トレンチではAs-A降下時の畑や降下後の耕地復旧溝、23トレンチではAs-A降下時の大群や畦、石列が確認されている。

これにより、本遺跡は18～23トレンチの設置区域内全域が、発掘調査対象となっている。

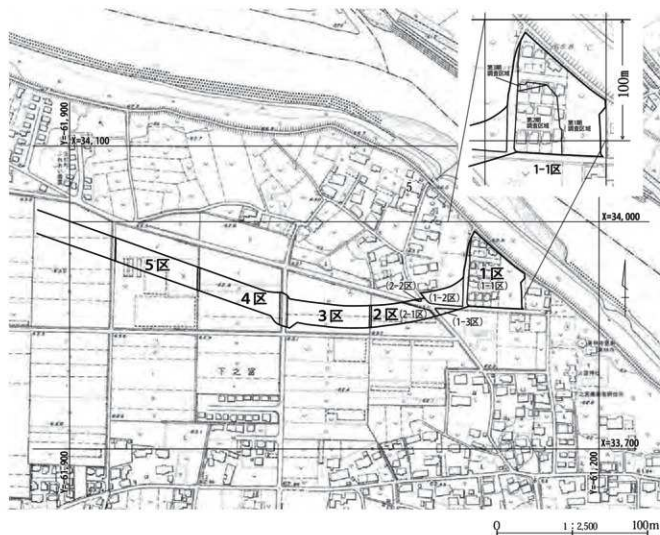
## (3) 発掘調査に至る経過

伊勢崎土木はこの試掘調査の成果を受けて、平成22年8月、保護課に対して発掘調査を依頼し、協議の結果、同年9月1日に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、以下「事業団」とする)がこれを受託することに決し、事業団が本遺跡の調査を実施することとなったのである。

## 第2節 調査の方法

### (1) 調査区の設定

本遺跡周辺は、圃場整備の区画整理により、ほぼ100mおきに敷設された道・水路で圍繞された区画が広がる。玉村伊勢崎バイパスは、この区画を東西に横断するが、本遺跡は道水路で区画された7区画があったが、東端の3区画は変則的な道路の敷設によって区画されたため一つの区として1区とし、以西の区画は、東から西に2区、3区、4区、5区と名称を付した。また1区は区の中を通る道路により、1-1区、1-2区、1-3区に細分し、更に1-1区は、第3節に後述するように3回に分けて調査されたため、東部と北部の第1期調査区、中央部・中南部・南西部・中西部の第2期調査区、そして中・西



第4図 下之宮高保遺跡の調査区

(伊勢崎市現況図No41平成22年作成、玉村町都市計画区域図9平成19年作成使用)

北部南寄りの第3期調査区にさらに細分している。

なお、上述のように、1～5区は、試掘調査で設定した区呼称に一致する。また、区の名称の標記は、発掘調査段階ではローマ数字表記と算用数字表記が混在していたが、本報告書においては算用数字表記に統一して報告する。

## (2) 調査面の設定

本遺跡は、下記の第1面は1～5区で共通している。しかし、2～5区では出水による調査の危険があったため、また1～3区は、その狭さから下位面到達の可能性が低く、出水や、壁面崩落の危険が想定されたため、第1面のみの調査に留めた。

また、1-1区では、第1期・第2期調査区域では5面の調査を行い、第3期調査区域では調査期間が極めて

短かったため、2面の調査に留めた。これらの調査面は、第1～3期調査区域の第1面は共通しているが第2面以下は、それぞれの調査状況によって異なるものになっている。第1期調査区域の第2・3調査面は本報告書の2面(以下同じ)、第4面は3・4面、遺構確認面が5面に相当する。2期調査区域の第2調査面は2面、第1期調査区域での経験から第3面の呼称は用いず、第4調査面は3面、第4調査面の下位が4面に相当し、第5調査面は5面を示している。3期調査区域での第2調査面は、3面に相当する。

1-2区では調査1面は1面であるが、調査2面は4面であり、2・3面の遺構を確認することはできなかった。

以下、本報告による遺構面を記す。



- 第1面 近世面であり、天明3(1783)年浅間山噴出のAs-A軽石層(後述の標準土層IV層)下面を基本として設定したが、遺構は天明3年後のものも含まれている。このため、本書では、第1面は天明3年より後の遺構を第1面上位面、天明3年の面を第1面中・下位面として報告する。
- 第2面 近世面であり、大洪水のあった寛保2(1742)年の被災遺構を調査対象とした。しかし、中世から近世にかけての洪水が多かったようで、寛保2年の遺構を特定するのは難しく、一部寛保2年と誤認した畑遺構も、本面の遺構として報告する。
- 第3面 中世面である。15世紀を中心とする時期の遺構を報告するが、その中心となるものが、中世館に伴う遺構群である。
- 第4面 古代面である。天仁元(1107)年浅間山噴出のAs-B軽石で覆われた遺構群である。
- 第5面 古墳時代面である。古墳時代前期の遺構を確認調査したが、1-1区第2期調査区域でしか調査できなかった。

### (3)調査方法

上述のように本遺跡の調査は、複数面を対象としており、各区、調査面ごとに実施した。

掘削は、表土及び各調査面間の土層は、掘削機械を用い、一部人力で掘削した。この作業の後、鋤簾を用いて、人力により確認面の精査を行い、遺構確認を行った上で、スコップ或いは移植コテ等を用いて、人力により遺構を掘削した。この際、土層確認のためのベルト等を設定し、記録化を図るまでの間、掘り残す等の手順を経た。

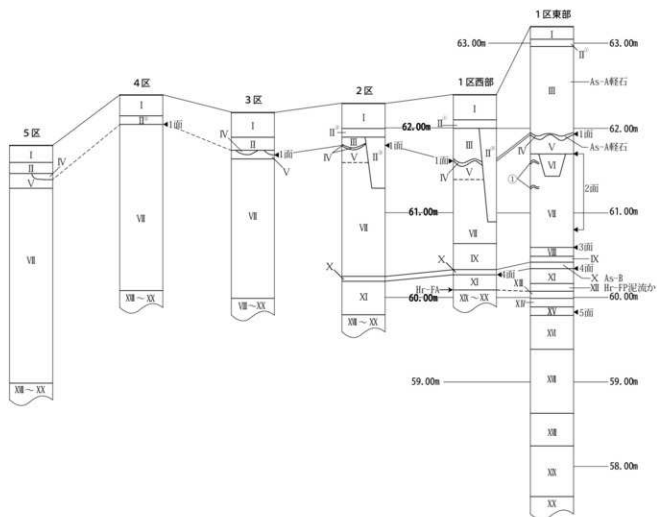
なお、1-1区においては、調査の効率化を図るため、As-A泥流層を除去して、As-A軽石面を表出させたのち、遺構の調査を行った。

記録保存のための遺構の記録は、測量図と写真によった。平面図は、原則としてデジタル測量で行い、断面図はアナログ測量を実施した後、デジタル化を実施した。また、適宜航空写真撮影を行ない、区全体或いは各遺構の写真撮影は、デジタル写真撮影を基本として、全景写真等については、記録保存の観点から6×7版によるモノクロ写真撮影も併用した。

### (4)標準土層

本遺跡の堆積層は、地点、地点により異なるものであった。従って、全く完全な標準土層を示すことはできないが、以下、これらを概観してまとめたものを標準土層として示す。

- I：現耕土：褐灰色(東部)～黒褐色(西部)砂質土。
- II：旧耕土
- II①：天地返し後の耕作土：にぶい黄褐色砂質土。
- II②：被災後の耕作土：暗灰褐色土。As-A軽石混入。
- II③：As-A泥流復旧溝埋土：As-A泥流層土主体。
- III：As-A泥流層：天明3年(1783)。黒褐色土。
- IV：As-A軽石層：天明3年(1783)。軽石・火山灰・軽石の3ユニット確認。本層下面が第1面の確認面。
- V：黄褐色細砂質土：天明3年(1783)の耕作土。
- VI：にぶい黄褐色砂：洪水復旧坑埋め土。寛保2年(1742)の可能性有。
- VII：洪水と耕作による形成層：褐色～黒褐色砂質土：川砂混入。複数層に分層可能。層の中に褐灰色砂質土の畑耕土複数枚確認。本層中に2・3面の第2面の確認面有り。
- ①：VII層中の耕作度：褐灰色砂質土。厚さ数cmで畝・畝間(サク)が波状に確認される。
- VIII：室町時代の表土：灰白色細砂質土：粘性あり。本層上面が第3面の確認面。
- IX：黒褐色砂質土：As-B軽石混入。いわゆるB泥黒。
- X：As-B軽石層：天仁元年(1108)。本層下面が第4面の確認面。
- XI：黒褐色～褐灰色粘質土：上位層は天仁元年(1108)耕作土。
- XII：明黄褐色粘質土：Hr-FP泥流か。
- XIII：褐灰色粘質土
- XIV：黒色粘質土
- XV：黒褐色粘質土：本層上面付近が第5面の確認面。
- XVI：ローム漸移層土：にぶい黄褐色。
- XVII：ローム層土：明黄褐色。
- XVIII：灰白色細砂質土
- XIX：にぶい黄色細砂質土
- XX：灰黄色砂質シルトと小礫の混土：前橋泥流風化層か



第5図 下之宮高塚遺跡の標準土層

### 第3節 発掘調査の経過

下之宮高塚遺跡の発掘調査は、平成22年10月から24年4月にかけて実施した。しかし、調査は西接する下之宮中沖遺跡と併せた調査であったため、本遺跡と下之宮中沖遺跡の調査は、交互、或いは並行に行われた。このため、本遺跡の調査は断続的なものとなっているが、その実質的調査期間および、当該調査対象区域は次の通りである。

- ① 期間 平成22(2010)年10月1日～12月2日  
対象区域 2～5区 調査面は1面
- ② 期間 平成23(2011)年1月4日～2月4日  
対象区域 4区 調査面は1面

- ③ 平成23(2011)年7月～10月  
調査対象1区 調査面は1～5面
- ④ 平成24(2012)年1月～3月  
調査対象1区 調査面は5面
- ⑤ 平成24(2012)年5月  
調査対象1区 調査面は2面1区のうち、東部の1～1区の「1期調査区域」は上記③の期間に実施された調査範囲(東部・北部)であり、「2期調査区域」は同じく上記④の期間に実施された調査範囲(中部から西・南部)、「3期調査区域」は同じく上記⑤の期間に調査された調査範囲(西側中北部)を示している。  
また、調査東端の1～1区は当初北半分の区域を調査した後、南半分の区域を調査する予定であり、調査区内

## 第1章 調査に至る経過

に在ったミニ団地跡には電柱の撤去を依頼していたが、当時東日本震災復旧が優先されたため、撤去が遅延し、変則的な調査区割を行うこととなり、1-1区の1～3期調査区間に未調査区域が生ずるなど、調査に支障を生じた。

さて、以下に調査日誌の抜粋を記す。

### ① 平成22年度調査の1

#### 2010年(平成22年)10月

- 1日 担当者着任。事務所用地整備(～5日)
- 6日 幅杭復元。
- 8日 2区、3区除草並びに安全柵設置。事務所設置。
- 12日 3区機械による表土掘削開始(～19日)。
- 14日 3区遺構確認(含む掘削)開始。
- 18日 5区除草作業(～19日)。
- 19日 3区写真撮影開始。4区除草作業。
- 20日 3区遺構実測開始。5区機械による表土掘削・遺構確認開始(～27日)。
- 29日 3区下位面への確認調査開始。

#### 11月

- 1日 10月30日の台風14号による降雨のため、調査区水没。3区は2日まで、5区は4日まで調査不能。
- 8日 3区調査完了。
- 9日 3区埋戻し開始(～12日)。
- 10日 2区機械による表土掘削開始(～18日)。
- 12日 2区遺構確認(含む掘削)開始。
- 15日 3区隣地境畦畔成形(～19日)。5区遺構測量開始。
- 17日 5区遺構写真撮影開始。伊勢崎土木の要請により、4区南の畦畔を撤去。
- 18日 2区遺構写真撮影開始。
- 19日 5区調査終了。玉村町教育委員会中島主査視察のため来跡。
- 22日 5区埋戻し開始(～25日)。
- 25日 5区隣地境畦畔成形(～30日)。
- 26日 2区全景写真撮影。
- 30日 2区調査終了。2区埋戻し作業開始(～12月1日)。

#### 12月

- 2日 2区隣地境畦畔成形。
- 3日 年末まで調査中断(下之宮中沖遺跡調査)。
- 15日 2・3・5区の平面図修正作業実施。

### ② 平成22年度調査の2

#### 2011年(平成23年)1月

- 4日 作業再開。
  - 6日 4区機械による表土掘削開始(～13日)。
  - 14日 18日まで調査中断(下之宮中沖遺跡調査)。
  - 19日 調査再開。4区遺構確認(含む掘削)開始(～25日)。
  - 23日 下之宮高仮遺跡・下之宮中沖遺跡現地説明会。(見学者181名)
  - 26日 4区写真撮影。
  - 27日 4区遺構測量開始(～2月1日)。
- #### 2月
- 2日 4区埋戻し。
  - 3日 4区隣地境畦畔成形(～4日)。
  - 4日 平成22年度調査終了。(下之宮中沖遺跡調査へ)

### ③ 平成23年度調査の1

#### 2011年(平成23年)5月

- 1日 担当者着任。(以後しばらくの間、下之宮中沖遺跡の調査に入る。)
- 7月
- 19日 調査範囲囲繞。下之宮中沖遺跡より資材搬入等開始(～21日)。
- 22日 1-1区1期調査区域(東・北区域)機械による表土掘削開始(～8月12日)。



25日 1-1区1期調査区域1面遺構確認、As-A下畑より掘削開始(北部を除きAs-A上面まで掘削)。

29日 1-1区1期調査区域1面断面図測量に着手、遺構測量開始。屋敷遺構調査着手(As-A軽石上面)。

## 8月

12日 1-1区1期調査区域東部As-A上面、北部As-A下面空中写真撮影。

13日 第1回現地説明会(1面屋敷遺構等、下之宮地区対象)。

17日 1-1区1期調査区域As-A下面調査。1-3区機械による表土掘削開始(～19日)、遺構確認。

18日 1-3区遺構掘削開始。

23日 1-2区機械による表土掘削開始(～31日)、遺構掘削開始。1-1区の調査中断、1-2・3区の調査に傾注。

## 9月

1日 台風12号に伴う降雨(～2日)。

2日 降雨に伴い調査区冠水、排水作業開始(1-2・3区は10月に入っても湧水止まらず)。

5日 台風被害対策作業。1-1区

6日 1-1区作業再開。1-1区北部、2面への機械による掘削開始(～31日)。

8日 1-1区1期調査区域1面(As-A下)空中写真撮影。

26日 1-3区調査再開。

27日 1-2区調査再開。

29日 1-1(1期調査区域東部)・1-2・1-3区1面(As-A下)、1-1区1期調査区域北部2面空中写真撮影。

## 10月

4日 1-2区2面へのトレンチによる確認調査開始。遺構確認(～7日)。

5日 1-1区1期調査区域2面遺構確認開始(含遺構掘削～7日)。1-2区2面遺構掘削、遺構測量、写真撮影、湧水著しく壁面崩落の危険のため、拡張を断念。1-2区調査終了。

6日 排水をしつつ埋戻し開始(～7日)。

7日 1-3区1面調査終了。法面との関係から2面調査断念。

8日 1-3区埋戻し開始(～12日)。



12日 1-1区1期調査区域1面調査東端の一部(近世屋敷力マド付近及び1号井戸)を除き終了。

14日 1-1区1期調査区域東部調査2面(2面)空中写真撮影。

17日 1-1区1期調査区域東部調査3面(4面、As-B下面)遺構掘削開始。

20日 1-1区1期調査区域東部調査3面(4面)空中写真撮影。

21日 1-1区1期調査区域北部調査4面(ほぼ3面)の中世館遺構群の確認に至る遺構確認開始、掘削開始。

26日 1-1区1期調査区域東部5面確認調査。南東部に遺物の埋蔵が多めであることを確認。

27日 1-1区1期調査区域調査4面(東部4面、北部3面)空中写真撮影。

29日 1-1区1期調査区域5面東部南東隅の包含層部分掘削、掘削、遺物出土状況写真、測量。

31日 1-1区1期調査区域北部調査4面(3面)空中写真撮影。1-1区1期調査区域北部4面(3面)と東部1面残部分調査終了。工事側に明け渡し。

## 11月

1日 発掘資材撤収、中沖遺跡へ搬送。以後年明けまで下之宮中沖遺跡の調査に集中。

## ④ 平成23年度調査の2

2012年(平成24年)1月

10日 調査再開。1-1区2期調査区域発掘資材搬入、安全対策。



- 11日 1-1区2期調査区域1面表土掘削開始(～26日)、遺構確認開始(～16日)。
- 12日 1-1区2期調査区域1面遺構掘削開始。
- 24日 1-1区2期調査区域1面遺構測量、写真撮影開始。
- 28日 1-1区2期調査区域1面空中写真撮影。
- 30日 1-1区2期調査区域調査2面への機械掘削、遺構確認開始(～2月8日)。
- 31日 古墳頂部(後に土塁であることを確認)を確認、遺構測量開始。
- 2月
- 9日 1-1区2期調査区域2面空中写真撮影。
- 10日 1-1区2期調査区域3面への機械掘削(～10日)、外堀・土塁調査等遺構調査継続。
- 13日 1-1区2期調査区域館以南4面への機械掘削(～17日)、遺構確認作業。
- 17日 玉村町教育委員会中島文化財係長、群馬県城館址研究会原氏来跡。
- 20日 1-1区2期調査区域館以南4面遺構掘削開始。高崎市教育委員会秋本主任主事来跡。
- 21日 1-1区2期調査区域4面館以南遺構測量、写真撮影開始。村田敬一先生(建築学)、玉村町教育委員会川端課長、小柴文化財室長、中島文化財係長視察のため来跡。
- 24日 1-1区2期調査区域3・4面空中写真撮影。口澤宏先生、中島文化財係長視察のため来跡。
- 26日 第2回現地説明会(隣接集落対象)開催、玉村町長他96名参加。
- 27日 1-1区2期調査区域3面表層面の調査完了。5

面への機械掘削開始(～3月8日)、遺構確認作業。

- 28日 1-1区2期調査区域3面土塁撤去、土塁下所在遺構の掘削、測量、写真撮影開始。
- 29日 降雪により現場作業中止。
- 3月
- 1日 1-1区2期調査区域5面遺構掘削、測量、写真撮影開始。
- 7日 1-1区2期調査区域4面遺構調査終了。
- 8日 1-1区2期調査区域3面遺構調査終了後、5面へ掘削。
- 11日 1-1区2期調査区域5面遺構調査継続。排水作業。東日本大震災1周年黙祷。
- 16日 1-1区2期調査区域5面空中写真撮影
- 19日 1-1区2期調査区域5面調査終了。
- 20日 1-1区2期調査区域埋戻し開始(～31日)。
- 27日 調査事務所撤去。
- 31日 資材撤去完了。平成23年度発掘調査終了。

#### ⑤ 平成24年度調査

##### 2012年(平成24年)4月

- 1日 本遺跡も担当する南玉埋堀遺跡等調査担当着任。
- 9日 担当1名出張。1-1区3期調査区域の安全柵圍繞。
- 10日 1-1区3期調査区域の機械による表土掘削。
- 11日 1-1区3期調査区域1面遺構確認、掘削、測量、写真撮影。
- 12日 1-1区3期調査区域調査2面(3面)への機械掘削開始(～13日)。遺構確認(～16日)。
- 16日 1-1区3期調査区域調査2面(3面)遺構掘削、測量、写真撮影開始。
- 19日 1-1区3期調査区域調査2面(3面)全景写真撮影。
- 20日 1-1区3期調査区域8号住居北半掘り下げ(5面の遺構)
- 23日 1-1区3期調査区域調査終了。
- 24日 1-1区3期調査区域埋戻し開始(～5月2日)
- 5月
- 2日 下之宮高砂遺跡調査完了。

【参考文献】  
国上庁 1996 『首都圏整備計画』

## 第2章 地理的および歴史的環境

### 第1節 遺跡の位置と周辺の地形

#### (1) 地理的環境

本遺跡は、群馬県中南部に位置する佐波郡玉村町下之宮に所在する。玉村町は関東平野の北西部に在り、本遺跡は玉村町役場の東2.9km、前橋市に在る群馬県庁の南東12.3km、伊勢崎市役所の西南西4.5kmに位置する。本遺跡は、利根川右岸にあるが、利根川は本遺跡の北側0.6km程を東南東方向に流れ、本遺跡の北東で南東方向に流れを変じて本遺跡の東端に接して流下する。また、後述する前橋台地を北西-南東方向に流下する中小河川の一つとして、本遺跡の西0.5kmに矢川がある。

遺跡地の周辺は、利根川の対岸を含めて農耕地帯であり、集落や耕作地が広がるが、新興のミニ団地などが散見される。公共交通はバスのみであり、明治10年(1881)に設立した日本鉄道が第一区線(現在のJ R 高崎線)の建設を計画した当初には、玉村を通過させる案もあったが、結局、鉄道線は明治17(1884)年に、本遺跡の南5.1km付近、烏川の対岸を東南東-北西方向に走行する路線として敷設され、本遺跡の南西4.9kmにJ R 新町駅が設置されている。また、本遺跡の南1.3kmには国道354号線が北西北西-東南東方向に走り、その利根川架橋である五料橋が、南東2.2kmに在る。西方1.8kmには県道40号藤岡大胡線のバイパス線が南北に走行し、西北西2.1kmにはその利根川の架橋である玉村大橋が架かる。また、利根川の北側5.3km地点には県道24号高崎伊勢崎線が東西に通過し、西北西2.6kmにはその利根川の架橋には福島橋が架かる。その他、本遺跡の西方4.7kmには関越自動車道の高崎玉村スマートインターが在り、西北西5.6kmには北関東自動車道の前橋南インターが在る。

#### (2) 地質的環境

本遺跡の所在する佐波郡玉村町は、北に赤城山、北西に榛名山、南を藤岡-比企丘陵に囲まれた前橋台地(新井1962)の南東部に在る。前橋台地は、今から約2万年前

に浅間山噴火で水蒸気爆発があった時に発生した、大規模な山体崩壊による応答泥流が吾妻川を下って前橋市域に至り、泥流堆積物を厚く積もらせたことで形成されたと考えられている。この前橋泥流堆積物は「大小の安山岩質角礫と細粒基質からなり、かなり固結している。ときに径数メートル以上の巨大岩塊をふくみ、またところにより河成の礫層をはさんでいる」(新井1967)地層であり、ボーリングデータによれば玉村町域ではおおむね17~20mの層厚を示すという(澤口1995)。なお、この泥流堆積物の上には板鼻黄色軽石層(As-YP)を挟む上部ローム層を載せている。このローム層上面は、南東方向へ樹枝状に延びる小支谷によって侵食されており、そのうちの多くは古墳時代以前に埋没していることが、本遺跡の北方を走る北関東自動車道関連の発掘調査等で判明している。

前橋台地の南部にあたる玉村町の景観は、ほとんど起伏のない平坦な地形に見えるが、明治18(1885)年測量の迅速図によれば、前橋台地南部は北西から南東にかけて緩い傾斜面を形成しており、標高は町北西部の板井では75mほど、南東端にある沼之上では55mほどとなっている。南端を画する烏川の南岸には藤岡-比企丘陵が迫っており、巨視的には前橋台地のなかで最も低い窪地状の地形となっている。このことから、関東平野の地質構造として知られる「関東構造盆地」の西端との見方(澤口1995)がなされている。

現在、玉村町域を横断する流路をとる利根川は、この前橋台地を貫流する大河川でもある。かつては、前橋台地の北東辺にあたる赤城山南麓との境、すなわち現在の広瀬川が流れる低地帯を流下していたと考えられており、その頃の玉村町附近は数条の小河川が流下する台地であつたらしい。西遷と称される利根川の現流路への変流の時期と要因について築瀬大輔は、自然災害説と人工引水説があると指摘している(築瀬2012)。前者は応永34(1427)年の大水災による西遷を主張するが、最初にその指摘をしたのは峰岸純夫であり(峰岸1984)、『伊勢崎市史』、『玉村町誌』がこの説を取り、築瀬も文書の記載に

基づく交通路の検討から、この説を取っている。一方、後者を主張したのが山崎一(山崎1978)と澤口宏(澤口2000)であるが、山崎は、惣社の長尾忠房が、現利根川の位置に在った久留馬川に拠って築城した石倉城(武田信玄が厩橋城への付城として築城した石倉城とは別物)の要害を増すため、旧利根川から久留馬川へ運河を掘ったものの、天文から永禄にかけての数回の洪水で利根川が変流して、城を押し崩したとし、澤口は『上毛伝説雑記』の記述に基づいて、石倉城へ利根川の水を導水するため

の堀を掘削したところへ洪水が襲い、東岸に三の郭だけ残して崩れたとして、この洪水の発生した1539(天文8)年と1543(天文12)年を西遷の時期としている。現状では、東西交通路の研究成果(久保田2009、築瀬2013)等から、応永34年の大洪水が利根川西遷の端緒であることが確認されている。しかし、15世紀後半までかなりの水量が移ったものの、少なくとも16世紀末まで西遷が続いたものと想定される。近世以降の利根川は概ね現流路を流れていたようであるが、絵図や現在も地形上に残された河



- |                |                      |       |
|----------------|----------------------|-------|
| ■ LP: 前橋台地後背高地 | ■ BM: 河成段丘(後背湿地)     | ■ 旧流路 |
| ■ BP: 前橋台地後背湿地 | ■ CB: 河岸段丘(旧中州: 完新世) |       |

第6図 周辺地形分類図(S=1/25,000 陸軍迅速図「倉賀野驛・伊勢崎町」 明治18年測図使用)

道から、七分川・三分川と呼称される玉村町南東端の対岸にあたる伊勢崎市側に蛇行・分岐した流路をとっていた事が知られる。

玉村町域での現利根川は、約150～200mの幅を有し、河床から3～10mの崖を形成している。台地地形は北西から南東方向へ緩傾斜するため、崖高は南東ほど低い。

前述のように、前橋台地上には中小河川が北西から南東方向に幾筋も流れていたと考えられ、埋没して現在は確認できない状態といつてよい。これらの埋没河川は、本遺跡から北方ないし北西方約4km前後のあたりを東西に横断する北関東自動車道路の発掘調査で存在が確認されている。これらはいずれも上部ローム堆積による台地地形形成後に流下が始まった榛名山麓起源の河川と考えられ、これによる小規模な侵食谷が樹枝状に展開していたと推測される。その多くは、縄文時代から浅間Cテフラ(As-C)の堆積する3世紀後半～4世紀初頭までの間には堆積作用が進んで埋没したらしい。前橋市徳丸仲田遺跡の旧藤川流路や同市西善尺司遺跡(共に第6図範囲外)で検出された河川も、6世紀初頭の榛名山噴火によるテフラ(Hr-FA)に覆われた水田が確認出来ることから、5世紀のうちにほとんどが埋没してしまったと考えてよいだろう。そのなかで、いくつかの水流を集めて現代ま

で遺存し続けたと考えられるのが、前橋南部から玉村町域を流れる端気川や藤川である。この両河川は人工的に流路改变されて現況に至っているが、かつては第6図に見られるように、蛇行しながら北西から南東への流路をとる古墳時代以前から続く河川であると考えられよう。玉村町の現利根川以南の地に当たる地域でも、埋没した矢川の流路が想定されている。本遺跡の西方に在る南玉埋堀遺跡の調査範囲にも確認された矢川は、現在は利根川右岸の南玉から箱石を経て飯倉まで南流する用水路である。自然河川としての矢川は、藤川や端気川と平行するように東南流して利根川及び烏川に注ぐ流路をとっていたようであるが、その河道については現在はほとんど遺存していない。この矢川旧河道の復元は、明治18年測量の迅速図や航空写真(1947年米軍撮影)、地区境と小字地名を参考におおよそ復元が可能である。また、これに発掘調査の埋没河川調査例を加えた復元流路も提示されている(中島1999 関・中島2005)。なお矢川旧河道は中間点の箱石で東方に分岐して利根川に注いでいたことが絵図等で判明している。これは「裏矢川」と呼ばれ、現在は旧河道に沿った小規模な自然堤防状の微高地に住宅が立ち並んでおり、当時の流路をうかがうことができる。

矢川旧河道の形成がいつ頃かについては、現在のところ明確ではない。天仁元(1108)年の浅間山噴火以降との説(澤口1995)もあるが、現利根川の対岸にあたる北側を東南流する藤川と流路方向がほぼ平行していることから、現利根川の北側から藤川や端気川と平行して流下していた小河川の存在も可能性として考えておきたい。

ところで、この自然河川としての矢川旧河道は、天明3(1783)年の浅間山噴火の際に発生した泥流に襲われ、泥流堆積物で埋没してしまったことが記録に残されている。現在の玉村東南域はこの泥流堆積物(以下「天明泥流堆積物」と呼ぶ)が厚く覆い、微妙な地形の凹凸を隠している。天明泥流は利根川から溢れ出して兩岸の低地部を襲っており、特に矢川旧河道に沿った地域は被害がひどく、利根川までの間約1.5kmの広範囲に及んでいる(関・中島2005)。なお、昭和22(1947)年のカスリー



写真1 カスリー台風被災状況写真  
(1947年10月30日米軍撮影、国土地理院「前橋使用」)



ン台風のときにも、これとはほぼ同様の氾濫被害がでていたことは注目される(写真1)。利根川が現流路に変流して以来、玉村町南玉・下之宮・小泉・飯倉・沼上之地域は、こうした洪水被害の常襲地域だったといえ、逆に利根川変流以前は比較的安全度の高い地域だったと推察される。このことは、縄文時代以降の遺跡立地との関係を考えるうえで、最も重要な地形条件と考えておくべきだろう。

この凄まじい被害をもたらした天明泥流は、西方に離れた長野県域にある浅間山の噴火に起因する。浅間山はこれより溯る3世紀後半～4世紀初頭の間、天仁元(1108)年の2回にわたって噴火がおき、このとき広範囲に亘って住民の生活環境に多大な影響を与えたと考えられている。また、前橋台地北西にそびえる榛名山は、古墳時代の西暦6世紀に2回の大きな噴火があり、県中央～東部に甚大な被害を与えたことが知られる。これらの火山噴火被害について、玉村地域においては降下火山灰のほか、榛名山の2度の噴火時に発生した洪水や泥流に覆われた事が判明している。さらに、年代や要因は特定できないが、中世に発生した洪水被害の痕跡も遺跡調査では明瞭に残されている。これらは、天明泥流のように甚大ではないにしろ、少なくとも農作物への被害は大きかったであろうと推察される。

玉村町域の歴史的な自然環境について、前橋台地東南部を主体に利根川の変流以後と以前で概述してきた。なお、前橋台地の南限を画する烏川は玉村町の南界ともなっており、対岸には藤岡市、埼玉県上里町がある。烏川は榛名山山西麓を流下して前橋台地の西側を画し、玉村町の南側では東流して南方から北流してくる神流川と合流、そこから約3km下流で現利根川を合わせている。16世紀代以前は玉村町の対岸で現流路のやや南側を流れ、利根川との合流点が尾島あたりまで至る以外、烏川の流路自体は大きな変化はなく、当地域における人類史のなかで確定的な地理的境界あるいは交流・交易ルートとしての役割を果たしてきた。このことから、烏川の存在が利根川変流以前の玉村町域の遺跡分布のあり方に一定の条件を与えていることは充分予測されるところである。

下之宮高痕遺跡の周辺地域における過去の植生については、いくつかの遺跡発掘調査に伴う花粉分析結果に

よって大まかな推定が可能である。それによれば、古墳時代の4～6世紀代では、集落のある遺跡周辺では概ね草本花粉と木本花粉がほぼ同量あり、草本ではイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属が優勢で、木本ではコナラ属・コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属が優勢との結果が出ていることから、遺跡周囲では水田を含む湿地及びやや乾燥地からなる草地と広葉樹林が相半ばする景観が推測される。また浅間Bテフラに覆われた12世紀初頭の地層からは、木本より草本花粉が大きく上回り、草本ではイネ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科が、木本ではクリ・シイ属・マテバシイ属とコナラ属コナラ亜属が優勢で、湿地もあるが比較的乾燥気味の開けた土地の周囲に広葉樹林が存在する景観が推測される。更に砂町遺跡では、6世紀初頭の榛名山の火山降灰(Hr-FA)は花粉の様に大きな影響を与えていないとの結果が確認された。そして天明三(1783)年の浅間山噴火に伴う降下火山灰(As-A)と泥流下の土層中の花粉から、遺跡地周辺はかなり開けた乾燥草地の周辺に疎らな広葉樹林が存在する景観であるが、古墳時代や12世紀末の木本花粉相に加えて新たにマツ属が確認されることから、人為的な開発の結果生じる二次林の拡散が裏付けられたといえよう。

## 第2節 周辺遺跡の歴史的環境

### (1) 旧石器時代

第1節で述べたように、前橋台地は約2万年前からの上部ローム層をのせており、玉村町域においても後期旧石器時代の遺跡が発見されてもよい条件ではあるが、現在まで明確な遺跡の存在は知られていない。寒冷な湿地的環境であったことがその理由とされる(『玉村町誌 通史編 上巻』p.11)。石器類が発見されないだけで、旧石器時代人の活動域であったことまでも否定するものではないが、前橋台地ではその北東側にある赤城山麓や大間々扇状地での比較的濃密な遺跡分布と全く対照的な状況を示している。

### (2) 縄文時代

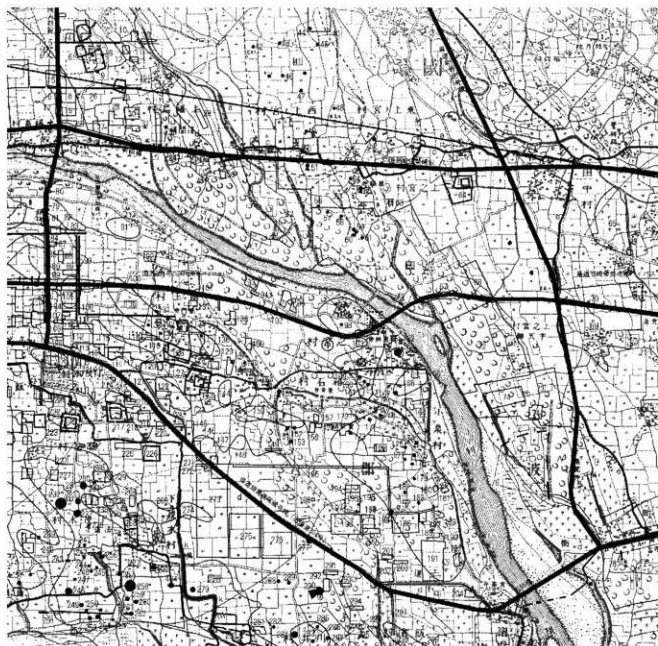
約12000年前に最終氷河期のドリラス期(Oldest Dryas)の終盤から温暖化が始まり、植生をはじめとした自然環境の大きな転換が、狩猟・採集経済を高度に発達させた

縄文文化を生み出した大きな要因になったことはよく知られている。前橋台地では、植生を示す花粉分析の結果から、この気候変動が一樣ではなく、寒冷地植生が温暖化の影響を受けて緩やかに変化していった例のあることも分かっている。

玉村町域とその周辺では、この時期から遺跡の存在が明確になってくる。玉村町向田遺跡(272)では旧石器時代末期まで溯りうる黒曜石製木葉形尖頭器、福島曲戸遺跡(79)では有舌尖頭器が出土している。この地点での植

生分析からは、寒冷地特有のマツ属やトウヒ属が主体でこれにコナラ亜属などの広葉樹類がわずかに加わってることが判明しており、急激な温暖期をむかえる直前の段階と評価(矢口1999)されている。このように想定される環境において、徳丸仲田遺跡での磨り石類の存在は食用堅果類などの利用も既に行われていたことを示唆する事例として注目される。

縄文時代早期以降、とりわけ群馬県内で各地に集落が形成され遺跡数が激増する前期以降にあっても、玉村町



第7図 周辺遺跡分布図(S=1/25,000 陸軍迅速図「倉賀野驛・伊勢崎町」 明治18年測図使用)

域での遺跡数・遺構検出は希薄である。福島大光坊(104)・福島曲戸(79)の両遺跡で少数の土坑が検出されているのみで、集落の存在は不明瞭である。福島曲戸遺跡のように少量とはいえ早期から後期までの土器片がまんべんなく出土することから、未確認ながら限られた地点で度々集落が存在したことは想定しておく必要はある。ただしその場合でも、遺物量の少なから極めて時間的に短いものであったと考えるべきだろう。その理由を、小河川の多い湿地的環境であったための狩猟対象動物相の貧弱さや有用植物の少なさに求めることも可能だが、そこで収束するのではなく、むしろ少量とは言え出土した石器類の分析や環境復元の結果等を総合的に検討して小規模で限定的な縄文人の生活の有り様を復元すべきだろう。同様に、現在得られる資料から玉村町域における縄文時代遺跡の立地傾向を語るのも時期なお早と考える。立地環境の異なる赤城山麓や大間々屈状地といった縄文遺跡の高密度分布域とは自ずと異なる遺跡立地背景を想定すべきなのだろう。

### (3) 弥生時代

弥生時代の時期区分として前・中・後の3時期区分が永く行われてきたが、稲作農耕の開始を巡る議論や土器編年研究の進展から、近年では更に細分して早期と晩期を加えた5時期区分も行われるようになってきた。また、中期と後期の境界に対する考え方の相違を解消するため、「前中後」の名称を避け「Ⅰ～Ⅴ期」と呼称することも並行して行われている。ここでは、周辺遺跡の紹介に重点を置くため、可能な限り各報告書や文献の記載に従い普遍的な3時期区分名で呼称することにする。

玉村町域での弥生遺跡の分布は、縄文時代と同様に少ない。しかし、その背景については縄文時代と異なる。群馬県において、少なくとも中期の後半からは稲作農耕本格化のために水田可耕地である低湿地への進出が顕現化するのであって、その点で玉村町域は格好の開発地だったとの想定は放されるはずである。しかるに、西側に隣接する井野川流域やこれに続く烏川中流域左岸には中期後半から後期にかけての弥生集落遺跡が多く分布するので対照的な状況を示すのはなぜであろうか。ここでその理由についての考究は避けるが、既知の弥生遺跡資料によって玉村町域における弥生時代の状況を概観する

こととした。

現状で最も古い段階の弥生土器が出土したのは福島飯塚遺跡である。ここでは東北地方南部の南御山式と思われる渦文土器がみられ、それ以外にも中期中葉から中期後半頃の在地系土器が出土している。中期後半では上飯島芝根Ⅱ遺跡(208)で中期後半の住居1棟(御新田式か?)が知られており、小規模で短期間と想定されとしても集落の存在は否定できない。遺構は確認出来ないが、福島南玉(114)で中期後半の土器片が出土している。特徴的なのは、在地系御山式の粟林式とともに、北島式ないし御新田式(上飯島芝根Ⅱ(208)他)が目立つことである。出土総数そのものが少量であるにもかかわらず明確な存在を示すことから、比率としては他地域に比べてかなり高い。弥生時代中期後半の関東北西部では、中部高地型御山式を特徴とする粟林式土器が群馬県北～西半地域に、烏川と利根川の対岸にあたる埼玉県北部では北島式(吉田2003)、渡瀬瀬川以東の栃木県側には北島式と類縁性の高い御新田式が分布する。群馬県東部では散在的分布ながらも東北地方南部の影響を受けた渦文系土器の存在が知られている。玉村地域はこれらの主要分布域の間隙地域に相当し、そのことがこのような複数型式の混在状況を示すと考えてよからう。また、この時期に粟林式土器の集団が鍋川や烏川、さらに利根川に沿って埼玉県北部(熊谷市前中西遺跡)まで進出したと推測されることから、玉村地域はその通過地点だったとの想定も赦されよう。弥生時代の後期は県内各地に集落遺跡が拡散する分布動態が知られるが、当地域においては全く異なる。茂木古墳群内の玉村町13号古墳(190)から出土した後期初頭の甕を筆頭に、福島南玉(114)・神人村Ⅱ(30)の各遺跡から少数の樽式土器片が出土しているのみで、遺構の存在はなお不明瞭である。ここでは、群馬県北～西半部でみられるような弥生後期の定住集落の姿は想定しにくい状況といえる。南玉埋藏遺跡から北西に約5km離れた横手早稲田遺跡では、古墳前期土器に混在しながら比較的まとまった量の樽式土器が出土している。その理由が西側の弥生遺跡主分布域に近いからだとするならば、更に南東に展がる前橋南部～玉村地域～伊勢崎南部の低地域への進出が阻まれた何らかの理由があるはずである。それはおそらく、広範囲に及ぶ水利管理と水田開発の可否で理解するのがよいと思う。

表1 周辺道跡一覧

No	道跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考			
1	下之宮高野道跡				●	●	●	●	●	R22-25調査、屋敷・溝、畑、復旧溝			
2	玉村町No.17道跡		●							玉村御前・玉村御前 指定地含む R29年発掘調査			
3	松原I道跡				●					R27試掘、4号調査、 集落			
4	松原II道跡				●					R27調査			
5	松原道跡				●	●	●	○	○	○	R29年調査 ○ 近世の可能性有		
6	阿佐美前(松原)集落				●	●	●	●		古墳			
7	玉村町No.55道跡				●	●				古墳			
8	玉村町No.56道跡				●	●				古墳			
9	玉村町No.47道跡				●	●				R22試掘、畑			
10	玉村町No.72道跡				●	●				古墳			
11	松清I道跡				●	●				R2試掘、溝			
12	松清II道跡				●	●				R27試掘、溝			
13	玉村町No.72道跡				●	●				R2試掘、集落			
14	玉村町No.70道跡				●	●				R2試掘、集落			
15	玉村町No.517道跡				●	●				R47調査、水田			
16	尾崎町I道跡				●	●				R14調査、水田			
17	尾崎町II道跡				●	●				R2・4号調査			
18	上福島尾崎道跡				●	●				R13年調査、東山 林跡、水田、溝			
19	尾崎町I道跡				●	●				R3年調査			
20	上福島道跡				●	●				R13調査、水田、畑、 溝			
21	玉村町No.518道跡				●	●				R4調査、水田			
22	中町道跡				●	●				R27試掘、集落			
23	玉村町No.584道跡				●	●				R11調査、畑			
24	上福島中町道跡				●	●				R3・147調査、集落・ 土坑、棚田、畑			
25	玉村町No.627道跡				●	●				R15試掘、道			
26	神人村道跡				●	●				R2試掘、土坑・溝			
29	阿佐美前				●	●	○	○	○	○	○	○	R2試掘、土坑・溝
30	神人村I道跡				●	●				R2調査、水田			
31	玉村町No.79道跡				●	●				S63試掘、土師器 60級地			
32	玉村町No.30道跡				●	●				R2試掘			
33	玉村町No.57道跡				●	●				R2試掘、古墳			
34	玉村町No.82道跡				●	●				R2試掘、集落畑			
35	玉村町No.511道跡				●	●				R4調査、畑			
36	梅崎南出道跡				●	●				R2調査、畑			
38	玉村町No.81道跡				●	●				R2試掘			
39	玉村町No.73道跡				●	●				R2試掘、集落			
40	松原道跡				●	●				散布地、古墳			
41	扇石山古墳群				●	●				散布地、終末期古 墳群			
42	宮郷村第4号墳				●	●				R44調査			
43	村妻跡古墳				●	●				R44調査			
44	宮郷村第8号墳				●	●				R44調査			
45	宮郷村第7号墳				●	●				R44調査			
46	宮郷村第5号墳				●	●				R44調査			
47	宮郷村第6号墳				●	●				R44調査			
48	宮郷村第13号墳				●	●				R44調査			
49	宮上塚古墳				●	●				R44調査			
50	宮郷村第12号墳				●	●				R44調査			
51	宮上塚古墳				●	●				R44調査			
52	上之宮古墳				●	●				R40調査、石室調 査			
53	石宮古墳群				●	●				終末期古墳群々			
54	宮郷村第11号墳				●	●				R44調査			
55	宮郷村第10号墳				●	●				R44調査			
56	宮郷村第9号墳				●	●				R44調査			
57	宮郷村第8号墳				●	●				R44調査			
58	宮郷村第17号墳				●	●				R44調査			
59	宮郷村第15号墳				●	●				R44調査			
60	宮郷村第14号墳				●	●				R44調査			
61	宮郷村第16号墳				●	●				R44調査			
62	西上之宮道跡				●	●				散布地、集落			
63	徳文神社				●	○	○	○	○	式内社、上之宮社 15、16世紀、那波 氏			
64	上之宮宮寺				●	●				散布地			
65	西本郷道跡				●	●				散布地			
66	東上之宮道跡				●	●				散布地			
67	東上之宮道跡				●	●				R23-24調査、集落、 土坑、ビト、溝、 畑、復旧溝、畑、 溝、井戸			
68	東上之宮道跡				●	●				R23-26調査、集落、 土坑、溝、水田 復旧溝			
69	阿弥大寺本郷道跡				●	●				R21試掘、集落、水 田、畑			

No	道跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
70	阿弥大寺本郷道跡				●	●				R22-23調査、集落、 館、井戸、溝、 水田
71	貞玉寺古墳跡				●					散布地、古墳
72	宮本道跡				●	●				散布地、集落
73	宮本前道跡				●	●				R8・11-12調査、水田、 水溝、畑
74	宮本前道跡 I・II区				●	●				散布地
75	I号塚道跡				●	●				那波氏、15世紀、 集古文書、利朝川 祖墓
76	小泉城				●	●				R13-17調査、建物・ 道路、溝、水田、 畑、復旧溝
77	集落跡				●	●				R27調査、集落、 土器焼成、水田、 復旧溝
78	集落跡				●	●				R104試掘(Na547)、 畑、道路
79	福島曲戸道跡				●	●				R12試掘(Na601)、 集落、水田、溝、 復旧溝
80	玉村町No.565道跡				●	●				R11調査、水田、溝
81	玉村町No.673道跡				●	●				R44試掘、水田、土 坑
82	玉村町No.600道跡				●	●				R107調査、集落、 屋敷、水田、復旧 溝
83	野原道跡				●	●				R147調査、集落、 屋敷、土坑、井戸、 溝、溝、溝、復旧 溝
84	玉村町No.692道跡				●	●				R44調査、集落、 水田、溝、復旧 溝
85	玉村町No.176道跡				●	●				R47調査(Na423)、 水田
86	福島久保田道跡				●	●				S62試掘
87	久保田道跡				●	●				R10調査、溝、土 坑、水田
88	玉村町No.512道跡				●	●				R27試掘、集落、水 田
89	玉村町No.156道跡				●	●				R2試掘、古墳
90	味噌袋・福島二丁町 道跡				●	●				R27試掘、集落、水 田
91	玉村町No.184道跡				●	●				R27試掘、集落、水 田
92	玉村町No.166道跡				●	●				R27試掘、古墳
93	何根道跡				●	●				R27試掘、古墳
94	玉村町No.204道跡				●	●				R27試掘、古墳
95	玉村町No.207道跡				●	●				R27試掘、古墳
96	玉村町No.212道跡				●	●				R27試掘、古墳
97	玉村町No.201道跡				●	●				R27試掘、古墳
98	玉村町No.202道跡				●	●				R27試掘、古墳
99	福島味噌袋道跡				●	●				R27試掘、古墳
100	南玉二丁町道跡				●	●				R23-24調査、水田、 畑、復旧溝、溝
101	南玉理屈道跡				●	●				R23-24調査、水田 畑、復旧溝
102	下之宮中冷道跡				●	●				R22-24調査、溝、 畑、復旧溝
103	玉村町No.208道跡				●	●				R27試掘
104	福島大光坊道跡				●	●				R9・12調査、集落、 溝、溝、溝、畑、復 旧溝
105	玉村町No.183道跡				●	●				散布地
106	玉村町No.596道跡				●	●				R11試掘(Na587)、 集落、水田、溝、 屋敷、復旧溝
107	福島大光坊道跡				●	●				R9調査、墓、水田
108	玉村町No.157道跡				●	●				R2試掘
109	玉村町No.199道跡				●	●				R2試掘
110	玉村町No.158道跡				●	●				R2試掘
111	玉村町No.161道跡				●	●				R2試掘
112	玉村町No.162道跡				●	●				R1試掘
113	玉村町No.160道跡				●	●				R2試掘、畑
114	福島南玉道跡				●	●				R11調査、集落、溝、 土坑
115	玉村町No.186道跡				●	●				散布地
116	玉村町No.163道跡				●	●				S62調査
117	玉村町No.164道跡				●	●				R2試掘、集落、水田
118	玉村町No.167道跡				●	●				R2試掘、集落、水田
119	玉村町No.148道跡				●	●				原家五輪塔(文安 5-6年)

No	道跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
120	玉村町№108道跡					●				旧試掘
121	千子堂遺跡									R3発掘、集落
122	玉村町№190道跡				●	●	●			散布地
123	玉村町№109道跡									R2試掘、集落
124	玉村町№698道跡									R2試掘、水田
125	玉村町№419道跡									R2試掘、水田
126	南玉郎						●	○		原武原敷
127	玉村町№701道跡									R2試掘(Na214)、土坑、堀?
128	玉村町№173道跡									R2試掘、水田
129	玉村町№138道跡				●					古墳?小
130	玉村町№185道跡						●			散布地
131	玉村町№314道跡				●	●	●			古墳
132	玉村町№6315道跡				●	●	●			古墳
133	玉村町№6316道跡				●	●	●			古墳
134	玉村町№6317道跡				●	●	●			古墳
135	玉村町№171道跡					●	●			R2試掘、集落、水田
136	玉村町№172道跡					●	●			R2試掘、集落
137	玉村町№170道跡									R2試掘、堀、水田
138	玉村町№625道跡									R2試掘
139	玉村町№206道跡									R2試掘
140	玉村町№193道跡				●	●				古墳?
141	杜宮崎古墳									S51発掘
142	玉村町№174道跡									旧試掘、水田
143	玉村城							●		南玉原原敷、金原氏、13世紀
144	玉村町№191道跡									散布地
145	千子堂1・2道跡									R6調査、集落、水田、溝
146	三塚2道跡									R5調査、水田、溝
147	三塚道跡									R5調査、水田、溝
148	玉村町№427道跡					●	●			散布地
149	玉村町№537道跡									R6試掘(Na483)、堀、水田
150	玉村町№214道跡				●	●	●			散布地
151	玉村町№429道跡									古墳?、S30航空写真
152	玉村町№430道跡									古墳?、S30航空写真
153	玉村町№431道跡									古墳?、S30航空写真
154	玉村町№194道跡									古墳
155	弁峰山古墳									R2試掘
156	玉村町№209道跡					●	●			R2試掘、水田、堀
157	玉村町№494道跡					●	●			R4試掘(Na408)、堀
158	玉村町№510道跡									古墳
159	玉村町№196道跡					●	●			古墳
160	玉村町№197道跡					●	●			古墳
161	玉村町№198道跡					●	●			古墳
162	次雷神社					●	○	○		式内社、上之宮注
163	玉村町№199道跡									旧2試掘(Na595)、溝
164	玉村町№598道跡					●	●			散布地
165	玉村町№213道跡					●	●			R2試掘、堀
166	玉村町№210道跡									R2試掘
167	玉村町№200道跡									R2試掘
168	玉村町№211道跡									R2試掘
169	玉村町№6215道跡					●	●			散布地
170	玉村町№489道跡									古墳
171	玉村町№433道跡					●	●			古墳
172	玉村町№437道跡					●	●			R2試掘、水田、堀
173	玉村町№432道跡					●	●			古墳?、S30航空写真
174	植田家住宅									国登録有形文化財、住生活跡所
175	玉村町№434道跡					●	●			古墳
176	玉村町№435道跡					●	●			古墳
177	玉村町№436道跡					●	●			古墳
178	玉村町№437道跡					●	●			古墳
179	玉村町№438道跡					●	●			古墳
180	玉村町№466道跡									R2試掘
181	玉村町№467道跡									R2試掘
182	玉村町№439道跡					●	●			古墳
183	玉村町№440道跡					●	●			古墳
184	玉村町№441道跡					●	●			一本櫛古墳?、S30航空写真
185	川井箱石道跡	●		●		●	●			R9調査、包含樹、集落、水田、溝、土坑
186	小泉大塚越道跡									R9・6・12調査、水田、堀、復旧溝、溝

No	道跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
187	小泉小塚遺跡					●				R2発掘調査
188	玉村町№442道跡					●				古墳
189	玉村町№468道跡					●				R2試掘
190	玉村町№469道跡					●				R1試掘(Na692)、水田?小
191	玉村町№686道跡					●				R2試掘
192	玉村町№470道跡					●				R2試掘
193	北田中道跡					●				R1調査、堀
194	玉村町№685道跡					●				R16試掘(Na685)、堀、復旧溝
195	玉村町№458道跡					●				R1試掘(Na347)、水田
196	扇倉木1号墳					●				S52発掘
197	扇倉木2号墳					●				S52発掘
198	沖道跡									R10調査、堀
199	玉村町№459道跡									R2試掘
200	玉村町№543道跡									R7試掘(Na494)、堀
201	玉村町№460道跡									R1試掘
202	往來道跡									R6調査、堀
203	玉村町№714道跡									R4試掘(Na713)、堀
204	玉村町№471道跡									R2試掘
205	玉村町№179道跡									散布地
206	上飯島芝堀跡									R6調査、集落、水田
207	玉村町№687道跡									R20試掘(Na697)、水田
208	上飯島芝堀2道跡									R6調査、集落、水田
209	玉村町№528道跡									R5試掘(Na469)、集落、水田
210	玉村町№554道跡									R9試掘(Na527)、集落、水田
211	玉村町№181道跡					●	●			散布地
212	玉村町№165道跡					●	●			S52試掘、集落
213	玉村町№187道跡					●	●			散布地
214	玉村町№188道跡					●	●			散布地
215	大明神道跡					●	●			R10調査、水田
216	玉村町№709道跡					●	●			R22試掘(Na721)、土坑、土
217	茂木館(元水堀)								○	田口氏、天正11年佐竹勢奇襲
218	玉村町№180道跡					●	●			散布地
219	玉村町№417道跡					●	●			R2試掘
220	玉村町№418道跡					●	●			S63試掘
221	玉村町№180道跡					●	●			散布地
222	玉村町№182道跡					●	●			散布地
223	徳田原敷							○		田口広政、天正、西蔵仁崇跡
224	玉村町№688道跡									R21試掘(Na711)、水田
225	玉村町№420道跡									R1試掘、溝
226	宮下原敷								○	大正年間まで建物残
227	玉村町№424道跡									散布地
227	五郎作東道跡									R9調査、溝
228	玉村町№421道跡									R2・9試掘、水田、溝
229	蔵田山道跡					●	●			S62調査、集落
230	玉村町№351道跡					●	●			古墳
231	萩塚									能賀芝堀村第10号墳
232	萩尾3号古墳									能賀玉村町第1号墳
233	玉村町№710道跡									S41調査、能賀玉村町第2号墳
234	下茂木神明2道跡									S62調査、水田、溝
235	神明道跡									S61調査
236	玉村町№422道跡									S63試掘
237	玉村町№354道跡									S41調査、能賀玉村町第3号墳
238	玉村町№355道跡									能賀玉村町第24号墳
239	玉村町№423道跡					●	●			散布地
240	玉村町№343道跡									能賀玉村町第4号墳
241	玉村町№356道跡									古墳、S30航空写真
242	玉村町№358道跡									能賀玉村町第6号墳
243	玉村町№362道跡									能賀玉村町第10号墳
244	玉村町№358道跡									能賀玉村町第7号墳

## 第2節 周辺道路の歴史的環境

No	道路名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
245	玉村町No.360道路				●					総覧玉村町第8号墳
246	玉村町No.361道路				●					総覧玉村町第9号墳
247	玉村町No.363道路				●					総覧玉村町第11号墳
248	玉村町No.364道路				●					総覧玉村町第12号墳
249	玉村町No.365道路				●					541調査、総覧玉村町第13号墳
250	玉村町No.366道路				●					542調査、総覧玉村町第14号墳
251	深沢道路				●					96調査、集落、古墳
252	玉村町No.414道路				●					92・14試掘、古墳
253	玉村町No.367道路				●					541調査、総覧玉村町第15号墳
254	玉村町No.368道路				●					総覧玉村町第16号墳
255	玉村町No.369道路				●					総覧玉村町第18号墳
256	浄土山古墳				●					542調査、総覧芝根村第1号墳
257	玉村町No.370道路				●					古墳
258	梨ノ木山古墳				●					541-42調査、総覧芝根村第3号墳(京高塚型古墳)
259	玉村町No.372道路				●					古墳、S36航空写真
260	玉村町No.373道路				●					古墳、S36航空写真
261	深沢道路(2次調査)				●	●				集落、古墳、墓、水田
262	玉村町No.374道路				●					古墳、S36航空写真
263	オトノ塚道路				●					R17調査、総覧芝根村第2号墳(付塚)、集落、井戸
264	殿台山古墳				●					総覧芝根村第4号墳
265	下茂木地区道路群(本路線No.21)				●	●				563調査、水田、井戸、溝
266	玉村町No.513道路				●	●				R14試掘(No.513)、講土土、水田
267	玉村町No.563道路				●	●	●			R10試掘(No.520)、溝、ビコ
268	下茂木屋敷						●			遺跡基、五文衛、天正年間、田口文書
269	下茂木地区道路群(本路線No.22)				●	●				563発掘
270	玉村町No.425道路				●	●				散布地
271	玉村町No.569道路				●	●				R10試掘(No.557)、水田、溝
272	向山道路				●	●	●			R19・20試掘(No.694・704)
273	玉村町No.426道路				●	●				散布地
274	玉村町No.668道路				●	●	●			R17・19試掘、土坑、水田、溝、畑田溝、井戸、ビコ
275	北原道路				●	●	●			R6調査、集落、墓、土坑、井戸、溝、水田
276	街道南道路				●	●	●			R2調査、墓、土坑、ビコ、溝、井戸
277	茶釜山古墳				●					古墳
278	玉村町No.428道路				●	●				散布地
279	阿子塚古墳				●					総覧芝根村第9号墳
280	川井城(古城)						●			遺跡基、16世紀、田口文書
281	玉村町No.461道路				●					R2試掘
282	玉村町No.446道路				●					544調査、総覧彌れ芝根村第17号墳
283	玉村町No.473道路				●					散布地
284	二ツ子山古墳				●					総覧芝根村第5号墳
285	玉村町No.449道路				●					543調査、総覧彌れ芝根村第14号墳
286	玉村町No.450道路				●					544調査、総覧彌れ芝根村第16号墳
287	玉村町No.451道路				●					544調査、総覧彌れ芝根村第15号墳
288	玉村町No.443道路				●					総覧芝根村第12号墳

No	道路名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
289	玉村町No.444道路				●					S44調査、総覧彌れ芝根村第18号墳
290	川井稲藁山古墳				●					総覧芝根村第7号墳、三角縁神祇鏡出土
291	玉村町No.499道路						●			R2試掘(No.86)、水田
292	玉村町No.497道路						●			R2試掘(No.73)、水田
293	玉村町No.462道路							●		S53試掘
294	玉村町No.463道路							●		S63試掘、畑
295	玉村町No.464道路							●		R2試掘
296	玉村町No.452道路				●					古墳
297	玉村町No.568道路							●		R10試掘(No.555)、畑、復旧溝
298	玉村町No.474道路				●	●	●	●		R2試掘、散布地
299	玉村町No.480道路							●		R3試掘
300	五科堀内路									両帯使街道利根川渡河点所在(開所)
301	玉村町No.472道路							●		R13試掘(No.621)、包含塚、水田
302	玉村町No.615道路				●		●	●		中路東山道
a	東山原路							●		
b	鎌倉支道支道							●		
c	上野大道							●		
d	日光橋惣使街道							●		
e	日光裏街道							●		大街道、江戸道、東京道
f	佐渡参行道							●		
g	五科路							●		
h	柴宿							●		
i	五科河岸							●		
j	朝色河岸							●		
k	備前橋(滝川)							●		関東奉行伊奈備前守

#### (4) 古墳時代

玉村町から前橋市南部及び伊勢崎市南部にかけての地域開発史のなかで、最初の大きな画期が古墳時代前期にあるとの理解については、大方の意見が一致するところである。当地域において、古墳時代前期の集落遺跡は、弥生時代後期の状況に比べ、爆発的ともいえる急激な遺跡の増加を示す。遺跡規模の大小や微妙な時期差を除けば、分布密度の濃淡も認めたい。これは、弥生後期には何らかの理由で果たし得なかった水田開発を広域にしかも短期間のうちに押し進めた結果と考えてよいだろう。水田跡については、浅間山As-Cテフラ(3世紀後半～4世紀初降下)に覆われた検出例は不明だが、第7図の範囲には確認されなかったが、周辺地域からは、6世紀初頭の榛名山降下テフラ(Hr-FA)に覆われた水田耕土下から走向や区画の異なる水田畦畔痕跡が確認されていることから、4～5世紀には水田の開発と経営が進められたことは間違いない。集落の規模や継続期間にはばらつきがあり、現利根川左岸にあたる伊勢崎市阿弥大寺本郷遺跡(69)や同市東上之宮遺跡(67)は規模が大きく後期まで継続する拠点集落と位置づけられてもよい。このようないくつかの拠点集落と多くの小規模短期集落の組み合わせで分布し、一気に広範囲の水田開発を進めたと理解したい。

前期の古墳については、川井稲荷山古墳(290)、軍配山古墳(232)、などが近隣のものとしてある。本遺跡に近い箱石浅間山古墳や川井稲荷山古墳(290)は2次的な埋葬のための墳丘改変で墳形や規模は不明だが、初期の段階では4世紀代の前期古墳であったことが判明している。川井稲荷山古墳ではこの初期埋葬に伴ったと考えられる三角縁神獣鏡1面が出土している。また、街道南遺跡(276)から周溝墓が検出されている。

古墳時代中期(5世紀代)は、前期に比べると遺跡数が減少する傾向がうかがわれ、現利根川左岸の伊勢崎市阿弥大寺本郷遺跡(69)のように後期まで継続する集落と前期で一旦終息する集落の両者がみられる。梨ノ木山古墳(258)など中期古墳が存在すること、前述のように6世紀初頭に噴火した榛名山降下テフラHr-FAで覆われた水田が玉村町域～前橋市南部の各地で検出されていることから、5世紀代を通じて継続した地域経営が行われてい

たことは間違いないだろう。ただし、この時期の古墳としては5世紀後半の梨ノ木山古墳(258)などが判明しているのみで、5世紀前半に比定できる古墳については不明確なままである。なお、松原Ⅲ遺跡(4)では5世紀前半の滑石製模造品の工房跡が検出されており、比較的早い段階で模造品による祭祀システムの一部を担う地域として機能していたことが知られる。

古墳時代後期(6～7世紀)には、烏川左岸に茂木古墳群(第7図左下)、川井古墳群が、現利根川右岸にそって箱石古墳群(第7図右下)、小泉古墳群(169中近世)がそれぞれ展開するようになる。そのうち川井古墳群のなかの芝根16号古墳(286)は昭和44年に群馬大学の手で発掘調査が行われ、残されていた石室構造から群馬県内でも最古段階に含まれる横穴式石室であると考えられている(右島2009)。小泉古墳群では全長46mの前方後円墳である小泉大塚越3号墳(186)がほぼ全面調査され、金銅製冠片・單鳳頭環大刀・馬具等の豊富な副葬品や多彩な形象埴輪等が出土している。同じく小泉大塚越7号墳(186)からは稀少な人面付円筒埴輪が出土した。茂木古墳群の中核であるオトカ塚古墳(263)は全町86mを越える前方後円墳であり、日本最大級の馬形埴輪を出土したことで知られる。これらはいずれも6世紀中頃～後半の古墳と考えられ、玉村地区における古墳築造最盛期を代表する例といえよう。

玉村地区における6～7世紀代の古墳の密な分布状況に比べ、集落遺跡の存在は限られている。土器などの遺物については各所で散見出来るが、集落としての姿を示すのは本遺跡の西2km程にある福島飯塚遺跡などわずかである。

玉村町～前橋市南西部域は、6世紀の初頭と中頃に噴火した榛名山の降下テフラの直接的な被害は少なかったようだが、その二次的災害ともいえる泥流が広範囲に堆積しており、これによって埋もれた田畑の分布が知られる。同様に、現利根川の左岸にあたる伊勢崎においても東上之宮遺跡(67)や阿弥大寺本郷遺跡(70)で泥流埋没畑が検出されている。

#### (5) 奈良・平安時代

律令期の上野国には13の郡が置かれ、更にその下に郷が置かれた。10世紀の『倭名類聚抄』に記載された「那波

郡には朝倉・頼田・田後・佐味・俊文・池田・葦束の7郷が属しており、このうち佐味・頼田郷が現在の玉村町域に概ね推定されている(尾崎1976)。

この地域における集落遺跡は7世紀後半あたりから顕在化してきて、平安時代の9世紀代には分布密度がかなり高くなり、分布範囲もほぼ全域にひろがるようである。

集落遺跡以外では、現利根川左岸にある上福島尾柄町(18)では東西に走る推定東山道駅路(a)、牛郷矢ノ原(ルート)が判明している。これは、側溝心々距離約9~10mで、7世紀後半から8世紀にかけて利用されたと推定されている。また、この推定駅路と関連して、南に約250mほど離れて官衙的施設と目される一万田遺跡がある。

本地域では、1108(天仁元)年に噴出した浅間山の火山灰に比定される浅間Bテフラ(As-B)に覆われた水田跡の検出が広範囲に見られる。これらは平均幅1.3mほどの大畦の走向から、ほぼ律令期の条里地割に沿ったものと理解されている。部分的に条里プランから外れた地形優先の区画や、異なる基準線を用いたらしい区画の存在なども判明している(中島・吉澤2004)。As-Bに覆われた水田条里地割の成立年代については、耕土下位から出土する土器の年代から8世紀後葉(中里2000)、前橋台地南部の調査例をもとに9世紀初頭以降(新井2001)といった見解がある。

ところで、本遺跡の南東近くには延喜式内社である火雷神社が鎮座する。現本殿は18世紀中頃の建物だが、縁起によれば御諸別王の創建で、796(延暦15)年に官社に列せられたと『日本後紀』にみえる。また、現利根川を越えた伊勢崎市側には俊文神社が鎮座する。この両社は上野国の12座のうちの2座であり、地名「上之宮」「下之宮」と呼びて南北に並んだ位置関係にあることが注目される。いずれも8世紀には存在していたことが想定され、火雷神社は農耕神、俊文神社は織物・養蚕の神の信仰とし、古代集落の展開と関連づける考え方もある(井上1992)。

なお注目される出土遺物として、福島曲戸遺跡(79)から「上野国」ほかの刻書紡輪や緑輪陶器、上飯島芝根Ⅱ遺跡(208)では「影」文字の銅印、また現利根川左岸の神人村遺跡(28)からは瑞花双鳳八棱鏡が出土している。

## (6)中・近世

本地域における発掘調査では、1108(天仁元)年噴火による浅間Bテフラを鍵層として調査面を分け、これより上層で確認される遺構や出土遺物を中世及び近世に帰属するものとして扱うことが多い。また、1783(天明3)年の浅間Aテフラを鍵層に近世遺構であることを認定することができる。ただし、このような鍵層となるテフラの認定が不明確であったり、出土遺物がほとんど見られない場合には、中世と近世を明確に分かつことは難しい。また、中世から近世を通じて現代までその痕跡を残す遺構もあることから、ここでは分割せず一括して概観する。12世紀中頃(長寛年中)に伊勢神宮内宮の「玉村御厨」がこの地におかれたとの記録(『神宮雜記』)が残されている。この時の在地開発領主が玉村氏であったとも目される。鎌倉幕府の政權下では、それまで上野国奉行人の安達氏に被官していた玉村氏によって支配されていたが、弘安8(1285)年の霜月騒動により、北条得宗家へ支配が移った。これにより、北玉村は円覚寺、これ以外の地は極楽寺に寄進されたと推定されている(唐沢定市1988)。

平安時代後期頃に現伊勢崎市南西部域を支配していたと推定される藤原姓那波氏が、治承・寿永乱(1180~1185)で没落し、替わって中原姓大江氏が那波氏を名乗ったといわれる。この中原姓那波氏は、室町時代に上杉氏守護下で玉村を支配し、戦国期には由良氏、のち後北条氏に属したらしい。この地域は、周辺の有力な豪族や、戦国期には上杉、武田、後北条氏らの動向に大きく影響を受け、河川交通や戦略的な要衝として度重なる戦乱の舞台ともなったため、広い範囲にわたって荒廃したと推測される。

発掘調査からは、玉村町~前橋市南部にかけて多く分布する環濠屋敷が注目されるが、発掘調査によって、周知の遺構は戦国末から近世のものが多く、中世の屋敷遺構は未周知のものが多いことが分かってきた。

初源が13世紀代まで遡及する可能性のある城郭・屋敷としては、弘長二(1262)年記録ほか板碑があり玉村太郎邸宅の伝承の残る観照寺屋敷(上之手)のほか、玉村城(143)、南玉館(126)、阿左美館(6)などが知られる(群馬県教育委員会1988)。発掘調査例では、本遺跡の他、福島久保田遺跡(86)、久保田遺跡(87)、福島味噌袋遺跡



(90)、福島大光坊遺跡(104)等が列記され、近世まで継続するものもみられる。なお、本遺跡の西方には金蔵寺があり、その開基と伝わる金原氏の屋敷跡と推定される玉村城143、(南玉村屋敷)が南に隣接する。ここには町重要文化財に指定された2基の五輪塔(文安5・6年銘)が残る。その更に南東に接して南玉館が位置し、那波氏家臣であった原氏の館、あるいは上野国守護安達氏家臣の玉村氏の館との伝承が残る。

また、大江姓那波氏の居城は、本遺跡南に在った小泉城(76)であったが、小泉城は、前節に述べた利根川西遷によって、その過半が利根川に削り取られてその機能を失ったため、居城を芝宿(H)に東隣する堀口城(那波城)に移している。那波氏は、源頼朝により那波郡に封じられたが、利根川西遷により、その支配領域は利根川左岸(東側)に片寄らざるを得なかったものと思慮される。

鎌倉公方と関東管領家の内紛である15世紀後半の享徳の乱(1455～1483)において、利根川(下流域は現荒川)は、鎌倉公方と関東管領家の境界となり、右岸(西側)にある下之宮高俣遺跡(1)は関東管領の勢力範囲にあったものと判断される。

農業生産関連の遺構としては、福島久保田遺跡(87)で1427(応永34)年と想定される洪水層に覆われた水田跡が検出されている。

近世に入ると、この地は徳川幕府代官の伊奈忠次の管掌のもとで再開発が実施された(『玉村町誌』)。正保4(1647)年以降には、玉村町を東西に横断する日光御幣使街道の通行が盛んとなって宿場として繁盛し、利根川渡河点の五料には厳しい取り締まりの関所、渡船場が置かれた。現在の玉村町の景観はほぼこの時期に形成されたと考えられる。

近世の埋没遺跡としては、中世から引き続く環濠屋敷、1783(天明3)年浅間山噴火に伴う泥流被害の埋没家屋・田畑がある。

現利根川左岸にある上福島町遺跡(24)は、天明泥流によって埋没した建物が発見された。ここからは礎石建物10棟、便所6棟、井戸2基、畑、道などの存在が判明し、当時のままの各種生活用品が出土している。また樋越諏訪前遺跡(36)では、埋没家屋や植え込みなどが、利根川遺跡では矢川氾濫を防ぐための堤防遺構が確認されている。この天明泥流で埋没した田畑としては、川井箱

石遺跡(185)、小泉大塚遺跡(186)、小泉長塚遺跡(187)等が知られており、柄田添遺跡では農作業(草取りか)の足跡、利根川対岸の伊勢崎市東上之宮遺跡では水田の倒れたイネも見られている。この天明泥流被災後の復旧田畑の検出も多い。下之宮中沖(102)、川井箱石(185)、伊勢崎市東上之宮(67)等の各遺跡では、砂礫の多く混じる泥流堆積物の天地返しによる耕土復旧を行った様子がありありとかがえる。下之宮高俣遺跡(1)の東部(1・2区)は、天明泥流の被害を直接被った地域である。

## 【参考文献】

- 新井 仁2001「群馬県における平安時代の水田開発について」研究紀要19  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
新井房夫1967『群馬大紀要自然科学編』10  
井上唯雄1992『第4章 律令時代の玉村町 第5節 古代信仰と神社』『玉村町誌』通史編 上巻  
尾崎喜左衛門1967『上野玉村古墳群発掘調査概報』  
尾崎喜左衛門1976『群馬の地名』  
唐澤定市1988『玉村朝野』『国史大系』9 吉川弘文館  
堀口 宏1995『第三章 地形・地質 第二節 台地』『玉村町誌 通史編 下巻』2 p.1516  
石井榮一2009「B区4面より検出された建物遺構の建築史的検討」『福島大島遺跡(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
玉村町誌編集委員会1992『玉村町誌 通史編 上巻』  
中里正康2000『砂防遺跡における大規模の調査報告』群馬考古学手帳10  
中島直樹1999『VIまとめ』『沖道跡』玉村町教育委員会 玉村町跡踏査会  
中島直樹・吉澤 学2005『群馬県玉村町における集里地割の復原』『東国史論』19  
土生田純之2008『古墳時代の実像』『古墳時代の実像』  
深澤敦仁2013『玉村周辺の古墳時代のはじまりを考える』『玉村町の前期古墳』平成25年度玉村町歴史資料館 第18回企画展資料  
石島和夫2009『玉村の古墳群を考える』群馬考古資料集編り展資料 玉村町歴史資料館  
峰岸純夫1964『上州一揆と上杉氏守護領国体制』『歴史学研究』284  
歴史学研究会  
築瀬大輔2012『中上野の地域構造と利根川—東上野と西上野』『群馬県立歴史博物館紀要』第33号  
矢口裕之2007『群馬県丸中田遺跡の縄文時代草創期遺物包含層の順序と古環境』『研究紀要』17、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
山崎 一1978『群馬県古城址の研究』上巻  
吉田 稔2003『北島式の掘削』『埼玉考古別冊7 埼玉考古学会シンポジウム 北島式土器とその時代』  
若狭 龍2002『古墳時代の地域経路』『考古学研究』49-2  
若狭 龍2011『中期の土毛野』『古墳時代土毛野の実像』季刊考古学・別冊17  
玉村町誌編集委員会1992『玉村町誌』  
玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』  
群馬県教委1988『群馬県の中世城跡』

## 第3章 発見された遺構と遺物

### 第1節 1面の調査

#### (1) 1面の概要(第8・9図、PL. 1・2・5～7)

1面は天明3(1783)年の、「浅間焼け」と呼ばれる浅間山の大噴火に伴い噴出したAs-A火山灰・軽石の前後の遺構を主体とした近世面である。

1面として扱っているが、主に天明3年7月7日(1783.8.4)午後から翌8日朝にかけて降下したAs-A軽石降下直前の面(以下「下面」とする)、7月8日午前のAs-A軽石降下直後の面(以下「中位面」とする)、そして午前10時の爆発に伴い発生し、午後に入って本遺跡付近に到達したAs-A泥流による被災後の面(以下「上位面」とする)に分けられる。

なお、本節では、上位面、中位面、下面の順に述べるが、中位面で特記すべき遺構は屋敷遺構内だけであるので、下面に含めて報告する。

なお、1-1区北部の中程には、地元で「クボッタ」と呼ばれる東西15m、南北36mの範囲で、As-A軽石下面寄り10cm程掘り窪められた区域があった。この区域は、当地での被災はなかったものの、昭和22(1947)年のカスリーン台風後の堤防のかさ上げのために掘削された痕跡であるという。

#### (2) 1面上位面

上述のように、1面上位面は、天明3(1783)年以降の所産の遺構群である。

1面上位面は1区から2区東部と、2西部以西の区域とに二分される。前者は天明3年の浅間山噴出の軽石降下による被災に加えて、火山災害の際に発生した層厚おおよそ1m程を測る泥流被災を受けた区域であり、後者は軽石による被災に留まった区域である。

1区と2区東部は、耕地復旧のための天地返しを目的とした復旧溝群が掘削されていたが、利根川堤防から約32mを境に、以西の区域は全面に復旧溝群が掘削されていたが、以東の区域は2面を確認したただけであった。ま

た復旧溝群は、畑の単位毎に掘削され、地表から深さ1.5～2m程の深さで掘削されていたことが確認される。

また2区中部から5区の区域にはAs-Aを踏み込んで耕作した復旧畑やこれを区画した道路、溝などを確認した。しかし遺存状態は全体に不良であったが、土地区画を復元できる箇所もあった。

2区中部から5区にかけての区域は、天明3年後のAs-A軽石を踏み込んで造られた畑や、道路、溝などが確認、調査した。

なお、遺構の報告に当たっては、区呼称を省いて記すこととする。

#### (a) 1区

##### 1. 復旧溝群(第10～13図、PL. 1・2・23)

**概要** 1区の復旧溝群は、As-A泥流被災後の天地返しによる耕地復旧のために掘削された遺構群である。1区では11面の復旧溝群を確認した。

**位置** このうち7・10号復旧溝群は1-1区北東部に、8・9号復旧溝群は同南東部にあり、4～6号復旧溝群は1-2区東部に、1号復旧溝群は同西部に、2A号復旧溝群は1-3区北部、2B号復旧溝群は同南部にある。

所在グリッドは表2に記した。

**規模・主軸方位** 表2に記した。

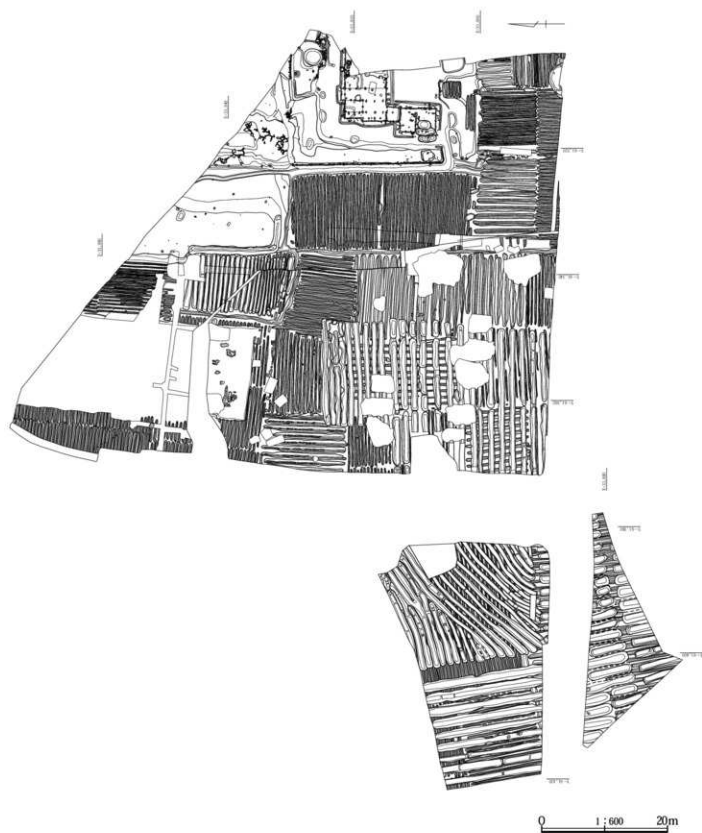
**構造** これらの復旧溝群は近接して掘削された溝群で構成される。

個々の復旧溝群の掘削の間隔、復旧溝の規模、溝と溝の間隔などは表2にまとめたが、いずれの復旧溝の掘削形態も箱型状で、底面は平底で、壁面は立ち気味である。

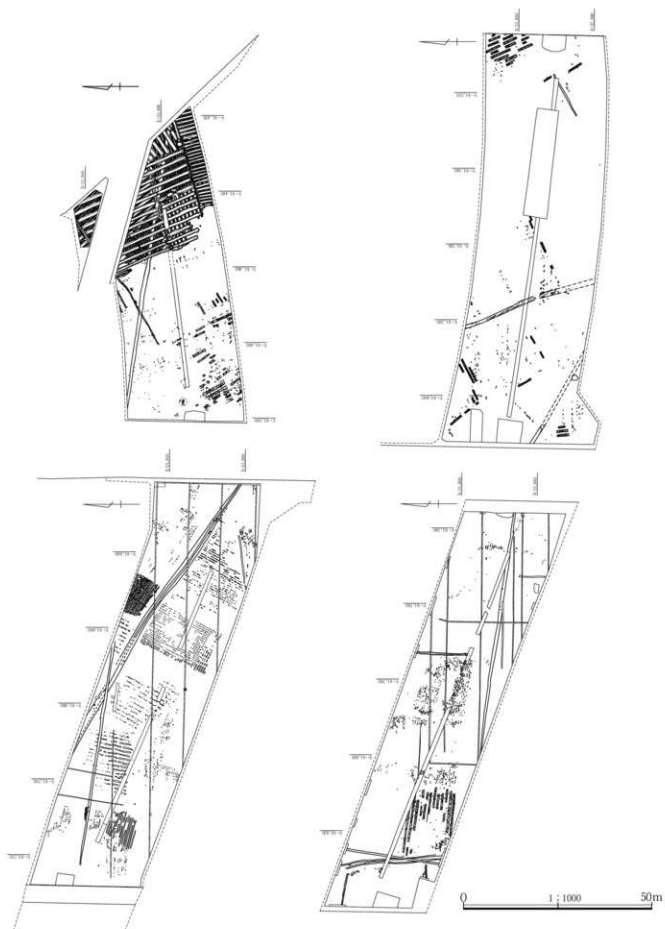
なお、9号復旧溝群は条の復旧溝を確認したが、過半の復旧溝が東西に2～3列に縦列に並ぶ。

**遺物** 1号復旧溝群からは不明鉄製品(1)と少量の近世の国産陶器片、近現代の土器片、2号復旧溝群からは少量の近世の国産陶器片、4号復旧溝群からは少量の国産陶磁器片が出土した。2号復旧溝群からは瀬戸・美濃陶器蓋(2)が出土した。

**所見** 1区の復旧溝群は畑の区画に対応して掘削されたものと思慮される。

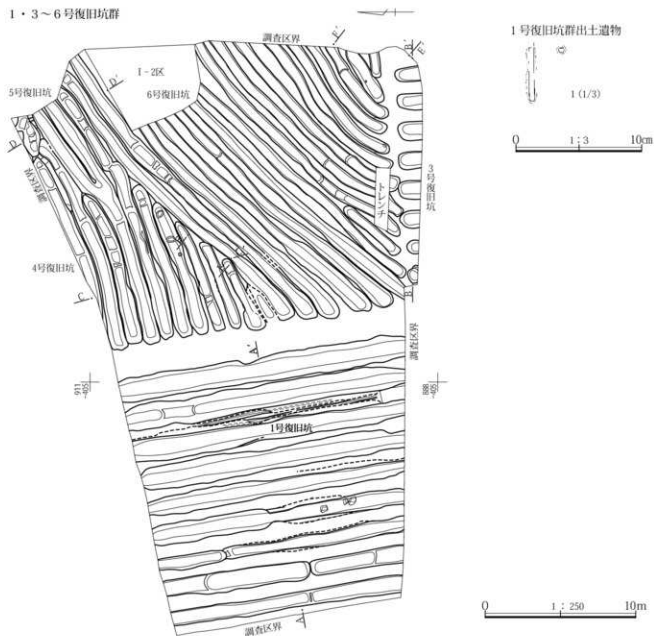


第8図 1-1区1面全体図



第9図 1・2・3区、2～5区1面全体図

1・3～6号復旧坑群



第10図の1 1区1・3～6号復旧溝群

また、その掘削時期は、天明3(1783)年以降の所産として把握されるに過ぎなかったが、1号復旧溝群から僅かであり、出土位置も特定できなかったが、近現代の陶磁器が出土しているため、近代に入ってから掘削されたものである可能性がある。

2・6・7・8号土坑(第12図)

**概要** 6号土坑は大型で、7・8号土坑は中規模の土坑である。共に南側が調査区外にでており、全容を把握することはできなかった。

**位置** 本土坑は1-1区の調査区南端、調査区の南東隅近くにある。所在グリッドは表6に記した。

**重複** 6・7号土坑は13号畑、6・8号土坑は16号畑を壊している。

また、6号土坑は7・8号土坑と重複するが、両土坑に対して、6号土坑の方が新しい。

**規模・主軸方位** 表6に記載した。

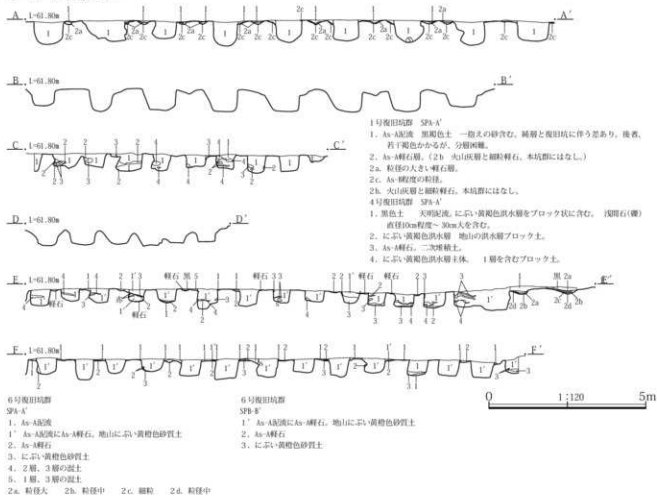
**覆土** 6号土坑は黒褐色土で埋没する。

**構造** 6～8号土坑は楕円形のプランを呈するものと想定される。共に箱形の掘削形態を呈するが、6号土坑の底面はやや丸底状を呈する。

**遺物** 6号土坑から銭種不明の銅銭(318)が出土したが、7・8号土坑からの遺物の出土はなかった。

**所見** 6号土坑の掘削意図は特定されなかった

## 1・3～6号復旧坑群



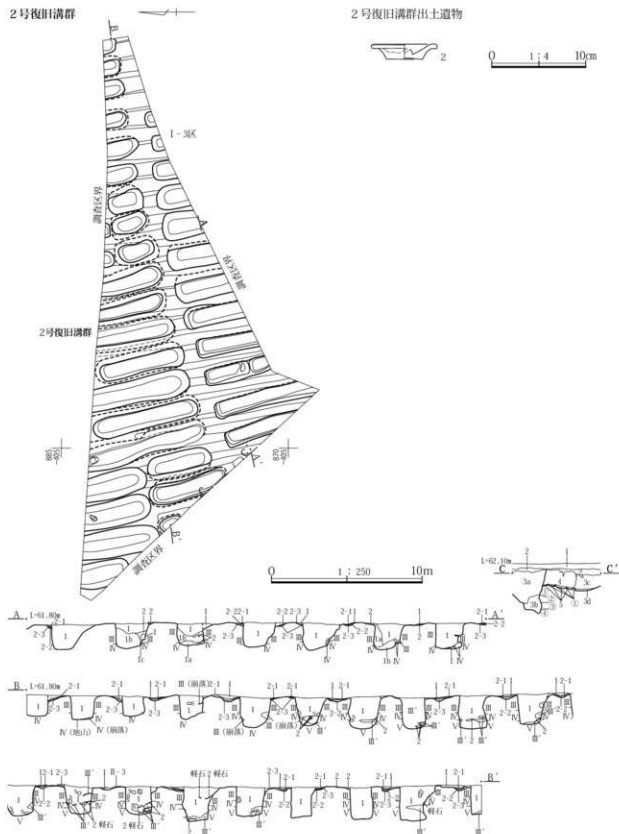
第10図の2 1区1・3～6号復旧溝群断面

表2 1区1面上位元復旧溝群一覧

番号	所在グリッド	主軸方位	規模(m)	復旧溝				溝間距離 (m)	(平均)					
				全長	側方間隔(cm)	(平均)	高さ(m)			(平均)	幅(cm)	(平均)	深さ(cm)	(平均)
1	800～908-402～421	N-07°-W	19.20 × 17.00	9	173～244	195.06	—	—	68～153	113.56	51～72	61.11	23～115	82.50
2A	904～074-360～368	N-83°-E	(9.86) × (44)	19	142～209	181.00	—	—	77～179	123.00	46～104	90.09	16～105	58.00
2B	868～879-382～404	N-75°-E	22.90 × (7.03)	12	165～214	194.00	—	—	102～160	123.17	58～101	85.08	31～103	69.18
3	889～891-383～398	N-90°	14.32 × (1.68)	8	182～197	190.71	—	—	86～125	109.38	44～72	61.88	32～90	79.57
4	898～913-392～402	N-75°-E	12.40 × 11.28	11	94～115	102.88	5.22～11.63	8.73	63～105	80.22	44～62	52.00	7～40	21.44
5	909～916-383～394	N-65°-E	(8.20) × (4.55)	5	99～109	102.67	—	—	90～105	82.80	24～58	42.00	5～31	16.67
6	890～912-382～400	N-45°-E	(26.92) × 16.00	16	66～136	102.53	—	—	55～107	60.47	38～68	50.58	3～45	33.59
7	929～947-336～346	N-5°-E	15.92 × 16.00	34	46～116	71.08	5.00～9.77	8.46	26～98	50.95	10～57	37.21	5～48	11.35
8	115～025-347～404	N-85°-E	17.00 × 10.28	9	86～142	110.25	16.64～16.96	16.77	37～107	84.44	22～58	36.22	8～54	30.63
9	889～915-347～372	N-7°-E	24.32 × (24.60)	15	116～204	168.79	—	—	78～115	97.13	45～76	58.47	28～138	71.64
10	950～951-342～346	N-83°-W	4.63 × (1.80)	7	59～111	78.40	1.16～1.08	1.06	45～61	52.17	7～13	10.57	11～55	26.33

2号復旧溝群

2号復旧溝群出土遺物



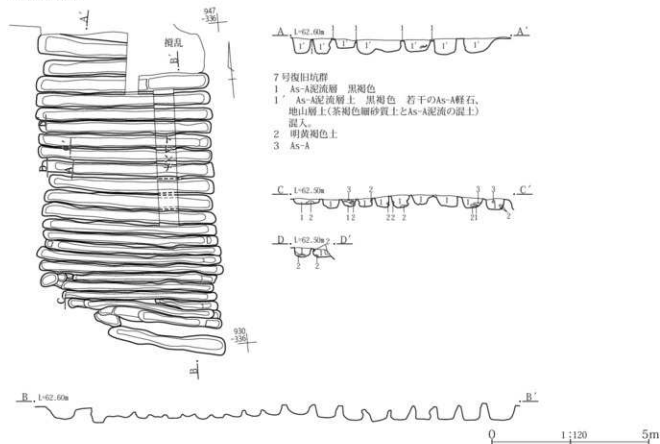
2号復旧坑群

1. As-A泥流 黒褐色上 一層式の砂含む。鈍層と復旧坑に伴う差あり。後者、若干褐色かかるが、分別困難。
2. As-A軽石層。(2b 火山灰層と細粒軽石、本坑群にはなし。)
- 2a. 粒径の大きい軽石層。
- 2c. As-B程度の粒径。
- 2b. 火山灰層と細粒軽石。本坑群にはなし。

第11図 1区2号復旧溝群

0 1:120 5m

## 7号復旧坑群



第12図 1区7号復旧溝群

その時期は、出土遺物から推して下限は現代に下るものと判断される。

## (b) 2区

## 1. 復旧溝群(第16図、PL. 5)

**概要** 2区の復旧溝群も、As-A泥流被災後の天地返しによる耕地復旧のために掘削された遺構群であり、4面の復旧溝群を確認した。

**位置** このうち1号復旧溝群は2-1区西部に、2号復旧溝は同中・西南部に、3号復旧溝群は同中・西北部にある。

**位置するグリッドは、**1号復旧溝群は866～876-417～444グリッド、2号復旧溝群は874～883-421～432グリッド、3号復旧溝群は869～891-429～462グリッドである。  
**規模・主軸方位** 1号復旧溝群 確認範囲：26.8×4.8m 主軸方位：N-76°-E

2号復旧溝群 確認範囲：12.6×7m 主軸方位：N-37°-W

3号復旧溝群 確認範囲：25.6×25.2m 主軸方位：

N-23°-W

4号復旧溝群 確認範囲：14.5×6.4m 主軸方位：N-75°-W

**構造** これらの復旧溝群は近接して掘削された溝群で構成される。

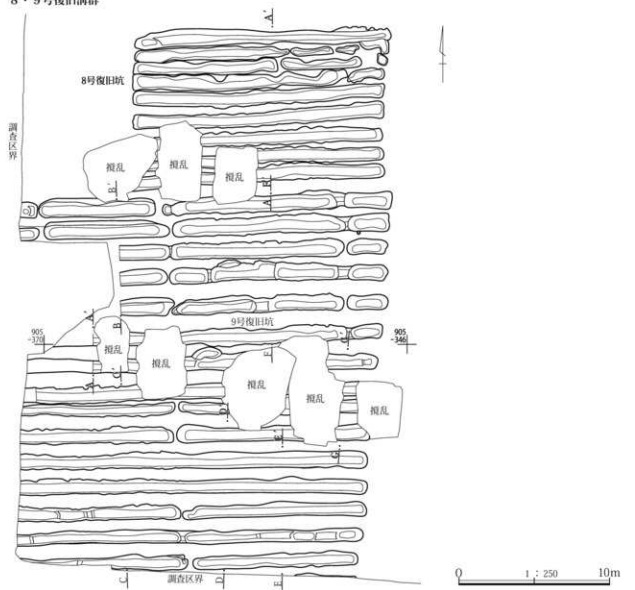
1号復旧溝群は28条の復旧溝を確認した。復旧溝は79～119cm、平均92.87cmの間隔で掘削され、その長さは、南側が調査区外にあるため、確認できなかったが、その幅は59～97cm、平均70.23cm、As-A下面からの深さは19～67cm、平均47.13cmを測り、隣接する復旧溝の間隔は15～38cm、平均25.29cmを測った。

2号復旧溝群は7条の復旧溝を確認した。復旧溝は159～211cm、平均178.33cmの間隔で掘削され、長さは東側が調査区外に出ていたため測定できなかったが、その幅は90～133cm、平均111.00cm、As-A下面からの深さは28～66cm、平均51.50cmを測り、隣接する復旧溝の間隔は22～85cm、平均50.00cmを測った。

3号復旧溝群は8条の復旧溝を確認した。復旧溝は182～197cm、平均190.71cmの間隔で掘削され、その長さ



8・9号復旧溝群



8号復旧溝群



- 8号復旧溝群 576号
1. 黄褐色土層 鎌倉む天明辰流土層、礫直径は10cm未満、黄褐色砂質土を含む。
  2. As-A、粘土やや小さい、直径1mm程度。
  3. As-4土層、黒褐色土層(天明辰流)を含む。
  4. 黒褐色土層 1層に同じだが、黄褐色砂質土が多い。

第13図の1 1区8・9号復旧溝群

は南側が調査区外に在ったため、測定できなかったが、その幅は86～125cm、平均109.38cm、As-A下面からの深さは44～72cm、平均61.88cmを測り、隣接する復旧溝の間隔は72～99cm、平均79.57cmを測った。

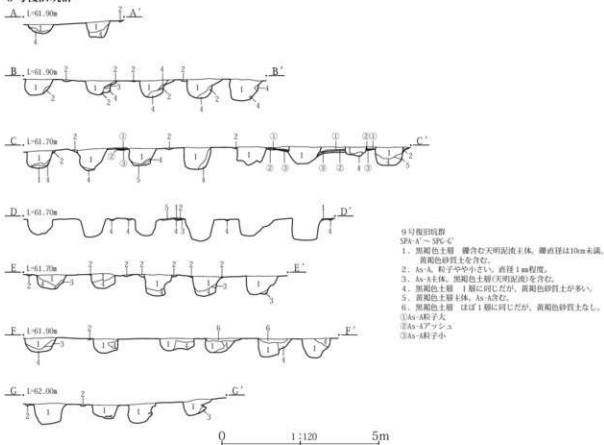
4号復旧溝群は14条の復旧溝を確認した。131～218cm、平均183.72cmの間隔で掘削され、復旧溝の長さは、南北両側が調査区外に出ていたため、測定できるものはなかったが、その幅は75～120cm、平均97.83cm、As-A下面からの深さは37～71cm、平均59.13cmを測り、隣接する復旧溝の間隔は33～123cm、平均86.59cmを測った。

遺物 2-1区の復旧溝群からは少量の国産陶磁器片が出土した。

所見 2区3・4復旧溝群は別遺構として報告したが、その走向と規模から推して、3号復旧溝群と4号復旧溝群のうち南部のものは同一の復旧溝群であると判断される。

また、その掘削時期は天明3(1783)年以降の所産として把握されるものの、その掘削時期を特定することはできなかった。

## 9号復旧坑群



第13図の2 1区9号復旧坑群土層断面

## 2. 復旧畑(第15図, PL. 5)

**概要** 上述のように、天明3(1783)年の浅間山噴火の被災復旧のため、2区東半部では復旧畑の掘削がおこなわれたが、2区西半部では、As-A軽石を鋤込んだ復旧畑3面を確認した。

しかしいずれも遺存状態は悪く、底面付近を調査できたに過ぎなかった。

**位置** このうち1号復旧畑は2区西部に、2号復旧畑は2区中・西南部に、3号復旧畑は2区中・西北部にある。

**位置するグリッド**は、1号復旧畑は858~888-471~498グリッド、2号復旧畑は360~879-452~472グリッド、3号復旧畑880~888-462~480グリッドである。

**規模・主軸方位** 1号復旧畑 確認範囲: 22.1×18.5m  
主軸方位: N-60°-E

2号復旧畑 確認範囲: 7×3.7m 主軸方位: N-30°-W

3号復旧畑 確認範囲: 5.95×1.8m 主軸方位: N-60°-E

**構造** 復旧畑は鋤先痕で確認されるが、サクの範囲を想

定できたものもあった。

1号復旧畑では16条のサクを確認した。サクは100~200cm、平均132.29cmの間隔で掘削され、その長さは確認できず、深さは測定できなかったが、幅は13~70cm、平均49.06cm、隣接するサクの間隔は45~150cm、平均80.83cmを測った。

2号復旧畑では5条のサクを確認した。サクは95~113cm、平均105.00cmの間隔で掘削され、その長さは確認できなかったが、幅は30~35cm、平均33.00cm、隣接するサクの間隔は65~80cm、平均73.33cmを測った。

3号復旧畑では2条のサクを確認した。確認範囲では、サクは153cmの間隔で掘削され、その長さは確認できず、幅は25~30cm、平均27.50cm、隣接するサクの間隔は125cmを測った。

**遺物** 2-1区の復旧畑からは肥前磁器染付碗(22)・皿(23)、産地不明の磁器小杯(24)出土遺物が出土した。

**所見** 2区1~3号復旧畑の掘削時期は天明3(1783)年以降の所産として把握されるものの、その掘削時期を特定することはできなかった。

1区6～8号土坑



第14図 1区6～8号土坑と出土遺物

(c) 3区

1. 2号道路(第18図)

**概要** 本道路は、硬化面によって確認された遺構であり、本道路は東西両側が調査区外に出るため、全容を詳らかにできなかった。

**位置** 本道路は3区西部、880～925-622～877グリッドに位置する。

**重複** 2号道路は他遺構との重複はなかった。

**規模** 2号道路 残長：25.3m 幅：89cm 深さ：-1cm

**覆土** 本道路はAs-Aを含む褐色土の下に確認された。

**構造** 本道路の走向はN-49°-Wに走向を取り、直線的な走行を呈する。

**遺物** 本道路からの遺物の出土はなかった。

**所見** 本道路の敷設の目的は特定されなかったが、5号復旧畑の北東を画している。

なお、敷設の時期は、天明3年以降の所産として把握できたに過ぎなかった。

2. 区画溝(第17・18図, PL. 6)

**概要** 3区では4条の区画溝を確認した。これらの区画溝は、後述の復旧畑を画するものである。

いずれの区画溝も削平により、遺存状況は不良である。

**位置** 1号区画溝は3区東部、865～870-515～519グリッ

ド、2号区画溝は3区中部、871～877-559～566グリッド、3号区画溝は3区西部、890～898-603～607グリッド、4号区画溝は3区西部、876～880-595～597グリッドに位置する。

**重複** いずれの区画溝も他遺構との重複はなかった。

**規模** 1号区画溝 残長：12.54m 幅：45cm 深さ：4cm

2号区画溝 残長：7.7m 幅：43cm 深さ：-1cm

3号区画溝 残長：24.3m 幅：38cm 深さ：3cm

4号区画溝 残長：3.7m 幅：35cm 深さ：-1cm

**覆土** 本道路はAs-Aを含む褐色土の下に確認された。

**構造** 1号区画溝の走向はN-61°-Eに走向を取り、直線的な走行を取るが、東端はN-75°-Eを向く。

2号区画溝の走向はN-67°-Eに走向を取り、直線的な走行を取る。

3号区画溝の走向はN-38°-Wに走向を取り、直線的な走行を取る。

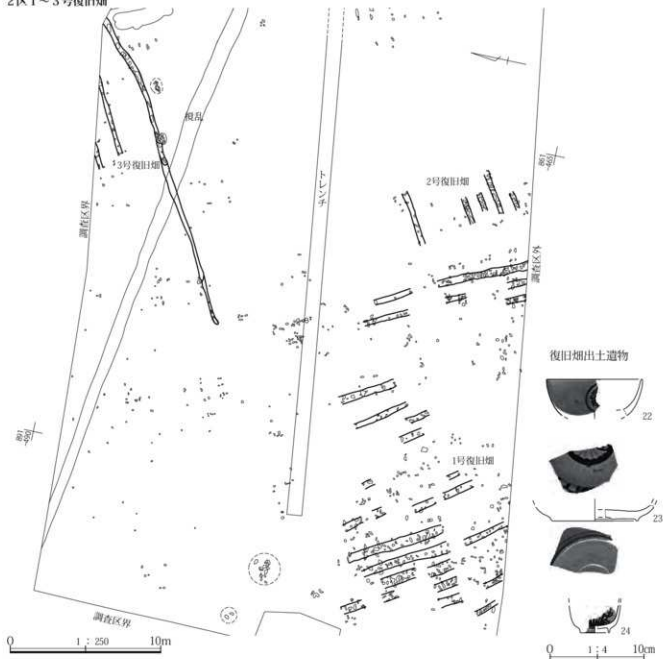
4号区画溝の走向はN-27°-Wに走向を取り、直線的な走行を取るが、東端はN-35°-Wを向く。

**遺物** 1～4号区画溝からの遺物の出土はなかった。

**所見** 上述のように、1～4号区画溝は復旧畑を区画する溝である。

なお、その掘削時期は、天明3年以降の所産として把握できたに過ぎなかった。

## 2区1～3号復旧畑



第15図 2区1～3号復畑

## 3. 復旧畑(第17・18図, PL. 6)

**概要** 3区においても、天明3(1783)年の浅間山噴火の被災復旧のため、As-A軽石を踏み込んだ復旧畑5面を確認した。

しかしいずれも遺存状態は悪く、底面付近を調査できずに過ぎず、深さも測定できなかった。

**位置** このうち1号復旧畑は3区北東隅部に、2号復旧畑は3区南東部に、3号復旧畑は3区中北部に、4号復旧畑は3区中南部に、5号復旧畑は3区南西隅部にある。

位置するグリッドは、1号復旧畑は876～888-504～516グリッド、2号復旧畑は867～880-553～576グリッド、

3号復旧畑は882～884-567～572グリッド、4号復旧畑は863～897-581～605グリッド、5号復旧畑863～872-601～611グリッドである。

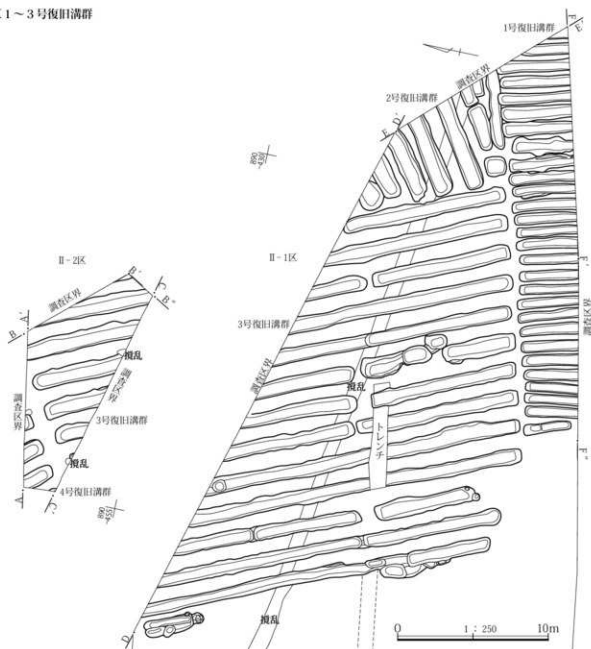
**規模・主軸方位** 1号復旧畑 確認範囲：17.15×12.9m 主軸方位：N-65°-E

2号復旧畑 確認範囲：3.9×0.4m 主軸方位：N-33°-W

4号復旧畑 確認範囲：22.10×11.60m 主軸方位：N-26°-W

5号復旧畑 確認範囲：3.10×2.60m 主軸方位：N-8°-W

2K1～3号復旧溝群



第16図の1 2区1～3号復旧溝群平面

構造 復旧畑は鋤先痕で確認されるが、サクの範囲を想定できたものもあった。

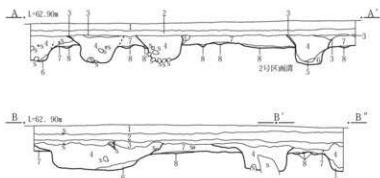
1号復旧畑では10条のサクを確認した。サクは95～130cm、平均107.19cmの間隔で掘削され、その長さは確認できず、深さは測定できなかったが、幅は25～55cm、平均40.50cm、隣接するサクの間隔は45～85cm、平均64.38cmを測った。

2号復旧畑ではサク1条を確認した。サクの長さ及び深さは確認できなかったが、その幅は40cmを測った。

3号復旧畑では2条のサクを確認した。サクは53cmの間隔で掘削され、その長さは確認できなかったが、幅は28～30cm、平均29.00cm、深さ2～3cm、平均2.5cm、隣接するサクの間隔は24cmを測った。

4号復旧畑では5条のサクを確認した。サクは85～110cm、平均100.83cmの間隔で掘削され、その長さは確認できず、幅は25～30cm、平均27.00cm、隣接するサクの間隔は60～85cm、平均75.00cmを測った。

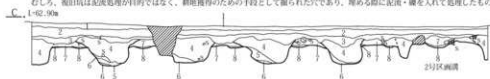
5号復旧畑では3条のサクを確認した。サクは85～



東壁 SPA-B' B''

- 1 暗褐色土 現代の耕作土(盛り土)。砂質(シルト)気味で、小礫を多く含む。上面に砕石が敷かれている。
- ※現代の耕地整備の際の盛り土と思われる。地山のシルト質土およびA流土を多量に含む。
- 2 灰褐色土 グライ化により灰色となる。3層と同質で灰色に変化した部分。シルト質で礫を少量含む。
- 3 黄褐色砂質土 シルト質で礫を少量含む。As-A直下の耕作土および耕作土下位の土(地山)の土と同じ土であるが、やや色が暗く、泥炭層を混在させる。
- 4 黒褐色土 復旧坑内の埋土で、A流土を主とし、大形礫をも含む。部分的にAs-Aや黄褐色砂質土を少量混在させる。
- 5 暗褐色土 復旧坑内の埋土で、A流土にAs-Aを多く混在させる。
- 6 黄褐色砂質土ブロック 黄褐色砂質土のブロックで、As-Aを混在させる。
- 7 黒色土 A流成であり、礫を多量に含む。
- 8 As-A 純層。

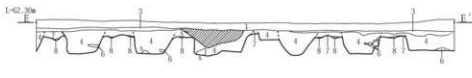
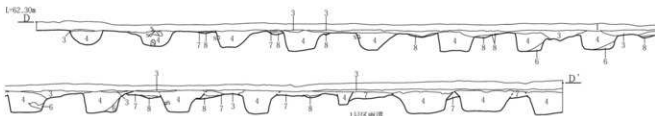
※2層と3層は、耕地復旧の際の復旧坑から出た土と思われる。いわゆる「天地返し」の結果と考えられる。  
むしろ、復旧時は泥炭処理が目的ではなく、耕地獲得のための手段として掘られた穴であり、埋める際に泥炭・礫を入れて処理したものと考えられる。



南壁 SPC-C'

- 1 暗褐色土 現代の耕作土(盛り土)。砂質(シルト)気味で、小礫を多く含む。上面に砕石が敷かれている。
- ※現代の耕地整備の際の盛り土と思われる。地山のシルト質土およびA流土を多量に含む。
- 2 灰褐色土 グライ化により灰色となる。3層と同質で灰色に変化した部分。シルト質で礫を少量含む。
- 3 黄褐色砂質土 シルト質で礫を少量含む。As-A直下の耕作土および耕作土下位の土(地山)の土と同じ土であるが、やや色が暗く、泥炭層を混在させる。
- 4 黒褐色土 復旧坑内の埋土で、A流土を主とし、大形礫をも含む。部分的にAs-Aや黄褐色砂質土を少量混在させる。
- 5 暗褐色土 復旧坑内の埋土で、A流土にAs-Aを多く混在させる。
- 6 黄褐色砂質土ブロック 黄褐色砂質土のブロックで、As-Aを混在させる。
- 7 黒色土 A流成であり、礫を多量に含む。
- 8 As-A 純層。

※2層と3層は、耕地復旧の際の復旧坑から出た土と思われる。いわゆる「天地返し」の結果と考えられる。  
むしろ、復旧時は泥炭処理が目的ではなく、耕地獲得のための手段として掘られた穴であり、埋める際に泥炭・礫を入れて処理したものと考えられる。



南壁 SPA-B' B''

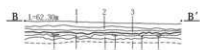
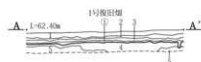
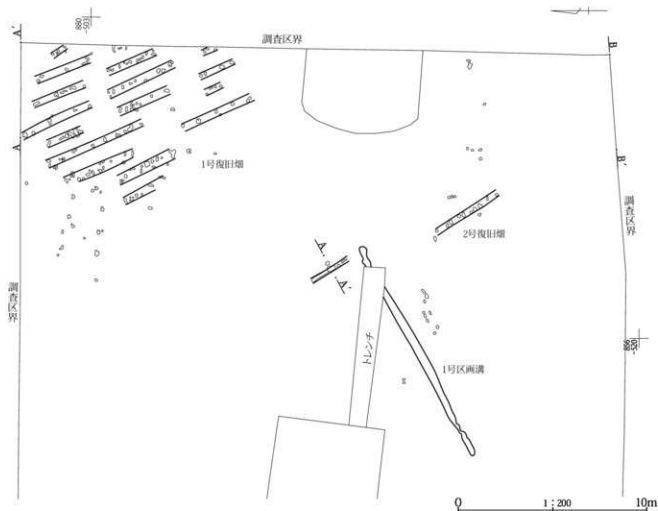
- 1 暗褐色土 現代の耕作土(盛り土)。砂質(シルト)気味で、小礫を多く含む。上面に砕石が敷かれている。
- ※現代の耕地整備の際の盛り土と思われる。地山のシルト質土およびA流土を多量に含む。
- 2 黄褐色砂質土 シルト質で礫を少量含む。As-A直下の耕作土および耕作土下位の土(地山)の土と同じ土であるが、やや色が暗く、泥炭層を混在させる。
- 3 暗褐色土 復旧坑内の埋土で、A流土を主とし、大形礫をも含む。部分的にAs-Aや黄褐色砂質土を少量混在させる。
- 4 黒褐色土 復旧坑内の埋土で、A流土を主とし、大形礫をも含む。部分的にAs-Aや黄褐色砂質土を少量混在させる。
- 7 黒色土 A流成であり、礫を多量に含む。
- 8 As-A 純層。

※2層と3層は、耕地復旧の際の復旧坑から出た土と思われる。いわゆる「天地返し」の結果と考えられる。  
むしろ、復旧時は泥炭処理が目的ではなく、耕地獲得のための手段として掘られた穴であり、埋める際に泥炭・礫を入れて処理したものと考えられる。

第16図の2 2区1～3号復旧溝断面図

0 1:120 5m

3K1・2号復旧畑、1号区画溝



北壁 5 SPA-A'

- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり強い、粘性なし。
- 2 暗褐色土 圃場整備時の土でグライ化している。わずかにAs-A混入。しまり強い、粘性なし。
- 3 褐色土 鉄分が酸化して黄色になっている。わずかにAs-A混入。しまりやや強い、粘性なし。
- 4 褐色土 地山。シルト質。しまり強い、粘性あり。
- 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くなっている。しまり強い、粘性なし。
- ① 褐色土 酸化層。As-Aをわずかに混入。しまり強い、粘性ややあり。

南壁 5 SPB-B'

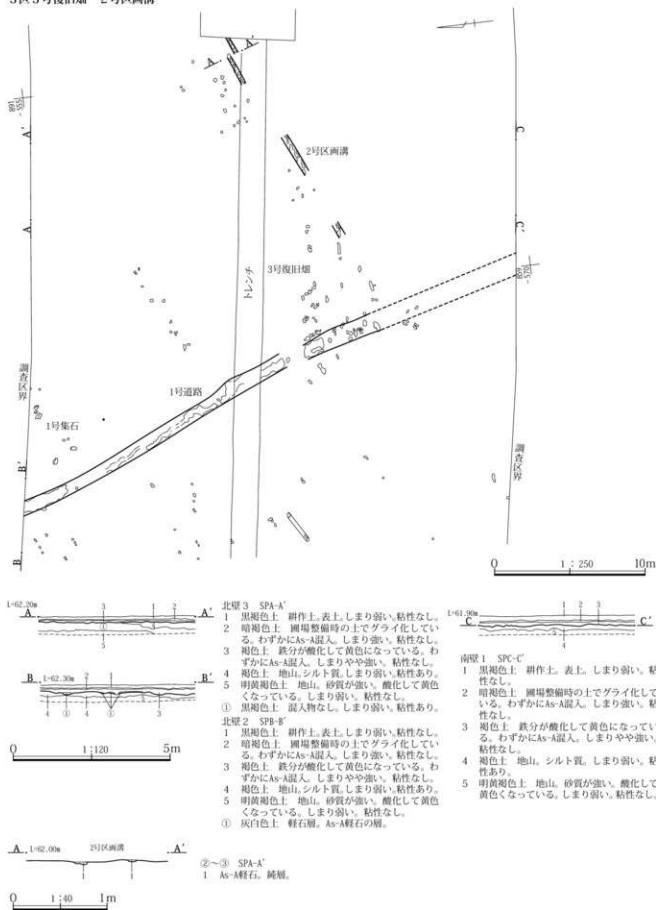
- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり強い、粘性なし。
- 2 暗褐色土 圃場整備時の土でグライ化している。わずかにAs-A混入。しまり強い、粘性なし。
- 3 褐色土 鉄分が酸化して黄色になっている。わずかにAs-A混入。しまりやや強い、粘性なし。
- 4 褐色土 地山。シルト質。しまり強い、粘性あり。
- 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くなっている。しまり強い、粘性なし。
- ① 黒褐色土 シルト質。しまり強い、粘性あり。
- ② 灰白色土 砂の層。しまり強い、粘性なし。



- ⑤ SPA-A'  
I As-A軽石。純層。

第17図 3区1号区画溝と1・2号復旧畑

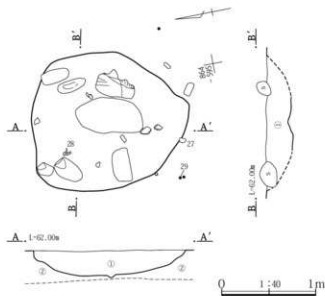
## 3K3号復旧畑 2号区画溝



第18図 3区2号区画溝と3号復旧畑



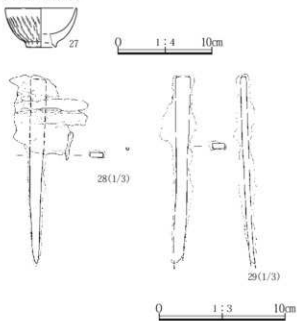
3K1号土坑



1号土坑 SPA-A'

- ① 暗褐色土 中央上面にAs-A軽石を多く含む。2層から落ち込んだ土が積もっている。つまり強い。粘性なし。  
② 褐色土 自然たい石。シルト。しまり弱い。粘性あり。

1号土坑出土遺物



第19図 3区1号土坑と出土遺物

110cm、平均100.83cmの間隔で掘削され、その長さと同様は確認できなかったがその、幅は25~30cm、平均27.50cm、隣接するサクの間隔は60~85cm、平均75.00cmを測った。

遺物 3区の復旧畑からの出土遺物はなかった。

所見 3区1~5号復旧畑の掘削時期を特定することはできず、天明3(1783)年以降の所産として把握されるに過ぎなかった。

4. 1号土坑(第19図、PL. 6)

概要 本土坑は、大型の土坑である。

位置 本土坑は3区調査区南端西部に在り、864~866-594~596グリッドに位置する。

重複 本土坑は他遺構との重複はなかった。

規模 長軸：172cm 短軸：146cm 深さ：30cm

覆土 暗褐色土で埋没するが、その中央上面にはAs-A軽石を多く含む。

構造 本土坑は楕円形様のプランを呈し、その掘削形態は摺鉢状を呈し、壁面は開き気味である。

遺物 本土坑からは瀬戸・美濃磁器クロム青磁小碗(27) 鉄釘(28・29)、不明鉄製品(30)が出土した。

所見 本土坑の掘削意図は特定されなかった

その時期は、出土遺物から推して下限は現代に下るものと判断される。

(d) 4区

1. 1号道路(第21~23図)

概要 本道路は、南北両側の側溝により確認された遺構であり、本道路は東西両側が調査区外に出るため、全容を詳らかにできなかった。

位置 本道路は4区中・東部、881~925-622~692グリッドに位置する。

重複 本道路は他遺構との重複はなかった。

規模 残長：83.4m 幅：60cm

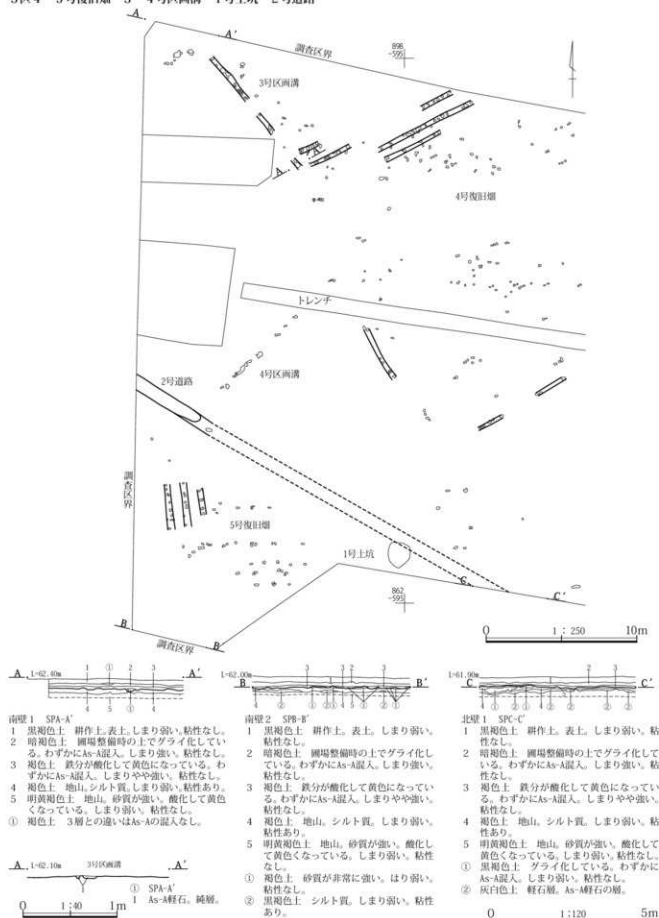
南側溝 幅：63cm 深さ：8cm

北側溝 幅：60cm 深さ：6cm

覆土 本道路は天地返しの際にAs-A微量を含む灰色シルト質土の下に確認され、側溝にAs-A含む暗褐色土が入る。

構造 本道路は調査区北から入り、極緩やかな弧状に走

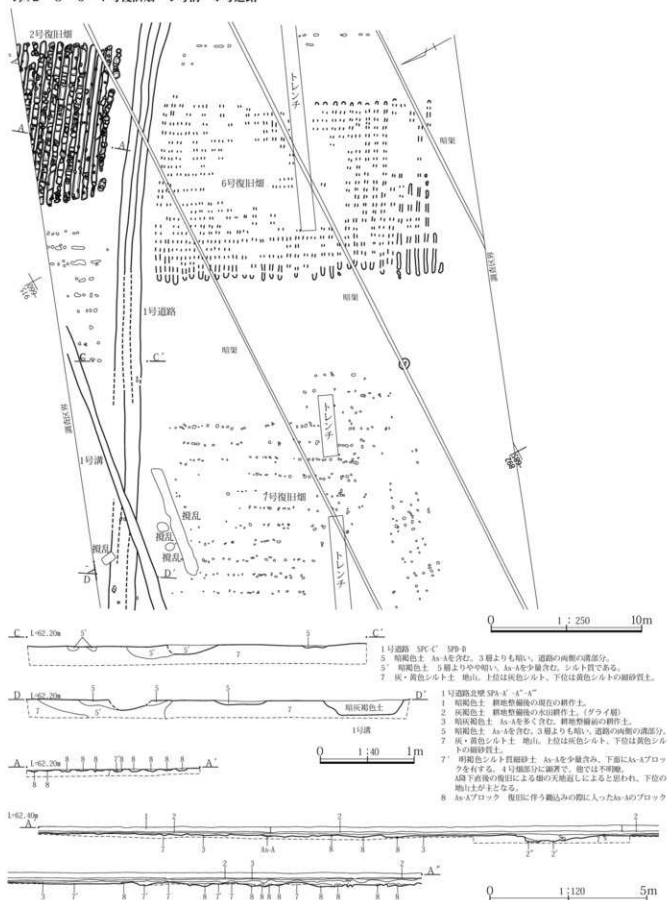
## 3区4・5号復旧畑 3・4号区画溝 1号土坑 2号道路



第20図 3区2号道路、3・4号区画溝、4・5号復旧畑と1号土坑

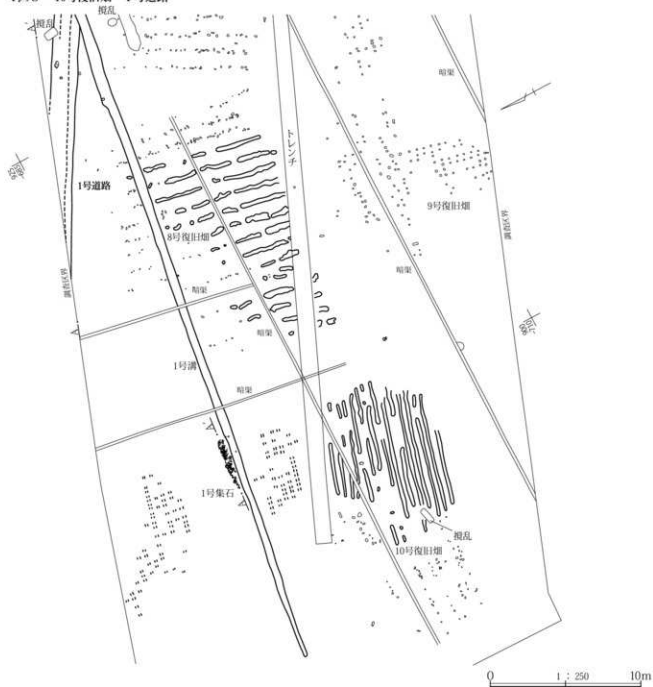


## 4K2・3・6・7号復旧畑・1号溝・1号道路



第22図 4区1号道路、1号溝と2・3・6・7号復旧畑

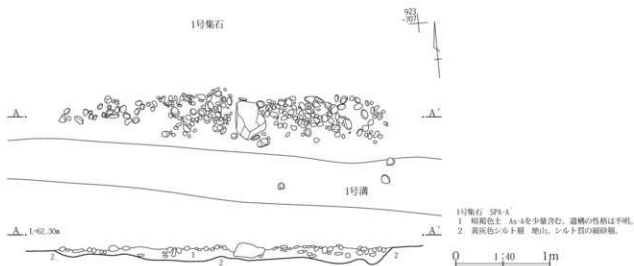
4区 8～10号復旧畑・1号道路



- 1 号道路北端 3PA-A'
- 1 灰褐色土 耕地整備後の畑右の耕作土。
- 2 灰褐色土 耕地整備後の水田耕作土。(グライ種)
- 3 灰褐色土 耕地整備後の水田耕作土。(グライ種)
- 4 灰褐色土 As-Aを多く含む。耕地整備前の耕作土。
- 5 灰褐色土 As-Aを含む。3層よりも深い。道路の両側の溝部分。
- 6 灰・黄褐色シルト土 堆土。上位は灰褐色シルト。下位は黄褐色シルトの細砂質土。
- 7' 明褐色シルト質細砂土 As-Aを少量含む。下にAs-Aブロックを有する。4号畑部分に調査で、他では不明瞭。
- 8 明褐色シルト質細砂土 明褐色シルト質細砂土による堆土の天照返しによると思われる。下位の堆土が主となる。
- 9 As-Aブロック 復旧に伴う動きの際に入ったAs-Aのブロック

第23図 4区1号道路と8～10号復旧畑

## 4区1号集石



第24図 4区1号集石

行を取り、その走向は北端でN-60°-W、東端がN-54°-Wに走向を取る。

遺物 本道路からの遺物の出土はなかった。

所見 本道路の敷設の目的は特定されなかったが、北側の1～3号復旧畑と南側の5～7号復旧畑の境となっている。

なお、敷設の時期は、天明3年以降の所産として把握できたに過ぎなかった。

## 2. 1号溝(第22図)

概要 本溝は中規模な溝遺構である。

本溝の掘削位置は確認面より高いため、西部は確認できず、東側は調査区外に出るため、その全容を確認することはできなかった。

位置 本溝は4区中・西部に在り、914～923-663～722グリッドに位置する。

重複 本溝は7・8・10号復旧畑と重複し、これらを切っている。

規模 残長：61.2m 幅：67cm 深さ：25cm

覆土 As-Aを含む暗褐色土で埋没する。

構造 1号区画溝の走向はN-81°-Wに走向を取り、直線的な走行を取る。

遺物 本溝からの遺物の出土はなかった。

所見 本溝の掘削意図は確認できなかった。

また、その掘削時期は、覆土にビニールが入るためそ

の下限は現代であるが、掘削時期は近世後期以降として把握できるに過ぎない。

## 3. 復旧畑(第21～23図、PL. 7)

概要 4区では、天明3(1783)年の浅間山噴火の被災復旧のため、As-A軽石を踏み込んで耕作した復旧畑10面を確認した。

遺存状態は良好ではなく、底面付近を調査し、サクの痕跡を確認できたものが多かったが、2号復旧畑はサクが比較的良好に確認された。

位置 1号道路の北側に1～3号復旧畑は、南側に4～10号復旧畑が在り、4区東半部に1～6号復旧畑、西半部に7～10号復旧畑がある。

位置するグリッドは表3に記した。

規模・主軸方位 表3に記した。

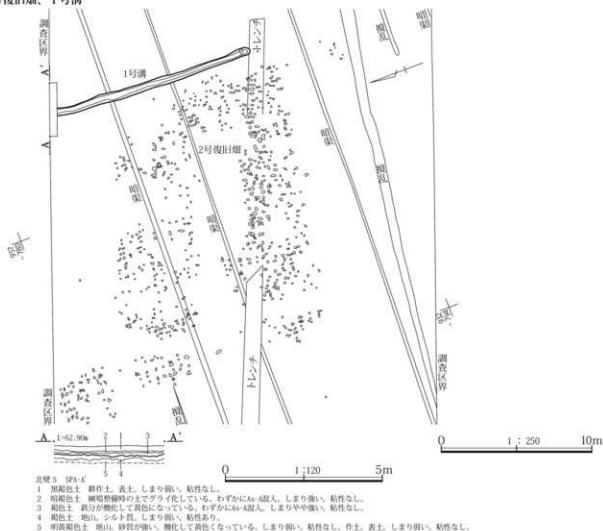
構造 復旧畑は鋤先痕で確認されるが、サクの範囲を想定できたものもあった。

個々の復旧畑のサクの掘削の間隔、サクの残存幅などは表3にまとめた。

遺物 4号畑からは少量の国産施軸陶器が出土したが、4区の他の復旧畑からの遺物の出土は見られなかった。

所見 4区1～10号復旧畑の掘削時期を特定することはできず、天明3(1783)年以降の所産として把握されるに過ぎなかった。

5K2号復旧堀、1号溝



第25図 5区1号溝と2号復旧堀

4. 1号集石(第24図)

概要 本遺構は、河床礫が分布する遺構である。

位置 本遺構は4区調査区西部に在り、921~922-707~710グリッドに位置する。

重複 本遺構は他遺構との重複はなかったが、南側に1号溝が近接してある。

規模 範囲：347×64cm

覆土 黄灰色シルト質土を掘り込み、As-Aを少量含む暗褐色土で埋め戻して、中・上位に河床礫が埋められる。

構造 大小の河床礫が集まる遺構であるが、その分布状況は、比較的密である。

遺物 本遺構からの出土遺物はなかった。

所見 本遺構の礫の配置意図は特定されなかった

その時期は、覆土から推して、天明3年以降の所産と見られるが、その時期を特定することはできなかった。

(e) 5区

1. 1・2号道路(第26図、PL. 8)

概要 本道路は、硬化面によって確認された道路遺構である。

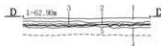
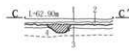
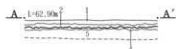
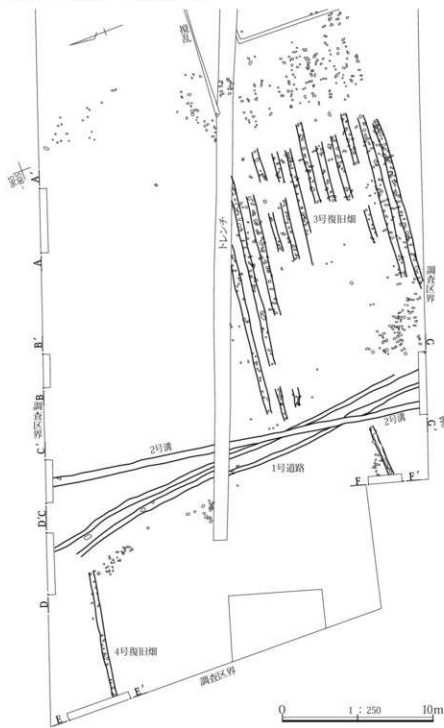
また、1号道路は北側が削平により失われ、南側が調査区外に在り、2号道路は南北両側が調査区外に出ているため、共に全容を詳らかにすることはできなかった。

位置 1号道路は5区西部に在り、945~970-827~330グリッドに位置し、2号道路は区西部に在り、944~971-826~329グリッドに位置する。

重複 1・2号道路は共に2号溝と重複するが、新旧関係を特定することはできなかった。また、両道路は30~75cm程隔てて、並走してある。

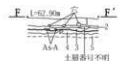
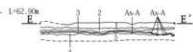
規模 1号道路 残長：25.3m 幅：30~46cm 深さ：

5K3・4号復旧畑、1号道路、2号溝



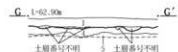
SPA-A' ~ SPB-F'

- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり強い。粘性なし。
- 2 暗褐色土 圃場整備時の土でクライ化している。わずかにAs-A混入。しまり強い。粘性なし。
- 3 暗色土 鉄分が酸化して黄色になっている。わずかにAs-A混入。しまりやや強い。粘性なし。
- 4 暗色土 地山。シルト質。しまり強い。粘性あり。
- 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くになっている。しまり強い。粘性なし。



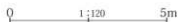
SPB-F' ~ SPF-F'

- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり弱い。粘性なし。
- 2 暗褐色土 圃場整備時の土でクライ化している。わずかにAs-A混入。しまり強い。粘性なし。
- 3 暗色土 鉄分が酸化して黄色になっている。わずかにAs-A混入。しまりやや強い。粘性なし。
- 4 暗色土 地山。シルト質。しまり強い。粘性あり。
- 5 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くになっている。しまり強い。粘性なし。



SPC-G'

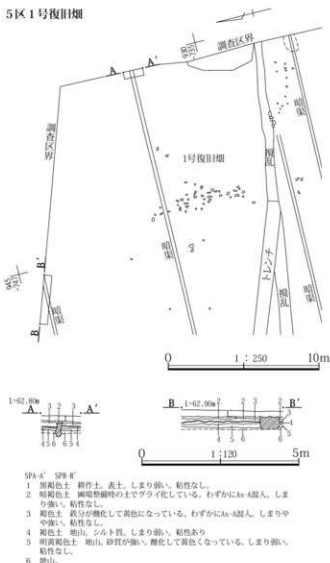
- 1 黒褐色土 耕作土。表土。しまり弱い。粘性なし。
- 2 暗色土 地山。シルト質。しまり強い。粘性あり。
- 3 明黄褐色土 地山。砂質が強い。酸化して黄色くになっている。しまり強い。粘性なし。



第26図 5区1号道路、2号溝と3・4号復旧畑



5K1号復旧畑



第27図 5区1号復旧畑

—cm

2号道路 残長：25.3m 幅：24～41cm 深さ：—cm  
 覆土 1号道路の土層記録は残せなかった。また、2号道路は僅かにAs-Aを含む褐色土下で確認された。  
 構造 1号道路の走行は蛇行しているが、その走向は、北端はN-13°-W、中程でN-2°-E、南端でN-3°-Wに走向を取る。また2号道路全体としてN-4°-Wに走向を取り、北端ではN-10°-Wに走向をとるが、その走行は緩やかな蛇行を見せる。両道路の横断面は若干窪みを有する。  
 遺物 1・2号道路からの遺物の出土はなかった。  
 所見 両道路の敷設の目的は、特定されなかった。  
 また、その時期は1面上位面の遺構として報告しているが、その時期は近世以降の所産として把握されるに過

ぎない。

なお、両道路は並走していたが、新旧関係にあるか否かを特定することはできなかった。

2. 1・2号溝(第25・26図、PL. 8)

概要 1・2号溝は、中規模の溝遺構である。  
 また、1号溝は北側が、2号溝は南北両側が調査区外に出ているため、共に全容を把握できなかった。  
 位置 1号溝は5区中北部東寄りに在り、938～952-772～773グリッドに位置し、2号溝は5区西部に在り、945～970-824～828グリッドに位置する。  
 重複 1号溝は単独である。2号溝は1・2号道路と重複するが、新旧関係は特定できなかった。  
 規模 1号溝 残長：13.8m 幅：60cm 深さ：4cm  
 2号溝 残長：25.8m 幅：55cm 深さ：8cm  
 覆土 覆土の記録は残せなかった。  
 構造 1号溝は、全体としてN-3°-Eに走向を取る、直線的な走行を呈するが、北端ではN-16°-Eに走向を転ずる。掘削形態は箱型状を呈すると想定される。その底面の横断面形は丸底状を呈する。

2号溝は、全体としてN-9°-Eに走向を取る、直線的な走行を呈するが、南端ではN-10°-Eに走向を転ずる。掘削形態は箱型状を呈すると想定される。その底面の横断面形は丸底状を呈する。

遺物 1号溝からは国産施軸陶器6gが出土したが、2号溝からの出土遺物は得られなかった。

所見 1号溝は2号復旧畑の東縁に沿って在り、2号溝は3号復旧畑の西縁に沿ってあることから、両溝は共に区画溝として掘削されたものと思慮される。

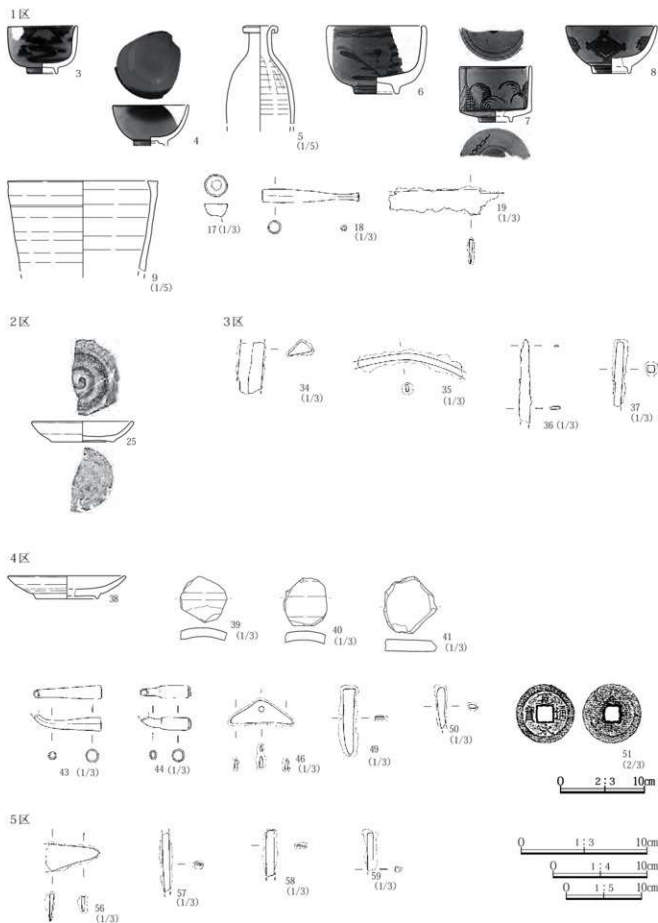
また、1・2号溝は1面上位面の遺構として報告しているが、その時期は近世以降の所産として把握されるに過ぎなかった。

3. 復旧畑(第25～27図、PL. 8)

概要 5区では、天明3(1783)年の浅間山噴火の被災復旧のため、As-A軽石を鋤込んで耕作した復旧畑4面を確認した。

これらの復旧畑の遺存状態は不良で、底面付近を調査したに過ぎなかった。

位置 1号復旧畑は5区東部、2号復旧畑は5区中部、



第28図 1～5区1面遺構外出土遺物

3号復旧畑は5区南西部、4号復旧畑は5区西端部道にある。

位置するグリッドは、1号復旧畑は913~942-737~759グリッド、2号復旧畑は932~958-774~794グリッド、3号復旧畑は941~963-802~827、4号復旧畑は944~971-830~839グリッドである。

規模・主軸方位 1号復旧畑 確認範囲：28.4×19.3m

2号復旧畑 確認範囲：22.2×20.1m

3号復旧畑 確認範囲：24.5×13.15m 主軸方位：N-83°-W

4号復旧畑 確認範囲：23.4×9.2m

構造 復旧畑は鋤先痕で確認されるが、サクの範囲を想定できたものもあった。

1号復旧畑の鋤先痕の分布は薄く、サクなどを想定することはできなかった。

2号復旧畑本復旧畑の鋤先痕の分布は、1号復旧畑より濃いが、サクなどを想定することはできなかった。

3号復旧畑の鋤先痕の分布は、5区南半部に集中し、12条のサクの痕跡を見出した。サクの痕跡の全長は4.1~16.6mを測った。また、サクの痕跡の測定によって、サクは92~114cm、平均102.55cmの間隔で掘削されていることが確認され、サクの幅は32~47cm、平均39.64cm、畝間は47~75cm、平均63.07cmを測った。

4号復旧畑では、南北の2カ所でサクの痕跡は確認された。サクの痕跡の長さは8.5m以下を測り、幅は35cm程を測った。また、想定されたサクの走向は、北側のものはN-80°-W、南側のものはN-87°-Eを向く。

遺物 5区の復旧畑からの出土遺物はなかった。

所見 5区1~4号復旧畑の掘削時期は、天明3(1783)年以降の所産として把握されるに過ぎなかった。

#### (f) 1面の遺構外の出土遺物(第28図、PL.23)

1面の出土遺物のうち、1区のAs-A泥流から製作地不明の磁器湯呑(3・4)、瀬戸・美濃陶器徳利(5)があった。

その他の遺構外の上出遺物には、1区からは肥前陶器陶胎染付碗(6)、肥前磁器染付筒形碗(7)・碗(8)、瀬戸・美濃陶器半胴裏(9)、砥石、敲石、火打石、キセルの雁首(17)と吸い口(18)、刀子(19)、鉄釘(20)、鉄滓(21)、2区からは在地系土器皿(25)、不明鉄製品(26)、3区からは火打石、鉄釘(32・33)、不明鉄製品(34~37)、4区

からは瀬戸・美濃陶器皿(38)・円盤状製品(39・40)、在地系土器円盤状製品(41)、砥石、キセル雁首(43・44)、寛永通寶(45)、火打金(46)、鉄釘(47・48)、不明鉄製品(49・50)、5区からは寛永通寶(51)、鉄釘(52~55)、不明鉄製品(56~60)があった。

また、掲載しなかった遺物には、1区では国産磁器100g、国産施釉陶器187g、国産焼締陶器40g、在地系焙烙・鍋42g、2区では国産磁器96g、国産施釉陶器279g、国産焼締陶器42g、在地系焙烙・鍋203g、在地系皿10g、瓦65g、近現代の陶磁器10g、3区では国産磁器144g、国産施釉陶器708g、国産焼締陶器25g、在地系焙烙・鍋258g、在地系皿34g、近現代の陶磁器21g、4区では国産磁器176g、国産施釉陶器804g、国産焼締陶器172g、在地系焙烙・鍋325g、在地系皿53g、その他の在地系土器類76g、近現代の陶磁器58g、5区では国産磁器125g、国産施釉陶器481g、国産焼締陶器81g、在地系焙烙・鍋81g、在地系皿3g、近現代の陶磁器28gや土器類248gがあった。

#### (1) 1面下位面

1面下位面の遺構は1~3区で確認されたが、特に天明3(1783)年の泥流被災区域である、1区から2区東部にかけて確認された。

このうち1区東部では泥流で壊された、土塁に囲まれた屋敷や、As-A軽石で覆われた竹藪跡と思われる区域と、以西の区域と2区東部にかけて、同じくAs-A軽石で覆われた畑跡を確認した。

#### (a) 1区

##### 1. 屋敷

##### ① 概要(第29・30図、PL.2)

調査範囲 屋敷は1区南東部に確認された。東部が調査区外にあるため内容は詳らかでない。確認した遺構の範囲は900~933-301~323グリッドに位置する。

泥流被害 屋敷は旧暦7月7日午後からの軽石の被災を受けているが、旧暦7月8日昼過ぎに泥流が高さ1m程で北或いは西方から到達しているが、建物の内部に押し寄せて、屋敷そのものは廃絶している。しかし、上流の玉村町上福島の上福島中町遺跡に比して少なく、家財を運び出した可能性が窺われる。

屋敷の区画 屋敷はその北側と西側が土塁で囲まれ、南面は低い段差で区切られる。内部は北部、中部、南部に分けられた。

北部は北側の土塁を削って石組で止止めを施して造成した東西706cm、南北318cmを測る区画があり、その南東部に重なるように10cm程高い、東西580cm以上、南北205cmを測る区画があり、ここには1号井戸がある。またこの区画の北東部と重なるように1号井戸の区画より8cm程低い、東西166cm、南北146cmの残長を測る区画がある。なお、北部の区画は1号建物との間には西部で264cm、東部で90cm程の幅員を測る通路が東西に走行する。この道路は北側の区画より10cm程低く、井戸のある区画周辺では段差に沿って河床礫が据えられている。

中部に棟を東西方向に取る母屋(1号建物)がある。西側の土塁との間に265cm程を測る通路が残る。

南部では、西半に南北に棟方向を取る2号建物があり、東半はニワ(庭)がある。2号建物と西側の土塁との間は117cmを測る。また、ニワ(庭)の南縁は2号建物の南縁の延長線上に在り、南側の区画より10cm弱低く、石組が組まれるが、2号建物から462cm程の地点で南側に497cm程南に広がるものの、段差に石組は伴わない。そしてこの区画には建物の痕跡(3号建物)が確認された。

柱の径 礎石建物の礎石には、柱の当たり痕跡の残るものがあった。その径は、6.4~12cm、平均7.96cm、およそ2寸半程を測った。

## ② As-A軽石降下後の痕跡(第29図、PL. 2)

概要 ここで1面中位面について述べる。

As-A泥流層土は硬く、As-A軽石下層は砂質で極めて軟質であるため、その上面をAs-A泥流から直接掘削することは困難なため、作業を単純化して効率化を図るため、As-A泥流層土除去後、As-A軽石層上面(中位面)を検出した。この中位面では、周辺の畑地などと異なり、屋敷内ではAs-A軽石の有無や、堆積量に濃淡が確認される箇所があった。

軽石の有無 As-A軽石は周辺部では5~6cmの層厚で堆積しているが、1・2号建物と南東隅の建物が想定された箇所では、As-A軽石の堆積はなかった。

軽石の濃淡 1・2号建物の外周部では、厚さ20cm以上のAs-A軽石の盛り土状の堆積が見られ、1・2号建物の

境付近では小山状に高さ40cm程の堆積も見られた。一方、ニワ(庭)では細かいAs-Aが散在する箇所があり、その周囲の軽石は、層厚15~24cmに盛り上げられたような箇所があった。また、1号建物と北側の井戸との間には、軽石を除けて通路を確保した痕跡が見られた。

所見 上述のAs-A軽石の堆積状況により、1・2号建物は軽石降下後、泥流到達前の時点では屋根が残り、北部の1号井戸には覆屋が無かったことが確認された。

また軽石の濃淡により、通路確保のため、庭や井戸との境の掃除が行われ、1号建物の北側の出入り口や2号建物の東側の出入り口も特定された。

## 2. 1号建物(第31・32・35~37図、PL. 2・3・23~25)

概要 本建物は本屋敷の母屋である。調査範囲の南東隅部に1号土坑が掘削される。

規模 残長：11.6m 幅：7.3m

竈 幅：76cm、奥行：76cm、高さ：36cm、

焚口 幅：36cm、高さ：25cm

かけ口 径：48×44cm

煙出し 幅：22cm 高さ：22cm

構造 本建物は棟方向がN-90°を向く礎石建物であり、西側4.6mと以東の区域に二分される。

本建物は深さ30cm以下の掘り方を有し、これを埋め戻して、明黄褐色土と黒褐色土などで敷きしめて床面を造っている。

西部は南北3間半、東西2間半に礎石(61~126)が配置されているが、東西も3間半の規格があったことが確認される。西壁南寄りには2間幅で、1/4間西方に張り出しがあり、北壁は東から2間と3間が北側に半間張り出す。また、東側1間の北寄りと南寄りに灰が確認され、この位置には囲炉裏の設置が想定される。

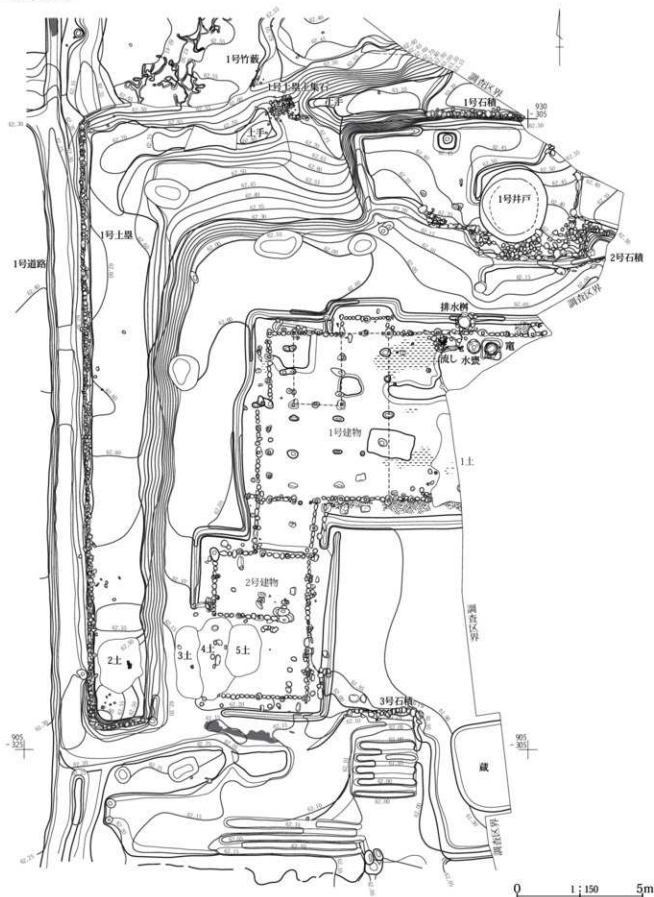
一方、東部は北西部が部分的に確認されたに過ぎなかったが、その北西隅部にダイドコロがあり、東側に竈、西側に水甕(129)が並べて据えられていた。竈にはぶい黄褐色粘質土で作られる。かけ口には幅7cm以下の金具の抜き取り痕があり、釜も遺存しなかった。また、水甕の西側に東西120cm、南北85cmを測り、北側と西側に河床礫を並べ、一部底面に砂利が残り、その北東側南落溝の位置に、排水弁として径52×50cm、深さ46cmを測り、肩に河床礫を廻らせる土坑が掘削されている。

1区1号建物(軽石有)



第29図 1区1号屋敷As-A軽石上面

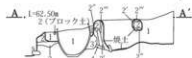
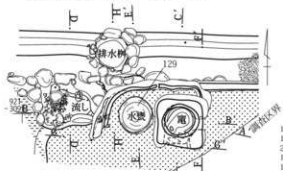
## 1区1号建物



第30図 1区1号屋敷As-A軽石下面

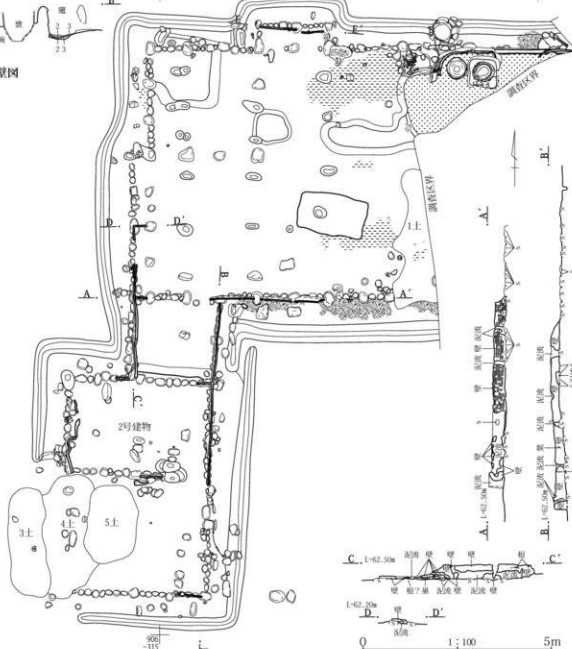
第3章 発見された遺構と遺物

1区1号建物 カマド 水篦 流し



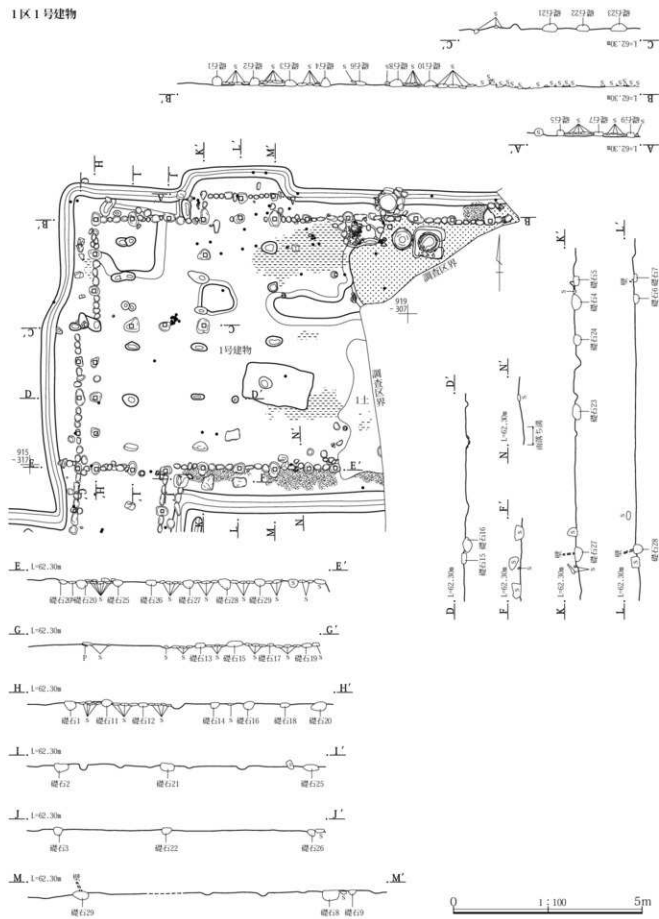
- 1号建物 流し欄土 SPB-B  
 1. 黒灰色細砂と珪砂に難化鉄着するにふい黄褐色土 やや粘質あり。  
 2. 黒灰色砂質土 直径5～10cm大の円礫を多数に含む。  
 1号建物 ヘツツイ 水がめ 50x4  
 1. 黒褐色土 天明泥炭 直径10～20cm大の円礫を含む。(一時埴輪類)  
 2. にふい黄褐色土 粘質土 灰黄褐色土、炭褐色粘質土を含む。しまりあり。(ヘツツイの構築土)  
 2'. 2層だが床面によくしまる。(ヘツツイの構築土)  
 2''. 2層だが中がゆるい。  
 3. 灰黄褐色粘質土 黄褐色土をブロック状に含む。 焼土粒を含む。  
 3'. 灰黄褐色粘質土 黄褐色土をブロック状に含む。 炭化物を含む。  
 4. 灰黄褐色土 ややしまる。 黄褐色土をブロック状に含む。 焼土はない。(土間のしまった土)  
 4'. 4層と同じだが、粘性でしまりあり。  
 5. 4層と同じだが、にふい黄褐色ブロック土を含む

1区1号建物 塋図



第31図 1区1・2号建物と土壁、及びダイドコロ

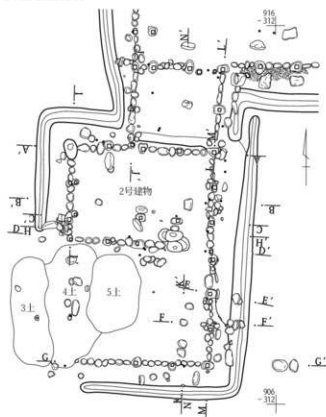
1区1号建物



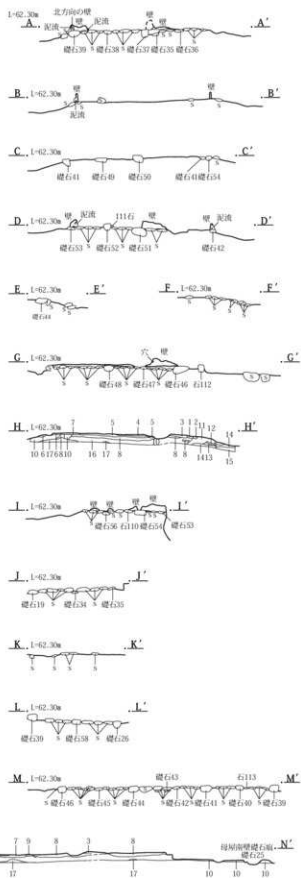
第32図 1区1号建物



1区2号建物



- 圖れ SP4-A' SP8-B'
1. にぶい黄褐色土 にぶい黄褐色土層入る。やや砂質でしまりあり。
  2. にぶい黄褐色土 やや砂質。しまりあり。
  3. 1層に似るが明黄褐色土層入る。
  4. 黄灰色砂質土 明黄褐色土を含む。
  5. 黄褐色砂質土 燻化炭粒状に入る。
  6. にぶい黄褐色土 灰黄褐色砂質土層入る。
  7. オリーブ褐色砂質土 黄褐色砂質土小ブロック入る。
  8. 灰黄褐色砂質土
  9. 明黄褐色砂質土 粘性あり。黄褐色砂質土小ブロック入る。
  10. にぶい黄褐色砂質土 8層土小ブロック混入。
  11. 黄灰色細砂
  12. 灰黄褐色土 黄褐色砂質土入り。やや砂質。
  13. 黄褐色砂質土 やや粘性あり。
  14. 黄褐色砂質土 粘性あり。
  15. 灰黄褐色砂質土 粘性あり。
  16. 黄褐色土
  17. 灰白色砂質土 燻化炭小ブロック状に付着。



0 1:100 5m

第33図 1区2号建物

北壁の突出部と東部、西壁南部、及び南壁の西側に土壁が遺されていた。南壁の土壁は、高さ34cm程を測り、柱が泥流と置換し、北側に縦横に1寸半の間隔で編まれたコマイの痕跡が見られた。また、北側突出部の土壁は南に8cm程押されている。

建物から35cm離れて、幅40cm、深さ7cm以下を測る、浅い雨落溝が遺されていた。

**遺物** 本建物のガイドココからは鉄釘(127・128)、常滑陶器甕(129)が出土した他、肥前磁器白磁小杯(130)・染付小杯(131)・染付碗(132・133)・染付皿(134)、瀬戸・美濃陶器鉄絵碗(135)・腰銘碗(136・137)・筒型香炉(138・139)、志戸呂陶器灯火受皿(140)、在地系土器皿(141)・銅(142~144)・焙烙(145)、寛永通寶(146~152・155~157・159~162・164・165・168~171)、寛永通寶と見られる鉄銭(153・158)と銅銭(170・171)、癒着した銭(154・166・167)、キセル吸い口(172)・雁首(173)、鉄釘(174~177)、不明鉄製品(178~180・182)、砥石・不明石製品(184)が出土し、掘り方からは在地系土器皿(185)、スギ材の破片が出土した。

**所見** 本建物は18世紀中葉の建築と把握された。また、本建物の分析所見は第5章に鑑定結果を掲載した。

### 3. 2号建物(第31・33・37・38図、Pl. 3・25)

**概要** 本建物は本屋敷の附属屋である。本建物の南西隅部に、3~5号土坑が掘削される。

**規模** 長さ：5.7m 幅：3.8m

**北部附属建物** 長さ：2.3m 幅：2.2m

**構造** 本建物はN-3°-Eに棟方向に向ける礎石建物であり、本体と北部の附属建物に二分される。

本建物は深さ27cm程を測る掘り方を有し、これを埋め戻して、褐灰色・明黄褐色砂質土などで床面を造る。

南部は南北6間強、東西2間に礎石が配置されているが、南から2間半強の位置に間仕切りの礎石列があった。

一方、北部は東壁が2号建物の東壁に、西壁が1号建物の西壁の延長線上にある。その規格は東西南北に1間+1/4を測る。

東壁の本体北部の間仕切り以北、附属建物にかけて、西壁の同一の過半と北壁の一部、間仕切りと南壁東端部の土壁が遺されていた。また西壁は15~20cm程東方に押し出されていた。

本建物も1号建物と同様に浅い雨落溝が遺されていた。

**遺物** 本建物からは火消壺と思われる在系土器(186)、鉄釘(187)、キセルと見られる銅製品(188)、また本体建物からは、瀬戸・美濃陶器腰銘碗(189)・烏水入れ(190)・灯火皿(191)・十能(192)・徳利(193)・すり鉢(194)、堺・明石陶器すり鉢(195)、在地系土器皿(196)・焙烙(197・198)、寛永通寶(199~201)、鉄鉢(202)、キセル吸い口(203)、不明銅製品(204)、鉄釘(205~207)、不明鉄製品(208~210)、火打石、不明石製品、また、掘り方からは在地系土器皿(213)・円盤状製品(214)が出土した。

**所見** 本建物の所見は第5章に鑑定結果を掲載した。

### 4. 3号建物(第34図、Pl. 4)

**概要** 本建物は本屋敷の附属屋である。

**規模** 東西残長：1.2m 南北長：4.3m

**構造** 本建物はN-15°-Wに方位を向ける建物である。

本建物は深さ3cm程を測る浅い窪地を伴う。

**遺物** 本建物からの遺物の出土はなかった。

**所見** 本建物の所見は第5章に鑑定結果を掲載した。

### 5. 土塁(第39~42図、Pl. 4・23)

**概要** 上述のように、土塁は近世屋敷の北側と西側とを画するものであった。

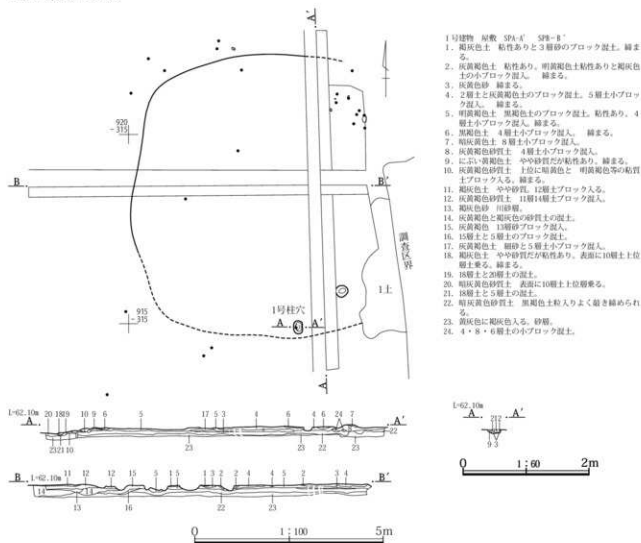
**規模** 長さ：36.7m 基底幅：326~346cm、上幅：188~365cm、高さ：31~84cm

**構造** 北側はN-89°-E、西側はN-1°-Wを向く。土塁は、黄褐色砂質土などを用い、東から西、北から南へ低くなるよう盛られている。

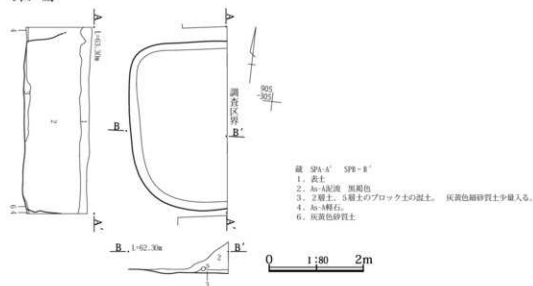
西側の土塁の西面には最下に長さ40cm以下の河床礫を横位に据え、その上に3・4段の河床礫を乗せた石組が施されているが、最下の石列は天明3年時点では埋もれていた。また北側の土塁の中部以東の南面には、幅34cm以下、高さ28cm以下に大型の礫を据え、その上にこれより小型の河床礫を4~5段乗せた石組を組んでいる。

**遺物** 肥前磁器染付碗(224)、同陶器陶胎染付碗(225)・火入香炉(226)、瀬戸・美濃陶器筒形小香炉(227・228)・半胴甕(229)・碗(230)、京・信楽系陶器上絵碗(231)、在地系土器皿(232・233)、釘と見られる鉄製品(234)、不明鉄製品(235)、砥石(236)

1区1号建物 掘り方

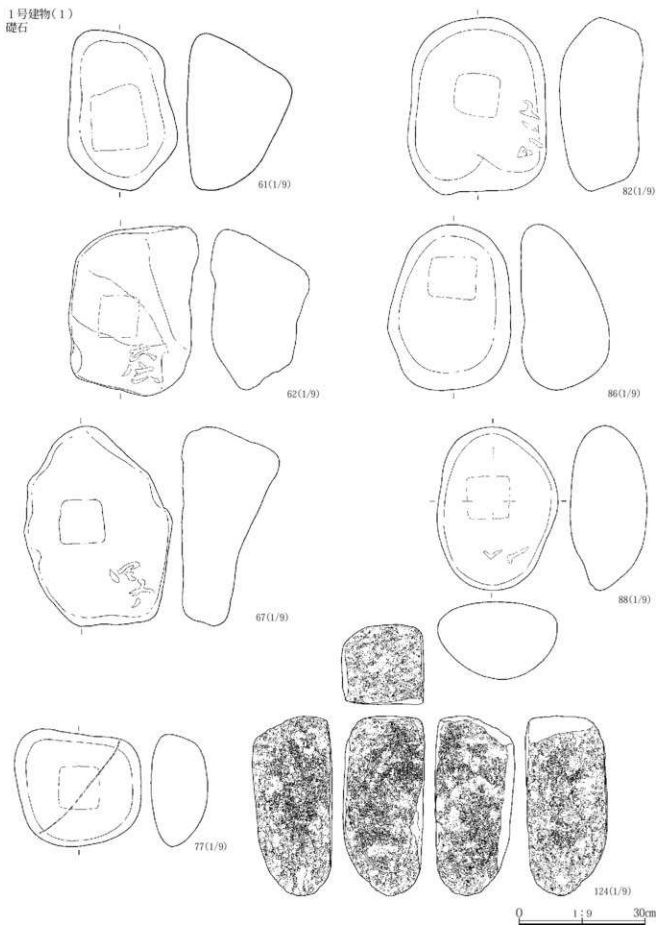


1区 蔵



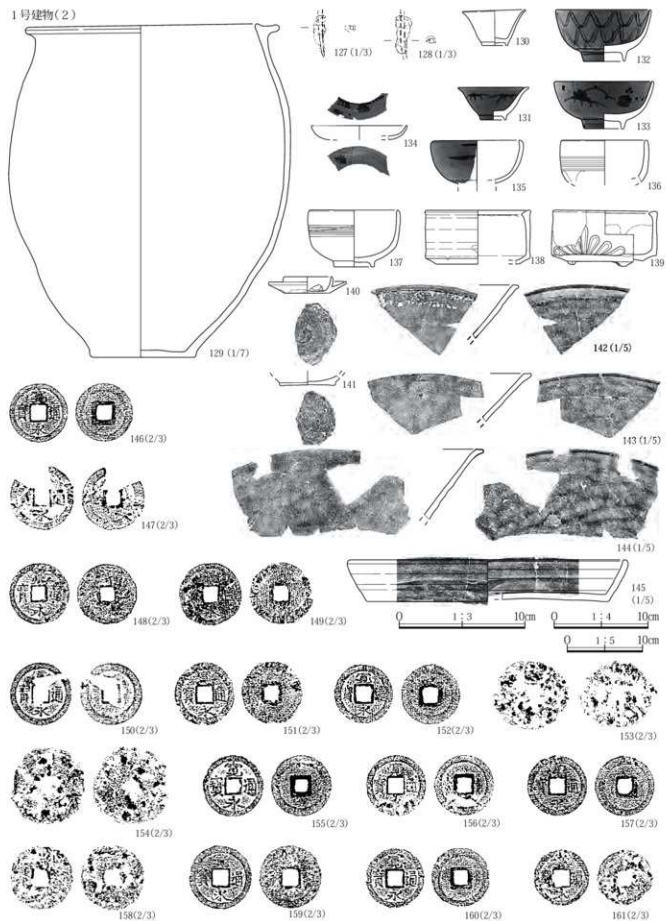
第34図 1区1号建物掘り方と3号建物

1号建物(1)  
礎石



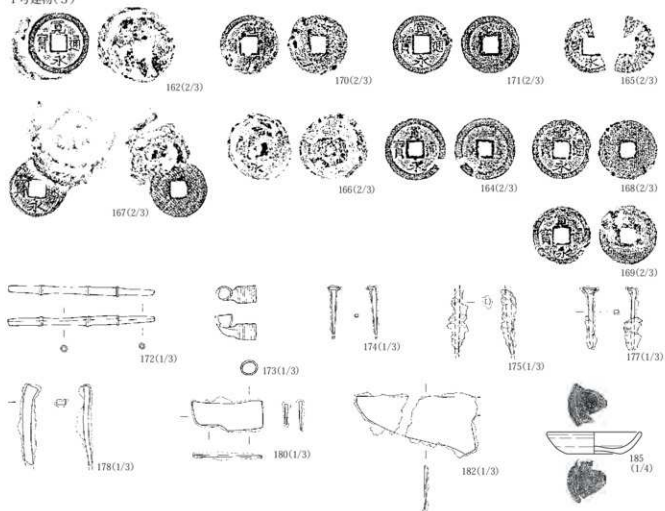
第35図 1区1号建物礎石

1号建物(2)

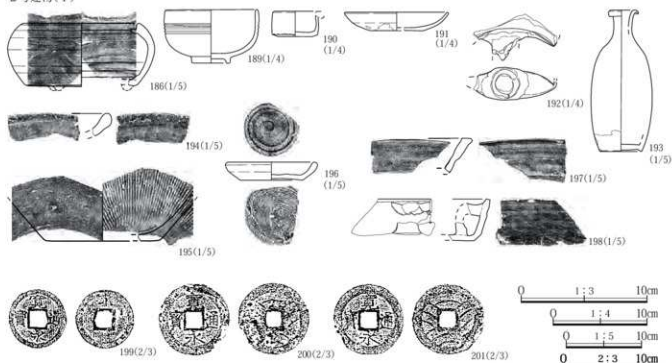


第36図 1区1号建物出土遺物(2)

1号建物(3)



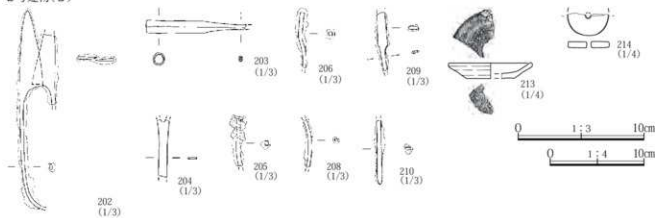
2号建物(1)



第37図 1区1号建物出土遺物(3)と2号建物出土遺物(1)

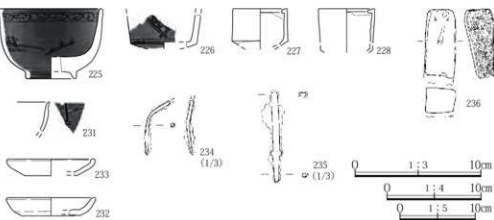
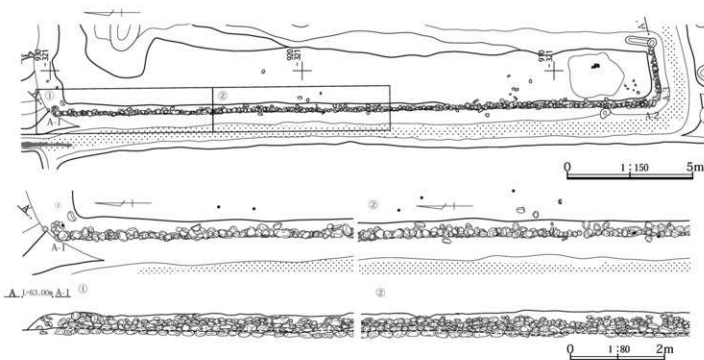
第3章 発見された遺構と遺物

2号建物(2)

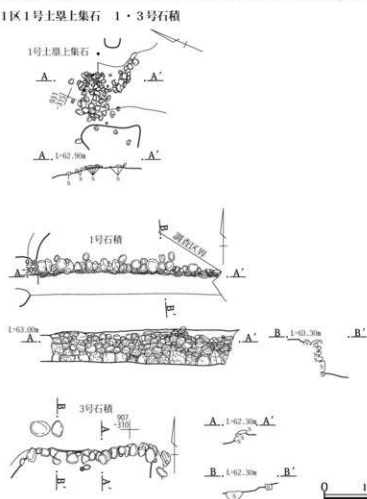
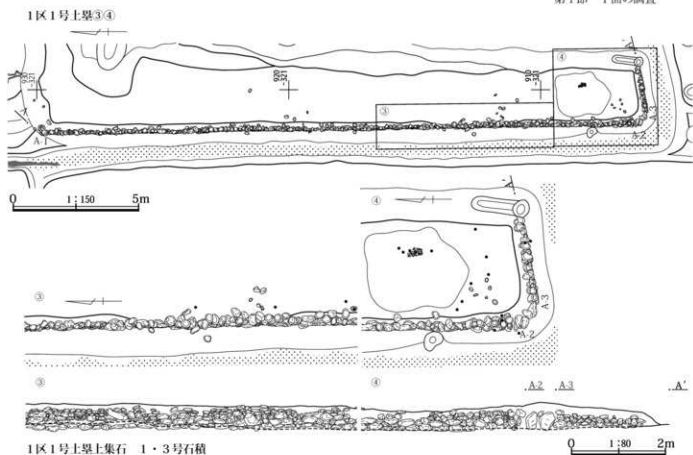


第38図 1区2号建物出土遺物(2)

1区1号土塁②

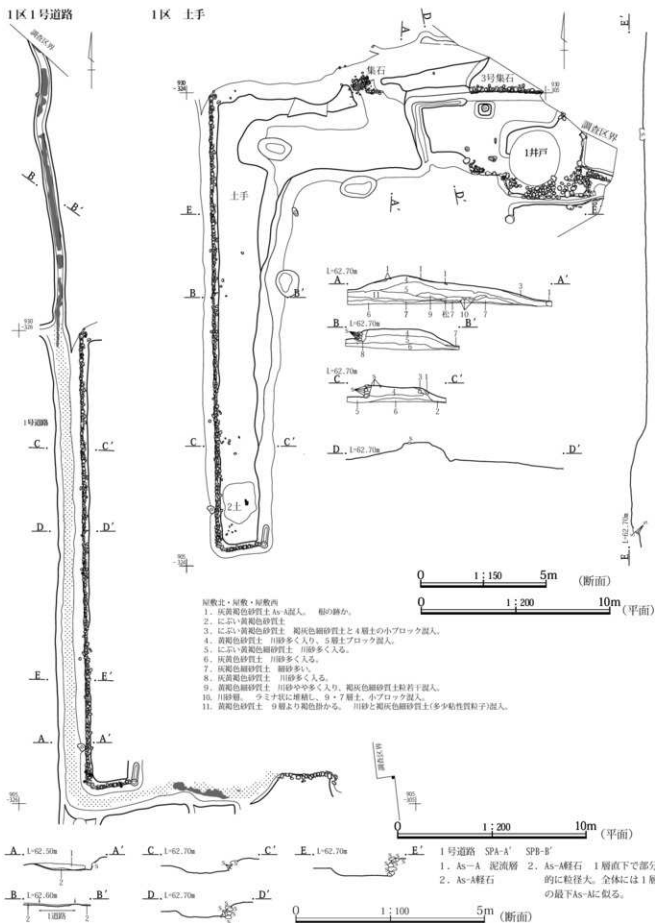


第39図 1区1号土塁西北部と出土遺物(位置は62頁第41図参照)



第40図 1区1号土塁南部(上)と土塁上集石(中)及び3号石組





第41図 1区1号道路と1号土塁

所見 植物同定により、土塁にはタケやマメガキが植えられていたことが確認された。

#### 6. 1号井戸(第42～44図、PL. 4・25)

概要 本井戸は天明3年の泥流で埋没した井戸遺構である。本井戸は当初9号土坑として調査している。

位置 本井戸は屋敷北端部の中程に在り、925～923-304～306グリッドに位置する。

規模 径：315×270cm 深さ：388cm

構造 本井戸は井筒朝顔型の掘削形態を呈する。

径400cmで掘削し、泥流の痕跡から推して、1間程の幅を測る井筒を挿入し、その外部を埋め戻したものと推慮される。なお、底面に井桁に組んだマツ属の角材(237～240)が残る。

遺物 本井戸からは肥前系染付の碗(241～243)・筒形碗(244・245)・蓋(246)・蓋物と見られるもの(247)・端反碗(248)・碗(249)・小皿(250)・皿(251・252)・徳利(253)・瀬戸・美濃陶器皿(254)・腰箱碗(261)・鉢鉢(262)・すり鉢(263)・同磁器染付端反碗(255～260)・塀・明石陶器すり鉢(264)・志戸呂陶器灯火受皿(265)・常滑陶器甕(266)・在地系土器焙烙(267・268)・置輪(269～271)・軒先瓦(272)・不明鉄製品(273)・砥石(274)が出土した。

#### 7. 屋敷内の土坑(第44図、PL. 3)

概要 本屋敷内からは1～5号土坑が確認された。

位置 1号土坑は1号建物の調査範囲の北西隅部に、2号土坑は土塁南端近くに、3～5号土坑は2号建物南端部西寄りに位置し、隣接して掘削される。

規模 規模は表12に記した。

構造 平面形態は表12に記した。掘削形態は1・3～5号土坑は箱形を呈し、2号土坑はすり鉢状を呈する。

遺物 1号土坑からは在地系土器内耳罐(275)、2号土坑からは在地系土器皿(276)が出土した。

所見 1号土坑は1号建物、3～5号土坑は2号建物に伴うものと思慮される。また2号土坑の掘削意図は不明であるが、土塁の職制に伴うものである可能性が考慮される。

このうち3号土坑と4号土坑の間には幅9cm、4号土坑と5号土坑の間には、幅24cmを測る隙壁を隔てて掘削されていた。土層断面の観察では4、5、6号土坑の順

に新しいが、その覆土から推して、いずれもAs-A泥流が上記障壁を壊しながら埋没しており、西(3号土坑)から順に埋没していたものと判断される。

#### 7. 屋敷内の出土遺物(第45図、PL.26)

上記以外の遺物には、建物に伴うものでは生産地不明の磁器ミニチュア(216)、鉄釘(217・218)、不明鉄製品、火打石があり、北端部の区画からは不明銅製品(215)の出土があった。この他、屋敷内からは、肥前磁器青磁染付碗(277・278)・染付碗(279)・染付小杯(280)、瀬戸・美濃陶器腰箱碗(281～283)・柳碗(284)・灯火受皿(285)・筒型香炉(286)、塀・明石陶器すり鉢(287)、常滑陶器甕(288)、在地系土器焙烙(289・290)・壺と見られるもの(291)・蓋(292)、土人形(293)、寛永通宝(294)、キセル(295)、不明銅製品(296・297)、鉄釘(298～304)、不明鉄製品(305・306)、敲石(307・308)、凹石と見られる石製品(309)、不明石製品(310)、火打石(311)があった。

#### 8. 1号道路(第41図、PL. 4)

概要 本道路は、1号屋敷の南東部から屋敷北東の竹藪あるいは利根川へ抜ける道路である。

位置 本道路は1区東部に在り、904～945-312～325グリッドに位置する。

本道路の中・南部の北は1号屋敷の2号建物、東には土塁、南と西には畑が近接し、北部は竹藪の間を抜ける。重複 本道路は他遺構との重複はなかった。

規模 残長：52.4m 幅：61cm 深さ：1cm

覆土 本道路はAs-A軽石・泥流に覆われている。

構造 本道路は2号建物南東隅前から略南西方向に出て、2号建物沿いに直線的にN-85°-E、更に1号土塁沿いにN-1°-Wに走向を転じて直線的に走行する。北端近くでは蛇行しながら北側調査区外に抜けるが、北端部の走向はN-19°-Wに取る。

なお、東側の土塁下端から13cm、西の8号畑から22cm低い位置に在り、後述の竹藪の中では、5cm程周囲より低くなっている。

遺物 本道路からの遺物の出土はなかった。

#### 9. 1号溝(第46・48図、PL. 4・26)

概要 本溝は大規模な溝遺構であり、西あるいは南側の

2号石積



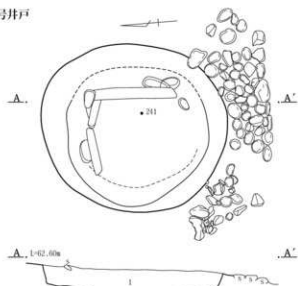
A, 1-62.50m

B, 1-62.50m

C, 1-62.50m

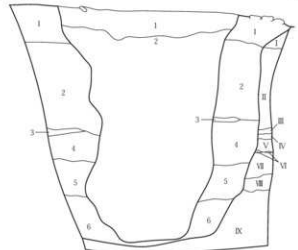
0 1:80 2m

1区1号井戸



SPA-A'  
1. にふい黄色砂質土に、As-A流入、褐色砂質土、小ブロック、礫類入る混土。

A, 1-62.60m



0 1:60 2m

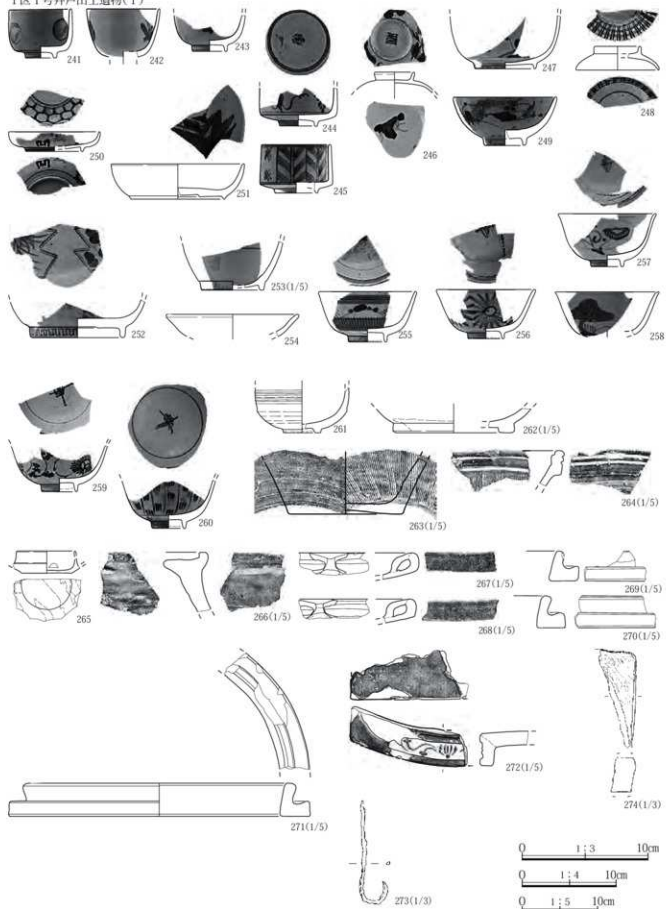
1号井戸

SPA-A'

1. にふい黄色砂質土に、As-A流入、褐色砂質土、小ブロック、礫類入る混土。
2. 径20～30cm以下5～10cmの礫類：As-A混入。
3. 成層石(天守閣築造時の礎)。
4. にふい黄褐色土 As-B 黄褐色ブロック土を含む。
5. にふい黄褐色土 As-B やや黄褐色ブロック土多い。
6. 灰黄褐色土 As-Bを含む砂質ブロック土を含まない。4～6が埋没した後一時、自然傾斜したものが、
- II. 灰黄褐色土層 砂層。
- III. 灰黄褐色土層 ややしまる砂層。
- IV. 灰黄褐色土層 粘土質、As-混入土。
- V. 黄褐色土層 As-混入土層(第IV層の間にAs-B層相当面)。
- VI. 黄褐色土層 粘土質。
- VII. 灰白土層 明黄褐色土層。
- VIII. 暗褐色土層 やや砂質であるがしりあり、As-混入土。
- IX. にふい黄褐色土 粘土土。しりあり。
- X. 明黄褐色～灰白色土 しりあり、粘土。最下層は灰白色土。(灰白色土層は前積泥流相か?)

第42図 1区1号土塁2号石積と1区1号井戸

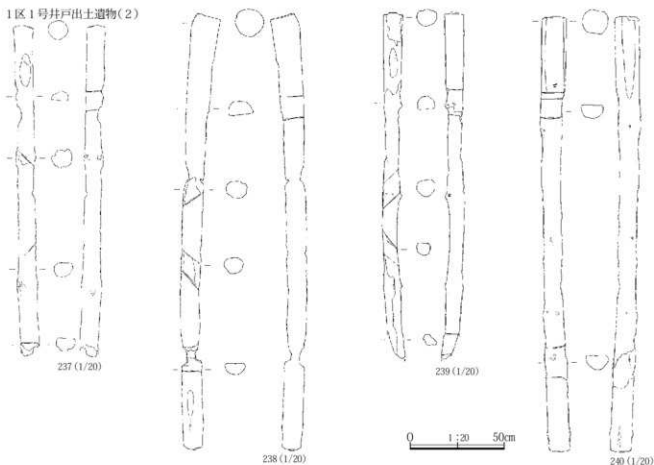
## 1区1号井戸出土遺物(1)



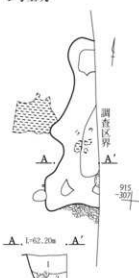
第43図 1区1号井戸出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

1区1号井戸出土遺物(2)

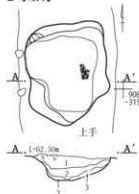


1号土坑

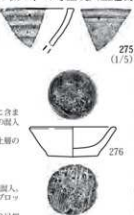


- 1号土坑 SPA-A
1. 円筒主体 直径2~15cm程。天明辰漬に含まれた浮腫のみの含まれる。露頭部に土砂の混入がなくスカスカ。
  2. に近い黄褐色土 砂質土(地山の黄褐色土層の崩壊) 天明辰漬を多く含む。
  3. に近い黄褐色土 天明辰漬を少量含む。
- 2号土坑 SPA-A
1. 浅層石中心の覆層(柱状2層土とAs-A辰漬混入)。
  2. 黄褐色細砂質土 地山層土As-A辰漬小ブロック混入。
  3. As-A辰漬層土と2層土のブロック混入。2層

2号土坑

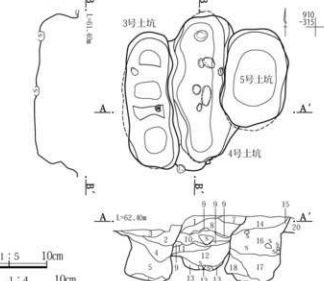


1区1、2号土坑出土遺物



- 3・4・5号土坑 SPA-A
1. に近い黄褐色土 砂質しまりなし。天明辰漬、As-A下の洪水土層。
2. 黒褐色土 露多くしめる。(天明辰漬) 1層をブロック状に極少量含む。
3. 黒褐色土 露多くしめる。(天明辰漬) 1層をブロック状に極少量含む。As-A含む。
4. 黒褐色土 露多くしめる。(天明辰漬) 1層をブロック状に極少量含む。As-Aは含まない。
5. 黒褐色土 露ほとんどない。(天明辰漬) 1層をブロック状に極少量含む。As-Aは含まない。
6. 辰褐色(As-A)土 As-A主体。
7. 2層と同じだが、1層のブロックがやや多い。
8. 2層とはほぼ同じ。
9. 2層とほぼ同。As-A主体。

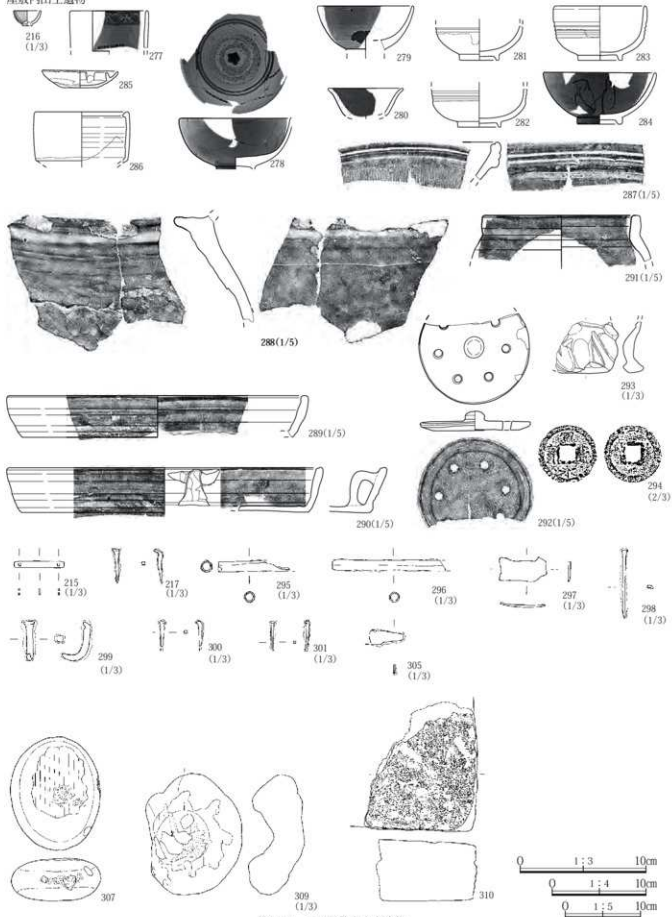
3~5号土坑



第44図 1区1号井戸出土遺物(2)及び1~5号土坑と出土遺物

10. 4層とはほぼ同じ。
11. 5層とはほぼ同じで、1層のブロック土がやや多い。
12. 5層とはほぼ同じで、1層のブロック土がやや多い。
13. 1層が主体。As-A、黒褐色の天明辰漬を少量ブロック状に含む。
14. 1層と同じ。極少量の天明辰漬、黒褐色土をブロック状に含む。
15. 1層と同じ。
16. 2層と同じ。
17. 5層と同じ。
18. 11層と同じ。
19. 18層と同じで、As-Aを少量含む。
20. 黒褐色土 露多くしめる。(天明辰漬)

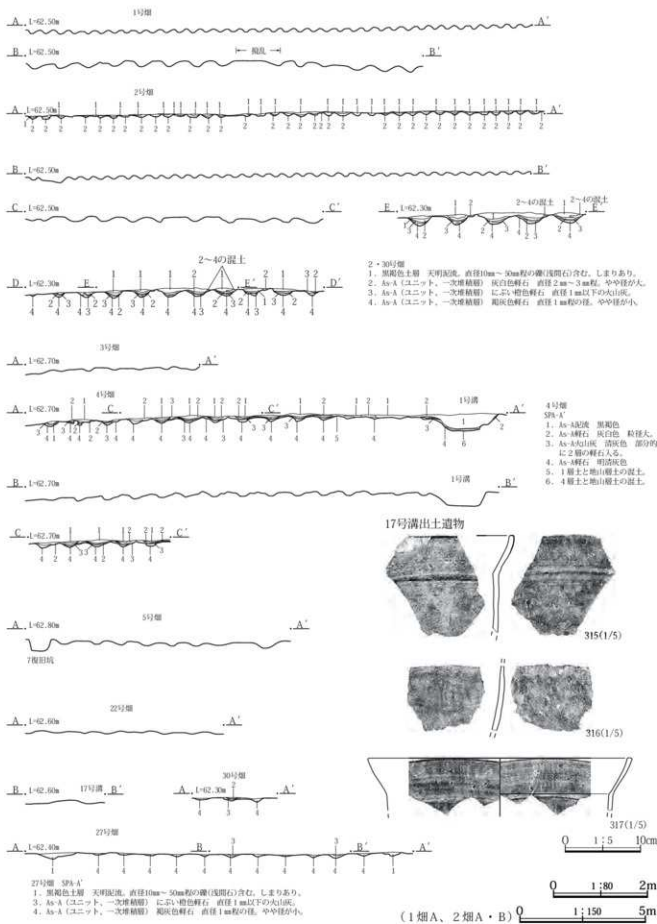
屋敷内出土遺物



第45図 1区屋敷内出土遺物



第46図の1 1区1・17・18号溝と1号溝出土遺物及び1・5・22・27・30号畑

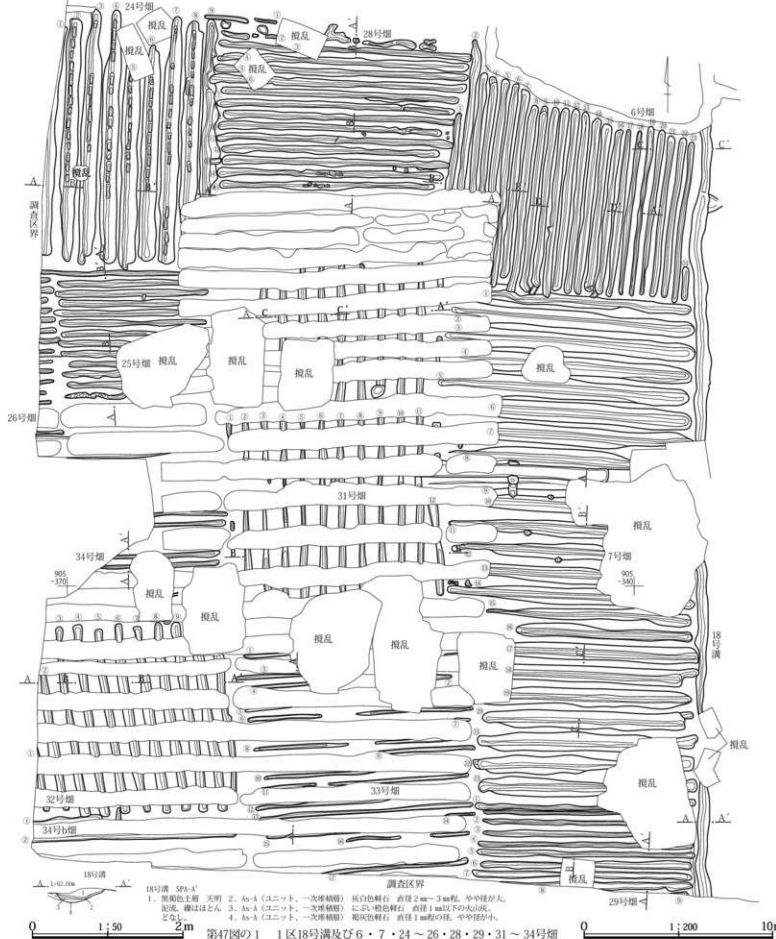


第46図の2 1区17号溝出土遺物及び1~5・22・27・30号畑土層断面

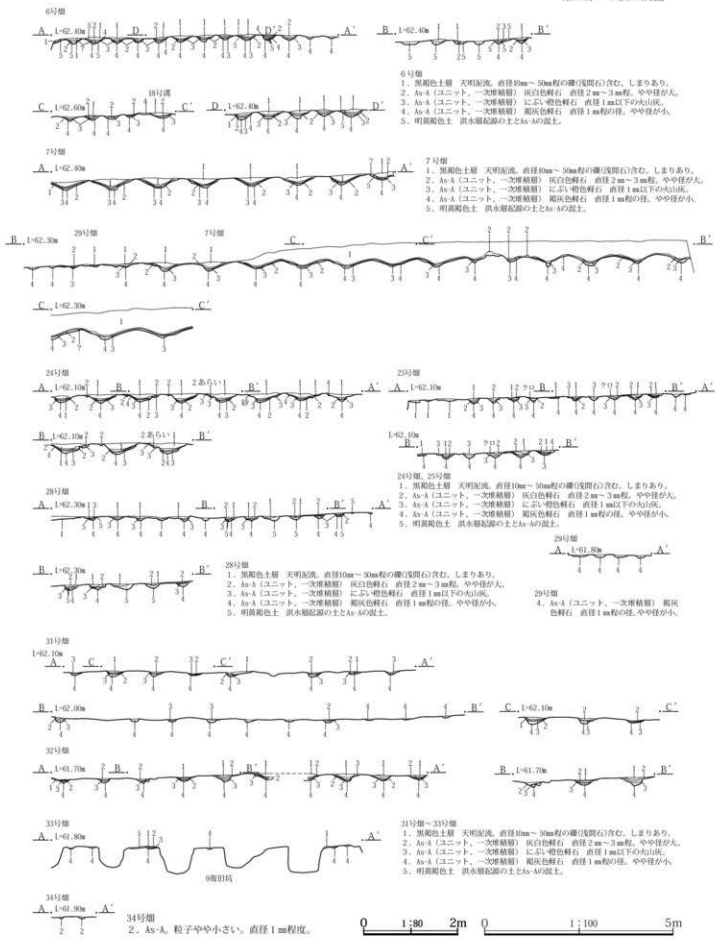


第3章 発見された遺構と遺物

1区 6・7・24～26・28・29・31～34号畑

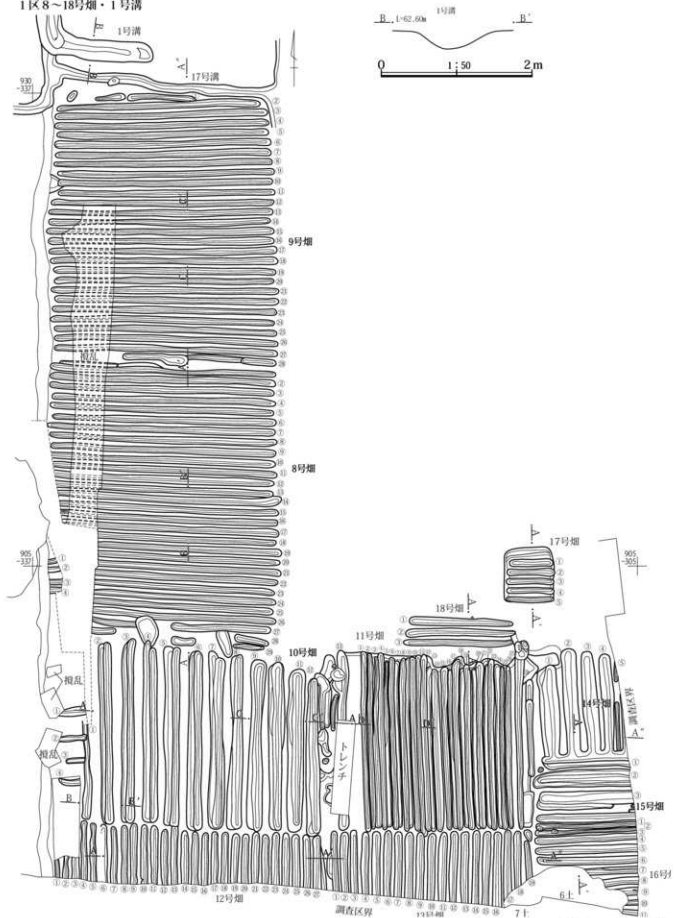


第47図の1 1区18号溝及び6・7・24～26・28・29・31～34号畑



第47図の2 1区6・7・24~26・28・29・31~34号畑土層断面

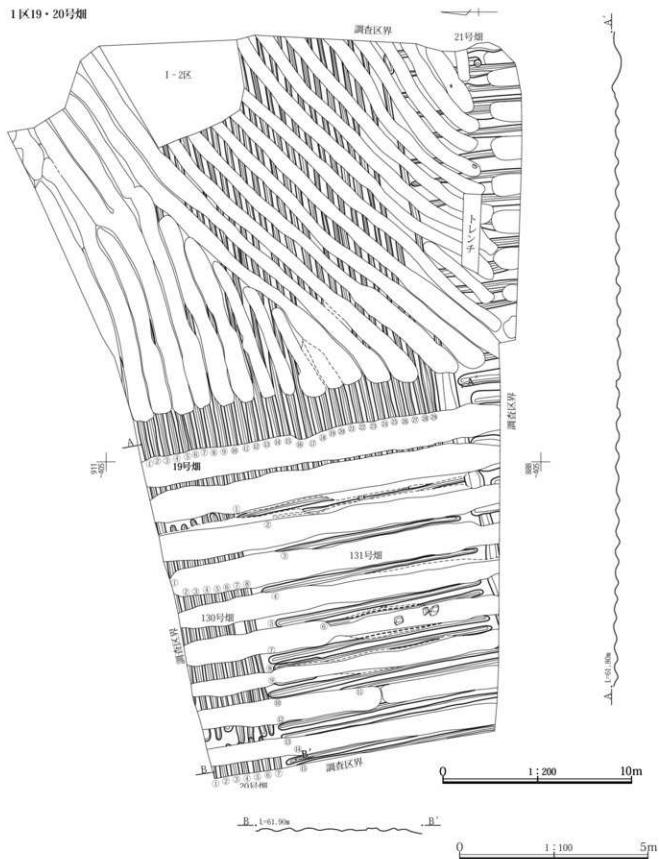
第3章 発見された遺構と遺物  
1区8～18号畑・1号溝



第48図の1 1区1号溝及び8～18号畑

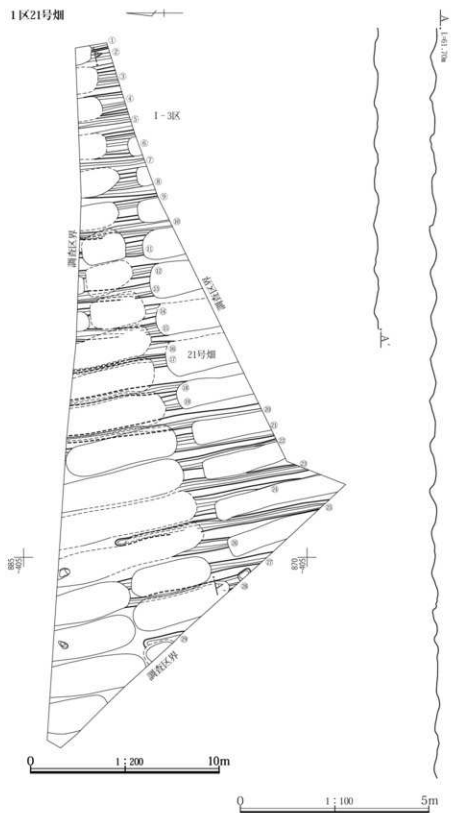


1区19・20号畑



第49図 1区(1-2区)19・20号畑

1区21号畑



第50図 1区(1-3区)21号畑

## 第3章 発見された遺構と遺物

表4 1区1面下位面As-A下畑一覽

番号	所在グリッド	土軸方位	東西×南北(m)	セウ						縦間(m)					
				発数	掘削回数(cm)	(平均)	長さ(m)	(平均)	幅(m)	(平均)	深さ(m)	(平均)	(平均)		
1	935 ~ 942-362 ~ 370	N-15°-E	7.35 × 39.13	72	47 ~ 70	54.81	—	—	—	26 ~ 47	49.54	4 ~ 11	13.04	6 ~ 34	14.19
2	934 ~ 940-360 ~ 368	N-08°-E	10.23 × 39.55	69	47 ~ 70	55.57	2.78	10-09	5.61	16 ~ 48	38.82	6 ~ 15	12.29	7 ~ 80	17.75
3	960 ~ 963-343 ~ 346	N-78°-E	3.13 × 2.33	9	32 ~ 60	46.38	—	—	—	21 ~ 33	24.38	3 ~ 8	5.44	6 ~ 34	16.40
4	948 ~ 963-346 ~ 346	N-10°-E	8.14 × 12.36	27	48 ~ 59	54.63	11.81	11-91	11.81	13 ~ 42	27.65	3 ~ 12	6.26	4 ~ 30	16.60
5	929 ~ 934-336 ~ 347	N-82°-E	10.68 × 4.65	7	51 ~ 71	58.06	9.81	9-81	9.81	31 ~ 41	35.57	8 ~ 10	17.12	12 ~ 35	32.00
6	920 ~ 934-336 ~ 350	N-83°-E	13.28 × 11.96	24	48 ~ 72	58.02	1.78	10-89	8.40	29 ~ 43	36.92	8 ~ 19	13.21	13 ~ 37	20.94
7	903 ~ 920-336 ~ 351	N-05°-E	14.56 × 28.24	24	79 ~ 208	123.71	6.85	14-52	10.90	44 ~ 167	86.43	9 ~ 32	19.63	18 ~ 63	37.64
8	900 ~ 915-323 ~ 330	N-05°-E	12.30 × 15.26	29	42 ~ 59	51.98	5.47	12-04	11.09	21 ~ 42	33.23	5 ~ 15	11.87	7 ~ 26	18.29
9	915 ~ 939-324 ~ 336	N-02°-E	12.27 × 15.22	28	42 ~ 56	51.20	3.45	12-02	10.88	27 ~ 47	32.97	5 ~ 15	9.69	9 ~ 23	17.68
10	890 ~ 900-320 ~ 334	N-04°-E	11.68 × 9.48	23	79 ~ 87	83.00	8.06	9-78	9.68	31 ~ 82	44.27	6 ~ 21	14.60	13 ~ 51	17.14
11	889 ~ 900-310 ~ 319	N-02°-E	9.22 × 9.73	29	35 ~ 63	44.64	5.12	9-59	8.77	23 ~ 44	31.11	2 ~ 16	7.46	5 ~ 27	4.52
12	888 ~ 891-321 ~ 335	N-87°-E	(14.40) × 2.71	23	51 ~ 61	54.26	—	—	—	14 ~ 44	33.13	7 ~ 13	11.04	16 ~ 38	17.93
13	886 ~ 891-310 ~ 321	N-87°-E	10.51 × (4.07)	20	48 ~ 61	56.43	—	—	—	30 ~ 49	37.89	6 ~ 15	11.95	9 ~ 33	17.16
14	894 ~ 900-305 ~ 310	N-06°-E	4.23 × (5.70)	5	51 ~ 119	87.31	—	—	—	23 ~ 83	64.10	3 ~ 25	6.00	4 ~ 34	17.20
15	892 ~ 900-305 ~ 310	N-90°-E	5.33 × 2.63	4	89 ~ 98	93.50	—	—	—	28 ~ 43	62.13	5 ~ 8	6.75	13 ~ 26	12.83
16	891 ~ 897-305 ~ 310	N-02°-E	5.53 × 5.47	13	33 ~ 80	52.53	—	—	—	17 ~ 45	32.73	1 ~ 7	8.77	8 ~ 29	15.88
17	903 ~ 906-300 ~ 311	N-88°-E	2.59 × 2.33	5	47 ~ 51	49.50	2.3	2-54	2.49	28 ~ 43	32.80	4 ~ 7	5.29	12 ~ 21	13.60
18	900 ~ 902-311 ~ 317	N-88°-E	5.92 × 1.65	3	51 ~ 34	52.38	5.47	5-79	5.68	33 ~ 45	34.50	7 ~ 12	10.00	17 ~ 18	17.10
19A				11	52 ~ 59	53.54	—	—	—	29 ~ 96	39.20	5 ~ 15	8.91	17 ~ 42	17.29
19B	892 ~ 910-382 ~ 419	N-80°-E	39.1 × 16.95	32	51 ~ 61	56.30	11.37	11-55	11.49	28 ~ 57	33.26	7 ~ 16	9.95	17 ~ 46	22.47
19C				33	46 ~ 61	56.47	—	—	—	15 ~ 38	27.75	4 ~ 10	6.40	12 ~ 46	27.17
20	900 ~ 915-419 ~ 421	N-08°-E	(2.30) × (3.70)	7	54 ~ 64	57.40	—	—	—	28 ~ 40	34.83	3 ~ 10	7.14	17 ~ 28	19.29
21	868 ~ 882-377 ~ 409	N-82°-E	(51.80) × (11.16)	28	74 ~ 136	87.90	—	—	—	33 ~ 90	51.28	9 ~ 36	12.23	38 ~ 68	38.80
22	943 ~ 947-346 ~ 348	N-07°-E	1.66 × 4.24	8	54 ~ 59	55.17	—	—	—	27 ~ 45	36.36	3 ~ 8	5.13	17 ~ 23	17.44
24	921 ~ 935-362 ~ 371	N-4°-E	9.13 × 13.70	9	100 ~ 108	104.75	11.32	13-44	12.71	59 ~ 90	81.44	7 ~ 23	17.80	13 ~ 29	18.78
25	914 ~ 921-362 ~ 370	N-88°-E	8.15 × 6.81	13	50 ~ 65	55.04	7.76	8-08	7.92	19 ~ 38	29.92	7 ~ 12	9.08	18 ~ 36	22.45
26	913 ~ 921-370 ~ 371	N-8°-E	(1.20) × 8.23	14	47 ~ 60	53.83	—	—	—	12 ~ 29	22.07	3 ~ 11	5.50	21 ~ 41	26.62
27	935 ~ 942-347 ~ 348	N-06°-E	(1.10) × 6.64	12	42 ~ 61	54.86	—	—	—	29 ~ 44	35.92	3 ~ 10	5.75	8 ~ 34	17.42
28	926 ~ 934-430 ~ 362	N-85°-E	13.60 × 8.05	14	51 ~ 62	57.77	10.50	13-58	12.24	27 ~ 49	33.25	6 ~ 14	11.14	8 ~ 41	22.62
29	888 ~ 893-336 ~ 348	N-90°-E	(7.90) × (4.35)	10	29 ~ 62	47.28	11.15	11-58	11.40	8 ~ 45	24.00	3 ~ 8	5.50	8 ~ 35	20.05
30	934 ~ 937-348 ~ 357	N-84°-E	9.67 × (2.33)	5	41 ~ 39	51.38	—	—	—	14 ~ 41	21.80	5 ~ 7	5.80	23 ~ 34	23.70
31	904 ~ 910-350 ~ 361	N-8°-E	11.56 × (17.64)	12	80 ~ 112	100.61	—	—	—	22 ~ 37	31.38	2 ~ 13	7.75	51 ~ 93	63.17
32	893 ~ 904-361 ~ 371	N-80°-E	10.48 × 10.68	11	38 ~ 115	100.05	9.83	10-22	10.04	37 ~ 63	44.27	12 ~ 18	14.36	13 ~ 77	50.14
33	889 ~ 902-348 ~ 361	N-82°-E	12.58 × 12.40	17	54 ~ 54	53.50	11.31	11 ~ 95	11.63	9 ~ 27	18.40	2 ~ 7	5.27	30 ~ 34	13.85
34	906 ~ 908-361 ~ 368	N-85°-E	(6.20) × 2.87	4	45 ~ 164	104.00	—	—	—	20 ~ 25	23.33	5 ~ 8	6.25	22 ~ 139	48.38
34B	890 ~ 892-360 ~ 371	N-88°-E	(10.80) × (2.36)	3	93 ~ 98	95.25	—	—	—	13 ~ 32	29.17	3 ~ 25	7.23	5 ~ 67	47.50
35	903 ~ 905-335 ~ 336	N-07°-E	(0.81) × 1.85	4	41 ~ 68	54.25	—	—	—	21 ~ 35	26.75	1 ~ 25	2.35	5 ~ 43	24.17
35B	893 ~ 897-334 ~ 335	N-04°-E	(1.40) × 4.30	4	115 ~ 138	124.33	—	—	—	28 ~ 42	31.50	4 ~ 11	7.00	87 ~ 103	70.75
35C				18	77 ~ 269	132.92	—	—	—	21 ~ 73	39.47	7 ~ 22	14.12	42 ~ 233	88.53

表5 2区1面下位面As-A下畑一覽

番号	所在グリッド	土軸方位	東西×南北(m)	セウ						縦間(m)					
				発数	掘削回数(cm)	(平均)	長さ(m)	(平均)	幅(m)	(平均)	深さ(m)	(平均)	(平均)		
1	870 ~ 873 ~ 418 ~ 427	N-67°-E	(7.80) × (4.40)	9	53 ~ 60	96.38	—	—	—	21 ~ 35	28.44	4 ~ 9	7.56	23 ~ 31	24.78
2	867 ~ 873 ~ 426 ~ 436	N-75°-E	(9.40) × (3.40)	7	53 ~ 59	55.30	—	—	—	29 ~ 33	31.50	5 ~ 10	8.43	24 ~ 27	23.30
3	866 ~ 870 ~ 426 ~ 444	N-77°-E	(7.90) × (3.00)	3	113 ~ 124	118.25	—	—	—	40 ~ 53	48.00	15 ~ 20	17.00	53 ~ 77	69.00
4	873 ~ 882 ~ 421 ~ 434	N-24°-E	(7.90) × (7.00)	17	45 ~ 64	55.54	1.80	1-83	1.80	19 ~ 51	27.69	3 ~ 9	6.56	7 ~ 51	27.07
5	871 ~ 881 ~ 429 ~ 442	N-15°-E	10.20 × (9.10)	19	42 ~ 63	55.11	9.64	10-13	9.86	28 ~ 39	31.60	6 ~ 12	8.74	16 ~ 34	24.11
6	869 ~ 880 ~ 438 ~ 452	N-75°-E	(11.50) × 10.30	10	104 ~ 126	112.44	9.29	9-64	9.51	38 ~ 38	47.10	10 ~ 18	15.90	50 ~ 86	64.22
7	873 ~ 877 ~ 430 ~ 455	N-25°-E	1.60 × (2.40)	5	86 ~ 116	104.50	—	—	—	24 ~ 48	39.60	6 ~ 16	11.20	47 ~ 61	62.00
8	881 ~ 888 ~ 436 ~ 451	N-70°-E	(9.10) × (9.00)	9	84 ~ 114	95.80	—	—	—	34 ~ 44	38.75	9 ~ 15	11.33	41 ~ 78	58.67
9	879 ~ 890 ~ 447 ~ 459	N-20°-E	(12.40) × (8.40)	26	45 ~ 61	51.87	—	—	—	21 ~ 33	28.95	4 ~ 25	8.42	12 ~ 31	24.86
10	895 ~ 903 ~ 429 ~ 452	N-42°-E	(10.00) × (8.40)	15	46 ~ 57	53.67	—	—	—	16 ~ 40	27.93	6 ~ 12	7.93	18 ~ 35	25.94
11	897 ~ 902 ~ 448 ~ 454	N-50°-E	(6.20) × (2.60)	8	90 ~ 65	57.50	—	—	—	18 ~ 45	38.43	3 ~ 14	9.38	13 ~ 29	23.33

表6 1面土坑計測値表

1区1面

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(m)	土軸方位	備考
1	914 ~ 918 ~ 307 ~ 308	不整形	335 × (112) × 72		
2	907 ~ 909 ~ 315 ~ 317	楕円形	216 × 180 × 88		
3	906 ~ 909 ~ 317 ~ 319	楕円形	285 × 95 × 112		
4	906 ~ 910 ~ 316 ~ 317	楕円形	326 × (108) × 82		
5	907 ~ 909 ~ 315 ~ 316	楕円形	265 × 134 × 115		
6	887 ~ 889 ~ 306 ~ 311	楕円形	398 × (180) × 143		
7	886 ~ 887 ~ 310 ~ 312	楕円形	(124) × (111) × 84		
8	896 ~ 898 ~ 305 ~ 307	不整形	(158) × (140) × 80		

畑地と東あるいは北側の竹藪とを区画している。

本溝は北側が調査区外に在り、また擾乱により壊された箇所もあったため、全容は詳らかにできなかった。

位置 本溝は1-1区中北部に在り、931~956-330~338グリッドに位置する。

重複 本溝と他の遺構との重複はなかった。

規模 残長：28.9m 幅：156cm 深さ：26~64cm

覆土 As-A泥流で埋没する。

構造 1号溝は北からN-3°-Eの走向で調査区に入り、中位で東にクランクする直線的な走行を取り、南端でN-85°-Wの走向を取って東に折れる。

その掘削形態は箱型状を呈するが、クランク部分で基底幅96cm、上幅15cm、高さ10cmを測るダム状の掘り残しがあり、クランク部分の南から屈曲部までは、前後の底面に対して37cm程深く掘削されていた。

遺物 本溝からは在地系土器皿(312・313)・焙烙(314)が出土した。

所見 本溝の掘削意図は確認できなかった。

#### 10. As-A下畑(第46~50図、PL. 1・2・4)

概要 1区では、天明3(1783)年のAs-A軽石で覆われた畑38面を確認した。

位置 1区の畑のうち1~5・22・27・30号畑は1-1区北部、8~18号畑は1-1区南東部、6・7・24~26・28・29・31~34A・34B・132・133号畑は1-1区南西19・20・131・134号畑は1-2区、21号畑は1-3区にある。

位置するグリッドは表4に記した。

規模・軸方位 表4に記した。

構造 これらの畑は粘性のほとんどない細砂質土を耕して造られている。

畑の規模、個々のサクの掘削間隔や規模、畝間などは表4にまとめた。

また、南東部にある17・18号畑は小規模であり、家庭菜園の様相を呈している。

遺物 1・12号畑から国産陶器片、6・9・23号畑からは在系土器片、18号畑からは国産陶器片と在系土器片、19号畑から国産磁器片が、いずれも少量出土した。また4号畑の表面から、耕作物ではないが、カナムグラの種子が出土している。

区画溝(17・18号溝) 1-1区では畑に伴う区画溝が見られた。17号溝は5号畑の西側の22・27号畑と、南側の6号畑を区画する区画溝であるが掘削されている。その規格は幅52cm、深さ6~13cmを測るもので、箱型状の掘削形態を呈するこの溝は、5号畑の南東辺を走って、5号畑の東辺を走る1号溝に達する。また南東の屈曲部より175cmの地点で当方に分岐し、分岐した溝は、9号畑北縁の西部では北に1.4m以下の距離を以て離れるが、略東南東方向に走行を変じて、更に略東方向に東半部は9号畑の北縁に沿って走行し、1号道路に至る。

また、1-1区中・南部に、東側の9・8・10・12・132・133号畑と、西側の5・7・29号畑の間を画する区画溝、18号溝が走る。この溝はN-0°に走向を取り、極緩やかに蛇行する走行を呈する。その幅は65cm、深さ9cmを測り、その北端は上述の5号畑を廻る区画溝の南東部に接続する。

遺物 17号溝からは在地系内耳鍋(315~317)が出土している。

#### 10. 竹藪(第51図、PL. 1)

概要 1-1区の北部で、耕作地ではない、区画が確認され、その地表面に遺された圧痕から、竹藪ではないかと想定している。

位置 1号屋敷の北辺とその延長線上にある9号畑北側の区画溝、そして1号溝に囲まれた区域であり、932~955-307~336グリッドに位置する。

規模 本遺構面は、東西28.5m、南北24.5mを測る。

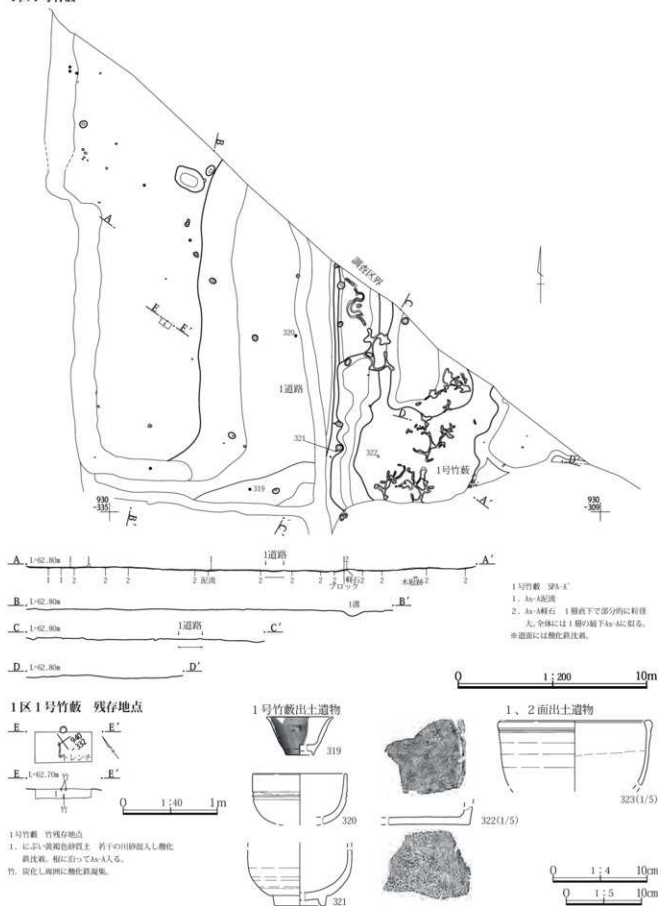
構造 本遺構面は、10cm以内の凹凸が前面に見られ、複雑な圧痕が見られた。また1号道路の東側では、根の痕跡の様なものが見られた。

遺物 本遺構からは少量の国産陶器片や在地系土器片が出土したが、この中には肥前磁器染付小杯(319)、瀬戸・美濃陶器腰罎碗(320)と尾呂碗(321)、及び在地系土器片(322)があった。またマツ以外の針葉樹の樹皮が出土した。

所見 本遺構は耕作地ではなく、またその地表面の様相は、自然林の存在を想起させるものであった。しかし樹木が植生された積極的な痕跡は認められず、根の痕跡はタケを想起させるもので、第5章の1号屋敷の所見や本遺跡の東には利根川が近接してあることなどを勘案し



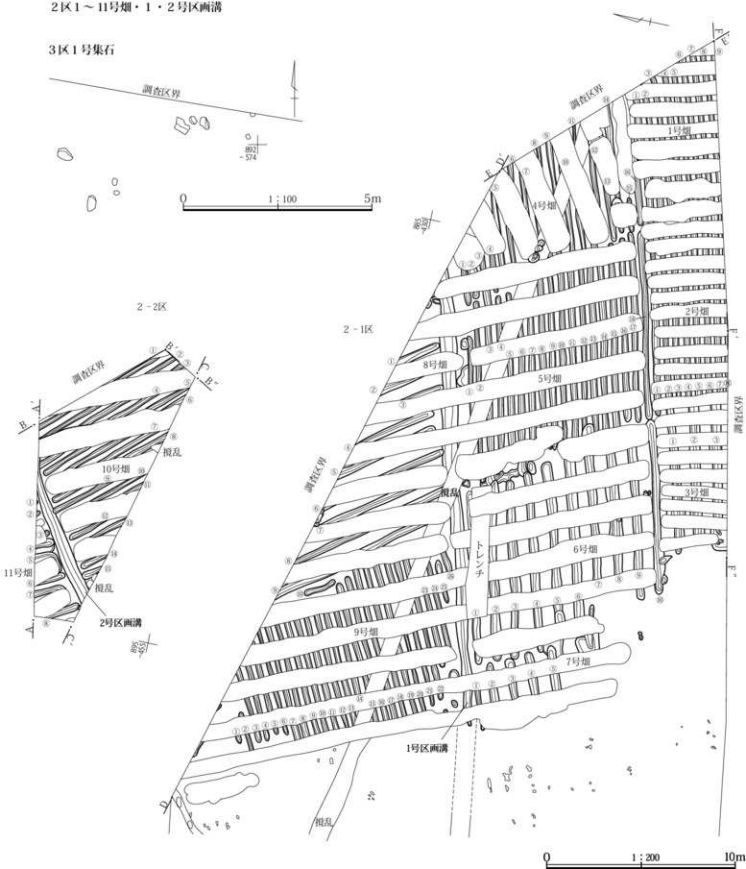
1区1号竹藪



第51図 1区1号竹藪と出土遺物

2区1～11号畑・1・2号区画溝

3区1号集石



第52図 2区1・2号区画溝と1～11号畑、3区1号集石

て、本遺構面は竹藪であったものと判断される。

## (b) 2区

### 1. As-A下畑(第52図)

**概要** 2区では、天明3年のAs-A軽石で覆われた畑11面を確認した。

**位置** 2区の畑は2-1区東部と2-2区にある。このうち1～3号畑は2-1区南縁部に、北部に8・9号畑が在り、10号畑は2-2区中東部に、11号畑は同西端部にある。

位置するグリッドは表5に記した。

**規模・主軸方位** 表5に記した。

**構造** 畑の規模、個々のサクの掘削間隔や規模、畝間などは表5にまとめた。

2区の畑は公道南の2-1区のサクは東北東-西南西方向に掘削され、公道北側の2-2区のサクは北西-南東方向に掘削されていた。

**遺物** 2区のAs-A下畑からの遺物の出土はなかった。

**所見** 上述のように、本畑群は、天明3(1783)年の浅間山の大噴火で降下したAs-A軽石で覆われた畑遺構である。また、本畑群の所在区域(2区東部)は、上記噴火に伴って発生した泥流の到達が確認された区域であった。

各畑の区画は、1面上位面の復旧溝群の区画とほぼ重なるものであった。

## (c) 3区

### 1. 1号道路(第18図)

**概要** 3区1号道路は、硬化面によって確認された道路遺構である。

また、1号道路は南側が削平され、南北両側が調査区外に出るため、全容を詳らかにできなかった。

**位置** 1号道路は3区中・西部、859～894-569～582グリッドに位置する。

**重複** 1・2号道路は共に、他遺構との重複はなかった。

**規模** 1号道路 残長：36.8m 幅：96cm 深さ：5cm

**覆土** 本道路の上面にはAs-A軽石が乗る。

**構造** 本道路の走行は蛇行しているが、その走向は、北端はN-20°-W、南半部はでN-15°-Wに走向を取る。

本道路の横断面は若干窪みを有する。

**遺物** 本道路からの遺物の出土はなかった。

**所見** 本道路の敷設の目的は、特定されなかった。

本道路の時期は、天明3(1783)年に存在していたものと判断される。

### 2. 1号集石(第52図、PL.26)

**概要** 本遺構は、河床礫が分布する遺構である。

**位置** 本遺構は3区調査区北端部西寄りに在り、890～892-573～579グリッドに位置する。

**重複** 本土坑は他遺構との重複はなかった。

**規模** 範囲：107×99cm

**覆土** 覆土の明確な記録は残せなかった。

**構造** 大小の河床礫が集まる遺構であるが、その分布状況は粗である。

**遺物** 本遺構からの出土遺物はなかった。

**所見** 本遺構の礫の配置意図は特定されなかった。

その時期は、確認面から推して、天明3年以前の所産と想定される。

## (d) 1・2面の出土遺物(第51図)

1面か2面か出別できなかった遺物に瀬戸・美濃陶器片口鉢(323)、砥石(324)、火打石(325)があった。

## 第2節 2面の調査

### (1) 2面の概要

2面は、およそ16世紀以降から天明3(1783)年の浅間山の大噴火の間の中近世面である。

2面の調査は、近世遺構のうち、寛保2(1783)年の大洪水に伴う被災遺構の調査であったが、層厚約1.5mを測る洪水層起源の土層中に、幾重にも洪水層が重なり、予想をはるかに上回る何面にも亘る復旧溝群や復旧畑が識別され、寛保2年の遺構面の検出に苦慮した。

そうした中、その可能性の見られた3面の畑跡を確認、調査したが、以下、この3面を上位面面、中位面、下位面とし、上位面、中位面、下位面それぞれに報告する。なお、寛保2年面の可能性が最も高いのは下位面の遺構群であった。

また、2面の調査は1-1区のみで実施している。

### (2) 2面上位面

2面上位面は、1-1区東部及び北部の1期調査区域で確認した。その後の調査で、下位に遺構面が検出されたため、寛保2年面である可能性が低くなり、1-1区中部以西、以南の2期調査区域では、調査対象から外した。

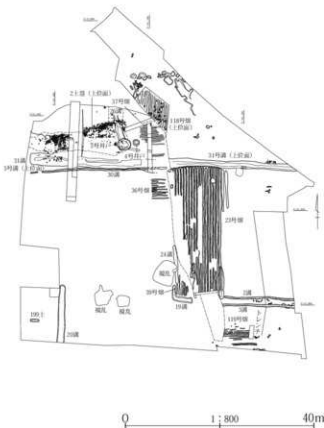
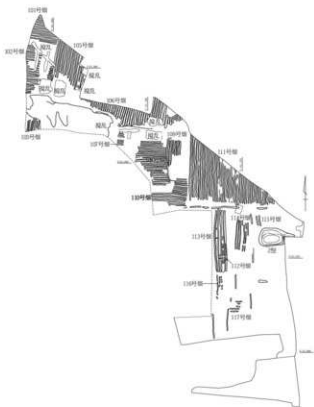
2面上位面では101~117号畑の、17面の畑遺構を確認した。また、2号竪穴と15号土坑を確認調査した。

#### 1. 畑(第54図, PL. 9)

**概要** 2面上位面では、褐色土の地山層に、筋状にわずかに残されたにぶい黄褐色土によって畑跡が確認された。しかし、下位の畑跡の確認と調査期間に鑑みて、遺構を掘削せず、その範囲と形状の確認に留めた。

**位置** 畑跡は、101~105号畑は1-1区北西部に、106~110号畑は同中北部に、111号畑は同北東部に、112~116号畑は同中東部に、117号畑は同東南部に所在する。

位置するグリッドは表7に記した。



第53図 1-1区2面全体図(左:上・中位面 右:下位面)

規模・主軸方位 表7に記した。

重複 本面の畑遺構のうち、108号畑と109号畑、112号畑と113号畑が重複するが、108号畑と113号畑の方が新しい。なお、108号畑は109号畑に対して27cm程高い位置にある。

構造 2区上位面の畑遺構は掘削を行わなかったため、遺構の形状を明らかにすることはできなかった。

個々の復旧畑のサクの掘削の間隔、サクの幅などは表7にまとめた。

遺物 2面上位面の各畑からの遺物の出土はなかった。

所見 101～117号畑の耕作時期は、寛保2(1783)年と天明3(1783)年の間と想定されるものの、その耕作時期を特定することはできなかった。

#### 2. 2号竪穴・3号竪穴(第59図、PL.10)

概要 2・3号竪穴は、縦列に連なる大型の遺構である。なお、調査段階で2号竪穴は1号井戸、3号竪穴は15号土坑と呼称していたことがあるため、遺構図や遺物注記にその呼称で記載されているものもある。

位置 2号竪穴と3号竪穴は1-1区中東部の調査区実際に位置し、2号竪穴は922～926-310～316、3号竪穴は923～925-305～311グリッドに位置する。

重複 2号竪穴と3号竪穴は併存しているが、他の遺構との重複はなかった。

規模 2号竪穴 長さ：532cm 幅：397cm 深さ：196cm

3号竪穴 残長：245cm 残幅：164cm 深さ：134cm

覆土 両遺構は灰黄褐色土や褐色土などで埋没する。

構造 2・3号竪穴の掘削形態は共に曲物形を呈し、両遺構の間は幅32cmを測るダム状の掘り残しが残るが、その頂部は2号竪穴の底面から80cm、3号竪穴の底面から18cmを測る。

遺物 2号竪穴からは少量の土師器片、中近世の在来系土器片、国産施釉陶器片が出土したが、3号竪穴からの遺物の出土はなかった。

所見 2・3号竪穴の掘削意図は共に特定できなかったが、縦列に連続して掘削される大型の遺構であり、2号竪穴からは湧水が見られた。

また、その時期は、寛保2年～天明3年の所産として把握されるものの、その掘削意図は特定できない。

### (3) 2面中位面

2面中位面は、1-1期の調査段階で、上位面と下位面との間に検出されたものであるが、面的な広がりはなく、下位面が検出されたため、2期調査区域では調査対象から外した。

#### 1. 畑(第59図、PL.9)

概要 2面中位面では、118号畑1面を確認したに過ぎなかった。

118号畑は、筋状にわずかに残された地山層と覆土の色調の違いから、確認された。しかし、上位面の畑跡と同様に、下位の畑跡の確認と調査期間に鑑みて、遺構を掘削せず、形状の確認に留めた。

位置 118号畑跡は、1-1区中北部南寄りに位置する。

位置するグリッドは表7に記した。

規模・主軸方位 表7に記した。

構造 118号畑も掘削を行わなかったため、遺構の形状を明らかにすることはできなかった。

また個々の復旧畑のサクの掘削の間隔、サクの幅などは表7にまとめた。

遺物 2面上位面の各畑からの遺物の出土はなかった。

所見 118号畑の耕作時期は、寛保2(1783)年と天明3(1783)年の間と想定されるものの、その耕作時期を特定することはできなかった。

### (4) 2面下位面

2面下位面は、暗灰黄色砂で覆われた遺構面である。暗灰黄色砂が寛保2(1742)年の洪水砂と判断したものである。各所に凹凸が散見された。

2面下位面では溝遺構7条、畑5面、竪穴1基、土坑1基を確認調査した。また、3面の2号土塁の頂部にある、集石も調査し、3面で確認調査した、3・4号井戸26号溝も、本面に含まれるものとして報告する。

なお、2面下位面は31号溝を境に南側が10～43cm低くなり、南西部が北側より25～30cm低くなっている。

#### 1. 溝(第565～8図、PL.9・10)

概要 2面下位面では、2・3・19・20・24・26・30・31号溝を確認した。このうち20・31号溝は大規模の溝遺

1-1区2面101～110号畑(上位面)



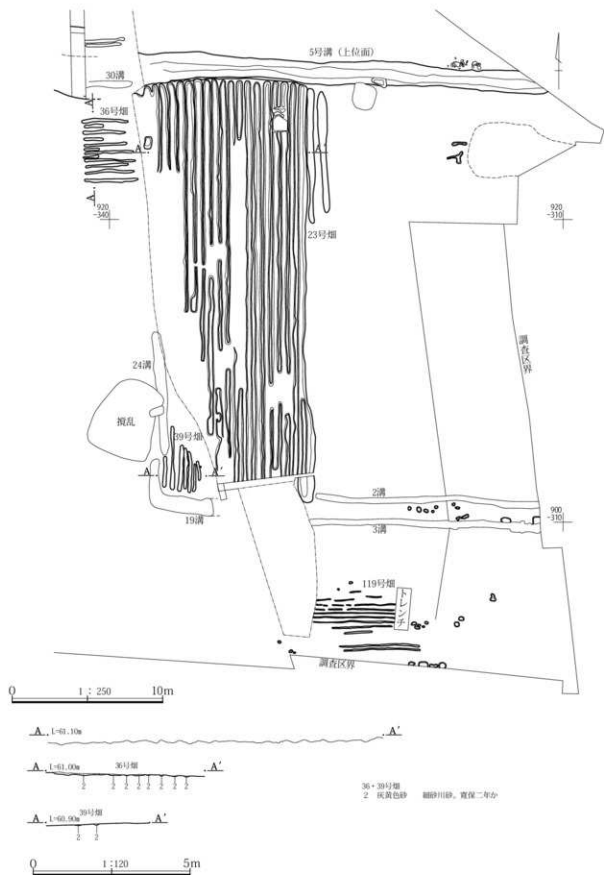
第54図 1区101～110号畑

1-1区2面111～117号畑(上位面)



第55図 1区111～117号畑

1-1区2面23.36.39.119号畑(下位面)5号溝(上位面)



第56図 1区5号溝の痕跡と23・36・39・119号畑



### 第3章 発見された遺構と遺物

構であり。他の溝は中小規模の溝遺構である。

また、19・24号溝以外の溝は、調査区外に出るため全容を確認することはできなかった。

なお、26・30号溝は3面に確認した遺構であるが、3面を切るため、本面に報告する。

位置 2・3号溝は1-1区南東部、19・24号溝は同中南部、20号溝は同南西部、26号溝は中部北寄りに、30号溝は中西部北寄りに、31号溝は中東部北寄りにある。所在グリッドは、2号溝は900~901-311~326、3号溝は899~900-311~326、19号溝は900~904-333~337、20号溝は892~904-359~361、24号溝は904~912-335~338、26号溝は904~940-345~347、30号溝は927~938-333~367、31号溝は928~931-310~(367)である。

なお、31号溝は3面の5号溝の埋土中にあるが、30号溝はその南に並走している。また、30号溝は東側の1期調査区域では確認できず、一方、31号溝は西側の2期調査区域では確認できなかった。

重複 各溝ともに、他遺構との重複はなかった。

規模 2号溝 残長：14.8m 幅：48cm 深さ：9cm

3号溝 残長：15.4m 幅：50cm 深さ：15cm

19号溝 長さ：6.6m 幅：113cm 深さ：22cm

20号溝 残長：12.2m 幅：152cm 深さ：10cm

24号溝 長さ：8.3m 幅：80cm 深さ：1cm

26号溝 残長：5.5m 幅：133cm 深さ：8cm

30号溝 残長：29.0m 幅：164cm 深さ：10cm

31号溝 残長：26.8m 幅：164cm 深さ：10cm

覆土 2・3号溝は川砂含む灰黄褐色砂質土、19号溝はにぶい黄褐色砂質土など、20号溝は灰黄褐色粘質土、24号溝は暗灰黄色砂で埋没した。

構造 2・3号溝は、全体としてN-90°に走向を取り、極緩やかに蛇行する走行を呈する。掘削形態は箱状を呈し、底面は平底を呈する。なお、2・3号溝は90~128cmの間隔を以て並走する。

19号溝はL字形に走行するが、その走向は西部はN-2°-W、南部はN-82°-Wに走向を取る。

20号溝は、N-3°-E、24号溝はN-4°-Wに走向を取り、共に直線的な走行を呈する。

26号溝はN-15°-Wに走向を取り、全体に直線的な走行を取るが、北端でN-0°に走向を転ずる。

30号溝は極緩やかに蛇行する走行を呈し、その走向は

おおよそN-89°-Wを向く。

31号溝は極緩やかに蛇行する走行をとるが、その走向は全体としてN-87°-Wを取る。

遺物 2号溝からは在地系土器皿(329)・内耳鍋(330)、不明鉄製品(331)、凹み石(332)が出土したが、他の溝からの遺物の出土はなかった。

所見 2・3号溝は並走することから、その間が道路であった可能性がある。19号溝は覆土の観察所見から流水の痕跡が確認された。26号溝はその位置から推して、3号井戸の掘水に対する排水機能を有するものと判断される。なお、31号溝は位置と形態から推して、道路としての機能が考慮される。30号溝はその覆土中に残された溝であるが、西側の2期調査区域では確認できなかった。他の溝の掘削意図を確認することはできなかった。

また、その時期は、20・26号溝は洪水前に埋没していたものと思慮されるが、他の溝は洪水で埋没したものと思慮される。

#### 2. 畑(第59図、PL. 9)

概要 2面下位面では、寛保2年と思慮される、洪水砂などで覆われた畑5面を確認した。

位置 2区下位面の畑のうち37号畑は1-1中北部に、23・36・39号畑は同中部から南部北寄りにかけて、119号畑は南東部にある。

位置するグリッドは表7に記した。

規模・主軸方位 表7に記した。

構造 畑の規模、個々のサクの掘削間隔や規模、畝間などは表7にまとめた。

なお、23号畑北縁は、23号畑側が低い、明瞭な段差を以て、31号溝と区画されている。

遺物 2面下位面の畑からの遺物の出土はなかった。

所見 上述のように、本畑群は寛保2(1742)年の大洪水で埋没したと思われる遺構群である。

このうち23号畑は、南側の1・2号溝と北側の段差に画された、付近で最も低い、長方形プランの区画に耕作されたものである。

#### 3. 井戸(第61図、PL. 10)

概要 3・4号井戸は3面に確認した井戸遺構であるが、調査の結果、2面の遺構であることを確認したため、2

面下位面の遺構として報告する。

位置 3・4号井戸は1-1区中北部に位置し3区調査区北端部西寄りに在り、3号井戸は932~935-343-346、4号井戸は933~934-342~343グリッドに位置する。

重複 3号井戸は北側で26号溝と接続する。新旧関係は特定できなかったが、併存していたものと思慮される。また4号井戸は他遺構との重複はなかった。

規模 3号井戸 径：249×213cm 深さ：214cm

4号井戸 径：112×90cm 深さ：228cm

覆土 3号井戸は、にぶい黄褐色粘質土などで埋められる。

4号井戸は、灰黄褐色土や黒褐色土などで埋められる。

構造 3号井戸はすり鉢型、4号井戸は井筒型の掘削形態を呈する。

湧水層 3・4号井戸は、共に、壁面最下層の灰黄色粘質シルトと小礫の混土と判断される。

遺物 3号井戸からは板碑(326)、4号井戸からは片口鉢と思われる在地系土器片(327)と板碑と思われる石片(328)が出土した。

所見 3・4号井戸の掘削時期は、16世紀から寛保2年の間の所産として把握されるに過ぎなかった。

#### 4. 199号土坑(第58図)

概要 199号土坑は比較的大型の土坑である。

位置 本遺構は1-1区南西隅部に在り、896~897-365

表7 1区2面畑一覽

番号	所在グリッド	主軸方位	規模(m)	掘削回数		畝			畝間(m)						
				回数	(平均)	長さ(m)	(平均)	幅(m)	(平均)	深さ(m)	(平均)				
上位層															
101	965~971・359~364	N-78°-W	5.80 × (2.50)	12	39 ~ 53	48.85	—	—	15 ~ 26	21.91	1 ~ 2	1.50	20 ~ 35	26.91	
102	954~965・362~365	N-8°-E	10.22 × (3.32)	22	37 ~ 55	47.65	—	—	11 ~ 39	23.18	5 ~ 7	5.50	16 ~ 33	24.55	
103	946~949・362~365	N-82°-E	2.44 × (2.44)	7	31 ~ 46	39.08	—	—	14 ~ 24	17.00	—	—	15 ~ 28	21.83	
104	957~960・360~361	N-17°-E	2.75 × (1.07)	9	25 ~ 45	31.38	—	—	16 ~ 31	22.22	—	—	5 ~ 17	9.63	
105	955~966・353~360	N-7°-E	(9.15) × (6.60)	15	40 ~ 50	44.82	—	—	15 ~ 38	26.47	2 ~ 7	4.85	15 ~ 26	18.64	
106	947~953・332~334	N-75°-E	21.80 × (7.73)	30	33 ~ 68	41.04	1.03	~ 2.87	1.69	18 ~ 43	21.76	1 ~ 4	4.00	3 ~ 28	12.31
107	943~946・344~346	N-4°-E	2.79 × 1.33	6	42 ~ 84	52.75	0.75	~ 1.26	4.20	20 ~ 28	23.80	1 ~ 1	1.00	15 ~ 60	26.20
108	935~944・335~343	N-15°-E	9.30 × (7.70)	23	31 ~ 46	40.98	2.82	~ 4.73	3.78	18 ~ 30	26.35	1 ~ 8	4.17	8 ~ 22	14.57
109	829~944・333~336	N-5°-E	5.00 × 3.10	8	33 ~ 45	37.64	2.88	~ 5.52	3.72	7 ~ 22	14.63	5 ~ 5	5.00	18 ~ 28	23.00
110	911~936・331~339	N-88°-E	(7.50) × 5.70	14	36 ~ 50	43.12	2.16	~ 7.4	3.35	11 ~ 31	18.93	2 ~ 2	2.00	19 ~ 30	24.68
111	911~946・313~331	N-90°	(18.00) × (14.12)	41	37 ~ 52	43.55	—	—	—	14 ~ 35	22.05	1 ~ 1	2.17	13 ~ 34	21.64
112	918~926・323~325	N-4°-E	(7.50) × (2.15)	13	32 ~ 113	49.50	—	—	—	17 ~ 47	23.00	—	—	13 ~ 88	26.18
113	917~930・323~326	N-0°	13.40 × 2.65	5	30 ~ 66	36.75	12.92	~ 13.4	13.16	18 ~ 52	36.40	2 ~ 4	3.00	15 ~ 19	17.00
114	921~928・318~321	N-4°-E	(6.30) × 2.65	7	38 ~ 44	40.42	2.73	~ 6.24	5.49	6 ~ 19	13.29	1 ~ 3	1.80	23 ~ 32	26.67
115	919~929・316~318	N-7°-E	2.30 × 2.00	3	54 ~ 110	81.75	2.07	~ 2.29	2.17	20 ~ 27	24.33	1 ~ 3	1.67	31 ~ 83	37.00
116	911~916・321~325	N-3°-E	5.03 × 1.15	3	38 ~ 54	46.00	2.14	~ 5.03	3.32	19 ~ 27	22.33	—	—	15 ~ 30	22.50
117	908~911・320~322	N-19°-E	2.30 × 1.95	5	43 ~ 63	51.88	0.61	~ 2.02	1.31	16 ~ 24	19.00	1 ~ 1	1.00	24 ~ 41	32.50
中位層															
118	936~945・338~344	N-45°-E	8.90 × 4.00	18	29 ~ 43	36.88	4.36	~ 5.48	4.47	6 ~ 20	12.67	—	—	16 ~ 33	24.56
下位層															
21	901~929・326~327	N-2°-E	28.12 × (10.80)	20	40 ~ 70	57.44	—	—	—	33 ~ 60	43.55	3 ~ 31	8.40	5 ~ 23	13.94
36	922~926・338~341	N-3°-E	4.25 × 3.53	21	21 ~ 53	35.59	1.02	~ 3.53	2.46	11 ~ 22	15.67	1 ~ 8	3.50	7 ~ 36	20.45
37	911~938・339~344	N-86°-E	5.26 × (4.27)	15	26 ~ 224	46.80	2.37	~ 5.09	3.86	12 ~ 26	18.00	1 ~ 4	2.53	7 ~ 205	28.71
39	902~906・333~337	N-5°-E	4.35 × 2.50	7	29 ~ 55	38.81	1.27	~ 4.17	2.54	15 ~ 26	20.29	1 ~ 4	3.14	10 ~ 30	18.33
119	891~899・319~326	N-89°-E	(7.00) × (3.95)	18	29 ~ 43	36.88	4.36	~ 5.48	4.47	6 ~ 21	12.67	—	—	16 ~ 33	24.56

~367グリッドに位置する。

重複 本土坑は単独で在り、他遺構との重複はなかった。

規模 長軸：184cm 短軸：99cm 深さ：13cm

覆土 灰黄褐色粘質土で埋没する。

構造 プランは短冊形に近い隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-88°-Wに取る。また、掘削形態は箱型で、底面の横断面形はやや丸底気味である。

遺物 本遺構からの出土遺物はなかった。

所見 本遺構の掘削意図は特定されなかったが、中近世に多い貯蔵穴の可能性はある。

その時期は、覆土から推して、寛保2年以前の所産と想定される。

#### 5. 集石遺構(第60図、PL.10・26)

概要 本遺構は3面に報告する2号土塁の頂部が、2面に露出したもので、ここに、河床礫が集中して出土した。また河床礫下の土壌は、周囲の砂質土とは異なる黒褐色粘質土であったため、検出されたものである。

位置 本遺構は1-1区中北部に在り、931~939-342~365グリッドに位置する。

重複 他の遺構との重複はなかった。

規模 範囲：19.0×4.1m

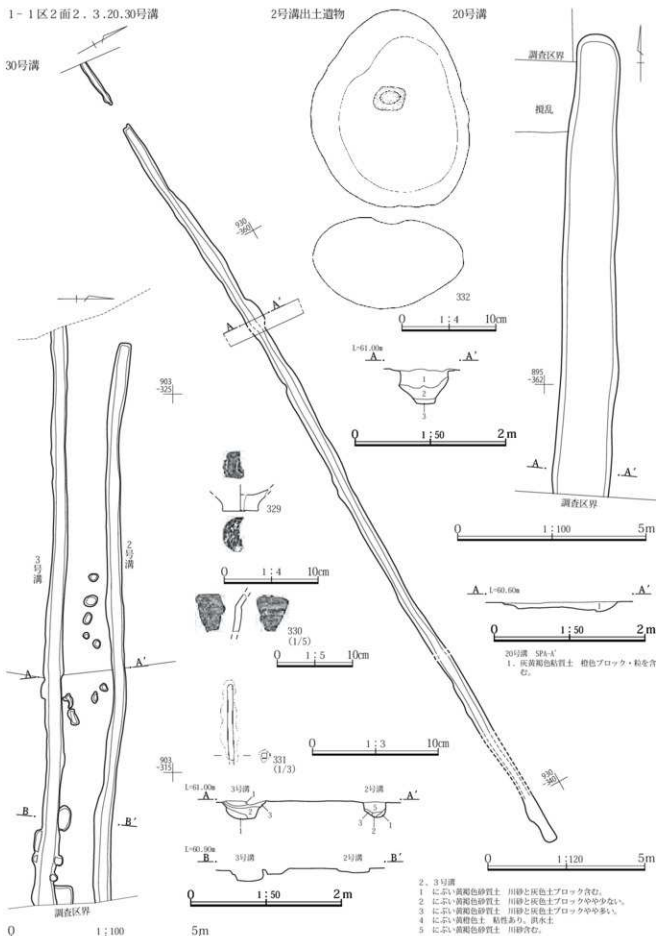
覆土 黄褐色土や褐色土で埋没する。

構造 河床礫が面的に密に分布する。

遺物 集石遺構からは肥前磁器染付皿(335)、瀬戸・美

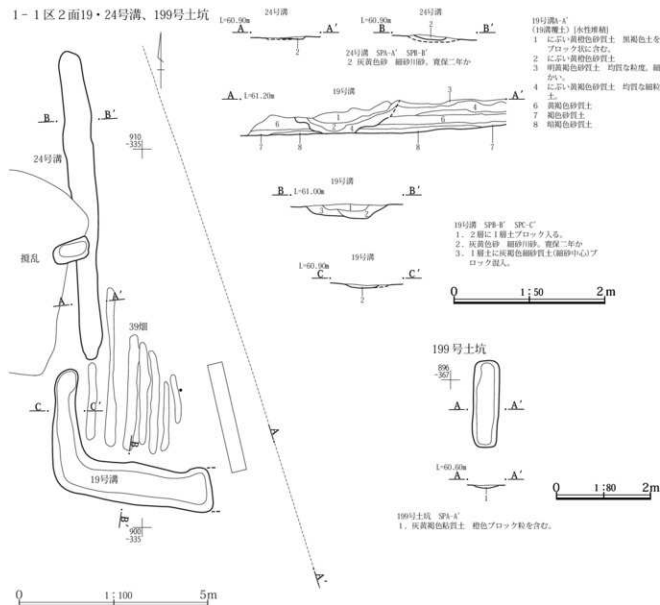
第3章 発見された遺構と遺物

1-1区2面2・3・20・30号溝



第57図 1区2・3・20・30号溝と出土遺物

## 1-1区2面19・24号溝、199号土坑



第58図 1区19・24号溝と199号土坑

濃陶器碗(336)、常滑陶器片口鉢とみられるもの(337)・  
甕(338)、在地系土器皿(339~341)・内耳鍋(342~344)  
や内耳鍋とみられるもの(345)・片口鉢とみられるもの  
(346)や火鉢(347)、板碑、敲石、砥石、凹み石(352)、  
不明石製品が出土した他、埴輪片や少量の中世の在系  
土器片が出土した。

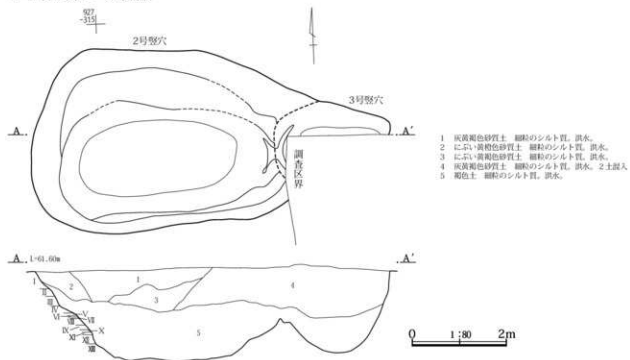
所見 本集石は2号土塁の崩落土中に含まれた礫の溜まり  
と考えられるが、投棄された礫も含まれるものと思慮  
される。

## (5) 2面の遺構外の出土遺物(第62図、PL.26)

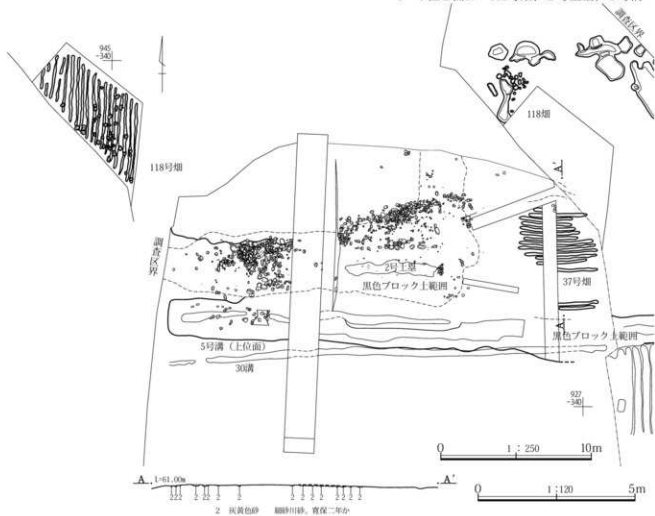
概要 遺構外の出土遺物には、龍泉窯系青磁碗(356)、  
中国磁器と見られる染付皿(357)、古瀬戸の平碗と見ら  
れるもの(358)、瀬戸・美濃陶器志野片(359・360)・折  
縁皿(361)、在地系土器内耳鍋(362)、洪武通寶(363)、  
皇宋通寶(364)、元符通寶と見られる銅銭(365)、鉄釘  
(366)がみられた他、少量の中近世の在地系土器片や近  
世陶磁器片、時期不明の土器類や瓦片などが出土してい  
る。

第3章 発見された遺構と遺物

1-1区2面2・3号竪穴

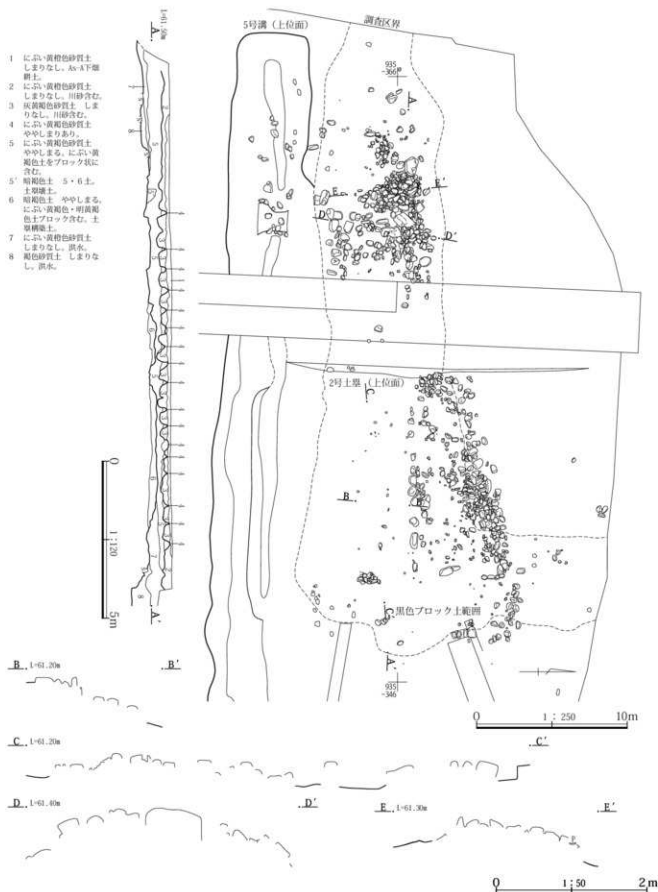


1-1区2面37・118号畑、2号土塁、5号溝



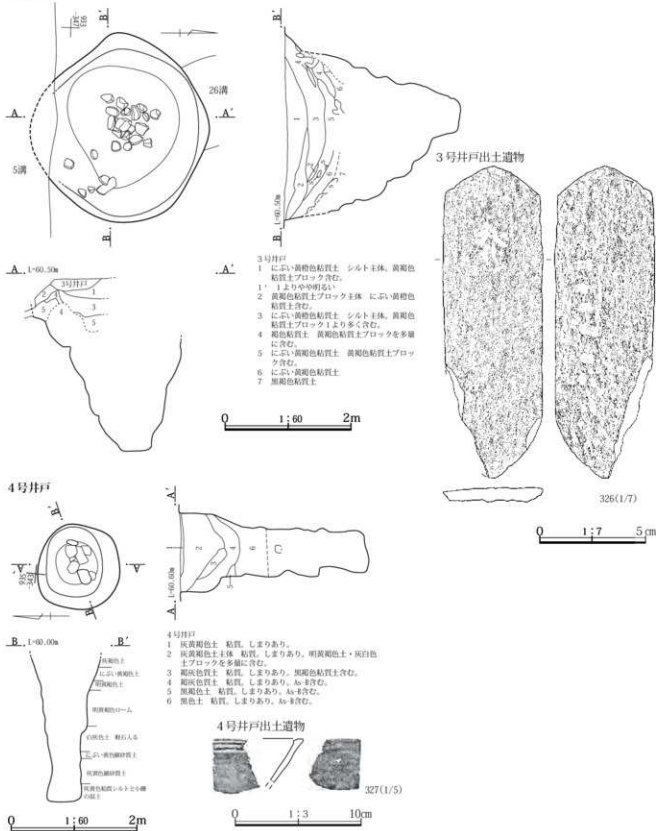
第59図 1区2・3号竪穴(上)、2号土塁上面と5号溝の痕跡及び37・118号畑

## 1-1区2面2号土塁、5号溝



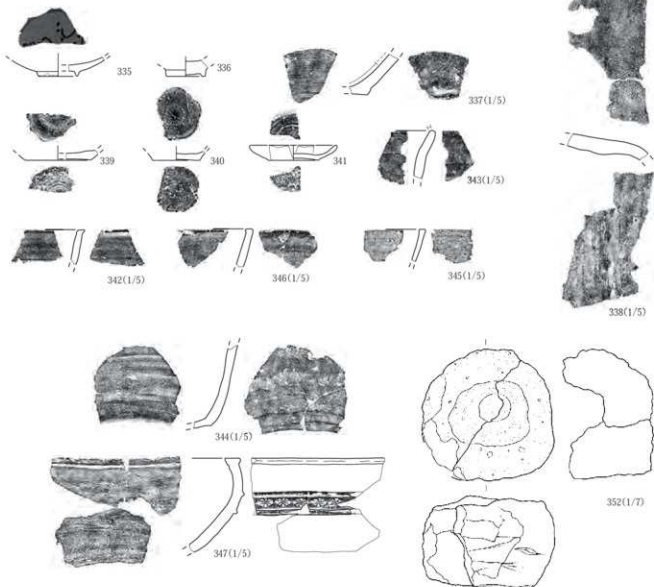
第60図 1区2号土塁上面の集石と5号溝の痕跡

1-1区2面3・4号井戸  
3号井戸

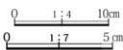
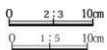
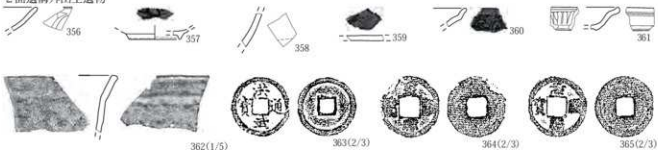


第61図 1区3・4号井戸と出土遺物

1区1号集石



2面遺構外出土遺物



第62図 1区1号集石と2面の遺構外の出土遺物



### 第3節 3面の調査

#### (1) 3面の概要

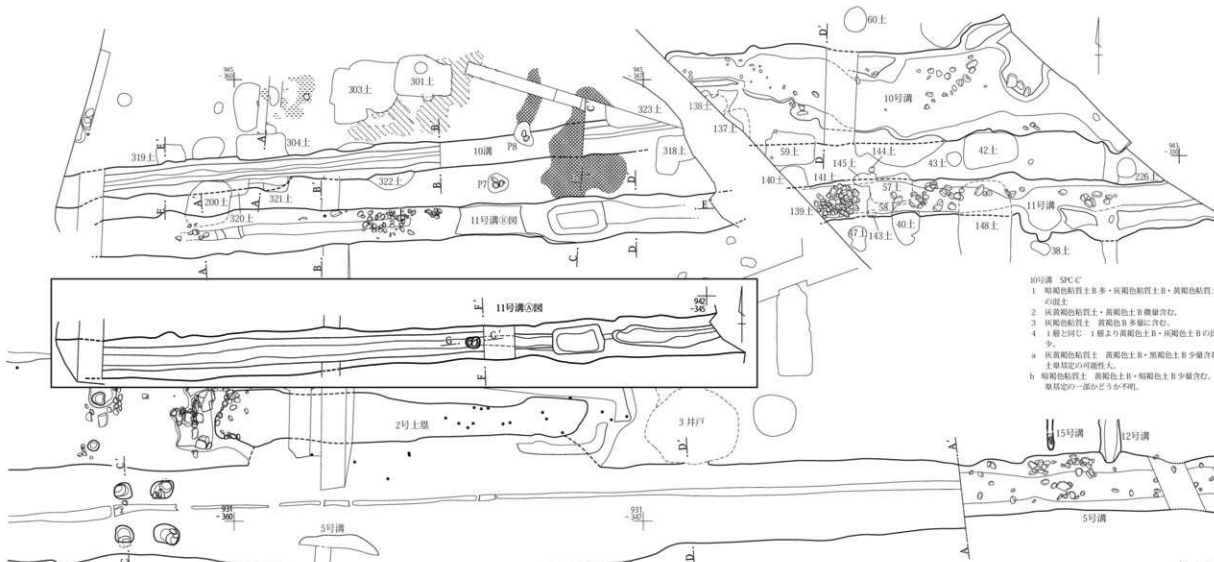
3面は中世面である。1-1区のみで確認、調査した。

1-1区東部と北部を対象とした1-1区の1期調査では、2面の調査終了後、東部南側より4面(As-B下面)

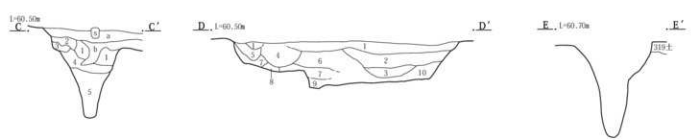
の調査に入った。東部の調査は順調に進んだが、1期調査区域の引渡し期限の2週間前になって、東部と北部の境付近に在る、後述の5号溝付近から中世遺構が現れ始め、以北・西の区域で、溝、土坑など合わせて200余りを数える遺構が確認され、館の存在が想定された。1期調査区域での本体工事は、当該区域が利根川に接しているため、その施工が渇水期に限られるため、期限に合わせた調査を行った。しかし、完掘できなかった遺構もあり、また、調査面が豊水期の利根川の水位に近かったことも



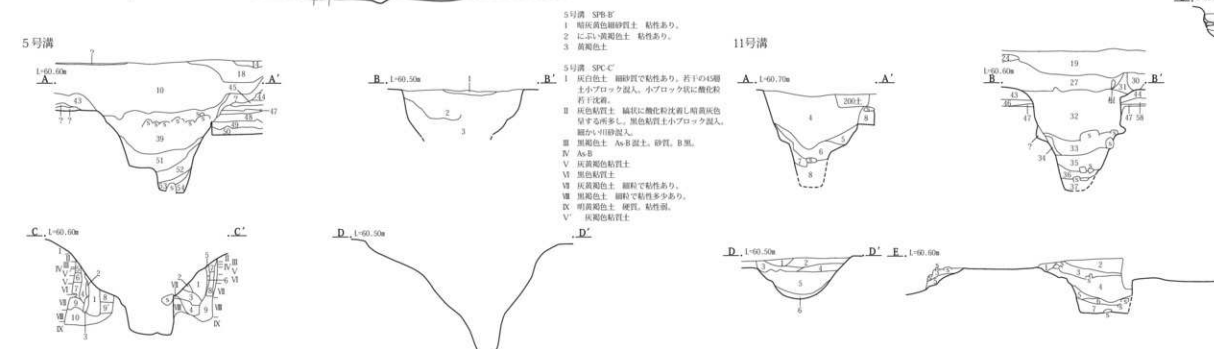
第63図 1-1区3面全体図



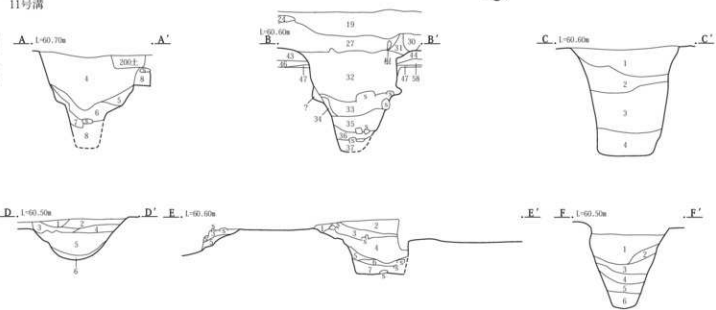
- 10号溝 SP'C-C'
- 1 黄褐色粘質土B多・灰褐色粘質土B・黄褐色粘質土Bの混入
  - 2 灰黄褐色粘質土・黄褐色土B少量含む
  - 3 灰黄褐色粘質土・黄褐色土B多量含む
  - 4 1層と約1:1層より黄褐色土B・灰褐色土Bの比率少
  - a 灰黄褐色粘質土・黄褐色土B・黒褐色土B少量含む、土壌安定の可能性大
  - b 黄褐色粘質土・黄褐色土B・暗褐色土B少量含む、土壌安定の一部はどうか不明



- 10号溝 SPA'A'
- 1 灰褐色粘質土 中やしまる。黄褐色粘質土B・暗褐色粘質土Bを含む。
  - 11 黄褐色粘質土Bと暗褐色土Bの混合土で少量の灰黄褐色土Bを含む。11層が灰黄褐色土少量
  - 12 黄褐色粘質土Bと暗褐色土Bの混合土で少量の黄褐色粘質土Bを含む。
  - 13 灰黄褐色粘質土。水性堆積。少量の暗褐色土Bを含む。
- 10号溝 SPB'B'
- 1 灰褐色粘質土 中やしまる。黄褐色粘質土B・暗褐色粘質土Bを含む。
  - 2 灰褐色粘質土 黄褐色粘質土Bを多く含む。
  - 3 1層に当たるが暗褐色粘質土Bを多く含む。
  - 4 1層に当たるが暗褐色粘質土Bの含量で分層。
  - 5 1層に当たるが暗褐色粘質土Bの含量で分層。
  - 6 2層に当たるが暗褐色粘質土Bの含量で分層。
  - 7 灰褐色粘質土。水性堆積。黄褐色粘質土Bを含む。
  - 8 灰褐色粘質土。水性堆積。少量の暗褐色土Bを含む。
  - 9 灰褐色粘質土。水性堆積。クミマ。
  - 10 灰褐色粘質土。水性堆積。クミマ。



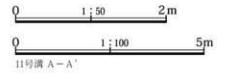
- 5号溝 SPB'B'
- 1 灰黄色粘質土 粘性あり。
  - 2 土に灰黄褐色土 粘性あり。
  - 3 黄褐色土
- 5号溝 SP'C-C'
- 1 灰白色土 細砂で粘性あり。若干の4層土小ブロック混入。小ブロック状に細粒状有行状。
  - II 灰色粘質土 編目状に塊状状し粗黄褐色分層を有し。黒色粘質土小ブロック混入。塊状可視認め。
  - III 黄褐色土 Aa多量土。砂質。B黒。
  - IV Aa多
  - V 灰黄褐色粘質土
  - VI 黒色粘質土
  - VII 灰黄褐色土 細砂で粘性あり。
  - VIII 黄褐色土 細砂で粘性多少あり。
  - IX 明黄褐色土 硬質。粘性弱。
  - X 灰褐色粘質土



- 11号溝 SPA'A'
- 4 黄褐色土 粘性あり。灰黄色シルト・黄褐色シルト・黄褐色土・明黄褐色土小ブロック多量混入。
  - 5 黄褐色土 粘性やや弱。明黄褐色土ブロックと黄褐色土小ブロック多量混入。
  - 6 灰黄褐色土 粘性あり。明黄褐色土・黒色粘質土ブロック若干の黄褐色シルトブロック混入。
  - 7 黄褐色土 粘性弱く細粒。明黄褐色土ブロック混入。
  - 8 灰黄色粘質土 粘性あり。細く4層認め。
- 11号溝 SPB'B'
- 19 灰褐色粘質土 粘性は若干ある。用砂若干混入。編目状沈し褐色の編目様多量混入。
  - 25 硬砂に2層土小ブロック混入。
  - 27 土に灰黄褐色土 中や砂で塊状あり。灰白色細砂状土混入。
  - 30 灰黄褐色粘質土 交互土小ブロック若干混入。
  - 31 灰黄褐色粘質土 交互土小ブロック混入。
  - 32 灰褐色土 明黄褐色土粘性弱ブロック・灰褐色土粘性ありの小ブロック。黄褐色土の小ブロック多量混入。
  - 33 2層土に暗褐色粘質土混入小ブロック混入。2層土の塊状若干混入。
  - 34 灰黄色粘質土 若干の明黄褐色土・黄褐色土小ブロック混入。
  - 35 黄褐色粘質土 用砂入り土に33層土混入。
  - 36 黄褐色土 粘性やや弱。黄褐色粘質土の小ブロック混入。
  - 37 灰褐色粘質土 用砂混入。3層土の小ブロック混入。
  - 43 灰褐色土 粘性あり44・45・47層土小ブロック混入。
  - 44 灰褐色土 細砂で粘性あり。若干の45層土小ブロック混入。小ブロックに比較して若干混入。
  - 45 灰褐色粘質土 編目状に塊状沈し暗褐色混入する所多。黒色粘質土小ブロック混入。細く4層認め。
  - 47 AaB
  - 48 黄褐色土 中や粘質。明黄褐色土ブロックを中や多量含む。

- 11号溝 E'E'
- 1 灰褐色粘質土 粘性あるが細砂状。ブロック。土に灰黄色・明黄褐色土小ブロックと黒色粘質土若干混入。
  - 2 灰黄褐色土 粘性やや弱。土に灰黄色・明黄褐色土・黒色粘質土小ブロックやや多量混入。
  - 3 土に灰黄褐色土 粘性あり。土に灰黄色・明黄褐色土・黒色粘質土ブロック多量入り。若干の1層土小ブロック混入。
  - 4 灰黄褐色土 土に灰黄色・明黄褐色土・黒色粘質土の小ブロック混入。若干の1層土小ブロック混入。
  - 5 黄褐色土 土に黄褐色土の小ブロック混入。土に灰黄色・明黄褐色土小ブロック混入。
  - 7 黄褐色土 粘性あるが塊状。土に灰黄色・明黄褐色土・黒色粘質土ブロック混入。土に灰黄色・明黄褐色土小ブロック混入。編目状に塊状沈し。

- 11号溝 F'F'
- 1 灰黄褐色土 しまる。灰褐色土多量含む。
  - 2 灰褐色粘質土 Bを含むない。
  - 3 灰褐色粘質土 1層より混濁あり。黄褐色土B塊状含む。
  - 4 暗褐色粘質土 黄褐色粘質土B少量。黄褐色粘質土B塊状含む。粘性強。
  - 5 灰褐色粘質土と黄褐色粘質土Bの混入。粘性強。
  - 6 灰褐色粘質土と黄褐色粘質土Bの混入。



第64図 1区2号土塁と5・11号溝

あって、一部の遺構では出水により調査が難航し、その結果、底面の誤認による掘削不足が生じるなどの不備も生じた。

一方、1-1区中央部以西、以南の区域を対象とした、2期調査では、2面の調査でその北部で周囲の砂質土と明らかに異なる黒褐色土から成る、後述の2号土塁が検出された。その調査に伴い、断ち割り調査を施したところ、館使用時の使用面が特定された。調査期間に鑑み、外堀である5号溝の南5m以北の区域に限って、この使用面を調査することとし、以南の区域では4面の調査と併せて調査を実施することとした。また、1期調査区域北部と2期調査北部の間に在る、3期調査区域も館の使用面を調査した。

3面の北部には館があり、これに伴う遺構と、中・南の館外の遺構とに分けられる。このうち館に伴う遺構は土坑・ピット262基、溝10条、土塁1条、橋脚1基、土橋1箇所、門1箇所があった。溝のうち5・6・8・9・10の6条は、堀と呼ぶべき遺構であった。また遺構の組み合わせによる虎口遺構1箇所が確認された。

一方、館外の遺構には、土坑16基、ピット4基があった。

## (2) 館内の遺構群

### 1. 2号土塁(第64～67図、PL.14・27)

**概要** 本土塁は、周囲の砂質土壌と異なる暗褐色粘質土であったため確認されたものである。埴輪や、周辺地域の古墳の石室に多用される角閃石安山岩が出土することから、古墳を壊して造られたと判断されるものである。また寛保(1742)2年と想定される洪水で一部が削られるが、当該洪水後も暫くは頂部が表出していた。

**位置** 1-1区西部北寄り、後述の5号溝の北側に接して在り、932～937-347～367グリッドに位置する。

**規模** 残長(東)：14.0m 残長(西)：2.9m

**基底幅**：348cm **上幅**：91cm **残高**：100cm

**突出部** 残長：1.8m **幅**：258cm **残高**：50cm

**重複** 本土塁は3面の他の遺構との重複は認められなかった。

**尚**、本土塁は南に2号が接している。

**構築土** 暗褐色粘質土等で埋没する。

**構造** 本土塁の走向はN-87°-Eを呈する、直線的な走

行を呈する。また東端部で北側に突出する。この突出部は現況では北側11号溝に達していないが、往時は達していたものと推定される。また、西部の後述の門の位置では、その上面が土塁裾部に対して20cm程高いもの、土塁本体としては3m途絶え、その西側は痕跡は残るものの、大きく削平されている。尚、本土塁の東側に土塁は確認されないが、館地表面の灰白色土とは異なる灰黄色土の痕跡が帯状に分布しているのが確認され、東部では堀の掘削土を用いて土塁を築いていることが分かる。

門の東側の土塁の北面西端部には複数段の石組が設置され、土塁の北面と土塁東部の突出部東西両側面に1段の石列が据えられていた。この石列の礎の基底は突出部東面を除いて、土塁裾端部から30cm程高い位置にあり、礎は浅い掘り込みの中に据えられ、下位10cm程が埋められていた。門の東側は礎の遺存状態から、土塁下位には、面取りされた石が据えられていたものと想定され、一方、門の西側の土塁下面には径36×33cm、深さ24cmを測る隅丸方形プランを呈するピットと径41×40cm、深さ34cmを測る不定形プランを呈する二つのピットが南北に1.5m程隔たって掘削されていた。また、土塁の北面と突出部西面は、この石列を境に崩れたように緩傾斜となっている。この石組の北西隅部のやや南東寄りには大型の礎が据えられ、北面の西端部を除く北面から突出部西面にかけては古墳の石室に使用されたとみられる、面取りされた角閃石安山岩が多く転用されている。

**遺物** 本土塁からは、人物埴輪男子(367)・女子(368)・頭部(369)・左手(370)・左腕(371)・不明(372・373)、形象埴輪で楯と思われるもの(374)・家(375～382)・基台部(383)・不明(384～390)、円筒埴輪(391～394)、在地系土器皿内耳綱(395)、不明鉄製品(396～398)、磁石、礎石(400)、礎石と見られるもの(401)、板破片(405)、茶臼、凹み石(407)、不明石製品などが出土している。

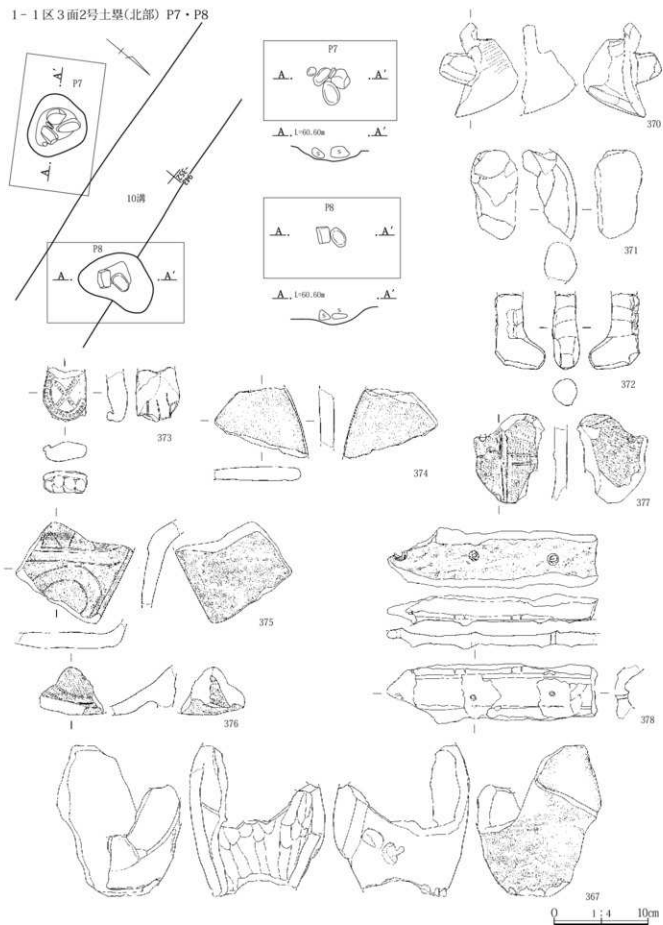
**所見** 本土塁はその残存高と館の建設位置から推して、高土居に属するものである。

また、本土塁は、その痕跡等から推して、本来5号溝の北に側全体に設置されていたものと想定される。また東部の北側へ突出する部分は、調査段階では北側11号溝に達していないが、往時は達していたものと推定される。

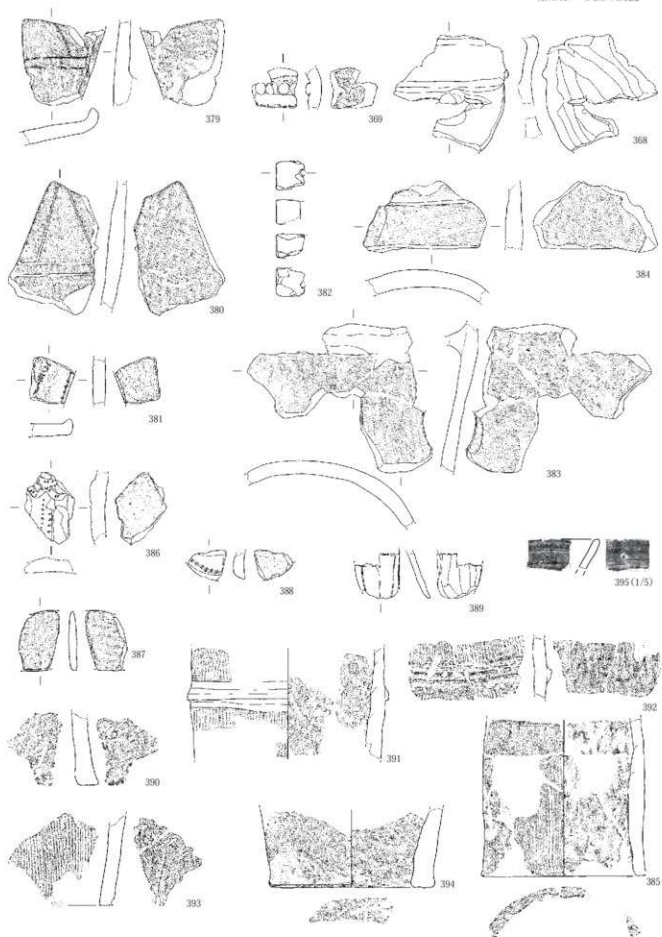
一方、北面と突出部西面の石組の裾は、現在は崩れて

第3章 発見された遺構と遺物

1-1区3面2号土塁(北部) P7・P8

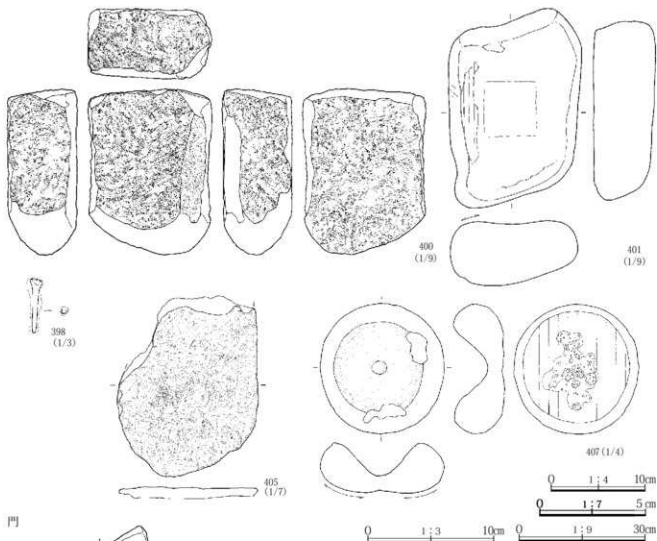


第658図 1区2号土塁下7・8号ピットと2号土塁出土遺物(1)

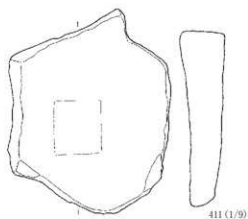


第66図 1区2号土塁出土遺物(2)

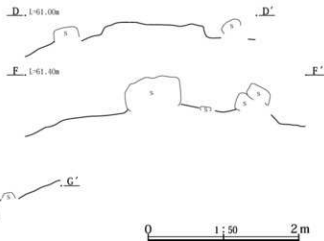
第3章 発見された遺構と遺物



門



- (洪水土) 1 灰黄褐色砂質土  
 2 黄褐色砂質土 粘土質かい  
 3 明黄褐色・灰黄褐色砂質土の混土  
 4 灰黄褐色砂質土  
 5 におい黄褐色シルト質土  
 6 におい黄褐色粘質シルト質土  
 (土梁) 7 におい黄褐色粘質土 土梁筋跡土  
 8 黄褐色粘質土 土梁筋跡土  
 (26号溝埋土) 9 におい黄褐色土  
 10 黄褐色砂質土と褐色土の小ブロック混土  
 11 におい黄褐色土 やや粘質  
 12 におい黄褐色土 やや粘質



E., 1:61.00m

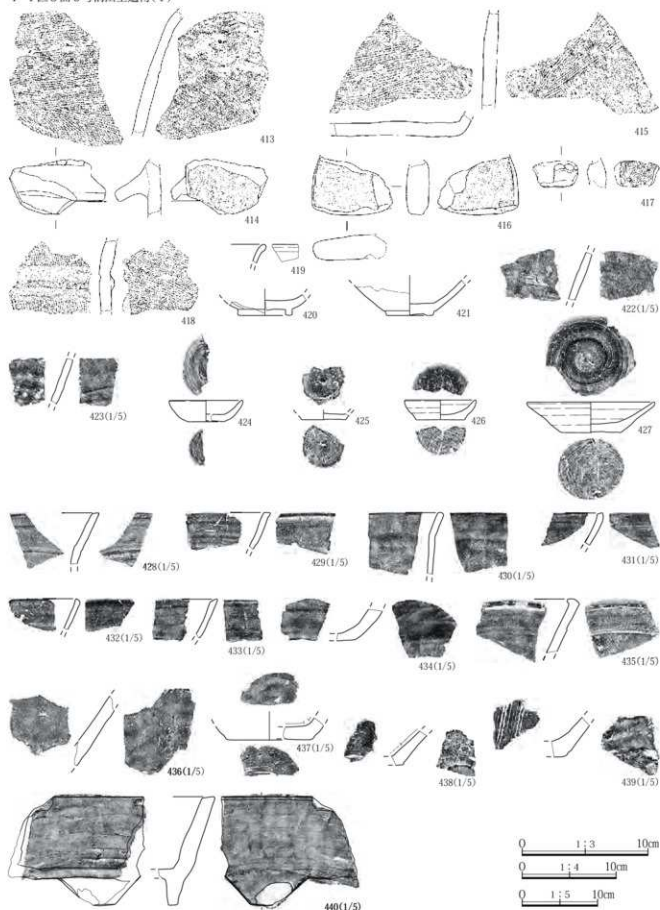
E., 1:61.40m

G., 1:61.40m

0 1:50 2m

第67図 1区2号土塁の断面と出土遺物(3)

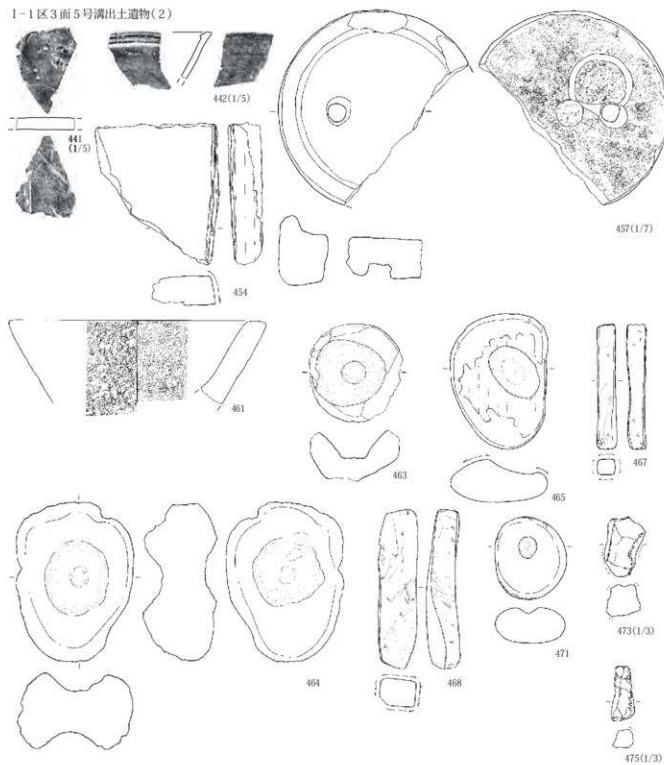
1-1区3面5号溝出土遺物(1)



第68図 1区5号溝出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

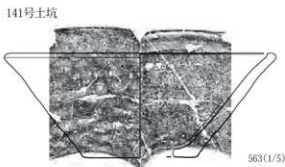
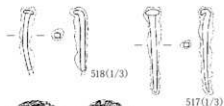
1-1区3面5号溝出土遺物(2)



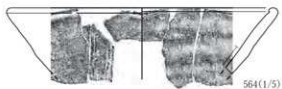
第69図 1区5号溝出土遺物(2)



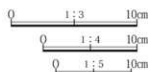
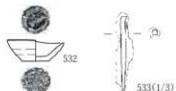
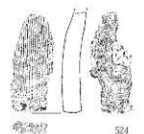
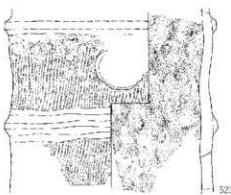
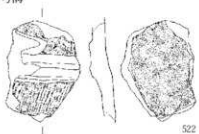
10号溝



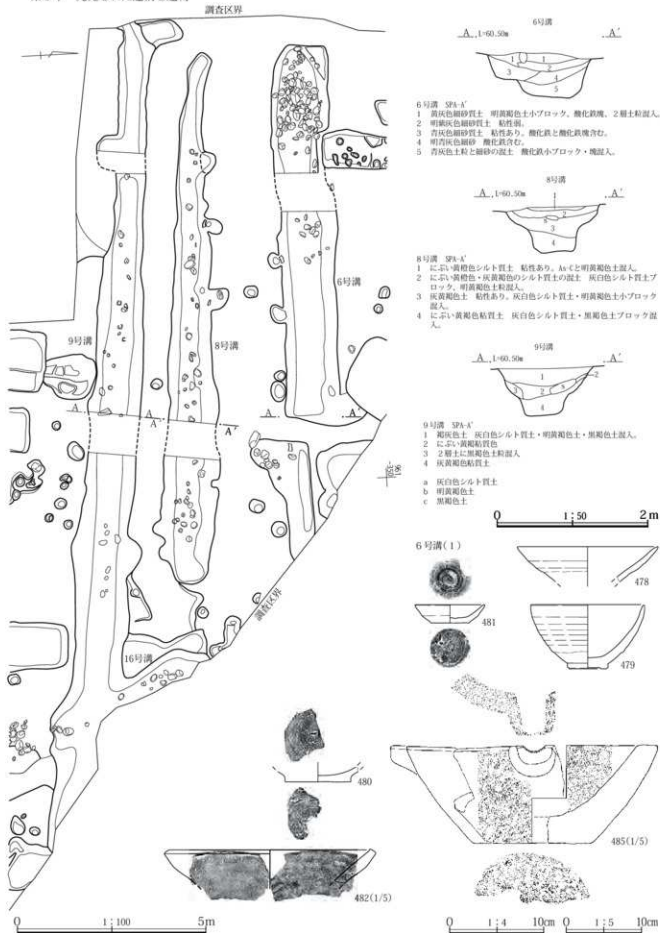
10号溝内河道跡



11号溝

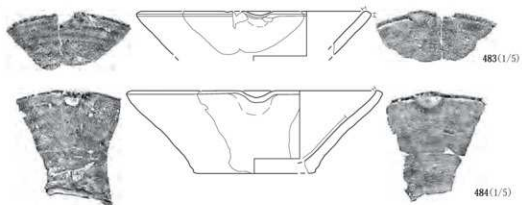


第70図 1区10・11号溝出土遺物

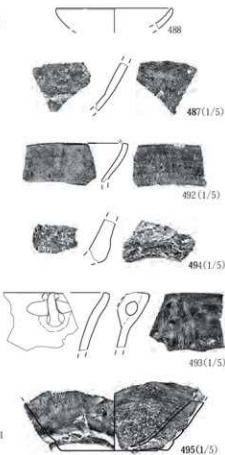


第71図 1区6・7・8・16号溝と出土遺物(1)

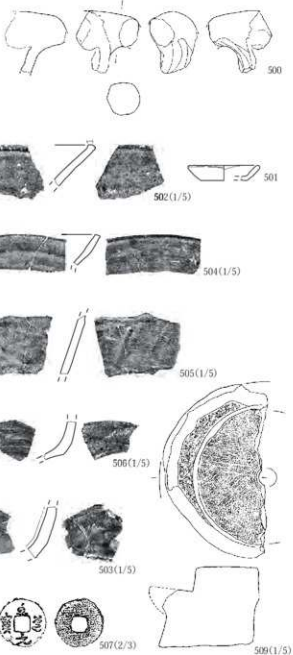
6号溝(2)



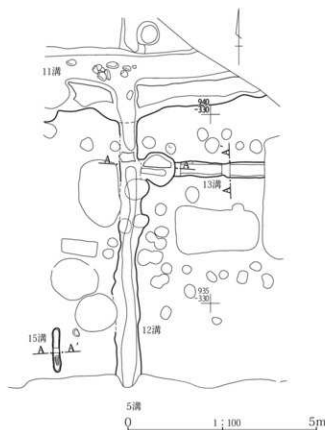
8号溝



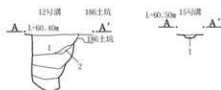
9号溝



第72図 1区6・8号溝出土遺物



第73図 1区12～15号溝

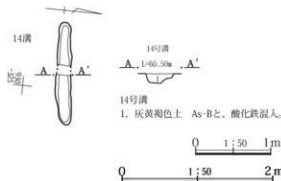


12号溝

1. 褐灰色土 粘性ややあり。地山(灰褐色粘質土)小ブロック混入。

15号溝

1. 灰黄色土: As-Bと、酸化鉄混入。



14号溝

1. 灰黄色土: As-Bと、酸化鉄混入。

15号溝

1. 灰黄色土: As-Bと、酸化鉄混入。

いるが、その土量と、土塁北面の傾斜に鑑みて、この石組みの裾側に、裾端部より40cm程の高さで武者走りが設けられていたものと想定される。

本土塁の時期は、並走する5号溝から推して、14世紀後半から15世紀の所産として把握される。

## 2. 内郭側の堀(第64・68～70図、PL.12・13・28)

概要 6・8・9・16号溝は、内郭側に在る堀である。

位置 6・8・9・16号溝は1-1区北端部に在り、位置するグリッドは、6号溝は958・959-348～361、8号溝は955・956-347～361、9号溝は951～954-341～362、16号溝は951～955-343～345である。

規模 6号溝 残長: 13.3m 幅: 125cm 深さ: 57cm

8号溝 残長: 14.1m 幅: 123cm 深さ: 62cm

9号溝 残長: 20.5m 幅: 135cm 深さ: 63cm

16号溝 残長: 4.8m 幅: 84cm 深さ: 30cm

重複 6号溝は69・89・91・189・224号土坑、8号溝は95・96・196号土坑、9号溝は16号溝、105・196・197号土坑、16号溝は9号溝と重複するが、いずれも新旧関係

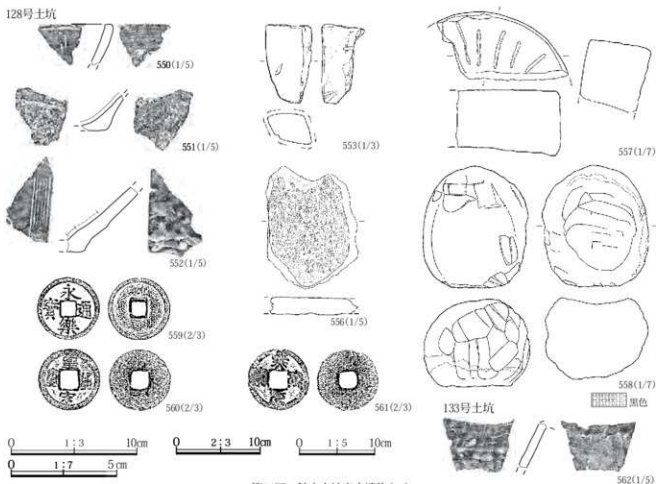
は特定できなかった。

覆土 8号溝は灰黄褐色土等、9号溝はにぶい黄褐色土等で埋没する。明青灰色土等で埋没する。

構造 各溝の走向は、6号溝はN-87°-W、8号溝は、9号溝はN-85°-W、16号溝はN-32°-Wに取り、その走行は共に直線的である。

4条の溝は、共に箱堀状を呈する。このうち6号溝は、その東部で南側に幅員を125cmから72cmに減する。その幅員減少区間の長さは、3.4m以上測る。また、8・9号溝はその規模も近似し、135cm程の間隔を以て並走し、8号溝が東部で途絶えてからの距離は175cm以上を測る。

遺物 6号溝からは古瀬戸陶器平碗(478)・天目碗(479)、在地系土器皿(480・481)・片口鉢(482～484)、石鉢(485)など、8号溝からは中国磁器白磁皿(486)、裏と見られる常滑陶器片(487)、在地系土器皿(488～491)・内耳鍋(492・493)・すり鉢(494)・片口鉢(495)、独鈷とみられる銅製品(496)、砥石(497～499)など、9号溝からは人物埴輪左腕(500)、在地系土器皿(501)・片口鉢(502・503)・内耳鍋(504～506)、至道元寶(507)、板碑片、茶



第74図 館内土坑出土遺物(1)

白下白(509)などが出土した。16号溝からの出土物はなかった。

所見 6・8・9号溝はその走向と規模から、館の堀と判断される。このうち8・9号溝は二重堀の可能性があり、6号溝東部の幅員減少箇所と8号溝の途絶えた以東に、虎口が在った可能性が考慮される。また、16号溝は土坑の可能性や、後述する10号溝東部と同様、利根川に削られた痕跡である可能性を有する。

また出土遺物から推して、6号溝は14世紀中葉から15世紀初頭、8・9号溝は14世紀後半から16世紀中葉の所産と認識されるが、8・9号溝は、6号溝が近接することから推して、15世紀以降に下る可能性を考慮したい。尚、16号溝の時期は特定できなかった。

### 3. 外郭側の堀(第71・72図, PL.12・28~29)

概要 5・10・11号溝は、外郭側に在る堀遺構である。

遺構番号については、5号溝は1-1区の2期調査では23号溝、10号溝は3期調査区では2号溝、11号溝は2期調査では25号溝も3期調査では1号溝と呼称していた

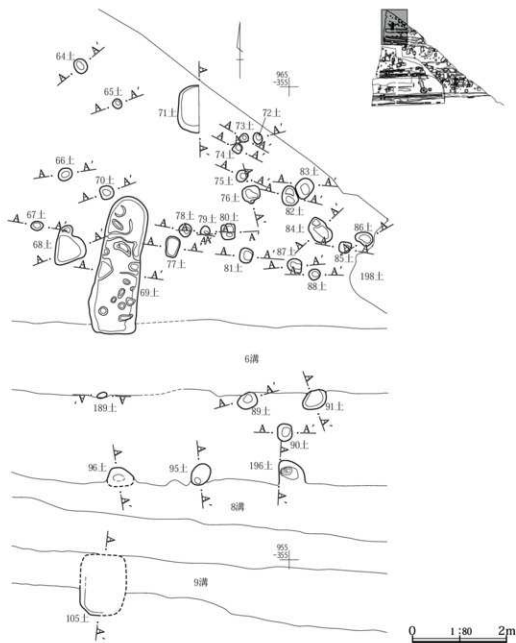
が、本報告では、1期調査期の呼称を用いて報告する。

5号溝では塵除けを伴う。また、5号溝の東部(1期調査区域)では、後述の菜研堀の底部部分は、埋め土上位が地山に近い土壌であったため、出水もあってこの埋土を底面と誤認して、完掘することができなかった。一方、5号溝は寛保2年と想定される洪水層によって埋没するまで、窪地として遺されていた。

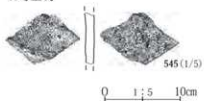
10号溝は1・2・3期調査で検出した遺構が11号溝の北に在ったため、一連の溝と解釈したが、再検討した結果、3条の溝が拘わり、また、東端部には利根川の氾濫の痕跡と思われる状態も見られた。3条の溝は北から、10a号溝、10b号溝、10c号溝と呼称することとした。

11号溝は1区調査区では、その西半で土坑群の重複が著しく、結果として完掘できなかったと判断している。位置 5・10・11号溝は1-1区中程の北寄り、所在グリッドは、5号溝は929~932-317~367、10号溝は940~942-330~365、11号溝は939~941-328~365である。

規模 5号溝 残長:50.4m 幅:28cm 深さ:169cm  
10a号溝 残長:9.1m 幅:104cm 深さ:67cm



65号土坑

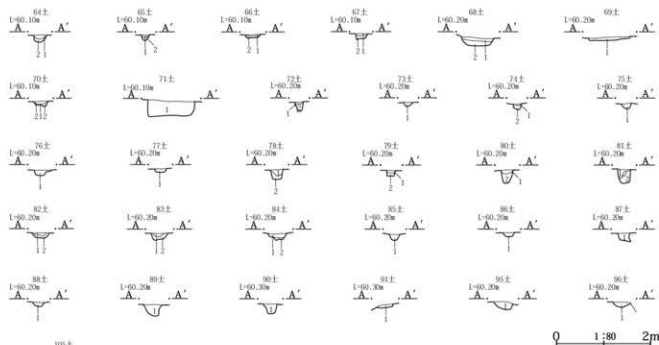


10b号溝 残長：4.3m 幅：112cm 深さ：125cm  
 10c号溝 残長：18.4m 幅：112cm 深さ：138cm  
 11号溝 残長：36.1m 幅：98cm 深さ：52cm、96cm  
 重複 10b号溝は10c号溝と重複し10b号溝の方が新しい。また、10c号溝と11号溝は重複はなかったが、10c号溝の覆土上面に11号溝の虎口の東側の土塁の痕跡と見られる灰黄褐色粘質土が面的に確認されたことから、11号溝の方が新しいものと思慮される。

この他、5号溝は12号溝、10c号溝は318～322号土坑、11号溝は12号溝、40・57・58・139・140・142・143・145・148・200・225号土坑と重複するが、200号土坑が11号溝より古いことを確認した他は、いずれも新旧関係

第75図の1 館内土坑・ピット(1)と出土遺物(2)

第3節 3面の調査



0 1:80 2m

64～68・70・72・74・76～84号土坑 SPA-A'  
 1 に近い黄褐色土 粘性あり。  
 灰黄褐色粘質土 粘性あり。土量多し。  
 69・73・75～77・85～89号土坑 SPA-A'  
 1 に近い黄褐色土 粘性あり。  
 71号土坑 SPA-A'  
 1 に近い黄褐色粘質土 黒褐色土・明黄褐色土小ブロック多く入る。  
 95号土坑 SPA-A'  
 1 黒褐色土 地山小ブロック混入。

10号土坑 SPA-A'  
 1 黄褐色粘質土 A・B混入。黒褐色土混入。  
 2 黄褐色土 粘性やや弱し。若干の灰白色土・褐色土・黒褐色土混入。

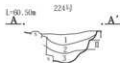
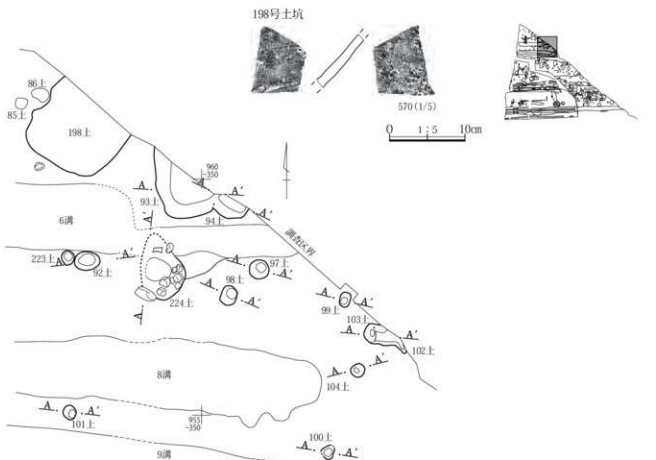
第75図の2 館内土坑・ビット土層断面(1)

表8 3面館内土坑一覧

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(m)	主軸方位
17	033-326	楕円長方形	184 × 93 × 23	S-60°
18	033-036-324-326	楕円長方形	156 × 140 × 23	S-60°E
19	036-038-325-326	楕円長方形	(146) × (122) × 30	
20	036-037-328-330	楕円長方形	222 × 117 × 24	S-87°E
27	037-038-331-332	楕円形	(66) × (53) × 13	
34	038-039-333-334	楕円長方形	115 × 82 × 15	
36	033-036-336	楕円形	81 × 70 × 23	
38	039-334	楕円長方形	64 × 38 × 18	
40	039-040-328-330	楕円長方形	(230) × 85 × 32	
41	038-039-337-338	楕円形	137 × 126 × 28	
42	043-043-335-336	楕円長方形	172 × 109 × 53	S-87°E
44	038-032-333	楕円長方形	178 × 106 × 8	
45	035-036-332-334	楕円形	128 × 106 × 83	
46	034-035-332-333	楕円長方形	110 × 99 × 20	
56	033-035-321-322	楕円形	175 × 152 × 69	
57	041-338-339	楕円長方形	(136) × (86) × 31	
58	040-041-338-339	楕円長方形	(145) × - × -	
59	042-043-341-343	楕円長方形	154 × 107 × 37	S-89°W
60	040-047-339-340	円形	81 × 70 × 4	
61	045-045-339-340	楕円長方形	140 × 113 × -	
62	036-039-338-328	楕円長方形	342 × (204) × 31	S-3°W
68	041-062-339	不整形	72 × 60 × 17	
69	038-042-338-339	楕円長方形	204 × 94 × 12	S-8°E
71	064-065-338-357	楕円長方形	100 × (45) × 17	
93	059-064-346-356	楕円長方形	(138) × (95) × 67	
94	059-349	楕円形	(75) × (42) × 44	
102	056-345-346	楕円長方形	85 × (34) × 11	
105	053-055-358-359	楕円長方形	(127) × (96) × 18	
106	052-053-352-353	楕円形	140 × 118 × 18	
107	051-052-352-354	楕円長方形	162 × 118 × 41	S-78°W
108	049-051-351-352	楕円長方形	242 × 116 × 26	S-14°E
122	040-050-348-349	楕円長方形	128 × 98 × 28	S-88°E
126	050-052-345-346	楕円長方形	200 × 103 × 21	S-5°E
128	049-051-342-343	楕円形	221 × 125 × 24	S-8°E
133	048-049-339-340	楕円形	157 × 90 × 63	
137	043-044-343-344	楕円形	(86) × (73) × 22	
138	043-044-344-345	楕円長方形	(53) × (53) × 24	
139	040-041-339-341	不整形	(196) × 114 × 28	

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(m)	主軸方位
140	041-042-341-342	楕円形	(78) × (66) × 37	
146	038-039-338-339	不整形	77 × (46) × 22	
147	038-039-338-340	不整形	(129) × (52) × 20	
148	038-041-335-336	楕円長方形	(290) × 171 × 60	S-5°W
157	037-038-337-338	不整形	86 × 60 × 14	
164	036-332-333	長方形	94 × 40 × 35	S-82°W
185	033-034-326-328	円形	138 × 134 × 69	
184	035-326-327	不整形	(37) × (37) × 30	
186	036-330-331	楕円長方形	80 × 80 × 12	
196	036-334-335	楕円形	(54) × (51) × -	
197	052-063-348	楕円形	68 × 66 × 35	
198	060-062-351-353	楕円長方形	191 × (157) × 93	
200	040-061-360-361	楕円長方形	(144) × (131) × 46	
220	035-036-339	楕円長方形	132 × 77 × 26	S-2°E
221	038-039-346	楕円長方形	90 × 66 × 41	S-6°W
222	039-040-341-342	楕円長方形	90 × (68) × 44	S-87°E
224	053-068-350-351	楕円形	(114) × (56) × 67	S-11°E
301	044-045-353-354	楕円長方形	180 × 130 × 58	S-85°W
302	045-046-354-356	楕円長方形	211 × 105 × 52	S-85°W
303	043-045-355-356	楕円長方形	208 × 200 × 43	
304	042-043-358-359	楕円長方形	153 × 86 × 53	S-87°E
305	046-047-362-363	楕円長方形	150 × 101 × 33	S-3°E
306	046-048-359-361	楕円長方形	213 × 210 × 48	
307	046-362-363	楕円長方形	105 × 75 × 23	S-86°W
308	043-046-358	水溝形	89 × 42 × 27	
309	046-358	楕円形	89 × 70 × 15	
310	047-357-358	楕円長方形	104 × 76 × 28	S-60°W
313	049-050-357-358	楕円長方形	85 × 74 × 16	
314	047-355-356	楕円形	93 × (72) × 36	
315	048-049-360-361	楕円三角形	(150) × (126) × 20	
316	047-049-359-360	楕円長方形	(73) × (62) × 23	
317	043-044-364-365	楕円長方形	72 × (29) × 21	
318	041-043-345-346	不整形	124 × (112) × 64	
319	062-361-362	楕円形	92 × (54) × 16	
320	041-359-360	不整形	(64) × (48) × 31	
321	041-358-359	楕円長方形	78 × (18) × 26	
322	044-042-354-355	楕円長方形	145 × (48) × 20	
323	043-043-343-348	楕円長方形	(131) × (60) × 125	

第3章 発見された遺構と遺物



92～94・97・98号土坑 SPA-A'

I に近い黄褐色土と明黄褐色土の混土 粘性あり。

101号土坑 SPA-A'

I 黄褐色土 地山ブロック混入。

99号土坑 SPA-A'

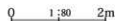
I 黄褐色土 粘性あり。As-C混入。  
II 明黄褐色土・黒褐色土粘質土ブロックとAs-C混入。粘性あり。

100号土坑 SPA-A'

I 3層土に2層土と若干の砂含む。  
II 黄褐色土 As-B入り。酸化灰土層。粘性あり。  
III 黄褐色砂 As-Bと若干の黄褐色土・に近い黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック。小礫入る。

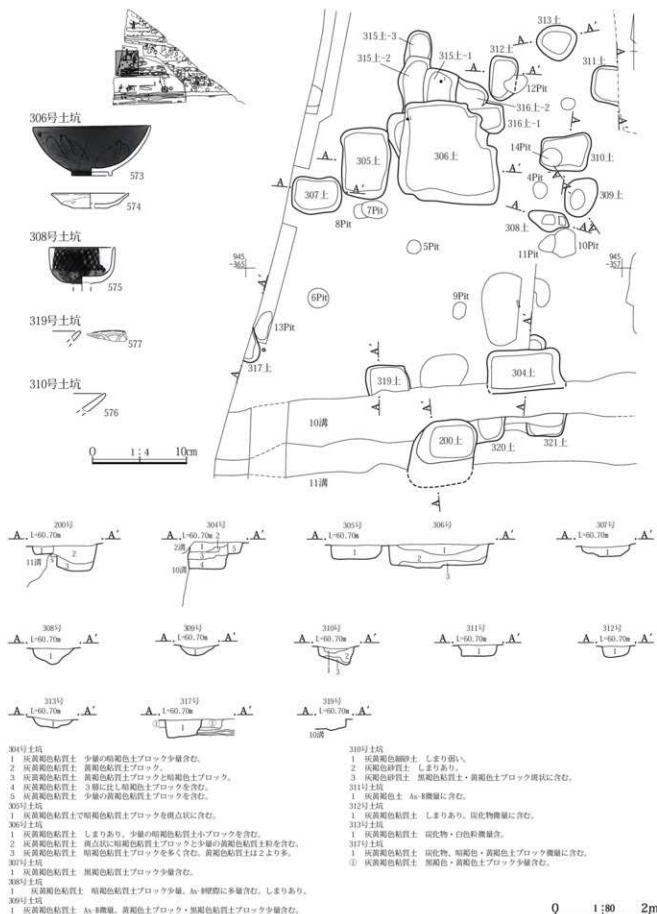
224号土坑 SPA-A'

I 黄褐色土 粘性あり。明黄褐色土小ブロック多く入る。  
II 黄褐色土 粘性あり。明黄褐色土小ブロック多く入る。  
III 黒褐色土 粘性弱。  
IV 黄褐色細砂質土 粘性弱。  
V 黄褐色土 粘性あり。明黄褐色土小ブロック多く入る。

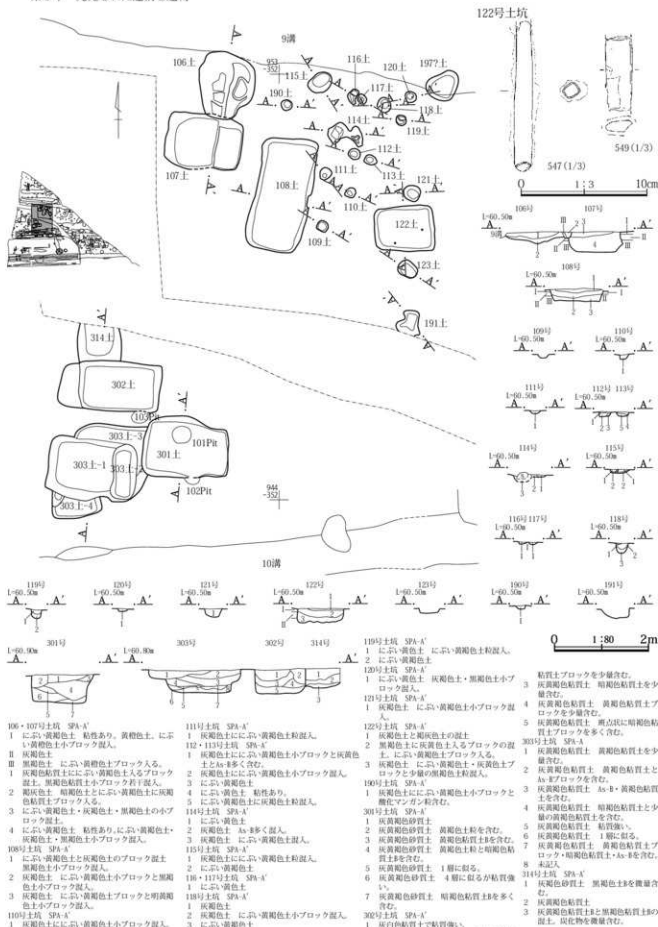


第76図 館内土坑・ピット(2)と出土遺物(3)





第77図 館内土坑・ピット(3)と出土遺物(4)



第78図の1 館内土坑・ピット(4)と出土遺物(5)

- 106・107号土坑 SPA-A'
- 1 におい黄褐色土 粘性あり。黄褐色土。におい黄褐色土小ブロック混入。
  - 黄褐色土
  - 黄褐色土 におい黄褐色土ブロック入る。
  - 1 灰褐色粘質土におい黄褐色土入るブロック混入。黒褐色粘質土小ブロック若干混入。
  - 2 灰褐色土 暗褐色土とにおい黄褐色土に灰褐色粘質土ブロック入る。
  - 3 におい黄褐色土・灰褐色土・黒褐色土の小ブロック混入。
  - 4 におい黄褐色土 粘性あり。におい黄褐色土・灰褐色土・黒褐色土小ブロック混入。
- 108号土坑 SPA-A'
- 1 におい黄褐色土と灰褐色土のブロック混入。黒褐色土小ブロック混入。
  - 2 灰褐色土 におい黄褐色土小ブロックと灰褐色土小ブロック混入。
  - 3 灰褐色土 におい黄褐色土ブロックと明褐色土小ブロック混入。
- 110号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土におい黄褐色土小ブロック混入。

- 111号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土におい黄褐色土混入。
- 112・113号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土におい黄褐色土小ブロックと灰褐色土を多く含む。
  - 2 灰褐色土におい黄褐色土小ブロック混入。
  - 3 におい黄褐色土
  - 4 におい黄褐色土 粘性あり。
  - 11号土坑 SPA-A'
    - 1 灰褐色土におい黄褐色土混入。
    - 1 におい黄褐色土
    - 2 灰褐色土 Asを多く混入。
    - 3 灰褐色土 におい黄褐色土混入。

115号土坑 SPA-A'

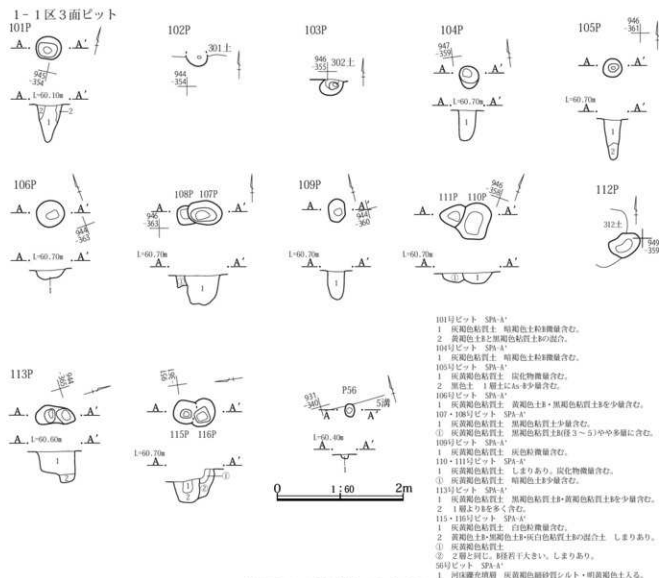
    - 1 灰褐色土におい黄褐色土混入。
    - 1 におい黄褐色土
    - 116・117号土坑 SPA-A'
      - 1 におい黄褐色土

118号土坑 SPA-A'

      - 1 灰褐色土
      - 2 灰褐色土 におい黄褐色土小ブロック混入。
      - 3 におい黄褐色土

- 119号土坑 SPA-A'
- 1 におい黄褐色土 におい黄褐色土混入。
  - 2 におい黄褐色土
- 120号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土・黒褐色土小ブロック混入。
- 121号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土 におい黄褐色土小ブロック混入。
- 122号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土と暗褐色土の混入
  - 2 黒褐色土に灰褐色土入るブロックの混入。におい黄褐色土ブロック入る。
  - 3 灰褐色土 におい黄褐色土・灰黄色土ブロックと少量の黒褐色土混入。
- 150号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土におい黄褐色土小ブロックと褐色フタガラを含む。
  - 1 灰黄褐色粘質土 灰褐色土粉を含む。
  - 2 灰黄褐色粘質土 黄褐色粘質土粉を含む。
  - 3 灰黄褐色粘質土 黄褐色粘質土と暗褐色粘質土を含む。
  - 4 灰黄褐色粘質土 1層に似る。
  - 5 灰黄褐色粘質土 1層に似る。
  - 6 灰黄褐色粘質土 4層に似るが粘質強い。
  - 7 灰黄褐色粘質土 暗褐色粘質土を多く含む。
- 300号土坑 SPA-A'
- 1 灰白褐色粘質土で粘質強い。
  - 2 灰黄褐色粘質土 Asをブロックと黄褐色粘質土ブロックを少量含む。
  - 3 灰黄褐色粘質土 暗褐色粘質土を少量含む。
  - 4 灰黄褐色粘質土 黄褐色粘質土ブロックを少量含む。
  - 5 灰黄褐色粘質土 濁点に暗褐色粘質土ブロックを多く含む。
  - 6 灰黄褐色粘質土 濁点に暗褐色粘質土ブロックを多く含む。
  - 7 灰黄褐色粘質土 暗褐色粘質土を少量含む。
  - 8 Asをブロックを含む。
  - 9 灰黄褐色粘質土 灰褐色粘質土と少量の暗褐色粘質土を含む。
  - 10 灰黄褐色粘質土 粘質強い。
  - 11 灰黄褐色粘質土 1層に似る。
  - 12 灰黄褐色粘質土 黄褐色粘質土ブロック・暗褐色粘質土・Asを含む。
  - 13 未記。

- 303号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色粘質土 黄褐色粘質土を少量含む。
  - 2 灰黄褐色粘質土 黄褐色粘質土と少量の暗褐色粘質土を含む。
  - 3 灰黄褐色粘質土 Asを黄褐色粘質土を含む。
  - 4 灰黄褐色粘質土 暗褐色粘質土と少量の暗褐色粘質土を含む。
  - 5 灰黄褐色粘質土 粘質強い。
  - 6 灰黄褐色粘質土 1層に似る。
  - 7 灰黄褐色粘質土 黄褐色粘質土ブロック・暗褐色粘質土・Asを含む。
  - 8 未記。
- 314号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色粘質土 暗褐色粘質土と少量の暗褐色粘質土を含む。
  - 2 灰黄褐色粘質土
  - 3 灰黄褐色粘質土と暗褐色粘質土の混入。灰褐色粘質土を含む。



第28図の2 館内土坑・ピット(4)

は特定できなかった。

尚、5・11・12号溝は併存していた可能性があり、5号溝の南には2号土塁が接している。

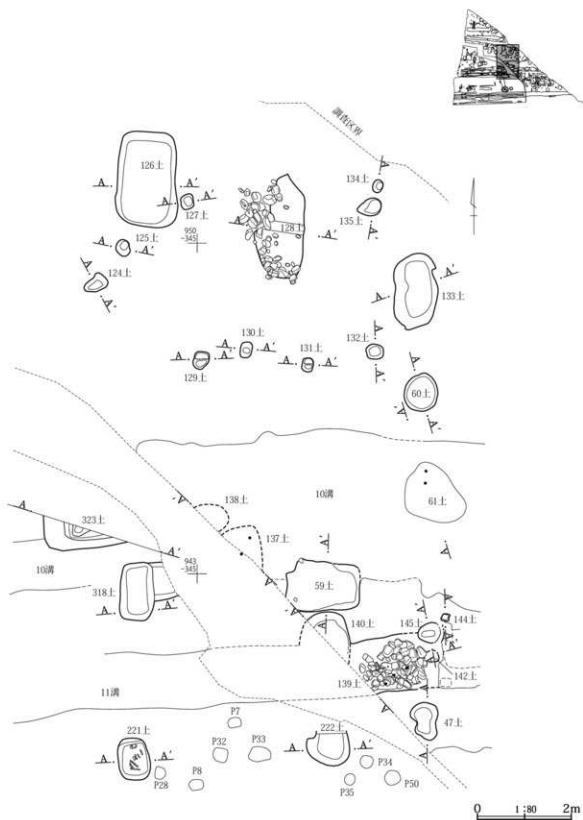
覆土 5号溝は灰色粘質土等、10号溝は灰褐色粘質土等、11号溝は灰褐色土等で埋没する。

構造 各溝の走向は、5号溝はN-87°-E、10a号溝はN-89°-E、10b号溝はN-87°-E、10c号溝はN-84°-E中、11号溝はN-88°-Eを取り、その走行は共に直線的である。

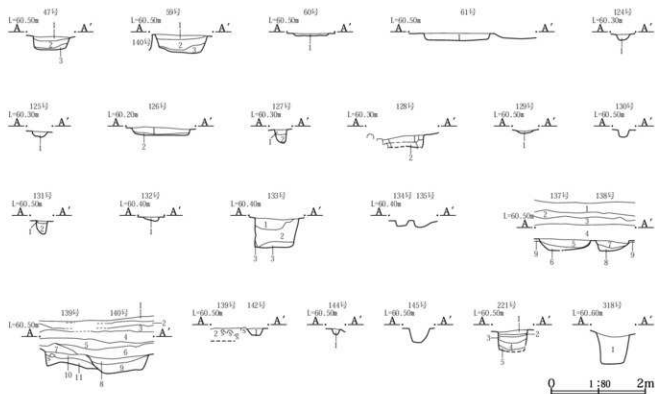
5号溝の掘削形態は、薬研堀から箱堀状に掘り直されている。この掘り直しは南側に拡張するもので、底面幅30cm程から80cm程に増すものの、その底面は50cm程高く

なっている。その上幅は、薬研堀の段階では80cm程と想定されるが、箱堀の段階では160cm程であり、掘幅は2倍となっている。薬研堀の底面の西寄り、2号土塁の断ち割り部には幅56cm、西側底面に対し56cm、東側底面に対し34cm高く、その東側に41cm隔てた地点にも、幅50cm、西側底面に対し46cm、東側底面に対し4cm高い、障壁様の掘り残しが見られ、後述の橋脚部分にも幅193cm、西側に対し38cm、東側に対し40cm高い掘り残しが見られる。また、5号溝の南から50cmの地点から、黄褐色土等で幅105cm、高さ26cmに塵除けが設けられていた。塵除けの側面は緩傾斜であった。

10号溝は上述のように3条に分かれるが、共に箱堀状



第79図の1 館内土坑・ピット(5)



## 47号土坑 SPA-A'

- 1 灰黄褐色粘質土 明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色土小ブロック混入。
- 2 灰黄褐色粘質土 明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色土粘入。
- 3 灰黄褐色粘質土 明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色土小ブロック混入。

## 59号土坑 SPA-A'

- 1 暗灰黄色土 粘性あり。細砂入る。
- 2 灰黄褐色土 粘性あり。細砂入る。
- 3 灰褐色粘質土 明黄粘質土大ブロックと黒褐色土小ブロック混入。

## 60・61号土坑 SPA-A'

- 1 にごい黄褐色土 粘質。しまる。As-Bを含む。

## 124・125号土坑 SPA-A'

- 1 にごい黄褐色土 粘性あり。黒褐色粘質土小ブロック混入。

## 126号土坑 SPA-A'

- 1 にごい黄褐色粘質土 にごい黄褐色粘質土と黒色土小ブロック多く入り。若干の明黄褐色土小ブロック混入。
- 2 灰黄褐色粘質土 黒色土小ブロックとにごい黄褐色粘質土小ブロック混入。

## 127号土坑 SPA-A'

- 1 にごい黄褐色粘質土 灰黄褐色土小ブロックと黒色土粘入。
- 2 灰黄褐色土 粘性あり。黒褐色土小ブロック・にごい黄褐色粘質土小ブロック混入。As-B。

## 128号土坑 SPA-A'

- 1 灰黄褐色土 粘性あり。暗灰色土小ブロックと少量のにごい黄褐色土入る。人骨入る。

## 129号土坑 SPA-A'

- 2 暗灰黄色粘質土 暗灰色粘質土小ブロック混入。

## 129号土坑 SPA-A'

## 131号土坑 SPA-A'

- 1 暗灰色粘質土に明黄褐色粘質土・灰黄褐色粘質土小ブロック混入。
- 2 明黄褐色粘質土・灰黄褐色粘質土・黒褐色粘質土の混入。明黄褐色土・暗灰色土・黒褐色土混入。粘性あり。

## 132号土坑 SPA-A'

- 1 暗灰色粘質土に明黄褐色粘質土・灰黄褐色粘質土小ブロック混入。

## 133号土坑 SPA-A'

- 1 灰黄褐色細砂質シルト・明黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック混入。
- 2 暗灰色粘質土・明黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロックや多く入る。
- 3 暗灰色土に若干の暗灰色粘質土小ブロック混入。

## 137・138号土坑 SPA-A'

- 1 黄灰色細砂
- 2 灰色細砂
- 3 灰褐色土 にごい黄褐色土小ブロック混入。
- 4 にごい黄褐色土 黄灰色土小ブロックと若干の明黄褐色土混入。

- 5 灰黄褐色土 粘性あり。黒褐色土小ブロック混入。

- 6 暗灰色土 粘性あり。黒褐色土小ブロック混入。

- 7 灰黄褐色土と粘土ブロックの混入。粘性あり。

- 8 暗灰色土 粘性ややあり。川砂や多く。黒褐色土若干混入。

- 9 灰黄色土と暗灰色川砂の混入

- 139・140号土坑 SPA-A'

- 1 灰黄褐色細砂質土

- 2 灰色細砂

- 3 灰色細砂

- 4 にごい黄褐色土 黄灰色土小ブロックと若干の明黄褐色土・浅黄色土小ブロック混入。

- 5 灰黄褐色土 にごい黄褐色土粘入。粘性あり。

- 6 灰黄褐色土 粘性ややあり。黒褐色粘質土・暗灰色粘質土小ブロック混入。

- 7 灰黄褐色土 暗灰色粘質土小ブロック・明黄褐色土・灰褐色粘質土・黒褐色粘質土・暗灰色粘質土粘入。

- 8 灰黄褐色土 黒褐色粘質土・暗灰色粘質土粘入。粘性あり。

- 9 暗灰色土 粘性あり。黒褐色粘質土・暗灰色粘質土粘入。

- 10 灰黄褐色粘質土 色調明るい。黒褐色粘質土・暗灰色土粘入。

- 11 暗灰色土 粘性あり。

- 139・142号土坑 SPA-A'

- 1 にごい黄褐色土 灰黄褐色土小ブロック入り。炭化物や多く入る。

- 2 灰黄褐色土 粘性あり。灰黄褐色土小ブロック混入。

- 141号土坑 SPA-A'

- 1 暗灰色土 粘性ややあり。灰黄褐色土小ブロック入る。

- 221号土坑 SPA-A'

- 1 にごい黄褐色土 洪水層。砂質。

- 2 灰黄褐色細砂質シルトに若干の礫入る。

- 3 2層土に暗灰色粘入る。

- 4 灰褐色砂質土 酸化鉄粘入る。

- 5 暗灰色砂質土 灰黄褐色細砂質シルト土に酸化鉄粘着。

- 222号土坑 SPA-A'

- 1 黒褐色土 天明洗流。にごい黄褐色洪水層をブロック状に含む。浅間石直径10cm人多く含む。

- 2 1層と同じだが黄褐色洪水層がない。

- 3 にごい黄褐色土 砂質。洪水層。

- 318号土坑 SPA-A'

- 1 黄褐色土 黒褐色粘質土砂を少量含む。

- 323号土坑 SPA-A'

- 1 灰黄褐色粘質土 にごい黄褐色土層状に含む。炭化物少量含む。

- 2 灰黄褐色粘質土 1層より含む物少ない。

- 3 灰黄褐色粘質土 黄褐色土少量含む。

- 4 灰褐色砂質土 しまりなし。粘性なし。土質が均等と異なる。

- 5 灰黄褐色粘質土 黄褐色土少量。炭化物・砂質土微量含む。

- 6 灰黄褐色粘質土 黄褐色土・暗灰色土混入含む。

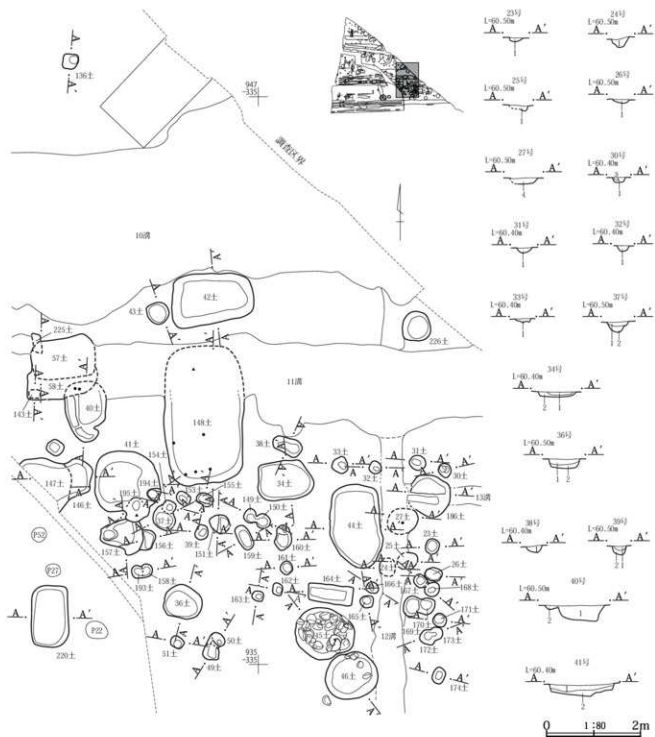
- 7 灰褐色粘質土

- 8 灰褐色粘質土 7層より色調明るい。

- 9 灰褐色粘質土 色調1層に比べ非常に暗い。しまりなし。黄褐色土少量含む。

第29図の2 館内土坑・ピット(5)土層断面

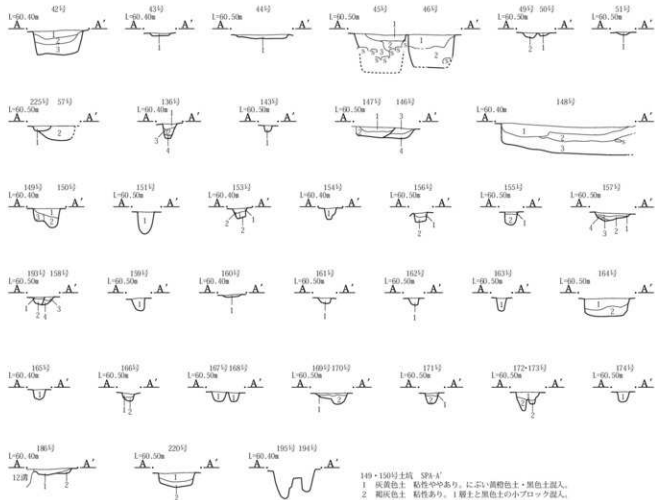
第3章 発見された遺構と遺物



- 22～33号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
  - 2 灰黄褐色粘質土 酸化鉄沈着。
  - 3 1層土と灰化物と焼土ブロック含む。
  - 4 1・2層土の混土に黒褐色粘質土混入。
- 34号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
  - 2 1層土と灰黄褐色土・黒褐色粘質土の混土。
- 35号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
  - 2 1層土と焼土ブロック混入。
- 37号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色粘質土 粘性あり。灰黄色土・明黄褐色土混入。
  - 2 褐色土土 粘性あり。明黄褐色土混入。
- 38号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色粘質土 粘性あり。褐色土混入。
- 39号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄色土 粘性あり。
  - 2 褐色粘質土 黒褐色粘質土小ブロック混入。

- 40号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄粘質土 粘性あり。砂入り。灰黄色土・明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
  - 2 におい・黄褐色土と1層土の小ブロック混土。灰黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック多く混入。
- 41号土坑 SPA-A'
- 1 暗灰黄色土 灰黄褐色土・黒褐色粘質土混入。粘性あり。
  - 2 灰黄褐色粘質土 1層土ブロックと黒褐色粘質土小ブロック混入。

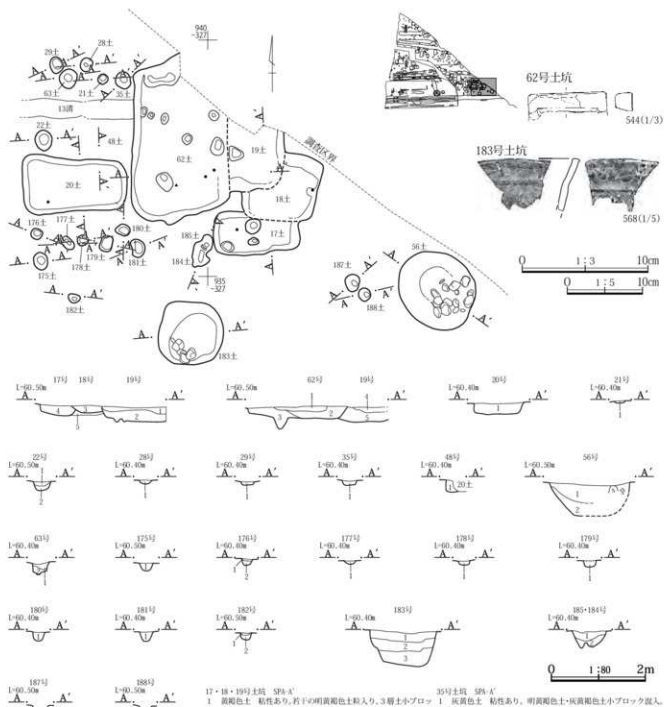
第80図の1 館内土坑・ピット(6)



- 42号土坑 SPA-A  
1 灰黄褐色土 明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。  
2 明黄褐色土・灰黄褐色土と3層土の小ブロック混入。黒褐色粘質土粒入る。  
3 灰黄色土 灰黄褐色土と若干の黒褐色粘質土小ブロック混入。
- 43号土坑 SPA-A  
1 に近い黄褐色土 粘質。しまる。As-Bを含む。
- 44号土坑 SPA-A  
1 灰黄褐色土 粘性あり。As-Bと明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック入る。
- 45号土坑 SPA-A  
1 灰黄褐色土 粘質。僅かに近い黄褐色粘質土を含む。As-Bを含む。  
2 灰黄褐色土 1層でやや近い黄褐色ブロック土・灰白ブロック土を多く含む。As-Bを含む。
- 46号土坑 SPA-A  
1 灰白色ブロック土と近い黄褐色ブロック土の混入。As-Bを含む。
- 49・50号土坑 SPA-A  
1 灰黄褐色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。  
2 1層土・黒褐色土・灰黄褐色粘質土の混入。
- 51号土坑 SPA-A  
1 灰黄色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック多く混入。
- 57・225号土坑 SPA-A  
1 灰黄褐色土  
2 灰黄褐色土 明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック含む。H-PP混入。
- 143号土坑 SPA-A  
1 黒褐色土 粘性ややあり。灰黄褐色土小ブロック入る。
- 136号土坑 SPA-A  
1 灰黄色土 粘性ややあり。ややしまり欠。H-PP・灰黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック混入。  
2 灰黄褐色土 粘質あり。灰黄褐色土粒入る。  
3 に近い黄褐色土 黒褐色粘質土粒入る。
- 146号土坑 SPA-A  
1 黒褐色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。  
2 灰黄色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。  
3 灰黄色土 粘性あり。明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色粘質土粒入る。  
4 黒褐色粘質土 明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロックと黒褐色粘質土粒入る。
- 148号土坑 SPA-A  
1 に近い黄褐色土 As-B粘。黒褐色土ブロックを少量含む。粘性やや弱まる。  
2 に近い黄褐色土 As-B粘・黒褐色土ブロックを少量含む。粘性やや弱まる。  
3 灰黄褐色土 As-B粘・黒褐色土ブロックを少量含む。

- 149・150号土坑 SPA-A  
1 灰黄色土 粘性ややあり。に近い黄褐色土・黒褐色土混入。  
2 黒褐色土 粘性あり。1層土と黒色土小ブロック混入。  
3 黒褐色土 粘性あり。灰白色土小ブロック混入。
- 151号土坑 SPA-A  
1 黒褐色土 明黄褐色粘質土小ブロック混入。
- 153号土坑 SPA-A  
1 黒褐色土と灰黄褐色土のブロック混入。黒・褐色土小ブロックやや多く入る。  
2 灰黄褐色粘質土 細砂多量入り。黒・褐色土粒入る。
- 154号土坑 SPA-A  
1 黒褐色土と灰黄褐色土のブロック混入。黒・褐色土小ブロックやや多く入る。
- 156号土坑 SPA-A  
1 灰黄色土 近い黄褐色土粒入る。  
2 灰黄褐色粘質土 細砂多量入り。黒・褐色土粒入る。
- 155・159・164号土坑 SPA-A  
1 灰黄褐色土 As-B・黄褐色粘質土をブロック状に含む。  
2 灰黄褐色土 1層と近い。黄褐色土ブロック少ない。
- 157号土坑 SPA-A  
1 灰黄褐色土 川砂多入り。に近い黄褐色土小ブロック混入。  
2 灰黄褐色粘質土 3層土粒入る。  
3 黒褐色土  
4 褐色土
- 158・193号土坑 SPA-A  
1 灰黄褐色土 粘性あり。に近い黄褐色土ブロック入る。  
2 黒褐色土 粘性あり。灰白色土小ブロック入る。  
3 1層土と灰黄褐色土の小ブロック混入。  
4 2層土と灰黄褐色土の小ブロック混入。
- 160・164・165・167・168号土坑 SPA-A  
1 灰黄褐色土 As-B・黄褐色粘質土をブロック状に含む。  
161・162・163号土坑 SPA-A  
1 灰黄褐色土 粘性あり。灰黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック混入。
- 166号土坑 SPA-A  
1 黄褐色土 粘性あり。明黄褐色土小ブロック・礫混入。  
2 黒褐色土 粘質あり。明黄褐色土小ブロック混入。
- 169～173号土坑 SPA-A  
1 に近い黄褐色土 As-B粘。黄褐色土ブロックを含む。  
2 灰黄褐色土 As-B粘。黄褐色土ブロック土を含む。
- 174号土坑 SPA-A  
1 灰黄褐色土 As-B・黄褐色粘質土をブロック状に含む。
- 180号土坑 SPA-A  
1 に近い黄褐色土 As-B粘。ややしまる。黒褐色土ブロック・黄褐色土ブロックを含む。  
2 に近い黄褐色土 As-B粘。同じだがやや黄褐色土ブロック多い。
- 220号土坑 SPA-A  
1 河床黄砂混る 灰黄色粘質土の層がシルト・明黄褐色土入る。  
2 に近い黄褐色土 細砂が混入する。

第80図の2 館内土坑・ピット(6)土層断面



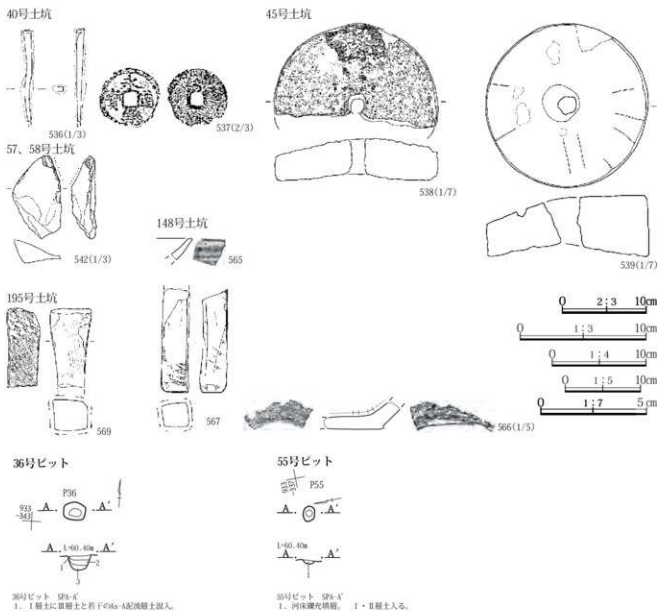
- 17・18・19号土坑 SPA-A'
- 1 黄褐色土 粘性あり、若干の明黄褐色土粒入り、3層土小ブロック欠入。
  - 2 暗灰黄土 地山、黒褐色～黒色土小ブロック若干混入。
  - 3 明オリーブ灰色土・明黄褐色土粒と若干の細砂混入、若干の塵状土混入。
  - 4 灰色粘質土 細砂土明黄褐色土粒混入。
  - 5 濃い黄褐色粘質土 細砂若干混入。
- 20・21号土坑 SPA-A'
- 1 灰褐色土 灰黄褐色土・灰・PP・明黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック含む。
- 62・19号土坑 SPA-A'
- 1 暗灰色土 粘性あり、明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
  - 2 暗灰色土 粘性あり、明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック、黒褐色粘質土大ブロック混入。
  - 3 灰黄褐色粘質土 若干の明・PP・明黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック混入。
  - 4 暗灰色土 粘性あり、明オリーブ灰色土小ブロックと若干の明黄褐色土粒混入。
  - 5 暗灰黄褐色粘質土 地山小ブロック若干混入。
- 22・28・29号土坑
- 1 灰黄褐色土 粘性あり、明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロック混入。
- 35号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄色土 粘性あり、明黄褐色土・灰黄褐色土小ブロック混入。
- 48号土坑 SPA-A'
- 1 暗灰色土 濃い黄褐色土粒入る。
- 56号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 A<sub>5</sub>-B<sub>5</sub> 黄褐色粘質土をブロック状に含む。
  - 2 灰黄褐色土 1層と同じ。黄褐色粘質土ブロック少ない。
- 63号土坑 SPA-A'
- 1 黄褐色土 粘性あり、明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロックと濃い黄褐色粘質土混入。
  - 2 灰黄褐色土 粘性あり、明黄褐色土・灰黄褐色土・黒褐色粘質土小ブロックやや多く入る。
- 175・177～181号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 A<sub>5</sub>-B<sub>5</sub> 黄褐色粘質土をブロック状に含む。
- 182号土坑 SPA-A'
- 1 黄褐色土
  - 2 暗灰黄色粘質土 A<sub>5</sub>-B<sub>5</sub> 黒褐色土粒と若干の大小のブロック含む。明黄褐色土粒を含む。
- 183号土坑 SPA-A'
- 1 灰黄褐色土 A<sub>5</sub>-B<sub>5</sub> 黄色土・黒褐色土ブロックを少量含む。
  - 2 灰黄褐色土 A<sub>5</sub>-B<sub>5</sub>。
  - 3 灰黄褐色土 黒褐色土ブロック・A<sub>5</sub>-B<sub>5</sub>混入。

第81図の1 館内ピット(7)





第3章 発見された遺構と遺物



第82図 館内土坑・ピット(8)と出土遺物(8)

表9 3面館内ピット一覧

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	備考
土坑番号を付したピット				
21	939-329	楕円方形	22 × 22 × 3	
22	937-938-330	楕円形	45 × 36 × 17	
23	937-331	円形	33 × 29 × 4	
24	936-937-332	楕円形	38 × 34 × 22	
25	936-937-331-332	楕円形	45 × 36 × 10	
26	936-937-331	楕円形	35 × 29 × 3	
28	939-329	楕円長方形	28 × 27 × 14	
29	939-330	楕円長方形	33 × 29 × 9	
30	938-939-330-331	楕円形	31 × 27 × 12	
31	939-331	楕円形	35 × 31 × 12	
32	939-332	円形	27 × 25 × 11	
33	939-333	円形	35 × 33 × 9	
35	938-939-328	楕円方形	37 × 32 × 16	
37	937-938-330-337	楕円長方形	50 × 40 × 24	
39	937-336	楕円形	32 × 28 × 21	
43	942-336-337	円形	46 × 46 × 6	

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(cm)	備考
47	939-940-339-340	楕円形	78 × 57 × 26	
48	937-329	楕円方形か	31 × - × 25	
49	935-335-336	楕円方形	333 × 29 × 15	
50	935-335	楕円形	34 × 21 × 24	
51	935-336	楕円方形	28 × 23 × 13	
63	938-939-329-330	楕円方形	42 × 37 × 23	
64	963-359	楕円形	32 × 27 × 12	
65	964-358	円形	19 × 18 × 13	
66	963-359	楕円形	31 × 25 × 9	
67	964-962-360	楕円形	27 × 19 × 9	
70	964-358	円形	28 × 28 × 15	
72	963-964-355	楕円形	25 × 19 × 8	
73	963-964-355-356	楕円方形	17 × 17 × 7	
74	963-356	楕円方形	20 × 19 × 14	
75	962-963-355-356	楕円形	28 × 23 × 13	
76	962-355-356	楕円長方形	37 × 30 × 16	
77	964-357	楕円方形	44 × 30 × 5	

## 第3節 3面の調査

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×高さ(m)	備考
78	963-962-357	隅丸方形	28 × 28 × 14	
79	963-962-356	隅丸方形	20 × 19 × 9	
80	963-962-355	隅丸長方形	33 × 28 × 9	
81	963-355-356	隅丸長方形	30 × 27 × 15	
82	962-354-355	楕円形	42 × 32 × 11	
83	963-963-354	隅丸長方形	44 × 36 × 18	
84	961-962-354	楕円形	56 × 41 × 14	
85	963-354	隅丸方形	25 × 25 × 15	
86	963-353	楕円形	38 × 27 × 12	
87	963-354-353	楕円形	30 × 28 × 14	
88	960-964-354	隅丸方形	24 × 24 × 10	
89	908-355-356	楕円形	42 × 34 × 27	
90	907-354-355	隅丸長方形	37 × 31 × 23	
91	908-354	楕円形	52 × 39 × 12	
92	908-352	楕円形	54 × 41 × 24	
95	906-957-356-357	楕円形	46 × 37 × 17	
96	956-358	隅丸三角形	56 × 403 × 11	
97	957-958-348-349	円形	42 × 42 × 25	
98	957-349	隅丸長方形	41 × 34 × 26	
99	957-346-347	隅丸方形部分	33 × 29 × 20	
100	954-347	隅丸方形	28 × 27 × 22	
101	954-955-352	隅丸長方形	52 × 28 × 15	
103	956-346	楕円形部分	42 × 25 × 13	
104	955-956-346	隅丸長方形	29 × 28 × 12	
109	949-350-351	隅丸方形	23 × 22 × 6	
110	950-350	隅丸三角形	22 × 19 × 6	
111	950-954-350-351	楕円形	26 × 23 × 7	
112	951-350	円形	25 × 22 × 9	
113	951-349-350	楕円形	27 × 20 × 6	
114	951-350	不整形	72 × 42 × 16	
115	952-953-350-351	楕円形	53 × 39 × 13	
116	952-350	不整形	30 × 19 × 5	
117	952-350	隅丸方形	19 × 19 × 6	
118	952-349	隅丸方形	33 × 29 × 13	
119	951-952-349	円形	22 × 22 × 8	
120	952-349	隅丸方形	23 × 23 × 14	
121	950-349	円形	36 × 35 × 14	
123	948-949-349	隅丸長方形	42 × 31 × 14	
124	948-949-348-347	不整形	52 × 30 × 9	
125	949-949-348	楕円形	36 × 29 × 18	
127	950-954-345	隅丸方形	30 × 27 × 14	
129	947-344-345	隅丸長方形	39 × 32 × 5	
130	947-343-344	隅丸長方形	34 × 25 × 15	
131	947-342	隅丸長方形	30 × 23 × 29	
132	947-341	隅丸方形	37 × 32 × 9	
134	951-341	楕円形	29 × 21 × 11	
135	950-341	水漏形	53 × 37 × 13	
136	947-338-339	隅丸方形部分	32 × 30 × 30	
142	947-339-340	楕円形	29 × 23 × 14	
143	949-339	隅丸長方形	25 × 17 × 16	
144	947-339	方形	16 × 14 × 12	
145	941-339-340	楕円形	54 × 44 × 30	
149	937-938-335	隅丸長方形	30 × 1263 × 23	
150	937-938-334-335	円形	311 × 30 × 23	
151	937-938-335-336	隅丸方形	43 × 40 × 25	
152	939-339	楕円形	35 × 32 × 24	
153	938-336	隅丸長方形	31 × 25 × 20	
154	938-336-337	隅丸長方形	28 × 27 × 20	
155	938-335-336	楕円形	38 × 26 × 18	
156	937-337	隅丸方形	44 × 24 × 24	
158	936-937-337	円形	27 × 1263 × 10	
159	937-335	隅丸長方形	55 × 30 × 24	
160	937-334	隅丸長方形	54 × 24 × 5	
161	936-937-334	隅丸長方形	28 × 26 × 12	
162	938-334	隅丸方形	24 × 21 × 14	
163	936-334-335	隅丸長方形	25 × 22 × 15	
165	936-332	円形	28 × 26 × 18	
166	936-332	隅丸長方形	28 × 24 × 16	
167	936-331	隅丸長方形	28 × 24 × 17	
168	936-331	楕円形	33 × 27 × 17	
169	936-331	楕円形	43 × 333 × 11	
170	936-331	隅丸長方形	35 × 34 × 26	
171	935-936-331	隅丸長方形	29 × 29 × 24	
172	935-331	隅丸長方形	34 × 1283 × 38	
173	935-331	円形	27 × 1233 × 23	
174	934-331	隅丸長方形	33 × 26 × 21	
175	936-330	楕円形	37 × 30 × 19	
176	936-330	隅丸長方形	24 × 22 × 16	
177	936-939-930	楕円形	33 × 21 × 19	
178	936-329	円形	25 × 24 × 17	
179	936-329	隅丸長方形	34 × 25 × 20	

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×高さ(m)	備考
180	935-936-329	隅丸長方形	32 × 24 × 24	
181	935-328	豆形	39 × 28 × 21	
182	934-329	隅丸三角形	26 × 19 × 14	
185	935-328-327	隅丸長方形	130 × 25 × 28	
187	934-935-323-324	楕円形	37 × 31 × 11	
188	934-323	隅丸長方形	28 × 26 × 12	
189	938-338-339	隅丸長方形	24 × 23 × 10	
190	932-933-351-352	隅丸長方形	24 × 23 × 10	
191	947-948-349	不整形長方形	152 × 66 × 21	
193	938-937-337	円形	28 × 1253 × 10	
194	938-337	楕円形	28 × 24 × 32	
195	937-938-337	隅丸長方形	56 × 47 × 33	
223	938-332	円形	30 × 27 × 22	
225	941-339	長方形	142 × 19 × 12	
226	941-942-331	円形	62 × 60 × 5	
ビット番号を付したビット				
5	939-343	楕円形	30 × 1273 × 10	
6	939-343	楕円形	28 × 1263 × 10	
7	939-344	楕円形	26 × 22 × 10	
8	938-344-345	隅丸長方形	31 × 24 × 7	
9	938-345	楕円形	33 × 21 × 18	
14	935-936-344	隅丸長方形	40 × 37 × 45	
15	935-936-343	楕円形	32 × 24 × 31	
16	935-936-342	円形	46 × 40 × 22	
17	935-340	隅丸長方形	34 × 32 × 29	
18	936-341	隅丸長方形	28 × 27 × 32	
19	936-340-341	楕円形	37 × 30 × 40	
20	936-340	隅丸三角形	131 × 30 × 12	
21	935-341	隅丸長方形	17 × 15 × 6	
22	935-338	隅丸長方形	49 × 38 × 46	
23	938-937-342	隅丸長方形	26 × 23 × 4	
24	938-341	隅丸長方形	20 × 19 × 19	
25	938-937-341	隅丸長方形	22 × 22 × 20	
26	938-937-340	隅丸長方形	21 × 15 × 8	
27	936-937-339	楕円形	30 × 28 × 9	
28	938-345	隅丸長方形	26 × 24 × 22	
29	937-938-345	方形	25 × 22 × 13	
30	937-345	隅丸長方形	30 × 36 × 39	
31	937-344-345	隅丸三角形	46 × 34 × 20	
32	939-344	方形	31 × 28 × 34	
33	939-343	楕円形	45 × 33 × 32	
34	938-939-341	隅丸長方形	28 × 26 × 6	
35	938-341	円形	24 × 23 × 16	
36	935-342	楕円形	35 × 28 × 25	
37	935-340	隅丸長方形	22 × 19 × 13	
38	937-341	隅丸長方形	22 × 19 × 22	
39	937-342	隅丸長方形	32 × 28 × 17	
40	937-342	隅丸長方形	31 × 29 × 19	
41	937-340	隅丸長方形	37 × 32 × 47	
42	937-938-342-343	楕円形	53 × 33 × 32	
43	937-938-341-342	隅丸長方形	38 × 35 × 61	
44	937-341	楕円形	28 × 23 × 14	
45	937-938-341	隅丸長方形	34 × 1003 × 39	
46	938-340	隅丸長方形	33 × 28 × 28	
47	937-938-340	隅丸長方形	26 × 26 × 35	
48	937-340	隅丸長方形	34 × 28 × 48	
49	937-340	隅丸長方形	20 × 18 × 12	
50	938-340-341	円形	33 × 31 × 12	
51	937-938-340	楕円形	48 × 41 × 7	
52	937-339	楕円形	32 × 30 × 5	
53	937-340-341	隅丸長方形	36 × 36 × 43	
54	937-342	隅丸長方形	21 × 18 × 17	
55	937-337	楕円形	23 × 16 × 5	
56	930-339	楕円形	20 × 15 × 7	
57	935-345	楕円形	19 × 12 × 7	
601	945-353-354	楕円形	40 × 36 × 58	
602	944-353	楕円形	33 × 1223 × 57	
603	945-354-355	楕円形	38 × 25 × 53	
604	946-358	楕円形	35 × 30 × 47	
605	945-361	円形	31 × 29 × 65	
606	944-363	円形	44 × 42 × 14	
607	946-362	楕円形	55 × 37 × 47	
608	946-362	隅丸長方形	30 × 1223 × 28	
609	943-944-360	楕円形	36 × 26 × 45	
610	945-358	隅丸長方形	60 × 48 × 17	
611	945-358	隅丸三角形	42 × 30 × 15	
612	948-949-359	楕円形	48 × 35 × 35	
613	943-944-363	楕円形	63 × 30 × 55	
614	943-361	円形	44 × 40 × 32	
615	950-951-361	隅丸長方形	40 × 30 × 76	
616	950-361	隅丸長方形	47 × 38 × 62	

### 第3章 発見された遺構と遺物

を呈し、底面は平底で、壁面は急傾斜を呈する。また、10a号溝と10b号溝は17cmの間隔を以て並走する。

11号溝は箱型を呈し、底面は平底で、壁面は急傾斜を呈する。最終使用面では中部西寄りに上幅196cm、基底幅422cmを測る埋戻し土橋が残る。この土橋の東側基底端から東に170cm程の位置から、77°の傾斜で比高差104cmの立ち上がりが見られる。そして、この位置には、完掘状態で東西164cm、南北88cm、深さ150cmを測る隅丸長方形プランの土坑の掘削が見られたが、本土坑の底面は、堀の西側底面より38cm、東側底面より50cm程低い。またその直ぐ東側28cmの間には、基底幅16cm、深さ100cmを測る菜研堀の痕跡が遺されていたが、最終段階では54cm程の高さに埋戻されていた。また、11号溝の南縁は幅60cm、深さ20cm程低くなっている。

**遺物** 5号溝からは形象埴輪(413)・不明(414)・家形と思われるもの(415)・靴と思われるもの(416)・人物(417)、円筒埴輪(418)、龍泉窯系青磁(419・420)、古瀬戸陶器平碗(421)、甕と見られる常滑陶器甕(422・423)、在地系土器皿(424~427)・内耳鍋(428~434)・片口鉢(435~439)・火鉢(440)・火鉢と見られるもの(441)・器種不明(442)、板碑片、板碑片と思われるもの(454)、石製硯、石臼、石臼上臼(457)、石鉢(461)、石鉢と見られるもの、凹み石(463~465)、敲石、砥石(467・468)、礫石器の凹み石(471)、火打石(473・475)、不明石製品など、10a・b号溝からは在地系土器片口鉢(510~514)、皇土通寶(515)、政和通寶(516)、鉄釘(517・518)、砥石、敲石など、11号溝からは人物埴輪(522)、円筒埴輪(523~527)、円筒埴輪と見られる埴輪片(528)、中国陶磁白磁皿(529)、瀬戸・美濃陶器天目碗(530)、常滑陶器甕(531)、在地系土器皿(532)、鉄釘(533)などが出土している。また10号溝東部の河道と思われる箇所からは在地系土器内耳鍋(580)と板碑片が出土している。

**所見** 5・10a・10b・10c・11号溝は、その走向と規模から推して、館の堀と判断される。

5号溝は、後述の虎口遺構の存在により11号溝と2重堀を成している。菜研堀から箱堀に掘り直されているが、菜研堀の底面の二箇所の掘り残しは、障子掘りに類する機能があったものと思慮される。また、西部の虎口部に残る掘り残しは、当初ここに土橋が設けられていたことを示唆するものと思われる。

このうち10a号溝と10b号溝は走向と規模が近似し、西端の位置が近接することから掘り直しの可能性がある。また、西端が調査区内で途絶えて、対応する溝が西側に掘削されないことから、その掘削意図は今後検討する必要がある。そして、10a・10b号溝と10号c溝の走向が異なることから、別遺構と解釈される。また、10号溝東端は斜め方向に577cm程広がっており、この部分は利根川に浸食されたものと解釈され、調査区東から9m程の間の10(b)号溝の南縁は蛇行が著しく、10b号溝の南端想定ラインより88cm程広がっていたことから、この区間の南縁も利根川の浸食による可能性が考えられる。

11号溝は、5号溝と同様に、菜研堀から箱堀に掘り直され、箱堀の段階では橋脚から土橋に入り口構造を変更している。また、11号溝の最終段階の遺構は2号土塁の突出部の延長部を境に東西に分けられ、虎口側(西側)に対し、東側は浅く、西側東端は障壁となっており、西側が外、東側が内という認識があったことが窺われる。

また各溝の出土遺物からは、5号溝は14世紀中葉から15世紀前半、10号溝は14世紀後半から15世紀前半という時期が得られた。10a・10b号溝は10号溝出土遺物の時期が当てられ、10c号溝はそれ以前の所産と考えられる。一方、5・11号溝は14世紀中葉から15世紀前半という期間が与えられる。

#### 4. 郭内の溝遺構(第73図、PL.13)

**概要** 郭内では、12・13・15号溝の、4条の中小規模の溝を確認調査した。

**位置** 12~15号溝は1-1区北東部、館の南東部に在り、位置するグリッドは、12号溝は933~942-331・332、13号溝は938-328~331、15号溝は933・934-334である。

**規模** 12号溝 残長：9.8m 幅：62cm 深さ：74cm

13号溝 残長：3.2m 幅：37cm 深さ：8cm

15号溝 長：1.2m 幅：45cm 深さ：9cm

**重複** 12号溝は11・13号溝、24・25・27・46・156・186号土坑と重複する。本溝は11・13号溝との新旧関係は特定できなかったが併存の可能性があり、24・25・27・46号土坑は本溝より新しく、156・186号土坑は古い。13号溝は12号溝、62・186号土坑と重複するが、両土坑との新旧関係は特定できなかった。

**覆土** 12号溝は灰色細砂等、13号溝は褐色色土、15号溝

は灰黄褐色土で埋没する。

構造 各溝の走向は、12号溝はN-1°-E、13号溝はN-88°-W、15号溝はN-1°-Wに取り、その走行は共に直線的である。また、13号溝は、11号溝南側から2.2m程の地点で12号溝より垂直東方に分岐する。

各溝は、共に箱堀状を呈し、平底を呈する。また12号溝は、13号溝の分岐点の北側に基底幅43cm、上幅20cmを測る低い障壁が設けられるが、その頂部と12号溝底部との比高差は北側で20cm、南側で50cmを測る。

尚、12号溝は、11号溝との交差点から北では、明瞭ではなくなるが、僅かな段差によって、北側の10号溝まで達していたものと思慮される。

遺物 15号溝からは土師器片と少量の中世在地系土器片が出土したが、図示すべきものはなかった。また、12・13号溝からの遺物の出土はなかった。

所見 12・13・15号溝はその走向と規模から、郭内の区画溝と館の堀と判断される。

また、その時期は、館の存続時期として把握されるだけで、特定することはできなかった。

#### 5. 郭内の土坑とピット(第74~82図、PL.16・29)

概要 本館の郭内では多数の土坑とピットが確認された。しかし、1-1区1期調査では、上述のように短期間で遺構を処理する必要があったため、調査の効率上、遺構番号を土坑とピットで分けることはせず、一括土坑として処理したが、本項では土坑とピットに分けて報告するが、遺構番号を変更することはしなかった。

また、3期調査では遺構番号を独自に付したが、本稿では、混乱を避けるため、敢えて遺構番号を振り直していることを附記する。

本項に報告する土坑は78基、ピットは184基(うち土坑番号を付したものは129基)である。

位置 表8・9に所在グリッドを記した。

規模・主軸方位 表8・9に記した。

重複 重複したもののうち、新旧の特定できたものを下に記す。尚、溝と重複したものは省略する。

54号土坑←55号土坑、62号土坑←18号土坑、107号土坑←106号土坑、140号土坑←139号土坑、147号土坑←146号土坑、150号土坑149←号土坑、203号土坑←209号土坑、17号ピット←48号ピット号土坑、53号ピット

←45号ピットの順にそれぞれ新しい。

覆土 各土坑ピットの断面図を参照された。

構造 77基の土坑のプランは、隅丸方形5基、隅丸長方形42基、円形等5基、楕円形14基、その他12基であり、隅丸長方形が全体の53.8%、楕円形17.9%を占める。掘削形態は箱堀状を呈し、底面は総じて平底を呈するものが多い。

一方、ピット184基のプランは、隅丸長方形23基、隅丸方形65基、方形3基、円形24基、楕円形62基であり、方形様のものが49.5%、円形様のものが46.7%であり、隅丸方形或いは方形プランのものが37.0%を占めた。掘削形態は柱穴状で、底面形は総じて丸底を呈するものが多かった。

遺物 27号土坑からは磁石、40号土坑からは鉄釘(536)と永楽通寶(537)、45号土坑からは石白下白(538・539)、57・58号土坑からは火打石(542)、62号土坑からは不明銅製品と石製品碗(544)、65号土坑からは常滑陶器甕(545)、114号土坑からは礎石、122号土坑からは不明鉄製品(547)、刀子(548)、砥石(549)、128号土坑からは在地系土器片口鉢(550・551)とすり鉢(552)、砥石(553)、板碑片(556)、石白下白(557)、不明石製品(558)、永楽通寶(559)、皇宋通寶(560)、銅銭(561)、133号土坑からは常滑か渾美製の陶器甕(562)、141号土坑からは在地系土器すり鉢(563・564)、148号土坑からは平碗と見られる古瀬戸陶器片(565)、在地系土器片口鉢(566)、砥石(567)、183号土坑からは在地系土器内耳鍋(568)、195号土坑からは砥石(569)、198号土坑からは甕と見られる常滑陶器片(570)、306号土坑からは瀬戸・美濃柳碗(573)と志戸呂陶器灯火皿(574)、308号土坑からは肥前磁器染付仏飯器(575)が出土している。また、遺構番号の重複から混乱が生じているが、310号土坑または館外の10号土坑から在地系土器皿(576)、19号土坑または319号土坑から出土したものに龍泉窯系青磁蓮弁文碗(577)があり、33号ピットは在地系土器香が(579)が出土している。

所見 128・221号土坑は北頭西向横臥屈葬による人骨の埋葬が認められたため、墓地であることが確認された。このうち127号土坑は北部9号溝の南に在り、西半分の壁際に礫が積まれており、被葬者は成人男性であった。また221号土坑は11号溝南側、虎口遺構の東側に掘削されたもので、被葬者は10歳の男子であった。この他の土

坑では、大型の隅丸長方形プランの土坑は貯蔵穴の可能性はあるが、他の土坑の掘削意図は想定できなかった。

またピットは柱穴或いは坑後の可能性が高いが、現時点で建物を想定することはできていない。尚、2号土塁北縁の東側延長線付近に在る、14・16・17・22号ピットは170cm程の柱間を以て東西に連なっている。対応する柱穴が無く、建物を想定することはできなかったが、土塁構築に伴うものである可能性が考慮される。

各土坑の時期は、出土遺物から推して、53号土坑は14世紀から15世紀中葉、128号土坑は15世紀後半、141号土坑は15世紀後半から16世紀、148号土坑は14世紀後葉から15世紀初頭、183号土坑は15世紀後半、204号土坑は15世紀末から16世紀中頃、4号ピットは14世紀後半から15世紀後半、5号ピットは16世紀、65・133・164号土坑は中世の所産として把握されるが、他の土坑ピットの時期は特定できなかった。

#### 6. 虎口遺構(第64図、PL.15)

**概要** 下之宮高冨遺跡では、中世館に於いて、明瞭な構造を有する虎口遺構が確認された。この遺構は2号土塁、5・11号溝を取り込むもので、橋脚跡、門遺構を伴うものである。

**位置** 本遺構は、I-1区西部北寄りに在り、929～941-347～364グリッドに位置する。

**規模** 東西17.6m 南北12.8m

**橋脚** 柱穴 P 1 径：72×50cm 深さ：101cm

柱穴 P 2 径：74×66cm 深さ：84cm

柱穴 P 3 径：57×54cm 深さ：89cm

柱穴 P 4 径：75×65cm 深さ：86cm

**門** 範囲 東西：236cm 南北：312cm

門柱間：266cm

**帯郭** 東西(残長)：16.7m 南北：336～364cm

**構造** 外側の堀である5号溝を渡る橋は、最終段階では木橋であり、5号溝の壁面に径の平均63.9cm、溝の肩部から平均90.0cmの深さを測る、規模の大きな柱穴を4基掘削して、橋脚を渡す。橋脚の柱穴の桁間は東側が150cm、西側が129cmを測り、梁間は南側が140cm、北側が130cm、橋脚は土層断面から推して6、7寸程度と想定される大型のものである。

木橋を渡ると両側の土塁に挟まれた、やや縦長、即ち

南北方向に長い空間がある。その中位に両側に礎石を据えた門が設置されるが、その柱間は1間半程を測るものである。この門の構造は不明であるが、支脚は伴わない。

門を越えると、2号土塁と11号溝に挟まれた、帯郭上の空間に出る。左方(西側)は調査区外に在るため、確認できないが、門の直近で空間が閉鎖された痕跡は認められなかった。一方、右方(東側)へ折れると12.6m程で2号土塁の北側突出部に突き当たり、左(北)に折れると11号溝の埋戻しの土橋があり、これを渡って内郭側に入る。11号溝に土塁は伴わなかったが、灰黄褐色粘質土の分布から、土塁があったことが窺われた。尚、内郭側の門の遺構は確認できなかった。

**遺物** 東西の門の礎石(東：411、西：401)の他2号土塁、5・11号溝からの遺物の出土はあったが、該当遺構の項を参照されたい。

**所見** 本遺構は有機的に遺構を結合して造られた、城塞化された虎口遺構である。また、土塁等を撤去して遺構確認を行ったが、2号土塁の項で述べた、門西側のピット2基を除いて、土坑、ピットは全く確認されなかったことから、当初より虎口遺構として構築されたものと解釈される。

また、その時期は、出土遺物から推せば、本館の使用期間の終盤と想定されることから、15世紀前半ということになる。最も館全体としては16世紀の出土遺物も見られるが、幅幅が3m或いは1.2mなどと狭いことを勘案すれば、16世紀半ばまで時期が下るとは考え辛い。また、城塞化の契機としては、15世紀後半の享徳の乱にその可能性が高いように思われる。

### (3) 館外の遺構群

#### 1. 土坑群・ピット(第83・84図、PL.16)

**概要** 館の南側では、土坑16基と、ピット4基を確認調査した。このうちピットと土坑14基は、館の外堀である5号溝から13m以内に掘削され、土坑の主軸方向は、15基が略南北方向にある。

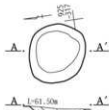
**位置** 表10・11に所在グリッドを記した。

**規模・主軸方位** 表10・11に記した。

**重複** 202号土坑と208号土坑、203号土坑と209号土坑が重複しているが、202・209号土坑が新しい。

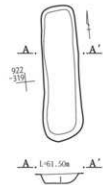
他の土坑は他の遺構との重複はなかった。

## 10号土坑



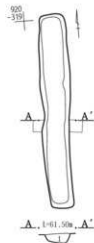
- 10号土坑 SP8-A'  
1 濃い黄褐色土 洪水層土、砂質。  
2 明黄褐色土 洪水層土、砂質。

## 11号土坑



- 11・12号土坑 SP8-A'  
1 濃い黄褐色土 洪水層土、砂質。

## 12号土坑

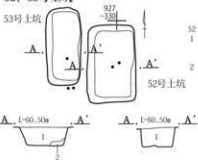


## 16号土坑



- 16号土坑 SP8-A'  
1 褐色粘質土 As-B多く入り黄褐色土粘質土。酸化層も入り。  
2 褐色粘質土 As-B多く入り、酸化層・小ブロック状に沈着。  
3 褐色粘質土 As-B多く入り、酸化層・小ブロック状に沈着。

## 52、53号土坑



- 52・53号土坑  
1 灰黄褐色土 濃い黄褐色・黒褐色粘 質土含む、As-B数ブロック状。  
2 灰黄褐色土 1に比し黒褐色粘質土多い、As-B数ブロック状。

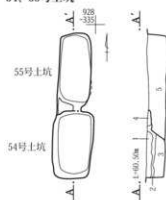
## 53号土坑



## 52号土坑



## 54、55号土坑



- 54・55号土坑  
1 灰黄褐色土 明黄褐色粘質土含むブロック状。As-B含む。  
2 灰白色粘質土 黒褐色・明黄褐色粘質土とAs-B含む。  
3 黒褐色土 As-Bと少量の明黄褐色粘質土含む。  
4 灰白色粘質土 As-B含む。  
5 褐色粘質土 As-Bとブロック状の明黄褐色土含む。

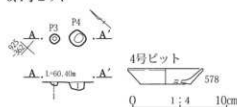
## 1号ビット



## 2号ビット



## 3,4号ビット



- 1号ビット SP8-A'  
1 濃い黄褐色土 ややしまる。As-B数、黄褐色土をブロック状に含む。

- 2・3号ビット SP8-A'  
1 灰黄褐色土 粘 質、ややしまる。

第83図 館外の土坑とビット(1)と出土遺物(1)

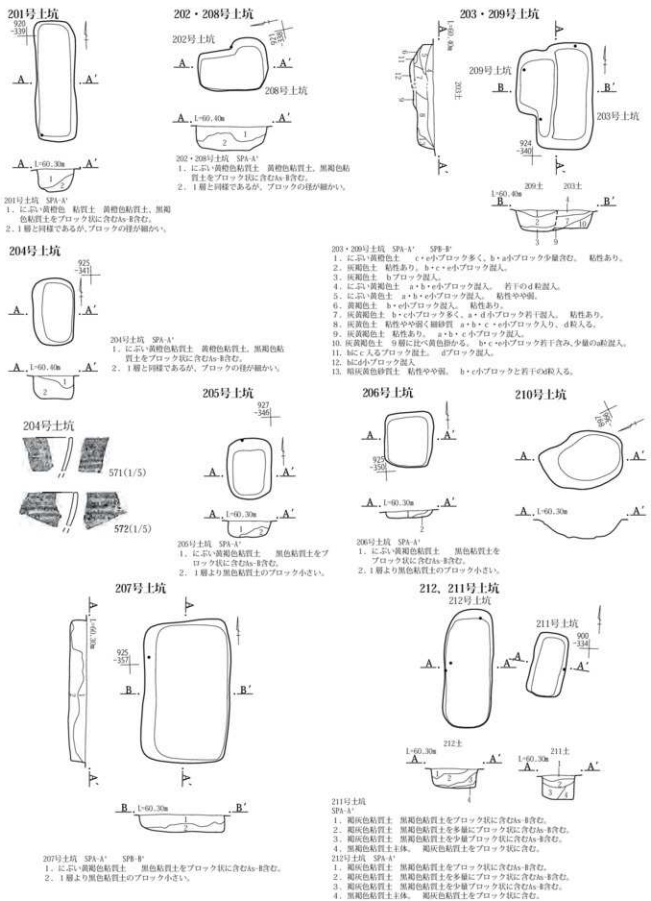
表10 3面館外土坑一覧

番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(m)	主軸方位
52	924-929-329-330	楕円長方形	218 × 136 × 52	N-1°-E
53	925-925-330-331	楕円長方形	218 × 100 × 55	N-1°-E
54	923-925-335-336	楕円長方形	192 × 115 × 53	S-0°
55	925-927-335-336	楕円長方形	[200] × 90 × 56	S-2°-E
201	939-329	楕円長方形	22 × 22 × 3	S-1°-E
202	937-938-330	楕円長方形	45 × 36 × 17	S-9°-E
203	937-331	楕円長方形	33 × 29 × 4	S-0°
204	936-937-332	楕円長方形	[38] × [34] × 22	S-0°
205	936-937-331-332	楕円長方形	[45] × [36] × 10	S-2°-E
206	936-937-331	楕円長方形	35 × 29 × 5	S-6°-E
207	937-938-331-332	楕円長方形	[66] × [53] × 13	S-3°-E
208	939-329	楕円長方形	28 × 27 × 14	S-84°-E
209	939-330	楕円長方形	33 × 29 × 9	S-0°
210	938-939-330-331	略楕円形	31 × 27 × 12	S-12°-E
211	939-331	楕円長方形	35 × 31 × 12	S-11°-E
212	939-332	楕円長方形	27 × 25 × 11	S-0°

表11 3面館外ビット一覧

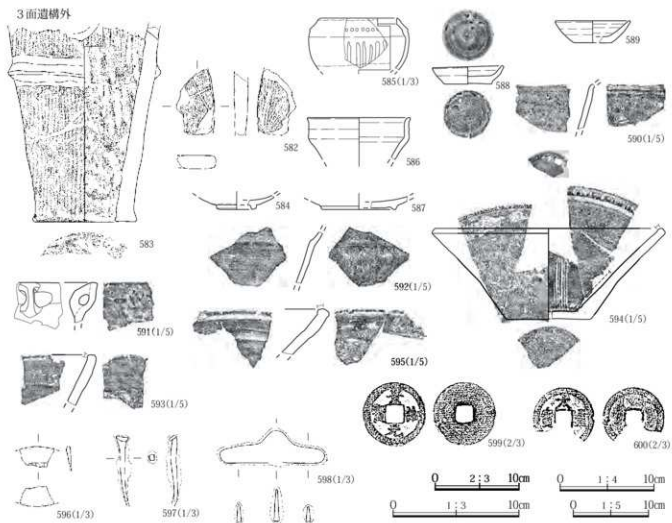
番号	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ(m)	備考
1	921-364	略楕円形	63 × 50 × 29	
2	923-362	楕円長方形	31 × 25 × 29	
3	924-361	円形	15 × 15 × 4	
4	924-361	楕円長方形	25 × 23 × 10	

### 第3章 発見された遺構と遺物



第84図 館外の土坑(2)





第85図 1区3面の遺構外の出土遺物

覆土 各土坑ビットの断面図を参照されたい。

構造 16基の土坑のプランは、隅丸長方形15基、略楕円形1基、であり、その殆どが隅丸長方形を呈する。掘削形態は箱状で、平底を呈する。

一方、ビット4基のプランは、2基が方形様、2基が円形様を呈する。また掘削形態は1号ビットがすり鉢状を呈する他は、筒状で平底を呈する。

遺物 52号土坑からは在地系土器皿(540)、53号土坑からは古瀬戸陶器盤類(541)、204号土坑からは在地系土器内耳鍋(571・572)があり、4号ビットからは在地系土器皿(578)が出土している。

所見 隅丸長方形プランの土坑は貯蔵穴の可能性を有するが、210号土坑と1～4号ビットの掘削意図を想定することはできなかった。

各土坑の時期は、出土遺物から推して、53号土坑は14世

紀から15世紀中葉、204号土坑は15世紀末から16世紀中頃、4号ビットは14世紀後半から15世紀後半の可能性を有する。

#### (4) 3面遺構外の出土遺物(第85図、PL.29)

概要 3面の遺構外の出土遺物には、形象埴輪(582)、円筒埴輪(583)、中国磁器白磁皿(584)・青白磁小壺(585)、瀬戸・美濃陶器白天眼碗(586)・皿類(587)、在地系土器皿(588・589)・内耳鍋(590～592)・片口鉢(593～595)、銅製鏡(596)、鉄釘(597)、火打金(598)、嘉祐元寶(599)、銅銭(600)、板碑片、火打石の出土がみられた他、少量の須恵器、土師器や中近世の在地系土器片が出土している。

## 第4節 4面の調査

### (1) 4面の概要

4面では、天仁元(1108)年の浅間山の火爆発に伴って降下したAs-B軽石で被覆された、古代末の調査面である。本面は1-1、1-2区のみで確認、調査した。

1-1区では、北東部から北部と、南西隅部を除く南半部では削平されて、遺構を確認することができなかった。また、1-2区は2013年9月始めの台風14号の降雨後の出水と、排土置場の問題等から東半部の過半と、西半部はトレンチ調査ができたに過ぎなかった。

4面では、遺構確認範囲のほぼ全域で11面のAs-B下畑が検出された。また、1-1区の南部に溝3条と土坑1基が確認された。

### (2) 4面の遺構と遺物

#### 1. 4・27・28・29号溝(第図、PL.)

概要 4・27・28号溝は中規模、29号溝は大型の溝遺構である。

1-1区1期調査の4号溝と2期調査区の28号溝は同一の溝遺構である。

位置 27・29号溝は1-1区南西隅部に、4・28号溝は1-1区南部南寄りに在る。所在グリッドは、4号溝は904-329~332、27号溝は892~898-357~369、28号溝は892~899-311~369、29号溝は892~903-352~369である。

規模 4・8号溝 残長：4号溝：14.4m、28号溝：59.1m 幅：65cm 深さ：7cm

27号溝 残長：13.7m 幅：78cm 深さ：33cm

29号溝 残長：18.1m 幅：232cm 深さ：7cm

重複 28号溝は27・29号溝と重複するが、新旧関係を特定することはできなかった。

覆土 4面各溝は灰黄色土等で埋没する。

構造 4・28号溝は極緩やかに蛇行する走行を呈するが、28号溝の西端でN-85°-E、4号溝の東端でN-90°を測る。その掘削形態は箱型状で平底を呈する。

27号溝はN-63°-Wに走向を取り直線的な走行を呈するが、北西端で略西方に、みなみはして略南西方向に走行を転ずる。本溝は箱型状を呈する左右2条の溝から成る。

底面の横断面形は平底状の箇所と丸底状の箇所がある。

29号溝N-47°-Wに走向を取り、直線的な走行を取る。掘削形態は箱型状を呈するが、壁面は開き、底面の横断面形はV字形を呈する。

遺物 4号溝は敲石、28号溝からは須恵器片1片と不明鑄造鉄製品(608)等が出土した。

所見 4・27・28・29号溝の掘削意図は想定できなかった。

またその時期は、覆土の観察から平安時代以前の所産として把握されるだけで、特定することはできなかった。

#### 2. 畑(第87~89図、PL.19)

概要 4面では、天仁元年のAs-B軽石で覆われた11面の畑を確認した。

尚、全体的に畝間は低かったが、特に東部では遺存状態は良くなかった。

位置 4面の畑は1-1区東部に120~125号畑、中・西北部に41号畑、南西隅部に40号畑、1-2区東半部に126号畑、北西部に127(128)・129号畑が在る。

位置するグリッドは表12に記した。

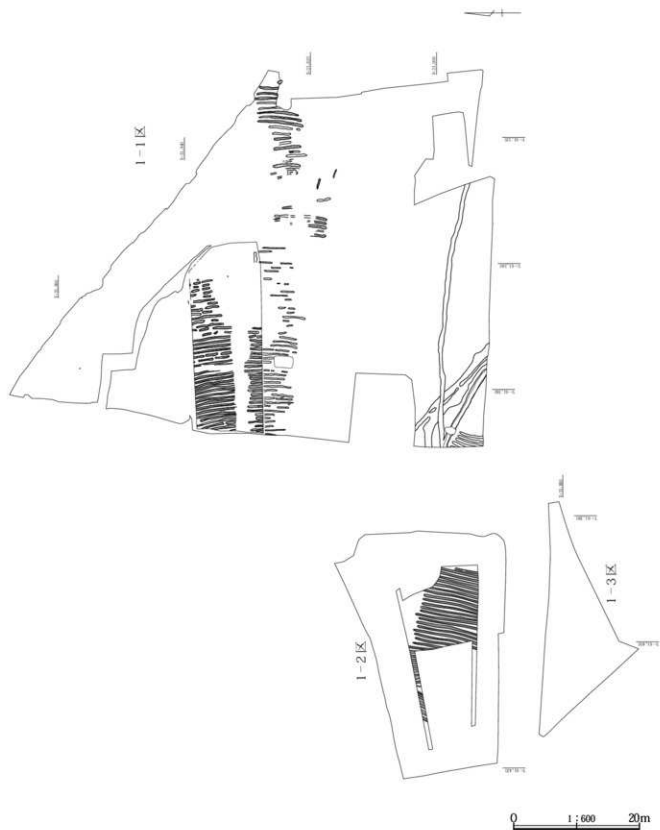
規模・軸方位 表12に記した。

構造 畑の規模、個々のサクの掘削間隔や規模、畝間等は表12にまとめた。

遺物 4面の畑からの出土遺物は得られなかった。

### (3) 遺構外の出土遺物

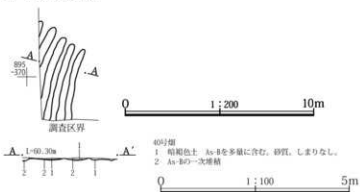
概要 4面では少量の土師器、須恵器片が出土したが、図示すべきものはなかった。



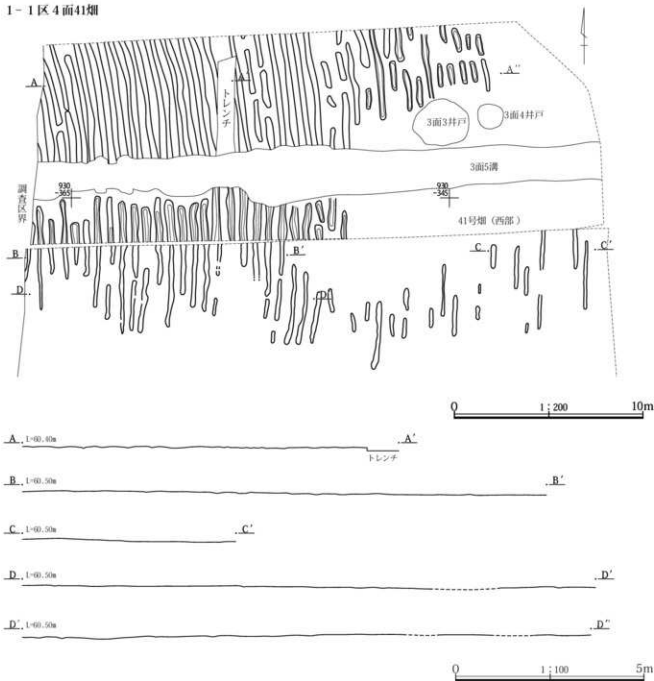
第86図 1区4面全体図

第3章 発見された遺構と遺物

1-1区4面40畑

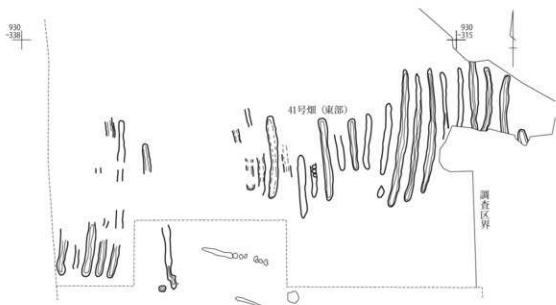


1-1区4面41畑



第87図 1区40・41号畑

1-1区4面41畑

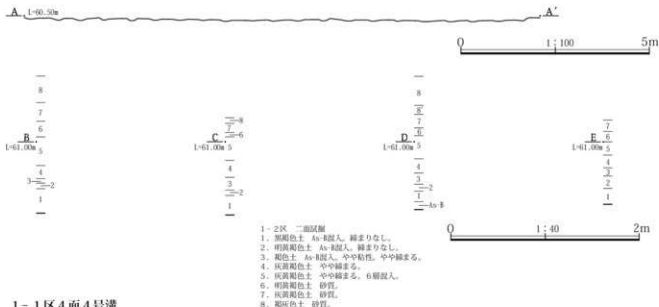


1-1区4面126～129畑



第88図 1区41・126～129号畑

1-1区4面126～129畑断面



1-1区4面4号溝

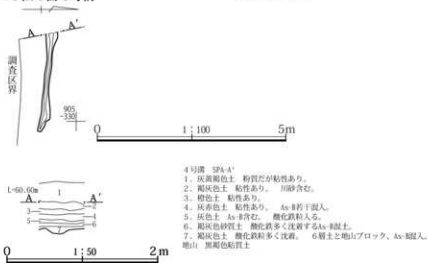
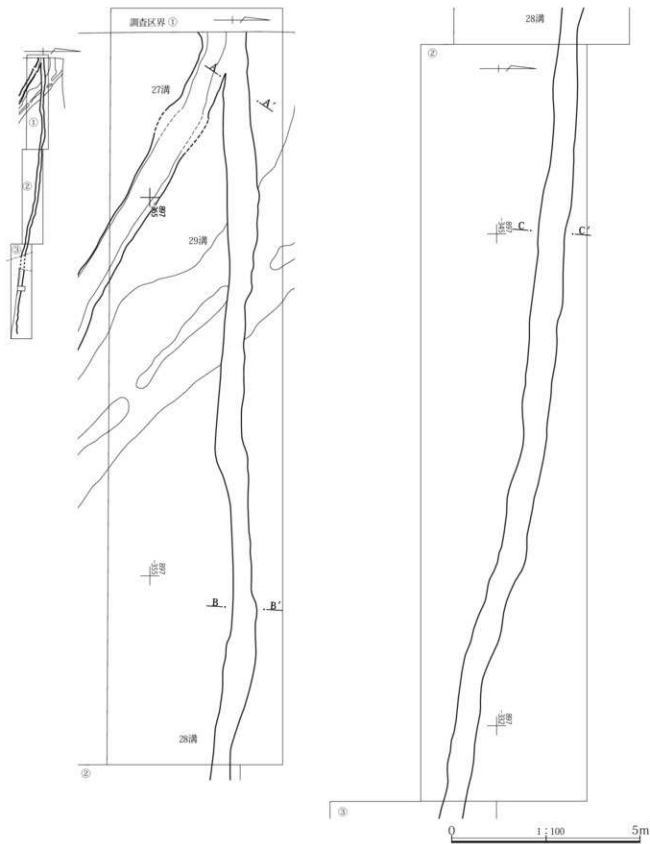


表12 1区4面As-B下畑一覧

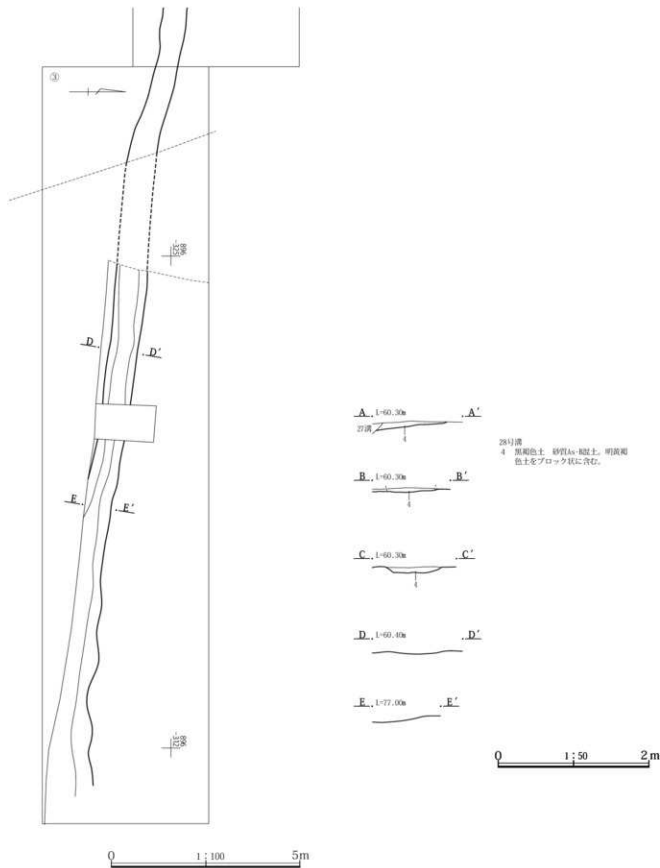
区	面	番号	所在グリッド	土軸方位	幅横(m)	サケ				縦間(cm)						
						条数	幅内距離(cm)	(平均)	長さ(m)	(平均)	幅(cm)	(平均)	深さ(cm)	(平均)		
1-1	4面	40	892～897-306～309	8-18°-E	(4.45) × (2.94)	5	58～75	67.38	—	—	23～45	35.20	1～4	2.75	20～37	30.25
1-1	4面	41	916～939-311～367	8-85°-E	(56.28) × (17.92)	72	68～179	70.56	—	—	15～47	31.42	1～3	2.36	15～199	38.95
1-1	4面	120	915～919-324～328	8-75°-E	(3.60) × (2.51)	2	—	—	—	—	15～28	21.50	2～2	2.00	—	—
1-1	4面	121	912～916-322～324	8-17°-E	(4.23) × (2.16)	4	31～102	41.17	0.97～0.97	0.97	23～41	30.75	1～1	1.00	7～26	31.67
1-1	4面	122	904～914-312～319	8-10°-E	(12.00) × (3.13)	4	30～117	98.00	1.13～8.75	6.19	27～41	34.00	3～5	3.50	31～104	47.50
1-1	4面	123	894～904-310～317	8-13°-E	(10.38) × (7.30)	8	67～221	98.29	6.75～8.44	7.32	32～59	43.38	2～5	3.50	19～184	55.00
1-1	4面	124	894～898-315～320	8-77°-E	(3.91) × (3.35)	3	119～179	149.00	1.45～1.45	1.45	17～57	43.00	3～4	2.67	83～123	103.00
1-1	4面	125	895～900-321～323	8-10°-E	4.77 × 2.23	6	36～239	82.80	1.82～2.11	1.96	19～37	29.83	2～4	2.67	11～204	53.20
1-2	4面	126	903～904-388～401	8-75°-E	14.00 × (11.50)	22	49～73	63.08	—	—	13～57	32.55	3～20	10.38	15～42	30.60
1-2	4面	127	902～904-401～406	8-80°-E	5.30 × (0.70)	8	62～76	68.00	—	—	35～50	43.00	—	—	16～36	24.57
1-2	4面	129	901～903-408～412	8-80°-E	4.50 × (0.70)	5	30～81	73.13	—	—	33～56	44.20	—	—	18～34	—
1-2	1面	131	890～902-405～421	8-80°-E	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

1-1区4面28号溝



第90図 1区27・28・29号溝(1)

1-1区4面28号溝



第91図 1区28号溝(2)



## 第5節 5面の調査

### (1) 5面の概要

5面は古墳時代前期の面で、遺構確認面は地表下約4mの深度に在る。5面の調査範囲は、1区東部の1-1区に限られた。

この1-1区のうち、1期調査区域(1-1区東部及び北部)の確認面は、後述する第5面以降の実確認面よりは若干高い層位にありその下位層は、調査過程で遺物包含層として認識されていたが、遺物の集中的分布は、調査区南東隅部(第92図右下寄り)から認められ、南東隅部を掘り下げて遺物の分布を確認したが、当該期の遺構は東側調査区外に在ると想定していた。

一方、2期調査区域(1-1区中央から南あるいは西側)ではH-FA下面に遺構は確認できず、その下位層で遺構の存在を認めたが、遺構の輪郭等が明瞭でなかったため、さらに確認面を下げて、基本XV層付近を確認面として遺構を確認した。その結果、竪穴住居9軒、掘立柱建物1棟、焼土遺構、土坑5基、ピット15基、溝状遺構群3か所を確認、調査した。

3期調査区域(1-1区北寄りの第1・2期調査区域の間)では、調査期間の関係から第3面と一括の調査としていたが、第2期調査区域北端の8号住居の北半部を確認した。なお、8号住居以北の区域は、遺構壁面の観察等から、5面に相当する時期の遺構は分布していないものと判断された。

なお、平成23年度の2期調査域に於いて検出された2・5・9号住居は調査域の東方に延伸していたが、1期調査域は既に工事側に引き渡され、建設資材置き場となっており、且つ第2期調査域の東壁は十分な傾斜角を設定して掘削していたものの、埋土であることもあり、安全上拡張して調査することはできなかった。

### (2) 5面の遺構と遺物

#### 1. 住居群(第92図、PL.18)

上述のように5面では9軒の竪穴住居を検出した。このうち、2・5・7・9号住居は、N-17°-Wの軸方向

を示す直線に沿って配置し(以下「住居ライン」とする)、6号住居は9m程、1号住居15m程は西側による位置に在る。また2・5・7・9号住居の位置は、確認面に於いて、西側に比べて高い位置に在るため、本住居群は、利根川西遷以前に、現利根川の河道付近に流下していた中小河川に伴う自然堤防上に営まれた集落であるものとみられる。

また、本住居群の中では8・9号住居の規模が大きいことから、集落の中心的建物であった可能性がある。

#### 2. 1号住居(第93図、PL.18・30)

**概要** 本住居は竪穴住居であるが、遺存状況は良好ではなく、掘り方が確認されているに過ぎない。

**位置** 本住居は1-1区2期調査区域北東部中程、住居ラインより西に外れた位置に在り、922~926-353~358グリッドに位置する。

**重複** 本住居は1号掘立柱建物と重複するが、土層断面観察から推して本住居の方が新しい。

**規模** 長軸：413cm 短軸：378cm 深さ：-

**構造** [竪穴]本住居のプランは、隅丸長方形を呈する。主軸はN-63°-Eを向く。

[掘り方] 幅10~52cm、深さ1~8cmを持つ周溝が一周し、北壁西部に於いては、周溝の外側(北側)に幅20cmで掘り方底面とほぼ同高のテラス状の掘り残しが見られる。また掘り方底面の中央付近には幅45cm以下、深さ6cm以下の鈎形状の溝が掘削される。この掘り方は黒色土、黒褐色土、暗褐色土等で埋め戻されている。

[柱穴・貯蔵穴] 上述のように床面は確認されないが、掘り方に於いて、柱穴、貯蔵穴等を確認した。

**遺物** 甕(609)等の土師器が出土した。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、凡そ古墳時代前期中段階級の所産と判断される。

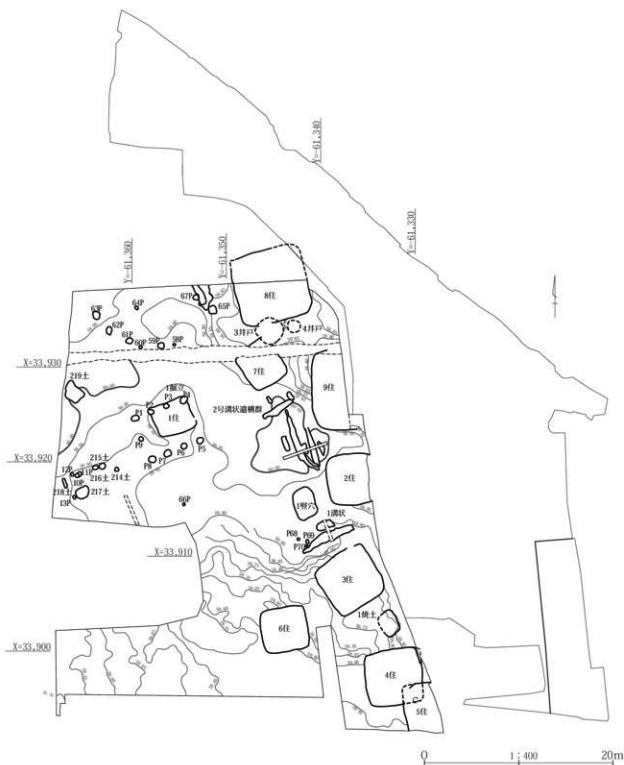
#### 3. 2号住居(第94図、PL.18・19・30)

**概要** 本住居は焼した竪穴住居であるが、上述の理由から、その東部を調査できなかった。

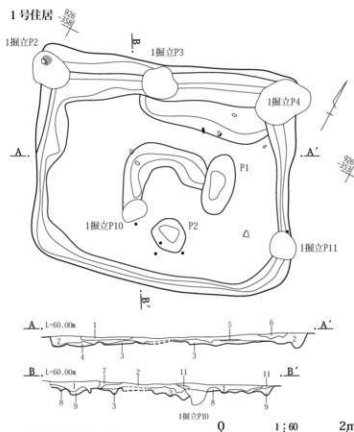
**位置** 本住居は住居ラインの中程に在り、915~921-334~340グリッドに位置する。

**重複** 本住居は単独で在り、重複する遺構はなかった。

**覆土** 本住居はロームやローム漸移層土、黒褐色土等(3



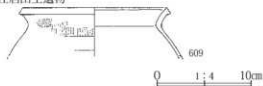
第92図 1区5面全景



1号住居 SPA・SPE・SPF

1. 黒褐色土層 黄褐色土をブロック状に少量含む。炭化物を含む。
  2. 黒褐色土層 炭化物を少量含む。
  3. 暗褐色土層 炭化物を少量含む。
  4. 暗褐色土層 黄褐色土をブロック状に含む。
  5. 黒色土層 炭化物層。
  6. にこみ黄褐色土層 黄褐色土をブロック状に含む。炭化物を含む。
  7. 黄褐色土層 炭化物を少量含む。
  8. にこみ黄褐色土層 炭化物を少量含む。
  9. 黒色土層 ブロック主体。炭化物を少量含む。
  10. 灰褐色土層 黄褐色土をブロック状に少量含む。
  11. 灰褐色土層 黄褐色土をブロック状に少量含む。
- 1号住居全土層。炭化物と粘土土のブロック。床面は未検出。セクションの下は掘方面。

## 1号住居出土遺物



第93図 1区1号住居出土遺物

～25・32層で埋没する。また壁際にいっゆる三角堆積層(39～44層)が確認され、その上面にはローム漸移層等の土葺き材(30・31・33～38層)と判断される層や、焼土・炭化物・灰等(26～29層)の堆積も見られた。

規模 長軸：545cm 短軸：(452)cm以上 深さ：51cm

P 1 径：50×28cm 深さ：60cm

P 2 径：38×32cm 深さ：71cm 柱痕径：[12]cm

P 3 径：50×40cm 深さ：69cm 柱痕径：[10]cm

P 4 径：30×(25)cm 深さ：2cm

P 5 径：25×21cm 深さ：17cm

P 6 径：26×22cm 深さ：7cm

P 7 径：22×22cm 深さ：1～5cm

P 8 径：26×23cm 深さ：2cm以下

周溝 幅：4～16cm 深さ：4～7cm

炬 径：73×46cm 深さ：6cm

構造 [竪穴]本住居のプランは、隅丸長方形を呈する。その主軸方向はN-84°-Eを向く。周提帯は確認できない。

[掘り方・床] 本住居は、外周には幅9～70cmのテラスを有し、その内側、北西部から北側と西部から南側に、幅38～75cm、深さ16cmの溝状に掘り込み、住居中央部以東には外周部より8cm以下の高さの掘り残しが見られる掘り方を有し、これを黒褐色土からローム等で埋戻し、上位に黒色土からローム漸移層土を用いて床面を造る。

[周溝]調査範囲に於いて、南壁から西壁、東部を除く北壁にかけて周溝が確認された。

[柱穴]床面にはP 1(北東)・P 2(北西)・P 3(南西)・P 4(南東)の4基の柱穴が確認される。このうち、P 1～3基はしっかりした掘り方を有するが、南東のP 4の掘り込みは浅い。柱穴のプランは楕円形を基本とする。

間尺はP 1・2が315cm、P 3・4が305cm、P 1・4が288cm、P 2・3が289cmを測り、東西列より南北列が短いので、前者を桁間、後者を梁間とするが。

また南壁に沿って柱穴P 5～8が確認されたが、このうちP 5・6は壁材固定の用に供し、P 7・8は浅い掘り込みで、入り口に伴うものと判断される。

[貯蔵穴] 貯蔵穴は確認できなかった。

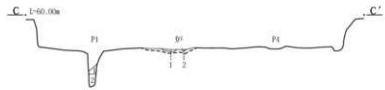
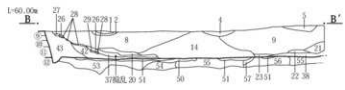
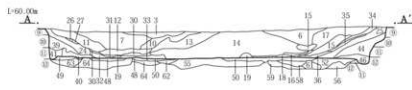
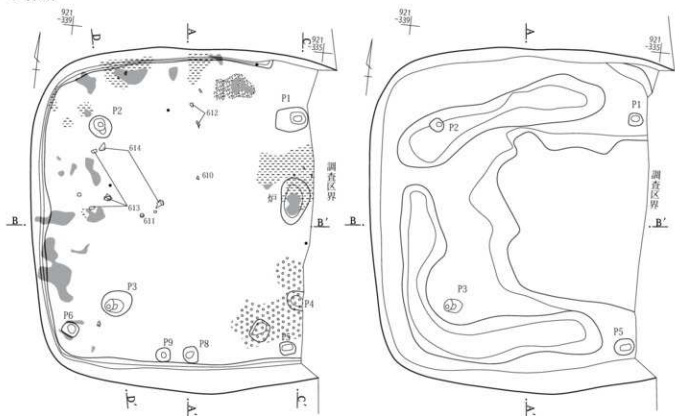
[券]炬は地床炬で、東側の柱穴P 1と3の間に確認された。炬は楕円形プランを呈し、浅い掘り込みを伴う。

[上屋]本住居の棟方向は、柱の配置から略東西方向を向き、焼失家屋であるため、柱の横に梁桁を結束したと想定される。柱痕から推定される柱材の径は、10～12cm程と細い。洗川市中筋遺跡で得られた屋根の傾斜角度28度(大塚昌彦1988、以下「大塚斜度」とする)を基に推計すると、本住居の床面から梁・桁までの高さは2.0m以上、棟までの高さは2.4m以上、地表から棟までの高さは1.8m以上を測ることになる。

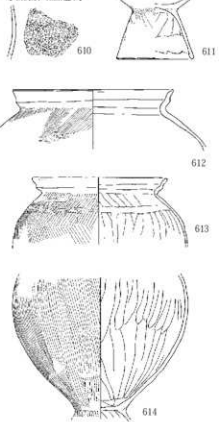
土層断面観察、焼土、灰、ローム等の平面分布から、葺き材は薄い葺き材と厚さ3・4cm程の土葺き材で構成される。

遺物 本住居からは甕(610・611)・台付甕(612～614)等

2号住居



2号住居出土遺物



0 1:60 2m

0 1:4 10cm

第94図の1 1区2号住居と出土遺物

2号住居 59A・59B

- ① 黒褐色土 粘りあり。
- ② ローム漸移層 粘り強。主に①・②の粘性あり。
- ③ ローム漸移層 明褐色土、黄褐色土、粘性あり。
1. ②・③・④層小ブロックの混入。土層ビッド。
2. 灰褐色粘質土、褐色粘質土小ブロック混入。土層ビッド。
3. ①・②・③・④層小ブロック多量混入。住居層土。
4. ①・②・③小ブロック多量混入。住居層土。
5. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
6. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
7. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
8. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
9. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
10. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
11. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
12. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
13. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
14. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
15. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
16. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
17. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
18. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
19. ③小ブロック多量混入。住居層土。
20. ②・③小ブロック多量混入。住居層土。
21. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
22. ②・③小ブロック多量混入。住居層土。
23. ②・③小ブロック多量混入。住居層土。
24. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
25. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
26. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
27. 炭化物、焼土炭化物。
28. 焼土(赤色) 灰土、焼土炭化物。
29. 焼土と炭化物の混入。焼土炭化物。
30. ②・③小ブロック多量混入。土層素材。
31. ②・③小ブロック多量混入。土層素材。
32. 黒褐色土 粘りあり。②層下層土、南側に③小ブロック混入。土層素材。
33. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
34. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
35. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
36. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
37. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
38. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
39. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
40. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
41. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
42. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
43. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
44. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。
45. ②・③・④小ブロック多量混入。土層素材。

46. ②・③・④小ブロック多量混入。
47. ②・③・④小ブロック多量混入。
48. ②・③・④小ブロック多量混入。住居層土。
49. ②・③・④小ブロック多量混入。
50. ②・③・④小ブロック多量混入。
51. ②・③・④小ブロック多量混入。
52. ②・③・④小ブロック多量混入。
53. ②・③・④小ブロック多量混入。
54. ②・③・④小ブロック多量混入。
55. ②・③・④小ブロック多量混入。
56. ②・③・④小ブロック多量混入。
57. ②・③・④小ブロック多量混入。
58. ②・③・④小ブロック多量混入。
59. ②・③・④小ブロック多量混入。
60. ②・③・④小ブロック多量混入。
61. ②・③・④小ブロック多量混入。
62. ②・③・④小ブロック多量混入。
63. ②・③・④小ブロック多量混入。
64. ②・③・④小ブロック多量混入。

P 1

1. ②・③の混入。
2. ②・③・④多量混入。

P 2

1. ②・③・④小ブロック多量混入。
2. ②・③・④小ブロック多量混入。
3. ②・③・④小ブロック多量混入。
4. ②・③・④小ブロック多量混入。
5. ②・③・④小ブロック多量混入。
6. ②・③・④小ブロック多量混入。

P 3

1. ②・③・④小ブロック多量混入。
2. ②・③・④小ブロック多量混入。
3. ②・③・④小ブロック多量混入。
4. ②・③・④小ブロック多量混入。
5. ②・③・④小ブロック多量混入。
6. ②・③・④小ブロック多量混入。

伊

1. 黒褐色土 粘りあり。②層下層土、南側に③小ブロック混入。
2. 黒褐色土 粘りあり。②層下層土、南側に③小ブロック混入。

## 第94図の2 1区2号住居土層住居記

の土師器、コナラ等の炭化材が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期中段階の所産と判断される。

なお、本建物の焼失は、炭化材等の遺存状況から推して、南風の日に南面を着火したものと想定される。

## 4. 3号住居・1号溝状遺構群

(第95図の1・2、第96図の1・2、PL.19・30・31)

概要 本住居は竪穴住居であり、焼失住居である。

位置 本住居は2期調査区域東端部、住居ラインのやや南よりに在り、903～911・336～340グリッドに位置する。

重複 本住居は北壁東部で324号土坑と重複するが、本住居の方が古い。なお、北に1号溝状遺構が近接して在る。

覆土 本住居はローム漸移層土を中心とした土層(1～21層)で埋没している。また壁際には黒色土からローム漸移層土によるいわゆる三角堆積層(41～43層)が確認され、その上位には黒褐色土からローム等の土層素材と判断される層(22～33・35～40層)も見られた。また床面に

は炭化物や灰の堆積も見られた。

なお、土層断面には幅2cm以下の噴砂の痕跡(浅黄褐色細砂質土)が確認されたが、この噴砂は弘仁9年(818年)の地震に伴うものと想定される。

規模 3号住居 長軸：605cm(最大651cm)

短軸：589cm(最大610cm) 深さ：67cm

P 1 径：27×26cm 深さ：31cm

P 2 径：40×37cm 深さ：19cm

P 3 径：38×32cm 深さ：11cm

P 4 径：42×39cm 深さ：10cm

P 5 径：21×18cm 深さ：24cm(床から：30cm)

P 6 径：43×40cm 深さ：25cm(床から：29cm)

P 7 径：31×26cm 深さ：10cm

貯蔵穴 径：112×88cm(坑部径54×48cm) 深さ：37cm

炉 径：72×(52)cm 深さ：5cm

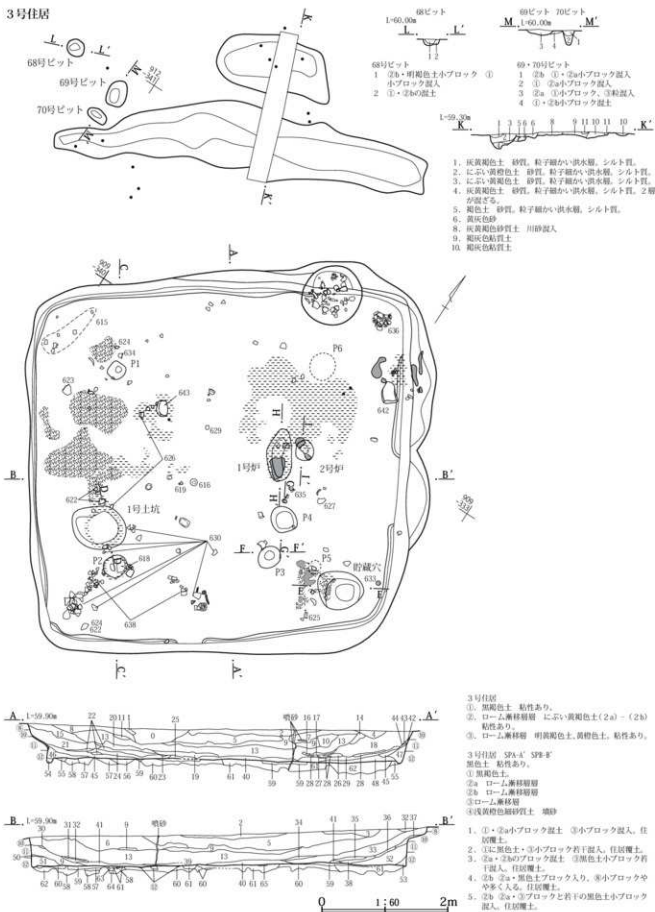
周溝 幅：5～15cm 深さ：1～6cm

(1号溝状遺構群)

溝1(北) 長さ：116cm 幅：91cm 深さ：14cm

溝2(南) 長さ：59cm 幅：102cm 深さ：11cm

3号住居



第95図の1 1区3号住居と1号溝状遺構群

6. ②b ②a・③・黒色土ブロック多く入る。住居層上。
7. ②b ③小ブロック・①・②aブロック混入し、灰黄色土小ブロックと炭化物若干混入する。住居層上。
8. ②b ②aブロック、①・③小ブロック、灰黄色土小ブロック(粘性やややく)大ブロック混入。住居層上。
9. ②a ①小ブロック、③若干混入。住居層上。
10. ①・②a・②b・③。灰黄色土ブロック混入。住居層上。
11. ②a・②bの混入。③の小ブロック若干混入。住居層上。
12. ① 若干の③ブロック混入。住居層上。
13. ②a 黒色土・①・②a・③ブロック多く入る。住居層上。
14. ②a混入大ブロック混入。①・②a・灰黄色土小ブロック混入。住居層上。
15. ②a ①・③・灰黄色土小ブロック混入。住居層上。
16. 黒色土。住居層上。
17. 土層上。住居層上。
18. ①・②a・③小ブロックの混入。③小ブロックと若干の灰黄色土大ブロック混入。住居層上。
19. ②a ①・③小ブロック混入。住居層上。
20. ②a ①・③小ブロック若干混入。住居層上。
21. ② ①大ブロック、③・③小ブロック混入。住居層上。
22. ① ②a・③小ブロック若干混入。葺き材。
23. ③ ②a小ブロック混入。葺き材。

24. ①・③小ブロックの混入。葺き材。
25. ②a ③小ブロック多く入る。葺き材。
26. ①・③混入。葺き材。
27. ②b 葺き材。
28. ①・②aの小ブロック混入。少量の③混入。葺き材。
29. ②b ①ブロック、③小ブロック、③粘りや多く入る。葺き材。
30. ②a ①・③粘り混入。葺き材。
31. ②b ③粘り混入。葺き材。
32. ②a ①・③粘り干入る。葺き材。
33. ②b ①・③・黒色土ブロックや多く入る。層上。
34. ②a 灰黄色土・③粘り混入。葺き材。
35. ②b 黒色土・②a小ブロックと③混入。葺き材。
36. ②a・②b ③粘り混入。葺き材。
37. ②a ②b小ブロックと若干の③混入。葺き材。
38. ① ③粘り混入。葺き材。
39. 黒色土・炭化物、ローム層様組織を若干含む。葺き材。
40. ②a ①・③・黒色土小ブロック若干入る。葺き材。
41. 青黒色 炭化物と灰白色灰。若干の②a・③混入。葺き材。
42. ① ②a小ブロック入る。三角層上。
43. ②a 三角層上。

## 第95図の2 1区3号住居土層記

構造 [竪穴]本住居のプランは、隅丸方形を呈する。本住居の主軸方向はN-51°-Eを向く。

[周溝帯]本住居に周溝帯そのものは確認できなかったが、住居北壁の北側140~370cm程の範囲で1号溝状遺構群(南北2条の溝から成る)が、本住居の北壁面に並走して在り、本住居の周溝帯の一部と思慮される。

1号溝状遺構群は南北2条の溝から成り、北側の溝(溝1)と南側の溝(溝2)は24~44cm程隔てて概ね並走する。溝1は緩やかな弧状を呈して、その走行は東半がN-64°-E、西半がN-53°-Eを向き、溝2はへろ字状を呈して、その走行は中・東部はN-80°-E、西部はN-54°-Eを向く。プランは整っておらず、底面には凹凸が見られる。

[掘り方・床] 外周に幅9~70cmのテラス、その内側、北西部から北側と西部から南側は、幅38~75cm、深さ16cmの溝状に掘削され、住居中央部以東には外周部より8cm以下の高さを測る掘り残しが見られる掘り方を有する。床面は、これを黒褐色土やローム漸移層土等で埋戻して造る。

[周溝]北東部と東壁及び南壁沿いの一部を除いて周溝が確認された。

[柱穴]床面と掘り方面に4基づつの小型のピットが確認された。

検出された小型ピットのうち床面で検出されたP1・P2と掘り方面で検出されたP5・P6は主柱穴と見られる。プランはP1が隅丸方形、P2・5は楕円形、P6は円形を呈するが、底面は何れも楕円状を呈し、掘り込みは凡そ30cm程である。また、主柱穴の柱間は、P1・

6及びP2・5では共に320cm、P1・2、P5・6は共に315cmを測る。

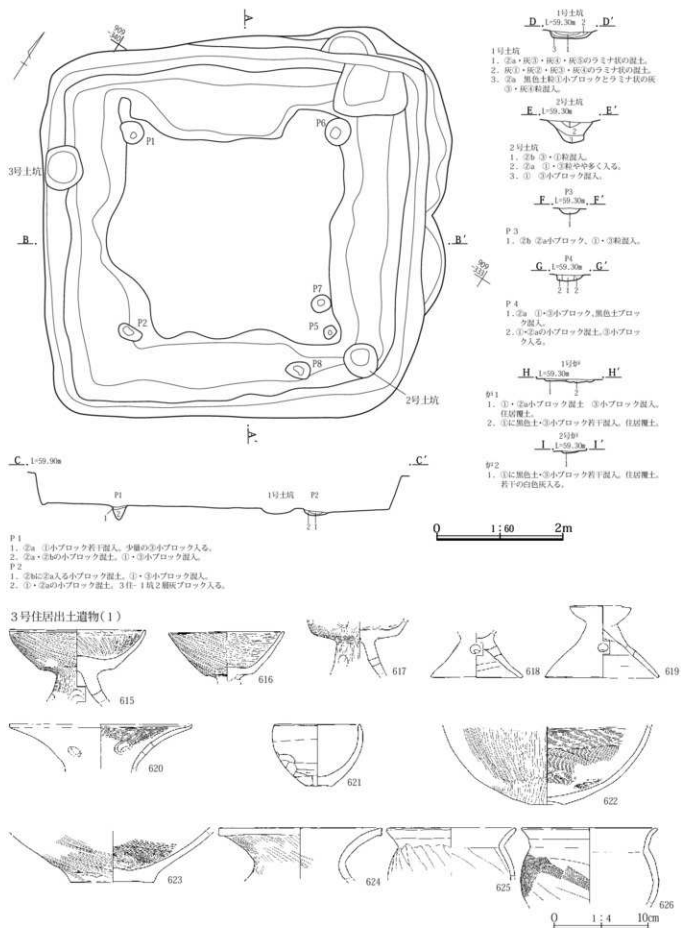
[貯蔵穴] 貯蔵穴は住居南西隅近くにあり、南壁から21cm、東壁からは33cmほど離れて、床面下12cm程で開く井筒浅顔形に掘削される。プランは隅丸長方形に近いが、底面は円形を呈する。底面は平底気味である。

[和]和は浅い掘り込みの地床で、東側の柱穴P2とP8を結ぶ線の中点より40cm北側に設けられる。南側に礫が据えられ、東側で焼土化が見られる。

[上屋]本住居の棟方向は、柱の配置から略東西方向を向くものと想定される。焼失家屋であることから、梁・桁を柱の横に結束した構造を呈するものと想定される。柱材の径は特定できない。大塚斜度(大塚1988)を基に推計すると、本住居の床面から梁・桁までの高さは1.3m以上、棟までの高さは2.2m以上、地表から棟までの高さは1.6m以上を測るものと想定される。

葺き材は土層断面観察、焼土、灰の平面分布から推して、薄い葺き材と厚さ4~10cmの土葺き材で構成される。遺物 高杯(615~619)・器台(620)・鉢(621)・壺(622~624)・甕(625~630)・台付甕(631~636)・台付甕と思われるもの(637)・小型台付甕(638・639)等の土師器、砥石(640)、敲石(641)、台石(642)、礎石の可能性のある礫があったが、これらの中には、近江辺り或いは山陰に近い甕があり、南関東系の台付甕が含まれている。所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期古段階の所産と判断される。

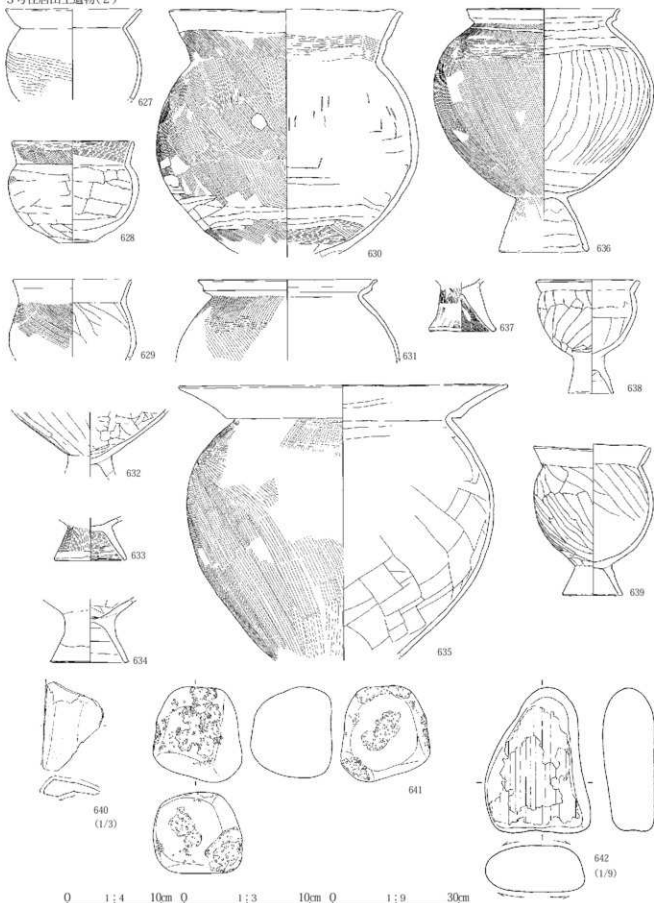
なお、焼失時の着火点等は想定できなかった。また、灰は粉殻を主体としたものであった。



第96図の1 1区3号住居掘り方と出土遺物(1)



3号住居出土遺物(2)



第96図の2 1区3号住居出土遺物(2)

5. 4号住居(第97の1・2図、PL.19・20・31)

**概要** 本住居は竪穴住居であり、焼土、灰の遺存等から焼失住居と判断される。

**位置** 本住居は2期調査区域東端南部、住居ラインの南寄りに位置し、891～900-328～335グリッドに位置する。

**重複** 本住居は南東部で5号住居と重複するが、本住居の方が古い。

**覆土** 本住居はローム漸移層土を中心とした土層(1～14層)で埋没している。また壁際にローム漸移層土を中心とした土壌でいわゆる三角堆積層(26～32層)が確認され、黒褐色土・ローム漸移層土・ローム等の土着き材と判断される層(15～22・24層)も見られた。

また床面には炭化物や焼土ブロックの堆積も見られた。

**規模** 長軸：606cm 短軸：592cm 深さ：64cm

P 1 径：33×24cm(掘り方面径：25×25cm)深さ：29cm

P 2 径：22×20cm(掘り方面径：27×26cm)深さ：36cm

P 3 径：18×17cm(掘り方面径：34×34cm)深さ：21cm

P 4 径：28×20cm 深さ：6cm

P 5 径：48×36cm 深さ：28cm

P 6 径：52×40cm 深さ：33cm

P 7 径：21×18cm 深さ：35cm(床から：38cm)

P 8 径：26×25cm 深さ：23cm(床から：29cm)

貯蔵穴 径：122×88cm 坑径：54×48cm 深さ：48cm

炬 径：72×(52)cm 深さ：3cm

周溝 幅3～7cm 深さ：6cm

**構造**〔竪穴〕本住居のプランは、隅丸方形を呈する。主軸方向はN-81°-Eを向く。

〔掘り方・床〕本住居は、中央は東西280cm、南北350cmを測る。床面から数cm内外の深さの掘り残しがあり、外周には幅7～25cmの堤状の掘り残しを伴う、内側に幅36～130cm、深さ3cm程、外側に幅19～30cm、深さ9cm程を測る二重の溝が廻る掘り方を有する。このうち両者の間にはが見られるが、床面は、掘り方を黒褐色土やローム漸移層土等で埋戻して造られる。

〔周溝〕南壁沿いの西寄り1/3から西壁、北壁、東壁の北寄り1/3にかけて周溝が確認された。

〔柱穴〕床面には5基の小型ピットが確認され、掘り方面に於いては更に3基の小型のピットを確認した。小型ピットは何れも楕円形のプランを呈する。

検出された小型ピットのうち、床面で検出されたP 1(北東)・P 2(北西)と掘り方面で検出されたP 7(南東)・P 8(南西)は主柱穴と見られる。

また、主柱穴は、P 1・2の桁間は307cm、P 7・8の桁間は309cm、P 1・7の梁間は294cm、P 2・8の梁間は共に298cmを測り、東西列より南北列の柱間の方が短い。

〔貯蔵穴〕南壁から20cm、東壁からは26～30cmほど離れて掘削される貯蔵穴を、住居南東隅近くに確認した。そのプランは床面では隅丸三角形を呈するが、底面は隅丸方形に近い。底面は丸底を呈する。

〔炬〕炬は東側の柱穴P 5と6を結ぶ線の西寄り(内側)に確認された。東西に並ぶ2箇所を炬として認識した。共に地床炬であり、共に浅い掘り込みを有する。

〔上屋〕本住居の上屋は、柱の配置から棟方向は略東西方向を向くものと想定される。焼失家屋と認識されることから、梁・桁を柱の横に結束した構造を呈するものと想定される。柱材の径は特定できない。大塚斜度(大塚1988)を基に推計すると、床面から梁・桁までの高さは1.5m以上、棟までの高さは2.3m以上、地表から棟までの高さは1.6m以上を測るものと想定される。

葺き材は土層断面観察、焼土、灰等の平面分布から、薄い葺き材と厚さ6cm以下の土着き材で構成される。

**遺物** 高杯(644～651)、高杯と思われるもの(652・653)、器台(654)、埴(655)、小型埴と見られるもの(656・657)、壺(658・659)、台付壺(660～667)等の土師器が出土したが、この中には吉ヶ谷・赤井戸式土器が含まれる。その他、叢石、鉄鏝(669)が出土した。

**所見** 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期古段階の所産と判断される。

なお、焼失時の着火点は南または北側と認識されるが、南の場合は南南東、北側の場合は北北西の風であったことが想定される。

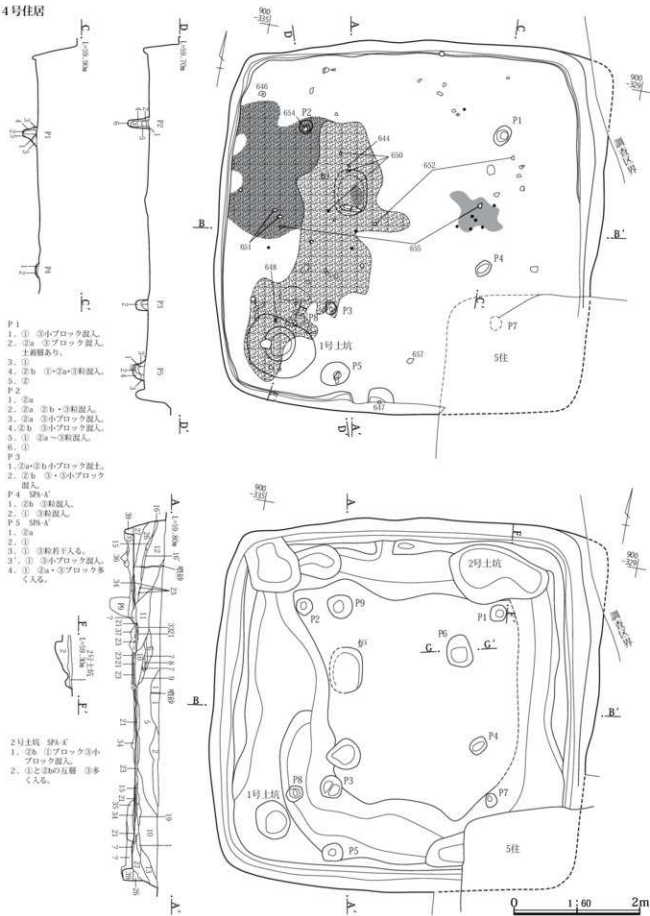
6. 5号住居(第98図、PL.19・20・31)

**概要** 本住居は竪穴住居であり、焼土の遺存等から焼失住居と判断される。

なお、その東部は調査できなかった。

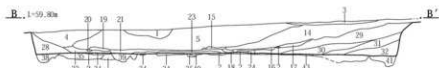
**位置** 本住居は2期調査区域東南隅、住居ラインの最南

4号住居



第97図の1 1区4号住居

### 第3章 発見された遺構と遺物



4号住居 A-A' B-B'

- ① 黒褐色土 粘性あり。
- ② ローム層状層 土色、黒褐色土(2a) - (2b) 粘性あり。
- ③ ローム層状層 明黒褐色土、黄褐色土、粘性あり。
- ④ 灰白色土 細砂質黄褐色土、粘性あるが、もろい。
1. ②b ①・②a・③ブロック混入。
2. ②a 黒色土・③ブロック若干混入。
3. ②a・②bの混土。黒色土・③小ブロック混入。
4. ②b ①・②a・③ブロック混入。
5. ②b ①・②aブロック粒と若干の③ブロック混入。
6. ②bに③・②a・③入る小ブロック混入。
7. ① 若干の②bの粗粒の小ブロック混入。
8. ②b・③の小ブロック混入。①小ブロック混入。
9. ②a ②b・③小ブロック混入。
10. ②a・②bのブロック混土。①・③小ブロック混入。
11. ②a・②b・③の小ブロック混入。
12. ②b ①が厚さ3cm程度の土が段に入り③ブロック混入。
13. ②a ①粒・③小ブロック混入。
14. ②a・②bの混土。黒色土・①・③ブロック混入。
15. ②a 黒色土②b小ブロック混入。
16. ②a 若干の③小ブロック混入。黄・褐色土化見。
17. ②a 若干の③小ブロック混入。黄土化しない。
18. 16層土と明赤褐色土の混土。
19. ②b 黒色灰と③混入。

19. ②b ①・③小ブロック混入。
20. 19層土に白色灰混入。
21. ②b ②a・③小ブロック混入。
22. ①と②bの混土。③粒若干入る。
23. 黒色灰 ②小ブロック混入。
24. ③ブロック。
25. ②b ②a小ブロックと、③粒若干混入。
26. ②b ②a小ブロック混入。
27. ③a ②aブロック混入。
28. ①・②aブロックの混土。
29. ②a 黄・褐色土化見。③・④小ブロック粒(17層中)混入。
30. ②a 黒色土ブロックと②b小ブロック・③粒混入。
31. ②b ②a・③小ブロック混入。
32. ②a ①・②b・③小ブロック混入。
33. ②b 黄土粒、若干混入。
34. ① ②a・③小ブロック入る。
35. ③a ③のブロック混入。
36. ②a ①・②b・③小ブロック混入。
37. ②b(黄土化見)と③のブロック混入。土色に黒色灰混入。
38. ①~③のブロック混土。
39. ①~②bブロックに③大ブロック入る混土。
40. ②b・③の大ブロックに①・②混入。
41. ②b ①・②aブロックと③大ブロック混入。
42. ③に②b混入。
43. ③に②b混入。
- ※ 1~14層まで層土。15層~25層まで土質。

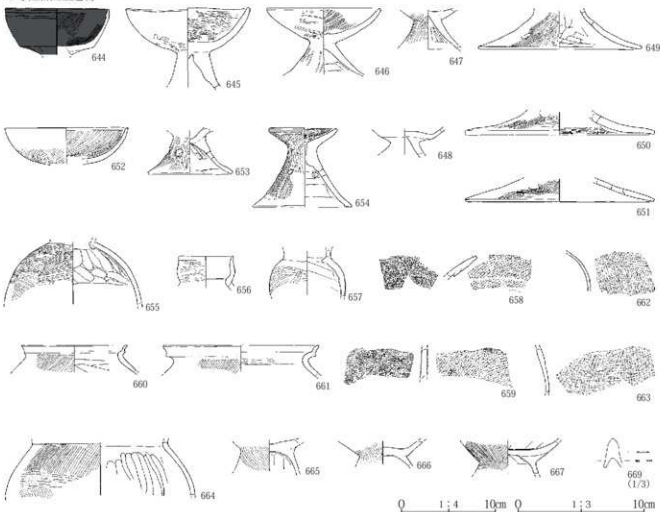


P 6 A-A'

1. ②a ②b・③粒混入。
2. 黒色灰 黄土混入。
3. ②aと③の小ブロック混土。
4. 黒色灰。
5. ②a・③粒の混土。

0 1:60 2m

#### 4号住居出土遺物



第97図の2 1区4号住居土層断面と出土遺物

に位置し、891～896・327～331グリッドに位置する。

重複 本住居の北部で4号住居と重複するが、本住居の方が新しい。

覆土 本住居はローム漸移層土を中心とした土層(1～11層)で埋没している。また壁際もローム漸移層下層土を中心とした土層でいわゆる三角堆積層(33・34層)が確認され、焼土化の見られる黒褐色土等(20・21層)の土葺き材と判断される層も見られた。

一方、住居北壁沿いのいわゆる三角堆積上、住居中央付近の床面の土葺き材と判断される土層の上に焼土の分布が見られた。

規模 残存範囲：559×356cm 深さ：55cm

P 1 径：59×47cm 深さ：54cm(床から：54cm)

構造 [竪穴]本住居のプランは、隅丸方形を呈する。主軸方向はN-81°-Eを向く。

[掘り方・床] 本住居は掘り方を有する。調査範囲の西壁際から北壁側にかけて、幅36～122cmの範囲が、南東側(中央部)に比して7cm以下で深くなっている。

この掘り方にローム漸移層土を薄く盛り、黒色土・黒褐色土等を用いて床を貼るが、底面から15cm程の間に、ローム漸移層土を間層として3枚の床面が確認された。[柱穴]床面には1基の小型のピットが確認されたが、このピットは位置的に主柱穴の可能性が考慮される。

[貯蔵穴] 調査範囲に、貯蔵穴は確認されなかった。

[炉] 炉は調査範囲の東端中央に焼土範囲が見られたが、炉と特定はできなかった。

[上屋]本住居の棟方向等は特定できなかった。

葺き材は土層断面観察、焼土等の平面分布から、ローム漸移層や黒褐色土等の薄い土葺き材が用いられていたことが確認された。

遺物 本住居からは台付甕(670～673)や甕(674)等の土師器が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期中段階の所産と判断される。

なお、着火点等は確認されなかった。

#### 7. 6号住居(第99図の1・2、PL.20・21・31・32)

概要 本住居は竪穴住居である。焼土、灰の遺存等から焼失住居と判断されるが、床面に灰層が厚く堆積する特徴がある。

位置 本住居は2期調査区域東南部、住居ラインから西に9mほど離れた位置に在り、899～904・641～346グリッドに所在する。

重複 本住居は単独で在り、他の遺構との重複は見られなかった。

覆土 本住居はローム漸移層土を中心とした土層(1～22層)で埋没する。また壁際にはローム漸移層土を中心としたいわゆる三角堆積層(23・29・31・35層)も確認され、葺き材と渾然となる堆積状況を示している。また黒褐色土等の土葺き材とみられる層(39層)も確認した。

また本住居の最も特徴とするところは、床面の中央から西部及び北壁寄りの床面に堆積する灰白色(28・33・36層)或いは黒色灰(34層)の面的堆積が見られたことである。その層厚は7cm程を測るが、執筆の時点で、このような灰の堆積の例を知らない。

規模 長軸：495cm 短軸：468cm 深さ：70cm

P 1 径：37×34cm 深さ：43cm

P 2 径：27×21cm 深さ：51cm

P 3 径：26×23cm 深さ：27cm

P 4 径：21×18cm 深さ：40cm

P 5 径：32×30cm 深さ：17cm

貯蔵穴 径：100×79cm 坑径：62×60cm 深さ：31cm

周溝 幅3～9cm 深さ：5cm

構造 [竪穴]本住居のプランは、方形に近い隅丸方形を呈するが、南西隅部は強く湾曲する。主軸方向はN-9°-Wを向く。

[掘り方・床] 本住居は、幅62～102cm、深さ10数cm程を測る、周溝状の掘り込みを伴う掘り方を有する。掘り方南部西寄りには径115×86cm、深さ18cmを測る、楕円形プランの土坑が掘削されている。掘り方をローム漸移層土やローム層土で埋め戻して、床面を造る。

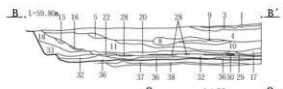
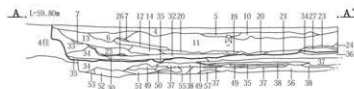
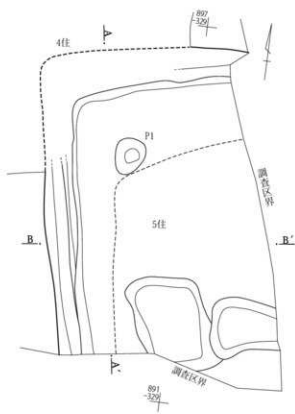
[周溝]南東隅から反時計回りに一周し、東壁から60cm程の間は南壁を離れて、南東隅から北側20cmの地点で東壁に達する。

[柱穴]床面には5基の小型のピットが確認されているが、このうちP 1(北東)、P 2(北西)、P 3(南西)、P 4(南東)が主柱穴である。

小型ピットのプランはP 1が隅丸方形、P 2・3・5は円形、P 4は楕円形を呈する。また、P 1・2は240cm、P 3・4は236cm、P 1・4は243cm、P 2・3

### 第3章 発見された遺構と遺物

#### 5号住居

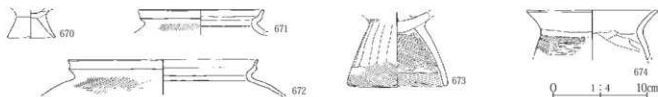


#### 5号住居 SPA-A' SP#キ

- ① 黒褐色土 粘性あり。
- ② ローム森林層 土崩・黒褐色土(2a)・(2b) 粘性あり。
- ③ ローム森林層 明黒褐色土、黒褐色土、粘性あり。
- ④ 灰白色土 細粒炭酸塩化層、粘性があるが、もろい。
1. 灰黒褐色土 ③小ブロックが入る、粉質。
2. ① 若干の6a・c・③粘入。
4. 2a ②a・③小ブロック若干混入。
5. 2に似るが黒褐色土小ブロック若干混入。
6. 2b ①・②a・③小ブロック、③ブロック多く入る。
7. 2b
8. 2a ③大ブロック・③小ブロック混入。
9. 2b
10. 9層より下位の2b ラミナ状の①と③小ブロック混入。
11. ①・③の大ブロックの混入。③ブロック混入。
12. 2b ③の小ブロック混入。黒褐色土・①・③小ブロック混入。
13. ①・③小ブロック混入。
14. ③に混入する小ブロック混入。①・②a小ブロック混入。
15. 粘土化見る②a(暗赤褐色)と粘土ブロック混入。
16. 粘土化見る① 粘入。
17. 2b ③ブロック混入。
18. ③に混入するブロック混入。①・②a小ブロックと若干の褐色粘土
19. ③ ③小ブロック混入。
20. 薄い粘土化見る①(黒褐色土) 若干の③粘と少量の粘土小ブロック混入。

21. 粘土と粘土化見る①・黒褐色土(青黒色)小ブロックの上下をはさむ。
23. 16に粘土粘、黒色灰混入。
24. ②b ①・②a小ブロック混入。
25. ②b・③小ブロック、①・③小ブロック混入。
26. 粘土化見る③層土。
27. 2b ③小ブロック混入、2層土境に黒色灰入る。
28. 2a
29. 粘土化見る黒褐色土と①の粘土、粘土入る。
30. 粘土。
32. 2a ①・③小ブロック混入。隙所に、混入物の遺跡有り。
33. ②a・②b・③のブロック混入。③小ブロック混入。
34. 2b 若干の③・黒褐色土粘入。
35. ①・②a・③小ブロック混入。
36. ① ②a小ブロックと若干の③粘入。
38. 2aに①入る小ブロック混入。若干の③混入。
48. ②a ③入る小ブロック混入。
50. ③ブロックに①・③入る。
51. 2a・③ブロック ①・②a小ブロックと若干の③小ブロック混入。
52. ①・③ブロック ①・②a小ブロック混入。
53. 2b
55. ①に③ブロックと若干の②a小ブロック混入。
56. ③に②aブロック混入。
57. 2a・③ブロック。

#### 5号住居出土遺物



第98図 1区5号住居と出土遺物

は246cmを測り、東西列の方が南北列より長い。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴は住居南西隅部に確認したが、貯蔵穴は住居西部半を囲む低い小堤に囲まれた区域の西端に掘削されている。この小堤は、住居南壁の中央から、周溝を挟んで90cm程直線的に北方に延び、直角に西に折れて、極緩やかに北側に湾曲しながら、柱穴P3付近まで1m程西に進み、ここから西壁まで1.1m程の間は、貯蔵穴の北を巻くように北側に屈曲する。小堤は南壁際からP3付近までは基底幅33～35cm、上幅6～10cm、高さ5cm以下で、P3以西は、基底幅46～80cm、上幅10～18cm、高さ2cm以下を測る。

貯蔵穴は井筒朝顔形の掘削形態で、床面のプランは扇形を呈し、井筒部は方形に近い隅丸方形を呈する。〔方〕は柱穴P2・3の間の浅い掘り込みが連なる箇所にもその可能性を考慮したが、位置は特定できなかった。〔上屋〕本住居の棟方向は、柱の配置等から略南北方向にあると想定したが、東西を向く可能性も残る。建築材はクスギ等を用い、柱材の径は特定できないが、P3・4が柱痕のものである可能性も考慮される。大塚斜度(大塚1988)を基に推計すると、本住居の床面から梁・桁までの高さは1.5m以上、棟までの高さは2.1m以上、地表から棟までの高さは1.3m以上となる。

底面に層厚7cm程の灰が広い範囲で分舞していたが、科学分析所見から、この灰には靱殻が多く含まれていることから、葺き材の可能性が低いことが確認された。

遺物 本住居からは、高杯(675～682)・高杯と思われるもの(683)・器台(684)・蓋(685)・鉢(686・687)・小型壺(688・689)・埴(690)・壺(691～694)・甕(695～698)・甕と見られるもの(699)・小型台付甕(700・701)・台付甕(702～710)を含む土師器、敲石(711・712)が出土した。所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期古段階の所産と判断される。

なお、着火点は南または北側と認識されるが、南の場合は南南東、北側の場合は北北西の風であったことが想定される。

#### 8. 7号住居(第100図の1・2、PL.21・32・33)

概要 本住居は竪穴住居である。3面5号溝の調査中に確認された。また本住居は床面の焼失住居と判断される。位置 本住居は2期調査区域北東部、住居ラインの北寄

りにあり、927～933-343～348グリッドに位置する。

重複 同時期の他の遺構との重複は見られなかった。

覆土 本住居は黒色土からローム漸移層土等の土壌(1～11層)で埋没し、壁際では同様の土壌でいわゆる三角堆積層(18・20層)を確認している。また黒褐色土やローム漸移層土から成る土葺き材の層(13・14層)も確認された。

規模 長軸：490cm 短軸：419cm 深さ：32cm

P1 径：63×33cm 深さ：23cm

P2 径：78×66cm 深さ：15cm

P3 径：64×60cm 深さ：15cm

P4 径：69×60cm 深さ：11cm

P5 径：54×41cm 深さ：3cm

P6 径：14×10cm 深さ：14cm

P7 径：27×25cm 深さ：18cm(床から：36cm)

P8 径：29×24cm 深さ：18cm(床から：32cm)

P9 径：22×19cm 深さ：14cm(床から：25cm)

P10 径：22×20cm 深さ：8cm

1号埴 径：65×40cm 2号埴 径：37×36cm

3号埴 径：72×43cm 4号埴 径：50×(23)cm

周溝 幅3～11cm(凡そ8cm) 深さ：5cm

構造 〔竪穴〕本住居のプランは、隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-34°-Eを向く。

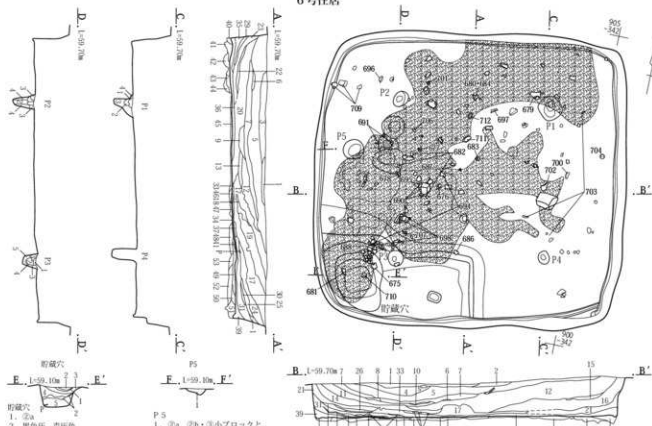
〔掘り方・床〕 本住居は、西側が東側より5cm程深く、土坑状の掘り込みが散見される掘り方を有し、これを下位にローム、上位に黒褐色土を主体とする土で埋め戻して床面を造る。

〔周溝〕重複箇所を除く残存範囲では、南壁東寄りの土坑P5を含む60cmを除く範囲で、壁面下を巡る。

〔柱穴〕床面では四隅近くに、隅丸方形を呈する土坑が確認され、このうち北西隅のP2の底面に、柱の荷重による塑性変形と判断される径24×21cm、深さ12cmを測る、隅丸方形プランの小ピットがある。またP2～4は、平面規模が大きく、礎板の設置が窺われる。なお、P1～4を主柱穴とした場合、その柱の径は20cm程であり、掘削位置は住居の隅に寄り過ぎるため、いわゆる壁柱穴に近いものと想定される。

一方、掘り方面では、明らかに主柱穴と見られるP7～9の3基を確認した。これらが床面に現れなかったのは、床面の形成により検出し辛かったが、建て替えによ

6号住居

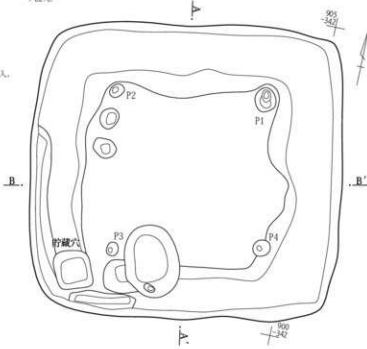


貯蔵穴  
1. ②a  
2. 黒色灰 青灰色  
3. ②b ①粒・③小ブロック・炭粒混入。  
4. ②a ②b・③粒混入。  
5. ②a 黒色土小ブロック若干混入。

6号住居 4-A' 8-B'  
①. 黒褐色土 粘状あり。  
②. ローム層群層 ぶよい黒褐色土(2a) - (2b) 粘状あり。  
③. ローム層群層 明黒褐色土。黄褐色土。粘状あり。  
④. 灰白色土。前記層に黒褐色土。粘性があるが、もちろ。  
⑤. 黒褐色土 粘状あるが、やや細粒質。

1. 黒色土 ①・②a・②b・③。焼土化した②a層土(青黒色土)のブロック混入。  
2. ① ②a小ブロックとやや多くの③粒入る。  
3. ① ③小ブロック入る。若干の黒色土・③小ブロック混入。  
4. ①・②aのブロック混入。②b・③と若干の黒色土小ブロック・粒入る。  
5. ②a 多量の①・②b・③小ブロック・粒入る。若干の黒色土小ブロック入る。  
6. ②bに入る小ブロック混入。③小ブロック混入。  
7. ②と③の小ブロック混入。①小ブロック粒入る。  
8. ③  
9. ②b ②b・③小ブロック混入。  
10. ②と③の小ブロック混入。  
11. ②b ③小ブロックと少量の炭化物混入。  
12. ②aに入るブロック混入。黒色土・①・③小ブロック若干混入。  
13. ②b 若干の黒色土・③小ブロック混入。  
14. ②a・②bの小ブロックと③のブロックの混入。1の焼土化した②小ブロック混入。  
15. ②b ①・②a・③小ブロック混入。  
16. ②b ③ブロックやや多く入る。若干の①・黒色土ブロック混入。  
17. ②b ③のブロック混入。①・③小ブロック混入。  
18. ①・②a・②bのブロック混入。若干の③小ブロック入る。  
19. 黒色土 ①・②a・②b・③小ブロック混入。  
20. ①・②aのブロック混入。黒色土・③小ブロック混入。  
21. ① 若干の黒色土・③小ブロック混入。  
22. ②a 多量の③粒混入。  
23. ②b ①・②a・③小ブロック混入。  
24. ②a 黒色土・②b・③小ブロック若干混入。  
25. ②a ③ブロック混入。①・②a・黒色土小ブロック混入。  
26. ②b ③小ブロック混入。  
27. ① やや焼土化せる ②b。③小ブロック下位にあり。  
28. 灰色灰層(黄褐色、灰色) 層かに③小ブロック入る。  
29. ②a ①の小ブロック混入。②b。③小ブロック混入。  
30. ②a ③小ブロック混入。  
31. ②a ①・②b・③・黒色土小ブロック混入。  
32. 焼土化せる②bと黒色土(層)の混入。  
33. 白色灰 焼土(褐色)小ブロック混入。  
34. 黒褐色  
35. ②a 多量の③粒混入。  
36. ②aと灰色灰の互層。  
37. ②a ③小ブロック。黒色土・③粒若干混入。  
38. ②a 多量の③小ブロック混入。  
39. ①・②b小ブロック混入。若干の③小ブロック混入。  
40. ③に②b・①小ブロック混入。  
41. ③に入るブロック混入 ②a・①小ブロック混入。  
42. ①に②・③小ブロック入る。  
43. ①・②a・③・③小ブロック混入。

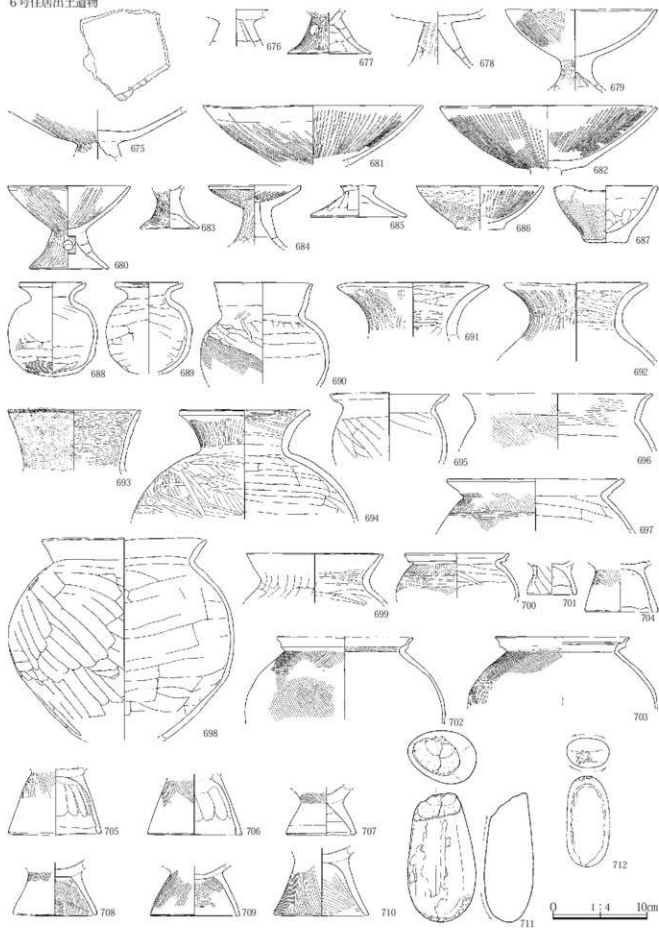
44. ③ P 1  
45. ③ 地山土位に①・②b乗る。 1. ②a ③粒多く入る。  
46. ③ ③小ブロック多く入る。 2. ②a ③粒少く入る。  
47. ③ ②a・②b小ブロック混入。 3. ① ③粒多く入る。  
48. ①・②・③・③の小ブロック混入。 4. ②b 若干の③粒入る。  
床近く(②a)は粘状細かい、ペドト下の床下土混層土。  
49. ③ ③・②a小ブロック若干混入。 1. ①と②aの混入。  
50. ①・②b・③の小ブロック混入。 2. ① ③粒若干混入。  
51. ②a・③の小ブロック混入。 3. ① ③小ブロック混入。  
52. ③ ③・②aの混入。  
53. ②b ③・③小ブロックの混入。  
54. ①・③ブロックの混入。②b小ブロック混入。



第99図の1 1区6号住居  
0 1:60 2m

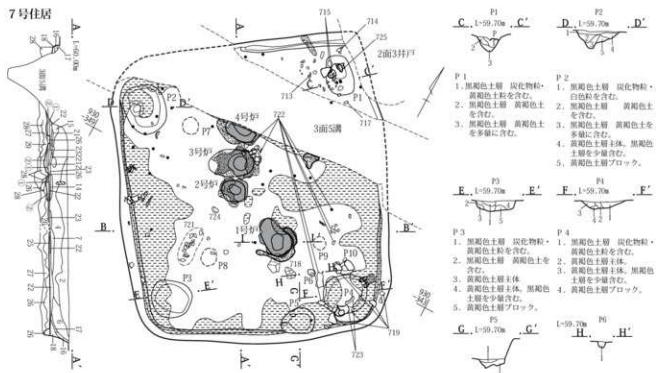


6号住居出土遺物



第99図の2 1区6号住居出土遺物

7号住居

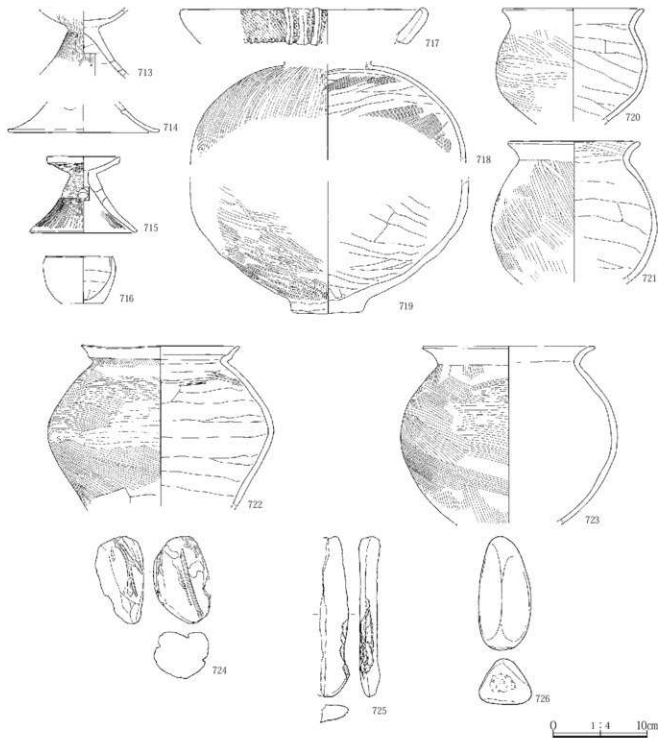


7号住居 SPA-A' SPB-B'

- ①. 黒褐色土 粘性あり。
- ②. ローム麻粒層等 に多い黒褐色土(②a-②b) 粘性あり。
- ③. ローム麻粒層 明黄褐色土、黄褐色土、粘性あり。
- 1. 黒色土①・②a・②bのブロックの混入。
- 2. ①・②a・②b・③ブロック、黒色土小ブロック。
- 3. ②aブロック。
- 4. ②a・②bブロック混入。①・③ブロックや砂多く入る。
- 5. ①・②aブロックの混入。③ブロック若干混入。
- 6. ②bに②a入るブロック混入。黒色土・①・③ブロック混入。
- 7. ②aに②b入るブロック混入。黒色土、小ブロック混入。
- 8. ②aに①・②a入るブロック混入。
- 9. ①に②a入るブロック混入。硝礫混入。
- 10. 黒色土・①・②a・②bのブロック混入。③ブロック入る。
- 11. ③ブロック。
- 12. ① 若下の混入。
- 13. ① 若下の3和混入。
- 14. ②b 若下の3和混入。
- 15. ③に②b入るブロック混入。①・②aブロック混入。
- 16. ①
- 17. ②a ③混入。
- 18. ③に②a～③和・炭化物入る。
- 19. ②a ③ブロックと若干混入。
- 20. ②b 若下の②a小ブロック混入。
- 21. ②b 若下の②a小ブロック混入。
- 22. 黒色土
- 23. ②b 灰白色炭混入の箇所あり。②a小ブロック混入。
- 24. ②b ①小ブロック混入。
- 25. ②と②bの混入。
- 26. 黒褐色土 ローム麻粒層ブロック(明黄褐色土)を少量含む。
- 27. ローム麻粒層ブロック(明黄褐色土)主体、黒褐色土を少量含む。
- 28. ②6c粘土粒を含む。
- 29. ②6cにローム麻粒層ブロック多量、粘土粒含む。
- ※ 1～12・15硝、 13・14硝、 土粒さ 26～29硝、 取り方

第100図の1 1区7号住居

## 7号住居出土遺物



第100図の2 1区7号住居出土遺物

### 第3章 発見された遺構と遺物

り埋没したものの可能性が窺われる。

また、主柱穴の柱間は174cm、P 8・9の柱間は210cmを測る。一方、床面に確認された柱穴の柱間は、P 1・2は325cm、P 3・4は280cm、P 2・3は302cm、P 1・4は351cmを測る。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴は把握できなかった。

〔灰〕がは地床がであったが、床面に焼土面が散見されたため、明確に把握できなかった。

〔上屋〕本住居の上屋は、柱の配置等から棟方向は北東-南西方向にあると想定した。柱材の径は、P 1～4では径20cm程、P 7～9は最大でも径20cm以下と想定される。大塚斜度(大塚1988)を基に推計すると、本住居の床面から梁・桁までの高さは1.1m以上、棟までの高さは1.55m以上、地表から棟までの高さは1.15m以上を測る。

埋没土地中に壁沿いに炭化物の分布が見られ、床面に焼土面が見られる。土葺き材は厚さ3cm程である。

遺物 高杯(713・714)・器台(715)・鉢(716)・壺(717～719)・甕(720～723)等の土師器、砥石と見られる石製品(724)、敲石(725・726)が出土した。

所見 本住居の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期中段階の所産と判断される。

なお、本住居も焼失家屋であるが、着火点は想定できなかった。

#### 9. 8号住居・3号溝状遺構群(第101図、PL.21・22・33)

概要 本住居は竪穴住居である。本住居は南半部が1-1区2期調査で、北西部が1-1区3期調査で調査したが、北東部は1・3期調査区域の狭間に入って、調査できなかった。

位置 本住居は、略北北西-南南東方向に連なる住居群の北端に在り、1-1区2期調査区域北東隅部、3期調査区域の南東隅部に位置する。934～941-340～349グリッドに所在する。

重複 本住居は同時期の他遺構との重複はなかった。

覆土 本住居はローム漸移層下層土を中心とする土壌(13・18・31層)等で埋没し、壁際も黒褐色土やローム漸移層土等の土壌でいわゆる三角堆積層(33～38層)も確認される。またローム漸移層下層土やロームから成る土葺き材と思われる土層(21・21'・24層)も確認された。

#### 規模 (8号住居)

長軸:773cm 短軸:770cm 深さ:42cm

P 1 径:72×66cm 深さ:80cm

P 2 径:80×80cm 深さ:87cm

P 3 径:77×76cm 深さ:46cm

P 4 径:72×69cm 深さ:46cm

土坑1 径:72×61cm 深さ:46cm

土坑2 径:120×57cm 深さ:50cm(床から:56cm)

周溝 幅10～31cm 深さ:14cm

#### (3号溝状遺構群)

溝 長さ:157cm 幅:106cm 深さ:14cm

構造 〔竪穴〕本住居のプランは、隅丸方形を呈する。主軸方向はN-11°-Wを向く。

〔周溝帯〕本住居に周溝帯を明確には確認できなかったが、住居西方2.2m程の位置に3号溝状遺構群がある。この遺構は交差する2条の溝に見えるが、交差点から北側が東、南側が西に出る溝が遺構である。

この溝は、N-8°-Wに走向をとり、直線的に走行する。掘削形態は不整で、底面にも凹凸が見られる。

〔掘り方・床〕本住居は、壁沿いには幅10～22cmを測るテラス状の掘り残しの内側に、幅112～181cm(標準120cm程)、高さ48cm以下の周溝状の掘り込みが見られる掘り方を有し、これを黒褐色土からローム層土で埋戻し、ロームを含む灰黄褐色粘質土で床面を造る。

〔周溝〕周溝は、東壁(南半)から南壁、西壁南部にかけて、壁面下を巡る。

〔柱穴〕本住居の床面には5基の柱穴・土坑があった。このうち主柱穴は、P 1(南西)、P 2(南東)、P 3(北東)で、そのプランは、P 1・2は楕円状、P 3は隅丸方形を呈する。共に底面には柱の荷重による塑性変形と見られる窪みが見られる。なお、P 2は、床面より、掘り方面の方が平面的に大きく、その径は96×85cmを測る。

また柱間は、P 1・P 2では445cm、P 1・P 3では404cmを測る。

〔貯蔵穴〕貯蔵穴の可能性のあるのは、床面の西壁際や北寄りで確認した、楕円形プランの土坑1である。一方、掘り方面の南壁西端付近に確認された土坑2は、東西に長い隅丸長方形のプランを呈するものであるが、これが当初の貯蔵穴であった可能性が考慮される。

〔灰〕がは地床と想定されるが、特定はできなかった。



なお、P1とP3を結ぶラインの80cm程北側に、径42×38cm、南側に径41×31cmを測る焼土面がある。

[上屋]本住居の棟方向は東北東-西南西方向を向くものと想定した。また、大塚斜度(大塚1988)を基に推計すると、本住居の床面から梁・桁までの高さは1.3m以上、棟までの高さは2.4m、地表から棟までの高さは2.0m程を測るものと想定される。

また、住居の断面観察から、屋根には土葺きが施されていた可能性が考慮される。

遺物 高杯(727)・埴(728)・壺(729～732)・台付甕(733・734)等の土師器と叢石(735)が出土した。

所見 本住居の時期は明瞭ではないが、出土遺物から推して、古墳時代前期の所産と判断される。

#### 10. 9号住居・2号溝状遺構群

(第102図の1・2、第103図、PL.22・33)

概要 本住居は竪穴住居である。

本住居は1-1区の第1期調査では確認できず、第2期調査で確認したが、その東半を調査できなかった。

位置 本住居は2期調査区域東端部中央やや北寄り、住居ラインの中程、923～321-336～340グリッドに位置する。

重複 同時期の遺構との重複はなかった。

[覆土]本住居はロームから黒褐色土等で埋没する。また壁際には黒褐色土やローム漸移層土等によるいわゆる三角堆積層(50～56層)が確認されている。また層厚の薄い14層(浅黄褐色土)や18層(褐灰色土)、24層(明黄褐色土)は土葺き材の可能性が考慮される。

規模 (9号住居)

長軸：(855)cm 短軸：(372)cm以上 深さ：67cm

P1 径：75×72cm 深さ：32cm 柱痕径：[19]cm

P2 径：72×55cm 深さ：54cm 柱痕径：[12]cm

周溝 幅：2～10cm 深さ：2～10cm

(2号溝状遺構群)

溝1 長さ：76cm 幅：38cm 深さ：-cm

溝2 長さ：99cm 幅：46cm 深さ：-cm

溝3 長さ：319cm 幅：83cm 深さ：-cm

溝4 長さ：161cm 幅：53cm 深さ：3cm

溝5 長さ：745cm 幅：68cm(本体幅：40cm)  
深さ：19cm

溝6 長さ：116cm 幅：52cm 深さ：8cm

溝7 長さ：424cm 幅：64cm 深さ：6cm

溝8 長さ：154cm 幅：48cm 深さ：8cm

構造 [竪穴]本住居は凡そ西半部を調査したに過ぎず、調査範囲の北端も3面5号溝に壊されていたため、空容は詳らかではないが、隅丸形状を呈すると判断される。本住居の主軸方向はN-6°-Wを向く。

[周溝帯]本住居に周溝帯は明確にできなかったが、住居南西方1.1～1.9m程隔った位置に2号溝状遺構群がある。2号溝状遺構群は8条の溝状遺構から成るが、溝3を除き、略北北西-南南東方向にほぼ並行し、溝3のみがこれに直交する。掘削形態に特段の規格性は見られないが、底面は凹凸が見られる。また、特に溝5は、9号住居の壁から240～400cm程隔たものの、その走行は、9号住居の西壁から南壁に沿うように在ることから、本遺構群は周溝帯に伴うものと思慮される。

[掘り方・床] 本住居は、掘り方の外周に幅72～140cm、深さ9cm以下の周溝状の掘り込みと、浅い土坑状の掘り込みを伴う掘り方を有する。これをローム漸移層土下層土等で埋め戻して床を造るが、床の一部にはロームを主体とした貼床(57層)が施されている。

[周溝]調査範囲全体の壁際には、幅の狭い周溝が設けられる。

[柱穴]床面には、主柱穴と判断されるP1(南西)・P2(北西)の2基の柱穴を確認した。P1・2間の柱間は、440cmを測った。

[貯蔵穴] 貯蔵穴は確認できなかった。

[埴] 埴も確認できなかった。

[上屋] 大塚斜度(大塚1988)に勘案すれば、床から棟までの高さは3m以上と想定される。

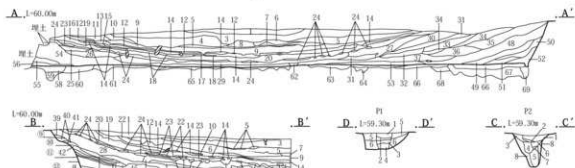
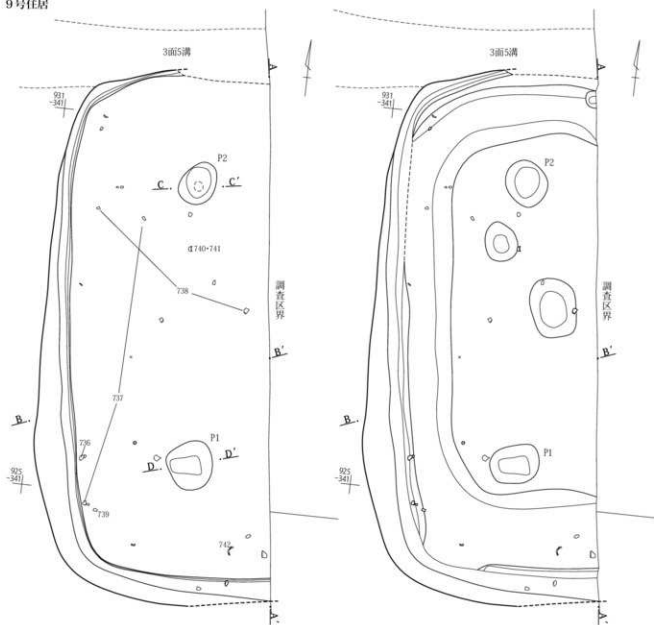
遺物 高杯(736・737)・埴(738)・壺(739)・台付甕(740～742)等の土師器が出土した。

所見 本住居の時期は、古墳時代前期中段階の所産と判断される。

#### 11. 1号掘立柱建物(第104図、PL.22・33)

概要 本建物は、中央列の柱が、西側内寄りのものを除いて確認されているため総柱の掘立柱建物に分類される。しかし、南北両側の柱穴と中央列の柱穴の規格が

第3章 発見された遺構と遺物  
9号住居



- P1
1. ②a ③小ブロック混入。
  2. ①
  3. ②b ③小ブロック混入。
  4. ① ③小ブロック混入。
  5. ②a ③粘入。
  6. ①・②a・②b・③ブロック混入。

- P2
1. ②b 灰化物(小ブロック状)と③粘入り。若くは粘土小ブロック入る。
  2. 黒色土 ③粘層かに入る。
  3. ②a 黒色土粘と③小ブロック混入。
  4. ①と③の入りブロック混入。
  5. ②a・②bの混入に③小ブロック混入。
  6. ③に②b入る混入。
  7. ③に黒色土・②a・③小ブロック混入。
  8. ①~③の混入。

0 1:60 2m

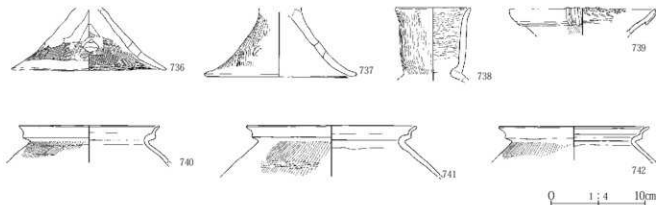
第102図の1 1区9号住居と3号溝状遺構群

9号住居跡のトラス

- ① 黒褐色土 粘性あり。
- ② ローム層群層 土質は黒褐色土(2a・2b) 粘性あり。
- ③ ローム層群層 明黄褐色土、粘性あり。
- ④ 灰白色土 前地底灰化層、粘性あるが、もろい。
- a. 灰白色ローム層群層 細砂質で極めて硬質、重量から40cm、トラスから28cmで往35cm程に張り方に異なる。
- b. 黄褐色ローム層群層 粘性あり、硬質。
1. 赤褐色土 細砂質、粘性やや強、酸化鉄質入る。自然堆積。
2. 灰褐色土 細砂質、粘性やや強、自然堆積。
3. 2a. ①・②の小ブロックと若干の⑤層土小ブロック混入。
4. 2b. ②a・③と若干の小ブロック混入。
5. 赤褐色土 粘性あり。
6. 2a. ②b・③と若干小ブロック混入。
7. ⑤層土に若干小ブロック混入。北寄りでは②a大ブロック。
8. 2a. ②a・③の小ブロック混入。
9. 2a. ②b小ブロック混入。
10. 2a. ②b小ブロック混入。
11. 2b. ②b・③の層土小ブロック混入。
12. 灰黄褐色土シルト質。洪水位土が、②b・③混入の一部か。
13. 12・14・⑤の混入の混入。
14. 浅黄褐色土 シルト質。酸化鉄質に沈着、②b・③混入。
15. 14層土と16層土の小ブロック混入。
16. 2aと14層土の小ブロック混入。
17. 18層土と⑤の小ブロック混入。
18. 赤褐色土 シルト質、粘性あり。
19. ⑤層土と③の小ブロック混入。
20. 2b. ③ブロック混入。②aブロック混入。
21. 14・20層土の混入。
22. 浅黄褐色土 シルト質。②b・③混入。
23. 2b. 若干の⑤層土小ブロック混入。
24. 明黄褐色土 ②b・③混入。
25. 2a. ②bブロック・③小ブロック若干混入。
26. 1層土、下位②a中心の混入。
27. 2b. ③小ブロックと少量の黒褐色土大ブロック混入。
28. 2a. 若干の③小ブロック混入。
29. ①・②aのブロック混入。2b. ③ブロック混入。
30. 2a・②b・③の小ブロック混入。黒褐色土小ブロック若干混入。
31. 2a. ③粘若干混入。
32. 2b. ③粘若干混入。

33. 2b. 黒褐色土・②a・③小ブロック多く入る。
34. 2a. 黒褐色土和②a混入。
35. 2b. ②a・③ブロックと若干の黒褐色土小ブロック混入。
36. 35に似るが、混入物や粘若干小さい。
37. 2a・②bのブロック混入。①・③小ブロック混入。
38. 2a. ③小ブロック入る。
40. ①・②aの混入。③小ブロック入る。
41. 2a. ③小ブロック入る。
42. 2b. ③小ブロック入る。
43. ①に②a入る小ブロック混入。
44. 2a. ③小ブロック入る。
45. 2a. ①・②b・③ブロック入る。
46. 2a・③のブロック混入。②b・③小ブロック入る。
47. 46に似るが、混入物あり。
48. 2a. ①・②a・③ブロック入る。
49. ①・③の小ブロック混入。
50. ①・②aのブロック混入。②bブロックと若干入る。
51. ①・②a・③のブロック混入。
52. 2b. ②aブロック入る。
53. ①に②a・③混入る小ブロック混入。
54. 2a. ①・②b・③ブロック多く入る。
55. 2b. ①・②a・③粘若干混入。
56. 2a・②b. の混入。③小ブロックと少量の黒褐色土小ブロック入る。
57. ③に若干の②a入る小ブロック混入。
58. 2aと③のブロック混入。①・②a小ブロック混入。
59. 2a・②bの混入。黒褐色土・①・③小ブロック混入。
60. 2a・③のブロック混入。①小ブロック混入。
61. ③・③ブロック混入。①・②b小ブロック混入。
62. 2a・③の混入。①小ブロック混入。
63. ②bに①と若干の②a・①ブロックの混入。②a多く入る。
64. ①・③粘の混入。
65. 2b. ③と若干の②a小ブロック入る。
66. 2bと③小ブロック混入。②粘若干混入。
67. 2b. ①・②a・③小ブロックと若干の②a大ブロック混入。黒褐色土小ブロック混入。
68. 2a・②bの混入と③小ブロック混入。
69. 2a・③の小ブロック混入。ややしまりつく。
70. 黒褐色土・①・②aの小ブロックと③ブロックの混入。
71. ③ブロックと②bブロックの混入。黒褐色土・②a小ブロック混入。

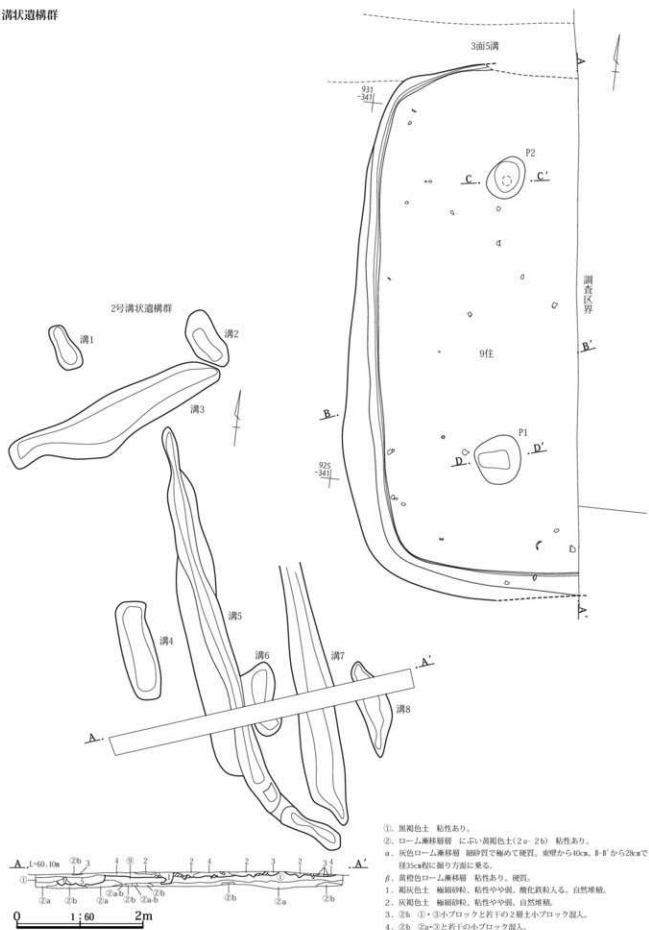
## 9号住居出土遺物



第102図の2 1区9号住居掘り方と土層注記及び出土遺物



溝状遺構群



第103図 1区9号住居と2号溝状遺構群

異なる(前者に比し後者が小さく掘削深度も浅い)ため、倉庫棟の礎柱の建物とは性格が異なる。

位置 本建物は1-1区2期調査区域北東部中程、略北北西-南南東方向に連なる住居群より西に12m程外れた位置に在り、319-326-353-358グリッドに位置する。

重複 本建物は北東部で1号住居と重複するが、土層断面観察から推して本建物の方が古いと認識される。

覆土 本建物の覆土は、柱痕、埋土共に黒褐色土やローム漸移層下層土を主体とした土壌で構成されている。

規模 範囲：432×428cm

P 1	径：56×39cm	深さ：75cm	柱痕径：12cm
P 2	径：43×36cm	深さ：58cm	柱痕径：5～12cm
P 3	径：39×34cm	深さ：84cm	柱痕径：6～12cm
P 4	径：61×43cm	深さ：70cm	柱痕径：12～16cm
P 5	径：50×44cm	深さ：57cm	柱痕径：12cm
P 6	径：43×38cm	深さ：55cm	柱痕径：8～14cm
P 7	径：54×46cm	深さ：77cm	柱痕径：6～13cm
P 8	径：52×45cm	深さ：76cm	柱痕径：14cm
P 9	径：33×32cm	深さ：33cm	柱痕径：10cm
P 10	径：28×20cm	深さ：25cm	
P 11	径：29×28cm	深さ：35cm	

構造 上述のように本建物は3×2間の掘立柱建物である。主軸(棟)方向はN-68°-Eを向く。

[柱穴の配置]本建物は南北列に各4基、中央列に3基の柱穴が掘削される。このうち中央列のものは、西側の内寄りのものが確認できなかった。また南列東端のP5は南西方向に15cm程寄っており、中央列では西端のP9が西側に12cm程、東端のP4は東に8cm程張り出しており、全体のプランは長方形に近い亀甲形を呈する。

[柱穴の形態及び規模] 柱穴のプランはいずれも楕円形を呈する。掘削形態はP1・2・7・8は井筒片朝顔形、P3～6は井筒形を呈し、P9～11は楕円状で、底面はP3・8が平底を呈する以外は丸底を呈する。

柱穴の径は20～60cm、平均40.59cm、深さは25～84cm、平均58.64cmを測る。しかし、南北列の柱穴の径は34～61cm、平均45.19cm、深さは55～84cm、平均69.00cmであるのに対し、中央列の柱穴の径は20～33cm、平均28.33cm、深さは25～35cm、平均31.00cmと、明らかな規格の相違が認められる。

[柱間]本建物の桁間は、隣接する柱の柱間は、106～

157cmと幅があり、その平均は127.4cmを測る。また東西両側の柱の柱間は365～402cmでこれも差があるが、平均は379.3cmを測るが、南北列について見るとその差は4cmと小さく、その平均は367cmを測る。

梁間は、隣接する柱の柱間は、132～180cmと幅があり、その平均は159.2cmを測る。一方、南北両側の柱の柱間は311～324cmと、その誤差は13cm以内と少なく、その平均は316.8cmを測る。

桁間に対して梁間は30cm程長い、基準となる正確な尺はなかったものと思慮される。

[上屋]柱は土層断面から、凡そ12cm程であったと推定される。また北列のP1・4と南列のP5～7の底面には、柱の荷重による塑性変形が確認される。中央列の柱穴が浅いことを勘案すると、建物の荷重は南北両側の柱に掛る構造であったものと思慮される。

また、中央列の柱穴P10の存在から、少なくとも東部に床が貼られていたことが想定される。

なお、柱穴底面の塑性変形が見られることから、ある程度の荷重が掛かったことは明らかではあるものの、柱材の径を想定した12cm程とした場合、ローム層では1本の荷重が60～70kgと算出される(石守晃1986)ことから推しても、比較的単純な構造であったと窺われる。

遺物 P1から土師器鉢(779)・壺(780～782)が出土した。

所見 本住居の時期は明瞭ではないが、1号住居の時期から推して、凡そ4世紀後半以前の所産と判断される。

## 12. 1号竪穴(第105～107図、PL.22・34・35)

概要 本遺構は竪穴構造を持つ遺構である。本遺構からは、完形若しくは完形に近い状態の32個の土師器が出土した。一部に火を起こした痕跡も見られた。

位置 本遺構は、2期調査区域中東部に在り、住居ライン付近に在る。913～917-340～342グリッドに位置する。

重複 本遺構は他の遺構との重複は見られなかった。

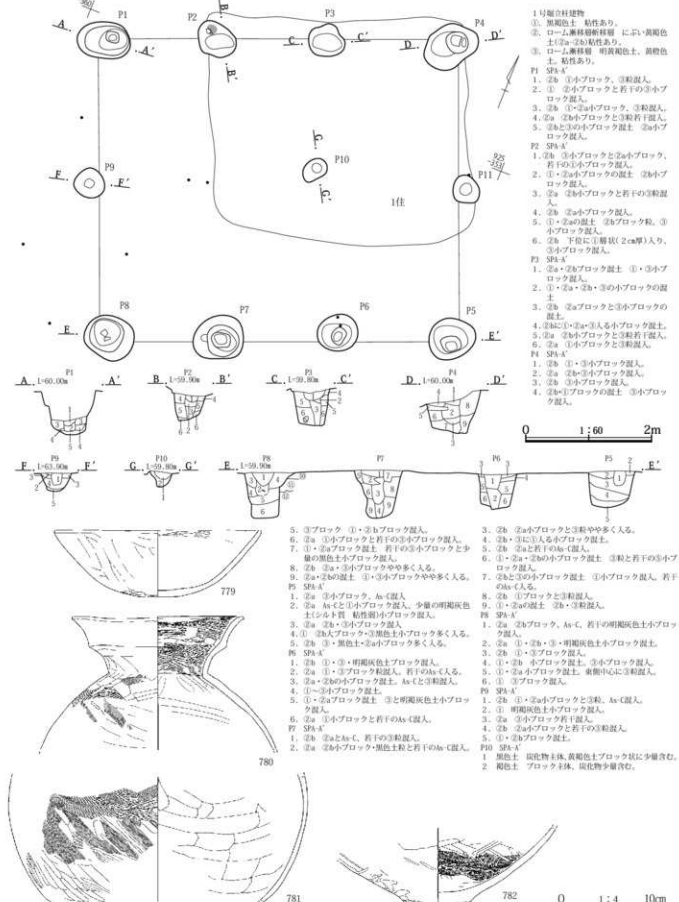
覆土 本遺構は黒褐色土やローム漸移層土を中心とする土壌で埋没する。また南部では焼土が確認され、床上2～4cm付近に部分的な面的分布も確認された。

規模 長軸：330cm 短軸：239cm 深さ：20cm

ピット 径：44×42cm 深さ：8cm

構造 本遺構のプランは、西辺に比べ東辺が北方に出る、

1号掘立柱建物



第104図 1区1号掘立柱建物と出土遺物

隅丸平行四辺形を呈する。主軸方向はN-17°-Wを向く。

[床] 本遺構は、掘り方を持たないいわゆる直床の構造である。掘削形態は箱形を呈し、底面は平底である。

[ピット] 北部東寄りにピットが確認された。これが、柱穴として使用されたものか否かは確認できなかった。

遺物 遺物は南東側に集中して出土したが、集中域はN-27°-W方向に列を成す東西2列に分かれるが、東西列は7~20cm程離れる。東列の分布は、幅40~80cmの範囲で、北端はピット手前まで濃いが、北寄りでは希薄になる。また西列の分布は、東辺は東列に併行に在る、幅70cm、長さ90cmを測る三角形の範囲には濃く、以北は北壁から1m手前の範囲で、粗く分布する。

出土した遺物には土師器 高杯(743~751)・埴(752~754)・小型壺(755)・壺(756~759)・小型甕(760~765)・甕(766・767)・小型台付甕(768・769・775)・台付甕(770~774・776~778)が出土した。760は山陰系土器である。

所見 本遺構の時期は、出土遺物から推して、古墳時代前期古段階の所産と判断される。

小型の遺構ながら、遺物が集中して出土したこと、西列の遺物分布域以西の範囲で火が焚かれた痕跡が見られたことから推して、本遺構は祭祀遺構の可能性を持つものと判断される。

### 13. 1号焼土(第105図)

概要 本遺構は、竪穴住居群の遺構確認途中に、焼土を確認し、その存在を把握した。当初は住居の可能性も考慮したが、プランが限定的で、掘削深度も浅いため、焼土遺構として調査した。

位置 本遺構は、1-1区2期調査区域南部東端近く、略北北西-南南東方向に住居群が連なるライン上に所在する。本遺構の北には3号住居、南には4号住居が近接して在る。本遺構は、A-7グリッドに位置する。

重複 本遺構は単独で在り、他の遺構との重複は見られなかった。

[覆土] 明確な覆土は確認されなかった。

規模 長軸：259cm 短軸：(196)cm 深さ：-cm

ピット 径：40×36cm 深さ：5cm

構造 本遺構のプランは、西辺に比べ東辺が北方に出る、隅丸平行四辺形状を呈する。主軸方向はN-31°-Wを向

く。

[床] 本遺構は、小さな分布ではあるが、底面上8cm程に焼土や灰の平面的分布が見られることから推して、掘り方を有するものと判断される。掘り方は確認面下、深さ9cm程まで掘削し、これを、黒褐色土やローム漸移層土で埋め戻して床を造る。

[ピット] 北東隅部にピットが掘削されている。なお、これが柱穴として使用されたものか否かは確認できなかった。

遺物 少量の土師器片が出土した。

所見 本遺構では火が焚かれていること、1号竪穴とその規模、平面形態が近似し、北壁近く遺構東半にピットが掘削されるという共通点があるため、本遺構も祭祀遺構の可能性を持つものと判断される。

本遺構の時期は、特定できなかった。

### 14. 5面の土坑・ピット群(第107・108図)

概要 5面では土坑6基、ピット17基を確認した。

位置 5面の土坑・ピットは、58~65・67号ピットが8号住居の西、3面の5溝以北の区域に分布し、214~218号土坑と10~13号ピットが1号掘立柱建物の西に集中して位置する他は、1号掘立柱建物の北西に219号土坑、南に66号ピット、3号住居の周提帯に伴うと見られる1号溝状遺構群の北西に68~70号ピットの分布が見られた。これらの所在グリッドは表12・13に記した。

重複 10号ピットと11号ピットが重複するが11号ピットの方が新しい。他の土坑・ピットは何れの遺構も単独で在り、重複は見られなかった。

覆土 黒褐色土を中心とする土壌で埋没するが、何れも土層観察に於いて柱痕等を確認することはできなかった。

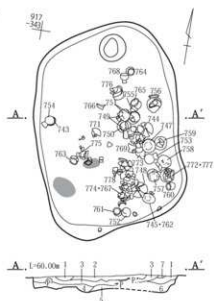
規模 表12・13参照

構造 平面形態 215・216号土坑、11・13・58・59・61・68号ピットは楕円形、217号土坑は空豆形、10号ピットは隅丸三角形、214号土坑、60・65・66号ピットは隅丸方形、63・64・69号ピットは隅丸長方形、218号土坑、70号ピットは隅丸短冊形、67号ピットは隅丸五角形、219号土坑は不定隅丸五角形、62号ピットは不整形を呈する。

また掘削形態は、215号土坑は楕円形、216号土坑は尖

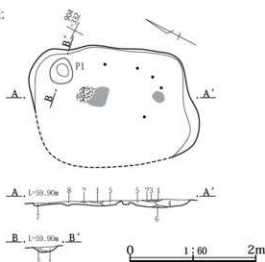
第3章 発見された遺構と遺物

1号竪穴住居



- 1号竪穴 SP4-A'
- ①. 黒褐色土 粘性あり。
  - ②. ローム層砂礫層 にごい・黄褐色土(②a-②b) 粘性あり。
  - ③. ローム層砂礫層 明黄褐色土・黄褐色土、粘性あり。
1. ②a
  2. ②b ①・③土ブロック、②a小ブロック混入。
  3. ③a ①小ブロックに、にごい・黄褐色土・③小ブロック混入。
  4. ①・②aの混入。
  5. ②a ②bブロックと③小ブロック混入、焼土面は本層中にあり。
  6. ②a ①小ブロック混入。
  7. ②a・②b

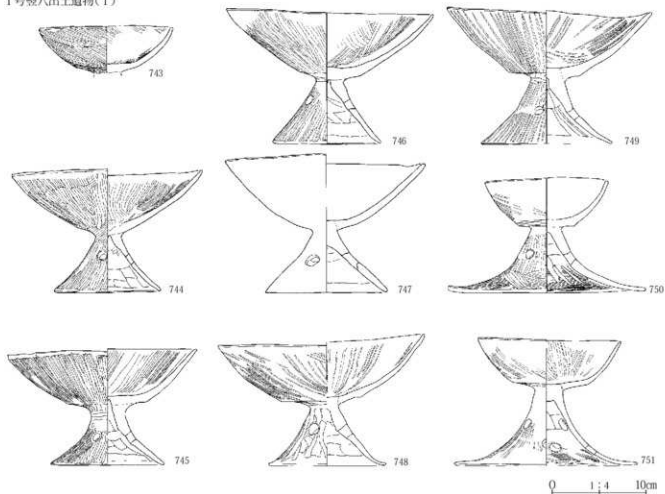
1号焼土



- 1号焼土 SP4-A'
1. 褐色焼土。
  2. ②bに②b・③小ブロック混入。
  3. 黒色土 ②a・bの小ブロック混入。
  4. ②a・②bの小ブロック混入、③小ブロック、③粒と若干の黒色土粒混入。
  5. ①・②b小ブロックの混入、③粒混入。
  6. ②b ①・③粒混入。
  7. ②b
  8. ②a 此層りに②b・③小ブロック混入。

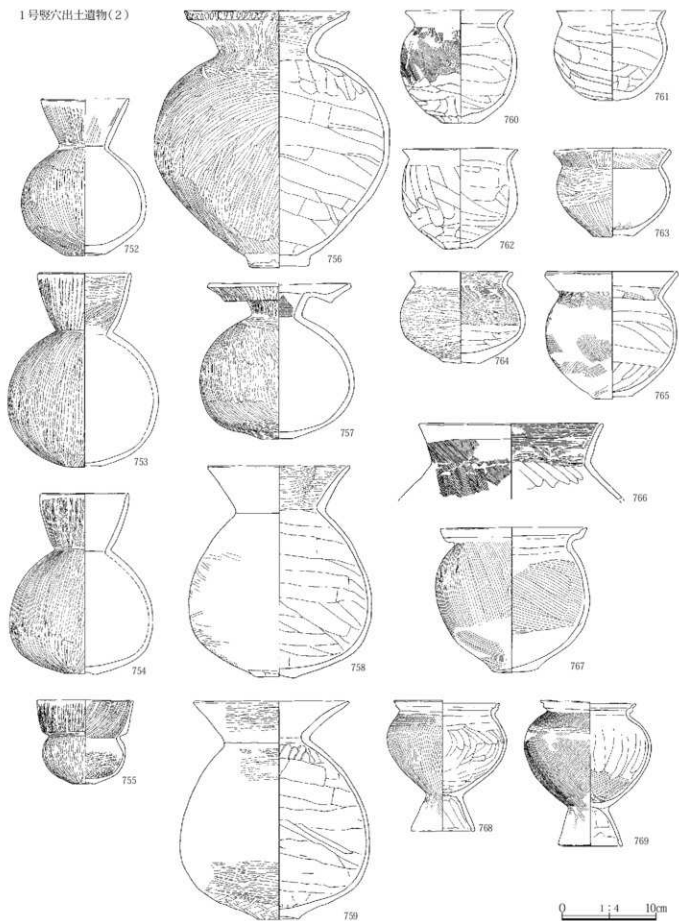
- SP4-B'
1. ②a ①・黒色土小ブロックと③粒若干混入。
  2. ②b ①・②a・黒色土・③粒含む。

1号竪穴出土遺物(1)



第105図 1区1号竪穴と出土遺物(1)及び1号焼土

1号壺穴出土遺物(2)



第106図 1区1号壺穴出土遺物(2)

1号竪穴出土遺物(3)

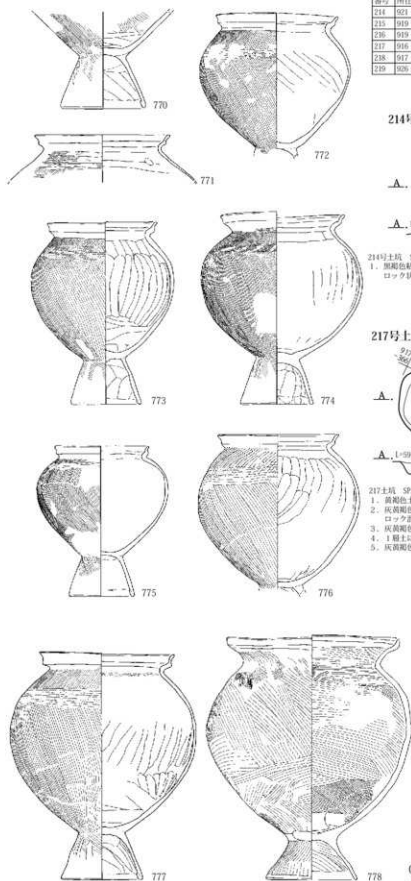


表13 5面土坑一覧

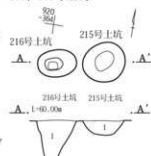
番号	所在グリッド	形状	寸法内径(推定値, <1は残存値)			主軸方位
			長さ×幅×高さ(cm)			
214	921・361	楕円形	43 × 42 × 12			
215	919・363 ~ 364	楕円形	62 × 43 × 68			
216	919・362 ~ 363	円形	68 × 62 × 22			
217	916 ~ 917・364 ~ 365	楕円形	146 × 113 × 23			
218	917 ~ 918・366 ~ 367	楕円形	163 × 30 × 13	S-18°-8		
219	926 ~ 928・364 ~ 367	平底形	202 × 153 × 94			

214号土坑



214号土坑 SPA-A'  
1. 黒褐色粘質土 明黄褐色粘質土をブ  
ロック状に少量含む。

215, 216号土坑



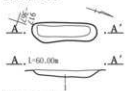
215・216号土坑 SPA-A'  
1. 黒褐色粘質土 明黄褐色粘質土をブ  
ロック状に少量含む。

217号土坑



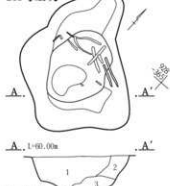
217号土坑 SPA-A'  
1. 黄褐色土 粘性あり。1層土小ブロック混入。  
2. 灰黒褐色土 粘性あり。1層土ブロックと若干の2層土小ブ  
ロック混入。  
3. 灰黒褐色土と1層土のブロック混入。  
4. 1層土に1・2層土ブロック多く入る。  
5. 灰黒褐色土 粘性あり。1・2層土小ブロック混入。

218号土坑



218号土坑 SPA-A'  
1. 黒褐色粘質土 明黄褐色粘質土を  
ブロック状に少量含む。

219号土坑



219号土坑 SPA-A'  
1. 黒褐色粘質土 明黄褐色粘質土をブロック状に少量含む。  
2. 濃い黄褐色土 明黄褐色土をブロック状に少量含む。  
3. 明黄褐色粘質土1珠。黒褐色粘質土を含む。

0 1:80 2m

0 1:4 10cm

第107図 1区1号竪穴出土遺物(3)及び5面の土坑群

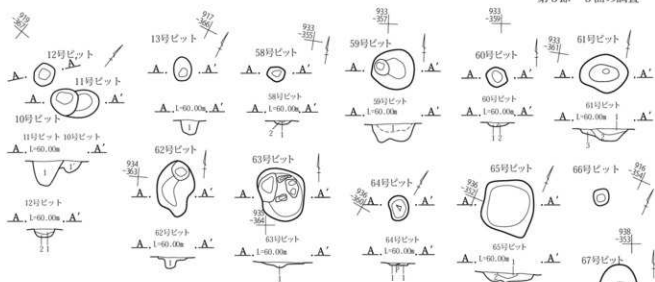


表14 5面ピット一覧

番付	所在グリッド	形状	長さ×幅×深さ (m)	備考
10	918-364	円形	43 × 42 × 48	
11	918-364	楕円形	(40) × 43 × 18	
12	918-365	円形	36 × 31 × 12	
13	916-365 ~ 366	楕円形	37 × 28 × 23	
58	932-355	楕円形	28 × 23 × 8	
59	931 ~ 932-356 ~ 357	円形	67 × 64 × 35	
60	931 ~ 932-358 ~ 359	円形	31 × 31 × 7	
61	931 ~ 932-359 ~ 360	楕円形	78 × 61 × 32	
62	933 ~ 934-362 ~ 363	不整形	82 × 61 × 20	
63	935-363 ~ 364	楕円形	91 × 80 × 5	
64	936-359	楕円形	40 × 30 × 3	
65	935 ~ 936-361	楕円方形	84 × 81 × 17	
66	915-355	円形	28 × 24 × 15	
67	937-352 ~ 353	楕円形	60 × 54 × 13	
68	911 ~ 912-342 ~ 343	楕円形	28 × 27 × 10	
69	911 ~ 912-341 ~ 342	楕円長方形	42 × 31 × 8	
70	911 ~ 912-341 ~ 342	楕円短方形	34 × 19 × 19	

第108図 1区5面のピット群

形、217~219号土坑は箱形、10~13・68・70号ピットは柱穴状を呈する。また底面の形態は214・215・219号土坑、10~12・58~59・63・66・69・70号ピットは丸底、216・217・218号土坑、62・64・65・68号ピットは平底、60号ピットは尖底を呈する。

**遺物** 219号土坑からは、その底面より50~80cmの位置で、7本の木片の出土が見られた。なお、この木片には加工痕跡は確認されなかった。

**所見** 本土坑・ピット群の土坑、ピットは、北西部の58・60・64号ピットと1号掘立柱西部の214号土坑、12・13号ピットは、共に鈎形の配列を見せるが、建物や柵列を想定するには至らなかった。また何れに対しても掘削意図等を想定することはできなかった。

### (3) 5面の遺構外の出土遺物(第109図、PL.36)

5面の遺構外の出土遺物には高杯(783・784)・器台(785)・脚付鉢(786)・台付甕(787)等の土師器片があった。

### 10~13号ピット

- 1 黒褐色粘質土・明黄褐色粘質土ブロックを包含む。
- 1' 1層に同じく、11号ピットの底でブロック切れる。
- 2 にごい・黄褐色粘質土・明黄褐色土ブロック少量を含む。

### 58号ピット

- 1 にごい・黄褐色粘質土・明黄褐色土・黒色土粉混入。
- 2 にごい・黄褐色土 にごい・黄褐色土小ブロック混入。

### 59号ピット SPA-A'

- 1 にごい・黄褐色土 にごい・黄褐色粘質土・黒色土小ブロック混入。

### 60号ピット SPA-A'

- 1 にごい・黄褐色土 明黄褐色土・黄褐色土ブロック にごい・黄褐色粘質土粉混入。
- 2 にごい・黄褐色土 若干の明黄褐色土・黄褐色土粉混入。

### 61号ピット SPA-A'

- 1 黒褐色土 にごい・黄褐色土小ブロックと若干の明黄褐色土・黄褐色土粉混入。
- 2 にごい・黄褐色土 にごい・黄褐色土ブロックと少量の明黄褐色土・黄褐色土小ブロック混入。
- 3 にごい・黄褐色土 若干の明黄褐色土・黄褐色土小ブロック混入。

### 62号ピット SPA-A'

- 1 黒褐色土 灰白色土小ブロックと若干の黄褐色粘質土小ブロック混入。

### 63号ピット SPA-A'

- 1 にごい・黄褐色土 にごい・黄褐色土・明黄褐色土・黄褐色土ブロック混入。

### 64号ピット SPA-A'

- 1 にごい・黄褐色土 にごい・黄褐色土・明黄褐色土小ブロック混入。

### 65号ピット SPA-A'

- 1 にごい・黄褐色粘質土 明黄褐色土小ブロック多く入り、若干の黒色土小ブロック混入。
- 2 黒褐色土 黒褐色土・にごい・黄褐色土・明黄褐色土・黄褐色土のブロック混入。黒色土多く混入。

## 第6節 縄文時代・弥生時代の遺物

(第109図、PL.36)

**概要** 本遺跡に於いては、5面を中心に若干の縄文・弥生時代の出土遺物を得た。

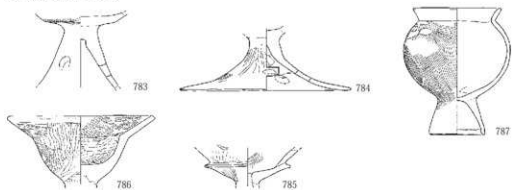
**出土遺物** 縄文土器片には前期、有尾式(788~791)、諸磯b式(792~798)、諸磯c式(799)、後期、堀之内1式(800~804)、堀之内2式(805~810)、加曾利b式(811)のものがあり、弥生土器には中期(812・813)のものがあつた。

また、石器には石鏃(814・815)、加工痕のある石器、石核や石核と見られるもの、打製石斧(824~827)があつた。

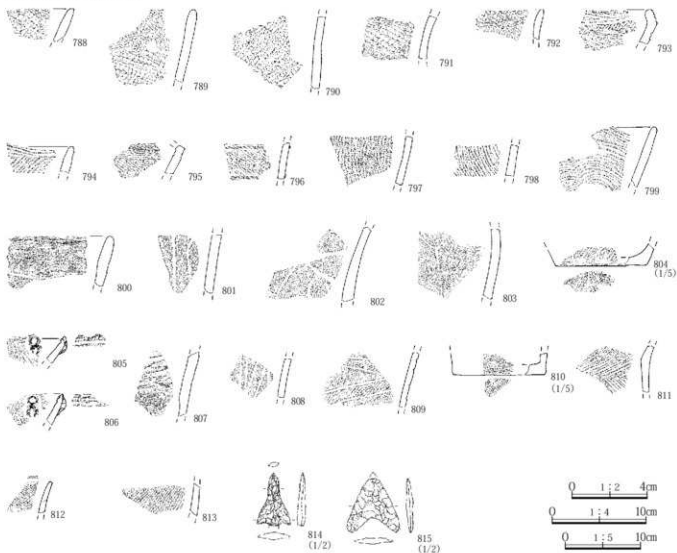


### 第3章 発見された遺構と遺物

#### 5面遺構外の出土遺物



#### 縄文時代・弥生時代の遺物



第109図 1区5面の遺構外の出土遺物と縄文・弥生時代の出土遺物

#### 【参考文献】

- 石守 晃1986「雁立柱建物の重量に関する一試験」『研究紀要』3、pp57-62、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 石守 晃2001「復元住居を用いた焼矢実験再び」『研究紀要』19、pp95-104、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 大塚昌彦「IV古墳時代」『中筋遺跡 第2次発掘調査概要報告書』、渋川市教育委員会

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 自然科学分析の委託

#### (1) 概要

本遺跡では、自然遺物等が出土したが、このうち、人骨、獣歯骨、木材、炭化材、種子、葉、灰については、遺構の理解に与すると判断し、鑑別の上、科学分析を委託した。

#### (2) 人骨の鑑定

本遺跡では中世館址の128・221号土坑から、人骨が出土した。両土坑共に、北頭位西向横臥屈葬の所謂中世土坑墓ではあったが、被葬者に対する情報が無かったため、鑑定を生物考古学研究所、梅崎修一郎氏に委託した。

鑑定要件は以下の通りである。

- ① 人骨であるか否かの判定
- ② 年齢
- ③ 性別
- ④ 埋葬状態
- ⑤ その他(古病理、特記事項)

鑑定書は本章第2節に掲載したため、詳細は記さないが、128号土坑出土人骨は成人男子、221号土坑出土人骨は少年男子のものと鑑定された。

#### (3) 獣歯骨の鑑定

本遺跡では中世館址の2号土塁、堀である10号溝、95・221号土坑、As-B混土、As-B畝下から11個体の獣歯骨が出土した。そこで、これらの獣歯骨等を確認するため、鑑定を宮崎貞雄氏に委託した。

鑑定要件は以下の通りである。

- ① 獣歯骨であるか否かの判定
- ② 歯骨の部位
- ③ 年齢
- ④ その他(古病理、特記事項)

鑑定書は本章第3節に掲載したため、詳細は省略するが、種はウマのみが特定され、8頭以上の遺存が確認された。これにより、館内で馬が飼育されていたことが確認された。

#### (4) 木材及び炭化材の樹種同定

本遺跡では各遺構から炭化材、或いは木材が出土したが、当事業団で同定できなかったものなため、遺構の解釈に与すると考えられた、近世屋敷の1号建物、1号土塁、1号井戸、および竹藪、中世の33号ピット、及び古墳時代前期の6号住居から出土した炭化材または木材の同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。

同定報告は本章第4節に掲載したため、詳細は省略するが、土塁に竹が植生され、井戸底部には近世の湿地に遺構で多用される松材が使用され、古墳時代の6号住居稲藁が出土していることなどが確認された。

#### (5) 灰の植物珪酸体同定

古墳時代前期の3・6号住居からは、厚みを持った灰が出土した。これは竈穴住居の屋根の葺き材が燃えたものであり、その種を特定できることにより、葺き材の種類が特定できるものと予測して、同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。

その同定結果は本章第5節に掲載したため、詳細は省略するが、予想に反して、灰は稲の籾殻を主体とするものであることが確認された。

#### (6) 葉と種実の同定

天明3年の火山災害の復旧溝群と、天明3(1783)年の災害被災畑、古墳時代前期の6号住居から種子と見られるものが確認され、天明3年の泥流中から葉が多数出土した。上記種子と、葉のうち、As-A軽石面に近接するか、根や茎がAs-A軽石下に延びていると判断されたものについて同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。

その同定結果は本章第6節に掲載したため、詳細は省略するが、同定できなかった資料もあったが、近世土塁に洗柿ではあるが柿が植生されていたことなどが確認された。

以下、これらの化学分析報告を、次節に掲載する。

## 第2節 下之宮高仮遺跡 出土 中世人骨

### (1)はじめに

下之宮高仮遺跡は、群馬県佐波郡玉村町下之宮に所在する。(公財)群馬県埋蔵文化調査事業団による発掘調査が、2010(平成22)年10月から2012(平成24)年4月まで断続的に行われた。

本遺跡の1区128号土坑及び221号土坑から、中世人骨が出土したので以下に報告する。

出土人骨は、水洗後観察・計測写真撮影を行った。なお、歯の計測方法は藤田恒太郎に従い(藤田1949)、歯冠計測値の比較は現代人権田和良(権田1959)を、中近世人骨は松村博文(Matsumura1995)を引用した。

### (2)1区128号土坑出土人骨

#### ①埋葬形態

本土坑は、長軸(南北)約220cm・短軸(東西)約104cm・深さ約28cmの規模である。人骨は、土坑中央部から出土している。出土状況の写真で推定すると、頭位は北で顔面部を西に向け、右側を下にした屈葬で埋葬されたと推定される。

#### ②副葬品

副葬品は、銭貨の永樂通寶(507)・皇宋通寶(508)などが3点検出されている。なお、出土歯は銭貨の緑青により青く染色されている。



写真2 1区128号土坑出土人骨(頭蓋骨)

#### ③被葬者の個体数

出土遊離歯には、重複部位が認められないため被葬者の個体数は1個体であると推定される。

#### ④被葬者の性別

出土歯の歯冠計測値は大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

#### ⑤被葬者の死亡年齢

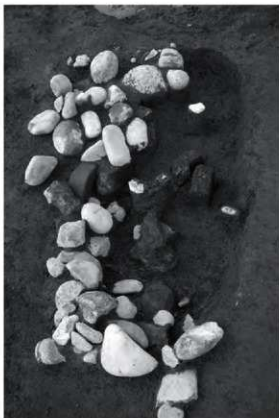


写真3 1区128号土坑全景

出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質一部が露出する程度のマルティン2度と象牙質が全面に露出する程度のマルティン3度の状態中間である。被葬者の死亡年齢は約40歳代であると推定される。但し、本個体は右側だけで咬む傾向があった可能性も高いため幅をもたせて約30歳

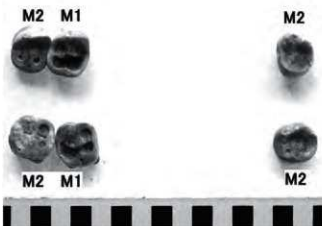


写真4 1区128号土坑出土人骨(出土歯咬合面観)

代～40歳代と推定される。

#### ⑥古病理

##### ・歯石

下顎切歯に、一部歯石が認められた。

##### ・齲蝕(虫歯)

出土歯には、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は、認められなかった。

##### ・咬合

本個体の上下大白歯の咬耗度を観察すると、上下共に右側の咬耗度が高く、左側が低い。したがって、本個体は何らかの理由で左右均等ではなく、右側で主に咬む傾向があったと推定される。

### (3) 1区221号土坑出土人骨

#### ①埋葬形態

本土坑は、長軸(南北)約90cm・短軸(東西)約66cm・深さ約40cmの規模の隅丸長方形土坑である。人骨の出土状況から、被葬者は頭位を北にして顔面部を西に向け、右側を下した横臥(側臥)屈葬で埋葬されたと推定される。

被葬者は、約10歳の男性(児)と推定されている。現代日本人の1975年の統計では、10歳の男性(子)の身長は約135.4cm・女性(子)の身長は約136.6cmである(鈴木1996)

#### ②副葬品

副葬品は、検出されていない。



写真5 1区221号土坑出土人骨出土状況

#### ③被葬者の個体数

出土遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

#### ④被葬者の性別

出土遊離歯の内、永久冠の計測値は、比較的大きいため、被葬者の性別は男性(児)であると推定される。

#### ⑤被葬者の死亡年齢

出土遊離歯は、永久歯と乳歯の混合列である。歯の咬耗度・歯冠形成・歯根の形成過程から、被葬者死亡年齢は約10歳であると推定される。

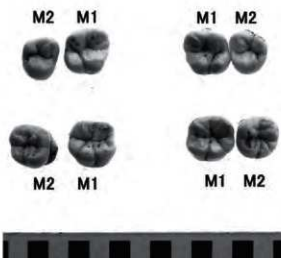


写真6 1区221号土坑出土永久歯咬合面観  
[M]：第1大白歯 M2：第2大白歯

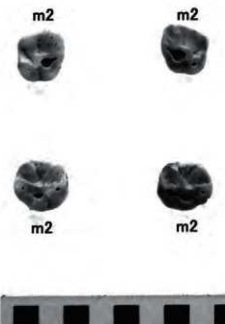
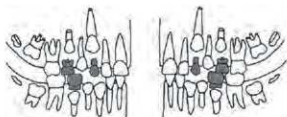


写真7 1区221号土坑出土人骨出土状況



第110図 221号土坑出土人骨の歯の萌出状態推定  
〔網掛け部が乳歯。それ以外は、永久歯〕

⑥古病理

・歯石

出土歯には、歯石は認められなかった。

・齦触(虫歯)

出土歯には、俗に虫歯と呼ばれる齦触は認められなかった。

・エナメル質減形成

出土歯の内、上顎切歯には明瞭なエナメル質減形成が認められた。このエナメル質減形成は、発育期において飢餓・タンパク質やビタミン欠乏等の栄養障害・胃腸疾患・発疹性高熱疾患・肺炎・結核・内分泌異常等で起ると推定されている(山本1988)。また、出現状態は線状タイプ・小窩タイプ、溝状タイプの3つに分類されるが、本

事例は線状タイプである。日本の中世人骨ではエナメル質減形成が認められた個体の線状タイプは山本美代子による室町時代人には100%(5例中5例)が、古賀英也による吉母浜遺跡出土中世人には81.8%(22例中18例)が認められている(山本1988・古賀2003)。

(4)まとめ

下之宮高髙遺跡の1区128号土坑と1区221号土坑から、中世人骨が出土した。1区128号土坑出土人骨は、約30歳代～40歳代男性と推定され、古病理として歯の咬耗度から右側で咬む傾向が認められた。1区221号土坑出土人骨は、約10歳の男性(男児)と推定され、古病理として出土歯にエナメル質減形成が認められた。

引用文献

- 藤田恒太郎 1949 歯の計測規準について、「人類学雑誌」61(1):27-32
- 藤田恒太郎 1949 「歯の解剖学」、金原出版
- 権田和良 1959 歯の大きさ性差について、「人類学雑誌」67(3):151-163
- 古賀英也 2003 西南日本古代人のストレスマーカー、「人類学雑誌」111(1):51-67
- MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional History of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum Monographs, No.9, National Science Museum
- 鈴木隆雄 1996 「日本人のからだ」、朝倉書店
- 山本美代子 1988 日本古人骨永久歯のエナメル質減形成、「人類学雑誌」96(4):417-433

表15 下之宮高髙遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	下之宮高髙遺跡		中世時代人*		江戸時代人*		現代人**					
	128号土坑	221号土坑	Matsumura, 1995		Matsumura, 1995		権田, 1959					
上	I 1	切歯	右	左	右	左	右	左	右	左		
		切歯	8.0	8.1	8.6	8.7	8.48	8.29	8.78	8.38	8.67	8.55
	I 2	切歯	7.1	—	6.7	6.8	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05
		切歯	—	—	6.1	6.0	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51
	C	切歯	7.8	7.7	8.2	7.9	7.96	7.43	8.01	7.60	7.94	7.71
		切歯	8.4	8.5	8.1	8.2	8.59	7.94	8.66	8.03	8.52	8.13
	P 1	切歯	7.3	7.2	7.4	7.3	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37
		切歯	9.5	9.5	9.1	8.9	9.48	9.03	9.67	9.33	9.59	9.43
	P 2	切歯	8.8	—	7.0	6.7	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02	6.94
		切歯	9.5	—	8.9	8.7	9.30	8.88	9.55	9.29	9.41	9.23
	M 1	切歯	10.3	—	10.7	10.6	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68	10.47
		切歯	11.8	—	11.6	11.6	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75	11.40
M 2	切歯	9.6	9.5	9.2	9.3	9.65	9.42	9.88	9.48	9.91	9.74	
	切歯	11.9	11.9	10.8	10.9	11.72	11.19	12.00	11.52	11.85	11.31	
下	I 1	切歯	5.4	5.4	5.4	5.6	5.42	5.22	5.45	5.32	5.48	5.47
		切歯	6.0	6.0	5.5	5.6	5.78	5.01	5.78	5.63	5.88	5.77
	I 2	切歯	6.5	6.3	6.0	6.0	6.04	5.78	6.09	5.97	6.20	6.11
		切歯	6.7	6.4	5.9	6.0	6.22	5.98	6.29	6.11	6.43	6.30
	C	切歯	6.8	6.8	7.2	6.9	6.88	6.55	7.06	6.69	7.07	6.68
		切歯	8.0	8.1	7.3	7.1	7.82	7.33	8.04	7.29	8.14	7.50
	P 1	切歯	7.1	7.0	7.2	7.0	7.07	6.96	7.32	7.06	7.31	7.19
		切歯	8.3	8.0	8.3	8.2	8.10	7.72	8.34	7.89	8.06	7.77
	P 2	切歯	7.3	7.4	7.0	6.9	7.12	7.00	7.45	7.12	7.42	7.29
		切歯	8.5	8.4	7.7	8.0	8.49	8.06	8.68	8.30	8.53	8.26
	M 1	切歯	10.7	—	11.9	11.9	11.56	11.06	11.72	11.14	11.72	11.32
		切歯	11.2	—	11.1	11.3	11.00	10.49	11.15	10.62	10.89	10.55
M 2	切歯	11.3	11.2	10.6	10.9	11.06	10.63	11.39	10.78	11.30	10.89	
	切歯	10.4	10.6	10.5	10.4	10.55	9.97	10.75	10.21	10.33	10.20	

注1. 計測値の単位は、すべて、mmである。  
 注2. 1 (第1切歯)・I 2 (第2切歯)・C (犬歯)・P 1 (第1小臼歯)・P 2 (第2小臼歯)・M 1 (第1大臼歯)・M 2 (第2大臼歯)  
 注3. 計測項目は、M D (歯冠近接線)・B L (歯冠背唇径)を意味する。  
 注4. 「破損」とは、歯冠が破損しており計測不能であることを示す。  
 注5. 「\*」は、MATSUMURA (1995)より引用。  
 注6. 「\*\*」は、権田(1959)より引用。



写真8 1区221号土坑出土顎左右切歯のエナメル質減形成

## 第3節 下之宮高俣遺跡の馬歯

指示のあった事項に就いて鑑定したが、遺存状態が部位骨であったため、鑑定結果は個別に示す。



No. 2 (1-1区221土坑・一括)

左下顎第1又は第2切歯片。歯冠長(左右幅) 13.7mm、歯冠幅(前後幅) 5.0+mm、歯冠高(長さ) 38.2mmである。



No. 3 a (1-1区2号土塁基底No. 2)

10数片に分離した白歯片。最大歯冠高7.5+mm。詳細を知るのは困難である。



No. 3 b (1区1G・2号土塁基底No. 3)

右上顎白歯片。10片ほどに分離している。中附歯幅が5.1mmと大きいことなどから、前歯と思われる。舌側歯冠高が40.0mm前後であり、牡牝馬と判断される。



No. 4 (1-1区17土坑)

灰白色をした焼骨片。最大骨片12.5×11.4mm。詳細を知るのは困難である。



No. 7 (1-1区10号溝・4面)表-

左下顎白歯である。歯冠高42.0mmを計測し、牡牝馬と判断される。



No. 9 (1-1区23号溝)

右上顎第3前歯又は第4前歯である。歯冠高49.4mmを計測し、牡牝馬と判断される。



No. 10 a (1-1区2号土塁 No. 1)

細かく分離して10数片となった白歯片で、最大歯冠高15.8+mmである。



No. 10 b (1-1区2号土塁)

細かく分離して10数片となったウマの下顎歯。最大歯冠高34.8+mmで、牡牝馬と思われるが詳細を知るのは困難である。



No. 12a



No. 12b



No. 12c



No. 13 (1-1区 41号畑 一括)

細かく分離して10数片となったウマの下顎歯。最大歯冠高54.8+mmで、牡馬と思われるが詳細を知るのは困難である。

表16 切歯計測値

遺物番号	No. 12		
	歯冠長	歯冠幅	歯冠高
右第1切歯	13.7	9.5	42.7+
右第2切歯	13.5	7.7+	44.7
右第3切歯	12.7	8.8	35.3+

単位: mm



No. 14 (1区As-B混土上)

右上顎第3前臼歯・第4前臼歯・第1後臼歯と左上顎第2後臼歯が出土している。歯冠高からは5~8才程の馬齢が推定される。

本遺跡からは、少なくとも8頭分の馬歯が出土している。

年齢の推定可能なのは7個体であり、幼馬馬の可能性もある1個体を除けば、他はみな牡馬であり、老馬馬はいない。

なお本稿では、歯冠高による年齢推定は西中川・松元(1991)によった。

主な参考文献

西中川康・松元光春(1991)遺跡出土骨同定のための基礎研究一特に在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較「古代遺跡から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、164-188。  
野村晋一(1977)「観説馬学」西川書店。

表17 上顎臼歯計測値

遺物番号	No. 9		No. 14			
	第3 or 第4前臼歯		第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯
	右	右	右	右	左	
歯冠近遠心径	24.4	28.0	25.0	23.1	24.7+	
歯冠頬舌径	22.0+	27.5	24.8	23.6		
原歯幅		11.0	12.4	11.8		
歯冠高智歯	49.4	53.8	58.5	44.9	50.0	
歯冠高舌側		52.3	56.7	42.2		
咬合面の傾斜	95°	92°	80°	83°		
中咽距離	4.3	5.6	4.8	3.7	4.0	

単位: mm

表18 下顎臼歯臼歯計測値

遺物番号	No. 12						No. 7
	No. 27						No. 10
	第2前臼歯		第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯	第3後臼歯
	右	右	右	右	右	右	左
歯冠近遠心径	30.1	26.3	25.6	23.8	24.0	29.2	22.0+
歯冠頬舌径	13.4	15.0	15.1	13.7	13.5	12.2	10.7+
歯冠高智歯	21.0	40.8	47.1	38.1	50.2	48.6	
歯冠高舌側	19.6	39.1	47.0	36.1	47.7	49.4	42.0
下後歯唇長	5.4	9.9	8.7	6.7	7.4	6.7	11.6
下内歯唇長	14.3	11.5	10.8	7.2	8.8	9.2	
Doublekot長	15.0	16.8	15.4	14.9	13.5	13.2	
咬合面の傾斜	105°	90°	83°	75°	80°	67°	80°
下内距離	5.6	5.7	5.1	4.2	4.1	3.9	

単位: mm

## 第4節 下之宮高俣遺跡出土木材 および炭化材の樹種同定

### 1. はじめに

佐波郡玉村町に所在する下之宮高俣遺跡から出土した木材5点と炭化材4点について樹種同定を行った。

### 2. 試料と方法

試料は、天明3年(1783年)の泥流で被覆された1号建物から出土した炭化材が1点(No. 1)と、竹林?から採取された炭化材が1点(No. 4)、1号井戸の基部に使用されていた木材が4点(No. 5~8)、1号土塁から採取された木材が1点(No. 9)、室町時代(15世紀頃)の33号ビットから採取された炭化材が1点(No. 2)、古墳時代前期の6号住居の床面から採取された炭化物が1点(No. 3)の、計9点である。

木材試料は、剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定し、写真撮影を行った。

炭化材試料は、まず肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を削り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製VE-9800)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。プレパラートはパレオ・ラボに保管、残りの試料は群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

### 3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹はマツ属複維管束亜属とスギ、分類群不明の針葉樹樹皮の3分類群、広葉樹はサンショウ属?のみ1分類群、その他にタケ亜科が確認された。また、古墳時代前期の6号住居から採取された炭化物は木材ではなく、イネ科と単子葉類の科などの炭化物で構成されていた。結果の一覧を表19に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1)マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diplaxylon* マツ科 図版1 1 a-1 c (No. 7)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、韌性は大である。

(2)スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図版1 2 a-2 c (No. 1)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスキ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で、切削加工は容易であり、割裂性は大きい。

(3)針葉樹 *Coniferous wood* 図版1 3 a-3 c (No.

表19 下之宮高俣遺跡出土木材および炭化材の樹種同定結果

No.	種別	区	遺構	層位	時期	樹種	形状	サイズ	年輪数
1	炭	1-1区	1号建物	-	天明3年(1783年)泥流被災	スギ	破片(節)	<3cm	不明
2	炭	1-1区	33号ビット	-	室町時代(15世紀頃)	サンショウ属?	破片(節)	<1cm	1
3	炭	1-1区	6号住居	5面(床面)	古墳時代前期	イネ科類・単子葉植物(群)	破片	-	-
4	炭	1-1区	竹林?	As-A泥流中	天明3年(1783年)泥流被災	針葉樹(マツ科以外の樹皮)	破片	<3cm	-
5	木	1-1区	1号井戸	井戸基部	天明3年(1783年)泥流被災	マツ属複維管束亜属	丸木	-	-
6	木	1-1区	1号井戸	井戸基部	天明3年(1783年)泥流被災	マツ属複維管束亜属	丸木	-	-
7	木	1-1区	1号井戸	井戸基部	天明3年(1783年)泥流被災	マツ属複維管束亜属	丸木	-	-
8	木	1-1区	1号井戸	井戸基部	天明3年(1783年)泥流被災	マツ属複維管束亜属	丸木	-	-
9	木	1-1区	1号土塁	-	天明3年(1783年)泥流被災	タケ亜科	不明	-	-



## 4)

樹皮：師細胞と柔細胞、単列の放射組織で構成される針葉樹の樹皮である。コルク組織がみられないため、マツ科以外の針葉樹である。

(4) サンショウ属? *Zanthoxylum*? ミカン科 図版1 4a-4c (No. 2)

大型の道管がまばらに分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は1~4列幅で、同性である。試料は節の部分で、組織が歪んでおり、なおかつ1年輪未満で晩材部が確認できなかったため、サンショウ属?とした。

サンショウ属には、温帯から暖帯に分布するサンショウとイヌサンショウ、暖帯から亜熱帯に分布するカラスザンショウがある。サンショウの材は強靱で折れにくい、カラスザンショウとイヌザンショウの材はやや軟軟である。

(5) タケ亜科 *Subfam. Bambusoideae* イネ科 図版1 5a (No. 9)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類で、維管束は柔細胞中に散在する。維管束は一对の道管と、それと直行する原生木部間隙と師部で形成され、その周囲を厚膜組織からなる維管束鞘が取り囲む。

タケ・ササの仲間、日本では12属が含まれるが、稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

(6) イネ *Oryza sativa* L. 炭化稲殻 図版1 6b, イネ科 (No. 3)

本来は楕円形であるが、形状は破片である。表面に、縦方向に規則的に並ぶ顆粒状突起がみられる。

(7) 単子葉類 *Monocotyledons* 図版1 6c (No. 3)

状態が悪く横断面が観察できなかったが、維管束と柔組織からなる単子葉類の稈である。なお、稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

## 4. 考察

近世の1号建物から出土した炭化材は、スギであった。スギは軟軟で加工しやすい材である。近世の群馬県内でのスギの利用は、井戸側や桶、曲物容器、建築部材、器具の柄などにみられる(伊東・山田編, 2012)。今回の試料は3cm角以下の破片となっており、元の形状や用途は不明であった。

近世の1号井戸では、基部に使用されていた木材はすべてマツ属複雑管束亜属であった。木取りはいずれも丸木である。マツ属複雑管束亜属は、アカマツ、クロマツともに水中における心材の保存性が高いため(平井, 1996)、近世以降の土木材や施設材に多用され、群馬県内では甘楽町の名勝梁山園でも近世の井戸材にマツ属複雑管束亜属が利用されている(伊東・山田編, 2012)。今回の1号井戸でも、水場での利用に耐えられるマツ属複雑管束亜属が選択的に利用されたと推測される。

近世の竹林?においてAs-A泥流中から出土した炭化材は、針葉樹(マツ科以外)の樹皮であった。製品に利用されていた可能性もあるが、竹林?から出土しているため、自然木から剥がれた樹皮と考えられる。

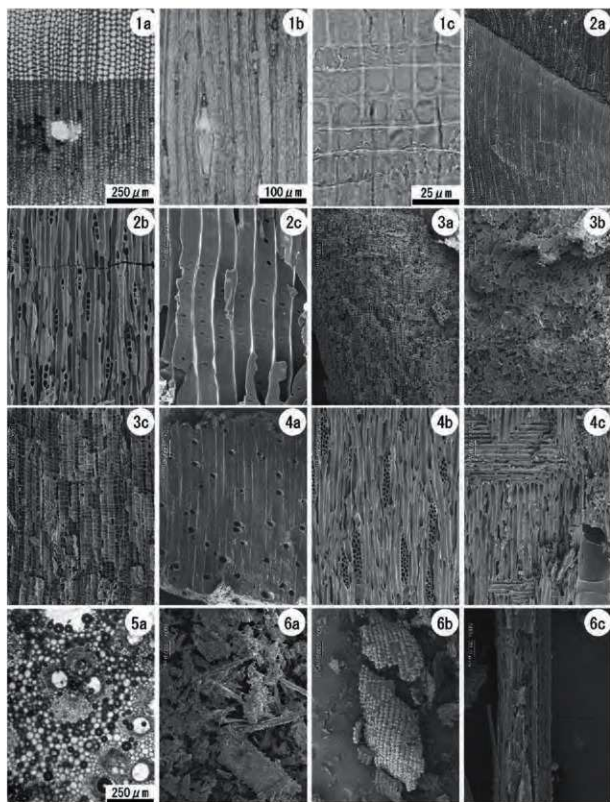
室町時代の33号ピットから出土した炭化材は、サンショウ属?であった。遺跡出土のサンショウ属は建築部材や土木材、用途不明の加工材、燃料材などとしての利用が確認されており、群馬県内では中村遺跡で古墳時代の柱材と杭、新保遺跡で弥生時代~古墳時代の自然木、五目牛南組遺跡で戦国~明治時代の加工木が確認されている(伊東・山田編, 2012)。今回の試料は1cm角以下の破片となっており、元の形状や用途は不明である。

古墳時代前期の6号住居の床面から出土した炭化物は、木材は含まれておらず、イネ科と単子葉植物の稈が確認できた。同じ地点で採取された灰について植物珪酸体分析が行われており、イネ科が多く確認されている(植物珪酸体分析の項参照)。したがって、元の素材は灰と同じで、本試料は灰にはならず黒色に炭化した部分であったと思われる。

1号土壘から出土した木材は、タケ亜科であった。土壘からの出土であり、土木材の可能性はある。タケ亜科は、軽量で割裂性が高く、弾力性と屈曲性が大きい(島地ほか, 2002)、土木材としても有用である。

## 引用文献

- 平井信二(1996)木の大百科, 394p. 朝倉書店。  
伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学—出土土製品用材データベース—, 449p. 海青社。  
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司(2002)木材の構造, 276p. 文永堂出版。



図版1 下之宮高痕遺跡出土木材の光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. マツ属複雑維管束亜属 (No.7)、2a-2c. スギ (No.1)、3a-3c. 針葉樹 (樹皮: No.4)、4a-4c. サンショウ属? (No.2)、5a. タケ亜科 (No.9)、6a. No.3の産状、6b. イネ籾殻 (No.3)、6c. 単子葉植物 (桿: No.3)

1-5 = a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

## 第5節 下之宮高痕遺跡出土の灰の植物珪酸体

### 1. はじめに

下之宮高痕遺跡で検出された竪穴住居から、灰が採取された。ここでは、灰の母植物を検討する目的で植物珪酸体分析を行った。分析No. 3 (試料No. 15)については、樹種同定も行われている(別項参照)。以下に、分析結果と考察を記す。

### 2. 試料と方法

試料は、1-1区の3号竪穴住居の覆土から採取された分析No. 1 (試料No. 13)と、分析No. 2 (試料No. 14)、6号竪穴住居の床面から採取された分析No. 3 (試料No. 15)の、計3点の灰試料である。なお、2軒の竪穴住居の時期は、いずれも古墳時代前期である。

試料を実体顕微鏡で観察し、灰をピンセットで取り上げ、グリセリンを用いてプレパラートを各5枚作製後、鏡検して、植物珪酸体を手掛かりに母植物の検討を試みた。

### 3. 観察の結果

観察の結果を表20に示す。

分析No. 1 (試料No. 13: 3号竪穴住居、覆土、P 2-6/6)

最も多く観察されたのはイネの籾殻に形成される珪酸体であった。次いで、棒状型の不明植物珪酸体が多く観察された。このほかに、ウシクサ族の機動細胞珪酸体とイネ型の短細胞珪酸体列が、鏡検用プレパラート5枚中に1~2点とごくわずかに検出された。なお、棒状型の不明植物珪酸体については、すべてのイネ科植物に類似した形態の植物珪酸体が存在するため(近藤, 2010)、由来した分類群の同定は難しい。

分析No. 2 (試料No. 14: 3号竪穴住居、覆土、P 2-4

/6)

最も多く観察されたのはイネの籾殻に形成される珪酸体であった。次いで、棒状型の不明植物珪酸体が多く観察された。このほかに、ウシクサ族の機動細胞珪酸体とイネ型の短細胞珪酸体列が、鏡検したプレパラート5枚中に、1~2点とごくわずかに検出された。

分析No. 3 (試料No. 15: 6号竪穴住居、床面)

最も多く観察されたのは棒状型の不明植物珪酸体であった。次いで、イネの籾殻に形成される珪酸体が多く観察された。

### 4. 考察

古墳時代前期の2軒の竪穴住居から検出された灰の母植物について検討した結果、3号竪穴住居の覆土から採取された灰(分析No. 1とNo. 2)の母植物は、主にイネの籾殻であった。また、スキヤチガヤなどのウシクサ族の葉由来の機動細胞珪酸体も、ごくわずかに含まれていた。3号竪穴住居の覆土からイネの籾殻を主体とした灰が検出された背景としては、何らかの理由で住居内に持ち込まれた籾殻が燃やされたか燃えた可能性、あるいは外で燃やされた籾殻の灰が住居内に持ち込まれた可能性などが挙げられる。

6号竪穴住居の床面から採取された灰(分析No. 3)の母植物は、イネの籾殻であった。一方、由来不明の棒状型の植物珪酸体が多量に含まれており、イネの籾殻以外の別の部位、あるいはイネ以外の植物の灰が混在しているとみられる。6号竪穴住居の床面からイネの籾殻の灰が検出された背景としては、何らかの理由で住居内に持ち込まれた籾殻が燃やされたか燃えた可能性や、除湿など何らかの目的で籾殻などの灰が床に敷かれた可能性などが挙げられる。

引用文献

近藤謙三(2010)プラント・オパール図鑑。167p.北海道大学出版会。

表20 下之宮高痕遺跡出土の灰の植物珪酸体(○非常に多い、○多い、△含まれる)

分析No.	試料No.	種別	遺構	面	採取位置		遺構の時期	機動細胞珪酸体	短細胞珪酸体列	イネ籾殻の珪酸体	不明植物珪酸体
					ウシクサ族	イネ型		イネ型	棒状型		
1	13	灰	3号竪穴住居	5面	覆土	P 2	6/6	△	△	○	○
2	14					4/6	△	△	○	○	
3	15				床面	-	-	○	○		

## 第6節 下之宮高松遺跡出土の大型植物遺体

### 1. はじめに

佐波郡玉村町に所在する下之宮高松遺跡の古墳時代の住居跡と天明泥流下の遺構から検出された種実と葉の同定を行い、当時の植生について検討した。なお、葉の同定にあたっては、千葉大学大学院園芸学研究所百原新氏にご教示いただいた。

### 2. 試料と方法

種実試料は、調査区1-1の4号畑1面と復旧坑の覆土、6号住居の5面から採取された。葉試料は、1号溝、1号溝南、土手1、北部畑のAs-A泥流中から採取された。遺構の時期は、4号畑と復旧坑、1号溝、1号溝南、土手1、北部畑が近世中期で、天明3年(1783)の浅間山の噴火に伴う泥流で埋没した。6号住居は古墳時代前期の遺構である。

大型植物遺体の抽出・同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。同定された試料は、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。

### 3. 結果

種実試料を同定した結果、草本植物のカナムグラ核の1分類群が得られた(表21)。

以下、種実試料の産出傾向を遺構別に記載する。

4号畑1面：カナムグラが少量得られた。

復旧坑：カナムグラがわずかに得られた。

6号住居5面：同定可能な種実は得られなかった。

葉試料を同定した結果、木本植物のママギキリュウキュウママギキ1分類群、草本植物のイタドリ1分類群の計2分類群が得られた。また、残存状態が悪いため、科以上の詳細な同定ができなかったものを不明A~Cに分類した(表22)。

以下、葉試料の産出傾向を遺構別に記載する。

1号溝：ママギキリュウキュウママギキと不明Aが各1点得られた。

1号溝南：不明Bが1点得られた。

土手1：ママギキリュウキュウママギキが1点得られた。

北部畑：イタドリと不明Cが各1点得られた。

以下、大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1)ママギキリュウキュウママギキ *Diospyros lotus* L. - *Diospyros japonica* Siebold et Zucc. 葉 カキノキ科

表21 下之宮高松遺跡から出土した種実遺体(括弧内は破片数)

No.	10	11	12
	1-1区		
	遺構	復旧坑	6号住居
分類群	面・層位	時期	時期
カナムグラ	株 26 (24)	4 (8)	種実なし

表22 下之宮高松遺跡から出土した葉遺体(括弧内は破片数)

No.	16	20	17	18	19	21
	1-1区					
	遺構	1号溝	1号溝南	土手1	北部畑	
分類群	面・層位	時期	As-A泥流中			
ママギキリュウキュウママギキ	葉	1		1		
イタドリ	葉					1
不明A	葉	1				
不明B	葉			1		
不明C	葉					

縁は部分的にしか残存していないが全縁で、全体形は卵形か。最大幅はほぼ中央にある。基部も葉先も尖る傾向が強いが残存していない。主脈は厚く太い。二次脈は基部側で互生だが、葉先にむかってやや対生になる。残存長35.4mm、残存幅26.6mm (No.18)と、残存長39.9mm、残存幅31.1mm (No.20)。

(2) カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.  
核 アサ科

褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は円形。一端に黄白色で心形の着点がある。壁は薄く、やや硬い。長さ4.6mm、幅4.6mm、厚さ3.2mm。

(3) イタドリ *Fallopia japonica* (Houtt.) Ransse Decr.  
var. *japonica* 葉 タデ科

葉の残存状態は非常に悪い。主脈は厚く、非常に長い。二次脈は葉の縁に沿って走る。残存長37.2mm、残存幅34.9mm。

(4) 不明 A Unknown A

主脈と二次脈が観察できるが、科以上の同定に必要な識別点は残存していなかった。残存長42.3mm、残存幅17.0mm。

(5) 不明 B Unknown B

主脈と二次脈が観察できるが、科以上の同定に必要な識別点は残存していなかった。残存長41.2mm、残存幅17.2mm。

(6) 不明 C Unknown C

主脈と二次脈が観察できるが、科以上の同定に必要な識別点は残存していなかった。残存長52.7mm、残存幅15.2mm。

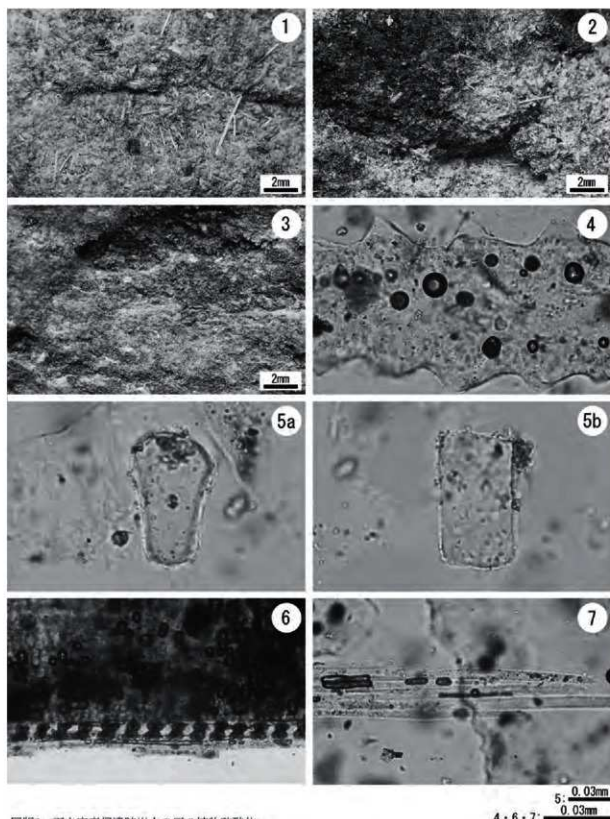
#### 4. 考察

天明泥流下の遺構から検出された種実を同定した結果、4号畑と復田坑からつる植物のカナムグラが得られた。カナムグラは道端や荒地などに生育する草本植物である。通常、畑などを構成する土壌は陸成土壌のため、生の大型植物遺体は残存しないが、泥流で埋没し、より低湿地側に位置している場合は、生の植物遺体が良好に残存する場合がある(例えば、東宮遺跡(佐々木・バンドリ, 2012)など)。今回は現地で取り上げられた試料であるため、なかでも比較的大型の種実が取り上げられたと考えられる。

1号溝と土手1から産出した葉はマメガキもしくはリュウキュウマメガキであった。マメガキは中国原産の栽培植物で、低地～山地でやや稀に野生化している。リュウキュウマメガキは日本では関東地方以西に分布し、山地の日当たりのよい谷間や斜面に生育する落葉高木である。果実は渋柿で食べられないが、熟して黒くなった果実は渋が抜けて食べられることもできる。柿渋を採って塗ると紙や布が強化される。防水・防腐作用もあり、渋団扇や番傘などに利用される。マメガキやリュウキュウマメガキは、溝の脇や土手の上など乾いた場所に生育していたと考えられる。北部畑から産出したイタドリは、日当たりの良い路傍から荒地までさまざまな場所に生育でき、やや湿ったところを好む。また、攪乱を受けた場所に生育するパイオニア植物でもある。畑の脇などに生育していたと考えられる。

#### 引用文献

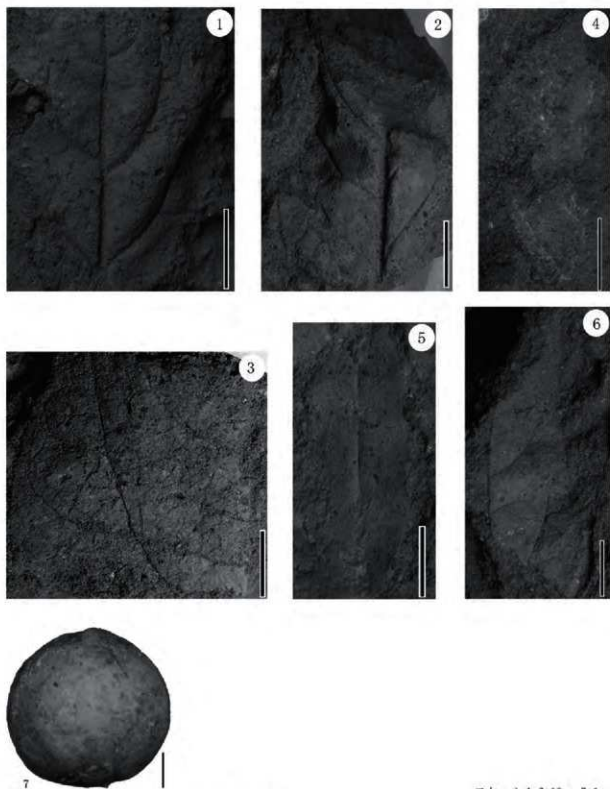
佐々木 山香・バンドリ スタルシヤン(2012) 東宮遺跡から出土した大型植物遺体。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「東宮遺跡(2)―遺物編―」: 437-461。巻頭函版。群馬県埋蔵文化財調査事業団。



図版2 下之宮高松遺跡出土の灰の植物珪酸体

1. 試料拡大写真(分析No.1)、2. 試料拡大写真(分析No.2)、3. 試料拡大写真(分析No.3)、4. イネ科型の珪酸体(分析No.1)、5. ウシクサ族の機動細胞珪酸体(分析No.2)、6. イネ型短鎖細胞珪酸体列(分析No.1)、7. 棒状型不明植物珪酸体(分析No.3)

a: 断面、b: 側面



図版3 下之宮高促遺跡から出土した大型植物遺体

スケール 1-6:10mm, 7:1mm

1. マメガキーリュウキュウマメガキ葉(土手1, No. 18)、2. マメガキーリュウキュウマメガキ葉(1号溝, No. 20)、
3. イタドリ葉(北部畑, As-A 泥流中, No. 21)、4. 不明A葉(1号溝, No. 16)、5. 不明B葉(1号溝南, No. 17)、
6. 不明C葉(北部畑, As-A 泥流中, No. 19)、7. カナムグラ核(4号畑, 1面, No. 10)

## 第5章 総括

## 第1節 概要

## (1) 1面の概要

以上のように、本遺跡では5面8期の遺構を確認し、出土遺物を得た。確認遺構は5面合せて、屋敷、館各1か所、竪穴住居9軒、掘立柱建物1棟、礎石建物2棟、建物跡1軒、竪穴遺構3基、土塁2条、溝44条、道路6条、橋脚、土橋、門各1か所、井戸3基、復旧溝群15面、復旧畑22面、畑83面、竹藪1か所、集石遺構3か所、焼土遺構1基であった。しかし、細砂質土の厚い堆積や、出水による安全確保の観点から、5面を調査できたのは東端の1区東部(1-1区)だけであり、諸般の事情から、面によっては調査出来ない箇所もあった。

各遺構の詳細は繰り返さないが、各調査面の概要を記してまとめる。

1面では天明3(1783)年の浅間山の大噴火に伴う屋敷や畑、竹藪などの火山災害被災遺構(1面中・下位面)や、その後の洪水被災を含めた耕地復旧に伴う遺構群(1面上位面)を調査した。特に屋敷遺構の礎石建物は、建築

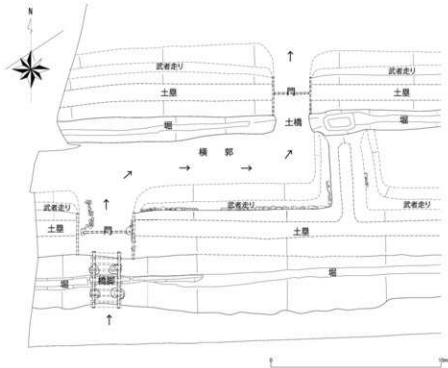
学に即した実測データを測定し、村田敬一先生(群馬県文化財保護審議会専門委員)に分析を依頼したが、その分析報告は本章2節に掲載する。

2面の調査は1-1区に限定され、寛保2(1742)年の大洪水など、度重なる洪水被災と復旧を示す畑跡を調査した。

3面も1-1区のみでの調査であったが、1-1区北部に、15世紀のものと判断する未周知の館跡を調査した。この館については後述するが、明らかに城塞化した構造を持つ虎口遺構を伴うものであった。また館外には、館の外堀に沿うように、貯蔵穴と推定される隅丸長方形プランの大型土坑が掘削されているのが確認された。

4面では、1-1天仁元(1108)年の浅間山の大噴火に伴って降下したAs-Bテフラで覆われた竪穴遺構を確認した。しかし、遺存状態が悪く、特に東部では天仁元年に耕作されていたか否かの検討が必要と思われる。

5面では、古墳時代の集落遺構を確認した。竪穴住居は、西遷前に、現利根川の位置に流下していた中小河川によるものと想定される自然堤防上に構築されていた。竪穴住居の中には灰が厚く堆積していたものもあり、葺



第111図 中世館虎口遺構概観図



き材の灰化したものの可能性を考えたが、珪酸体分析により、粉殻を主体とするものと同定されたことから、単純に葺き材とすることができないことが分かった。また、祭祀遺構と判断される竅穴遺構も確認された。

## (2) 中世館と虎口遺構

上述のように、1-1区3面では、明らかに城塞化を意図した虎口遺構を伴う館遺構が発見された。この館は、短郭方形、或いは回字状プランを呈するものと推定され、外堀の確認長と、虎口位置がから推して、一辺100mを越えるものと想定される。

本虎口は噴道虎口であり、95頁の第63図に記したように、土塁(2号土塁)を伴う2条の堀(5・11号溝)と、5号溝に掛けられた4脚の橋脚、11号溝の埋め戻しの土橋、そして礎石建ちの門(門戸)遺構から成る。尤も5号溝が堀幅2m程の菜研堀、11号溝が浅い菜研堀であった時期もあり、構造に変遷があったことが窺われる。

本虎口の進入路は、第111図に示したように、木橋で外堀(5号溝)を渡り、幅1間半程の門(門戸)をくぐると内堀(11号溝)に突き当たる。土塁と内堀の間には横郭と呼ぶべき横長の空間が在るが、左側(西側)に障壁は確認されなかったことから、導線を左右に選択できる、並(ならび)虎口であったと推定される。導線を右に選択すると突出した土塁で進路を阻まれ、左折して内堀を埋め戻した土橋を通り、内郭に入る。内堀の内郭側にも門が設置されたものと思慮される。また、内堀の土橋の両側は、深く掘られているが、その東側は浅く、内郭側と外郭側の違いが明確にされている。

本虎口遺構は、堀の掘削も小規模で、防御機能としては未熟である。また横長の印象を受けるが、その構造は機能的に造られている。浅学もあって、現状では当該期の虎口遺構の調査例は確認できておらず、少し時期の下る宮城県桑折町桑折西城例を含め、古い段階の、類例の少ない虎口遺構として評価されるものである。

### 参考文献

- 群馬県教育委員会(1989)『群馬県の中世城跡跡』  
 桑折町教育委員会(2011)『史跡桑折西山城跡発掘調査報告書(第3次調査)』  
 児玉幸多、坪井清足監修(1981)『日本城郭体系』別巻Ⅱ、新人物往来社  
 山崎 一(1978)『群馬県古城遺跡の研究』上巻、群馬県文化事業振興会

## 第2節 下之宮高尽遺跡の建築遺構

本稿は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が作成した実測図、写真、及び調査担当者からの聞き取りをもとに作成したものである。本稿で引用する各市町村のデータは、各市町村が実施した民家調査報告書<sup>1</sup>による。また、屋敷構えの構成要素や平面図における室呼称等は、地元玉村町の民家調査報告書による。

### I 屋敷構えと付属建物

屋敷全体が発掘対象でないことから、明らかになったのは屋敷のほぼ西半分である。今回発掘された部分において、屋敷に直接接した道はなく、屋敷への主の出入口となるカイド<sup>2</sup>は見当たらない。建築遺構は1号建物、その南西部に接続し張り出す2号建物の2棟である。

以下、当遺跡の屋敷構えを玉村町、及び近接する伊勢崎市、埴町等の調査結果より考察すると次の通りである。なお、以下における付属建物の主家から見た方位は第112図による。

#### 1 土塁・竹藪と屋敷規模

建築遺構の西、北西、北に土塁、北西、北に竹藪がみられる。この方位の土塁と竹藪は玉村町の利根川右岸沿いの農家の屋敷構えでは時々見られるものであり、これらは利根川の氾濫と空っ風への備えと考える。屋敷の東側は不明だが、土塁は北東、東、竹藪は北東であったと推定する<sup>3</sup>。

#### 2 主家と井戸の配置

1号建物は礎石から判断して農家の主家<sup>4</sup>とみてよい。当屋敷に見られるように、主家が南面して建ち井戸が主家の背面(北)にあるのは特別なケースでなくよく見られるものである(表1)。

#### 3 屋敷の出入口

2号建物の南西に西側の道からの屋敷出入口がある。しかし、この道幅は40～70cm程度あることから、この屋敷出入口は補助的なものであり主のものは、主家の東から南にかけての方位にあると推定する<sup>5</sup>。このことは、当地域の特徴ではなく、県下の農家屋敷出入口にみられる一般的な傾向である。敷地に接する道が北側や西側にあっても直接そこに設けず、カイドで誘導して東、南東、

南に設ける場合が多い。

#### 4 付属建物

主家と付属建物の配置状況をパターン化してみると、主家一棟型直列型、並列型、かぎ型、コの字型、口の型、分散型に分類できる(第113図)。これらの型における付属建物の棟数や種類は別記した順に多くなることから、これらの型は屋敷構えの発展過程を示しているといえよう<sup>9</sup>。伊勢崎市と境町の調査結果からみると、主家が広間型の6件をみると、直列型1件、かぎ型2件、コの字型が2件、口の字1件であり、分散型はみられない。

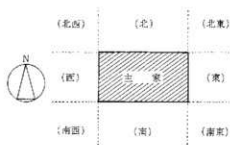
当屋敷は北に建物跡がないこと、2号建物の東側(主家から二ツ(庭)を隔てた南)に建物が建てられた跡の一部が確認できたことから、コの字型または口の字型の屋敷構えと推定する。このことから発掘対象とならなかった範囲に設けられたと想定できる付属建物は、北東から東にかけて、味噌蔵、東から東南にかけて便所、南東から南にかけて蔵であり、2号建物の東側にはバラックに相当する納屋である。

## II 建物

建物に関わる主な出土資料は土壁(床下部)の一部、礎石、炭化物、流し、排水樹、水瓶、竈である。礎石の多くは柱当て痕<sup>7</sup>(柱の圧痕)と柱心を示す十字の墨書を残すが、番付の符帳(墨書)が判明している礎石は2つのみである<sup>8</sup>。土壁以外、柱・桁・梁等の建築部材は出土していない。

### 1 発掘データ資料からの復原平面図作成

柱礎石幅、柱当て痕寸法、礎石幅、柱心々寸法を示す①～③通りの礎石実測断面図(群馬県埋蔵文化財調査事業団作成)を第114図に、第114図より作成した柱間寸法図を第115図、復元平面図を第116図に示す。



第112図 主家からの方位第129図

表23 主家からみた付属建物の建造位置(境町)

方位	柱礎 建物 使用	バラ ック	物 置	番 倉	蔵	金 庫	井 戸 家	風呂 場	木 小 屋	土 台 所	農 機 庫	車 庫	その他	(備 註)	全 体 に 占 め る 率 (%)		
東	11	4	4	3	1	1				1			1	26	14.286		
南東	10	3	2	5	1	2	2	1				1	5	34	18.681		
南	1	14	5	3	3	3	3	3					5	39	21.429		
南西		2	3		2	4	1						1	13	7.1		
西					1	2								3	1.6		
北西			1		8					1				10	5.3		
北	2	2	8	4	3	1	2	5	7	2	3	1	2	1	43	23.7	
北東	2		2	8				1		1				14	7.7		
計 (棟数)	26	25	25	23	19	13	8	7	7	6	5	2	2	1	13	182	99.996

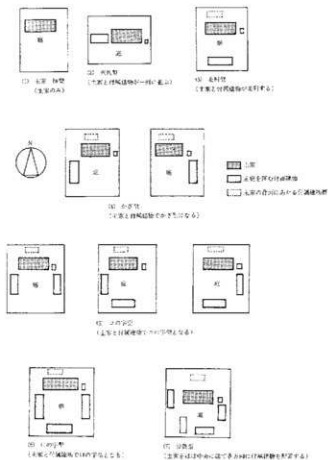
第115図において第114図から直接採用したデータは柱間心々寸法、柱当て痕の寸法である。①～③の通りのうち部屋間仕切の間隔が明らかでない通りのデータは、他のデータがない場合は除き不採用とし、より長く多くの実測値が明らかになっている通りを優先的に採用することを原則とした<sup>9</sup>。なお、礎石は浅間押しの泥流が動いていることも予想されることから、同じ箇所において異なる寸法の場合は民家の過去の調査例でよく見られるモジュール(部屋においては3尺・1間、張り出し部においては1尺5寸・2尺等)に近い方を採用した。また、礎石30、31、32、55、57は、移動したもので当初の位置でない<sup>10</sup>と判断し、第115図では除いた。

### 2 1号建物

当建物は礎石の配置からみると広間型の民家(農家)の土間部分が欠損しているものと推定する(第116図)。広間型は過去の県内の調査によると、床上の土間側の広間は「ザシキ」[又は「ザスキ」、一般的には「広間」と呼ばれ、用途はケ(寝)としての団楽・食事の場、日常における客間、その奥の南側は「コザ」(県内他地区では「オクリ」「デイ」「デー」などとも)と呼ばれ、用途はハレ(晴)としての客間、北側は「ナンド」[県内他地区では「ヘヤ」とも)と呼ばれ、用途は寝室である。また、「コザ」の西側の張り出し部は「トコ(床の間)」、ザシキの北側の張り出し部は「戸棚(仏壇・物入)」であり、共に下屋(げや)の造りと考える。

各部屋の広さを見ると、「ザシキ」は梁行3間半、桁行2間の14帖、「ナンド」が梁行・桁行とも1間半の4帖半、「コザ」は梁行2間、桁行1間半の6帖である。

「ナンド」「コザ」の桁行1間半は、過去の調査におい



第11図 附属建物の配置形式

て数少ないものである。調査済みの玉村町(4例)、伊勢崎市(8例)、境町(3件)、藤岡市(14件)、富岡市(19件)、渋川市(7件)、子持村(3件)、高山村(3件)、中之条町(4件)、黒保根村(13件)の広間型では、その部分は多くが桁行2間である。参考までに玉村町、伊勢崎市、藤岡市の広間型の概要を表24、25、26に示す。

「ザシキ」のイロりは出土した炭化物より推定した。北側のものは過去の調査例からもよく見られるものである。南側のものは建造年代が降ると設けるもので、あまり見られないものである。これは客専用のものとする。

「ダイドコロ」の東端は明らかになっていないが、過去の調査例からみて床上とはほぼ同じ桁行の広さであり、ダイドコロの南東隅には「ウマヤ(馬屋)」を設けていたと推定する<sup>10)</sup>。

### 3 2号建物

当建物は北から南に連なる3室からなる。過去の調査からみると主家に接する部分は南側2室の建物との接続部の部屋(トリツキ、ヨリツキなどと呼ばれる)、南側2

室が隠居屋、若しくは北側が隠居屋で南側が納屋であると推定する(表23、第116図(南側2室を隠居屋として作図))。

### 4 建造年代推定

発掘した民家の建造年代の指標として考えられるのは、主家における平面形式、客間2間の柱内法寸法、構造、部材等である。以下、それらをもとに建造年代を考察する。

#### (1) 平面形式

近世民家(石場建て(いしば建て)<sup>11)</sup>の広間型は畿内とその周辺で16世紀末～17世紀中頃までに、中部、関東、中国、四国地方ではやや遅れて17世紀後半、東北地方では17世紀末～18世紀初頭、九州でもやや遅れて成立したとされている<sup>12)</sup>。

過去の民家調査によると、広間型は高山村が18世紀初期まで、中之条町が18世紀中期まで、伊勢崎市、子持村では18世紀末期まで、渋川市、黒保根村が19世紀初期まで、境町が19世紀中期まで、玉村町、藤岡市、富岡市が19世紀末期までみられる。広間型の発展形式とされる四間取り(不整形四間取り、喰違い四間取り、田の字型)は、渋川市、富岡市が17世紀末期以降、玉村町、伊勢崎市、高山村、中之条町が18初期以降、藤岡市、境町が18世紀中期以降、子持村、黒保根村が18末期以降に採用されていたことが分かる。

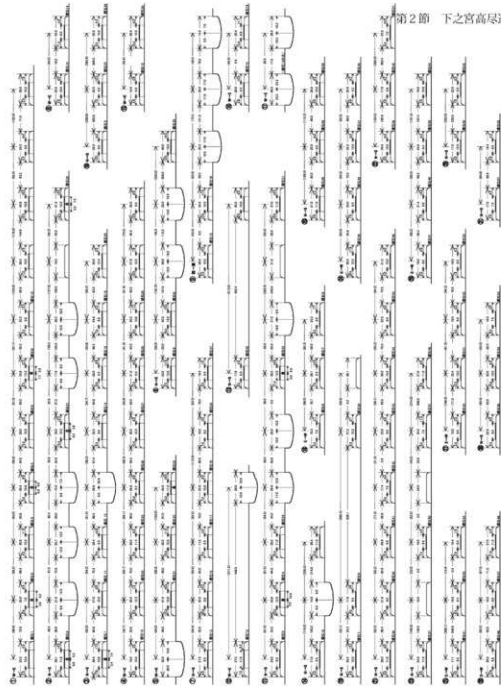
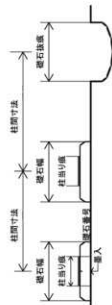
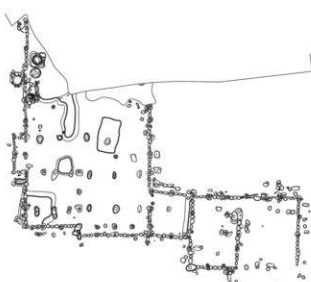
これら明らかかなように、四間取り(田の字型)が普及しても広間型は無くならず両者は混在していたといえよう。群馬県では四間取りが多くなるのは市町村によって異なるが、おおよそ18世紀中期以降、それ以前は広間型とされている。

#### (2) 1号建物の客間の桁行2間の柱内法寸法

農家主家における客間2間の柱内法寸法<sup>13)</sup>と建造年代関連についてまとめた資料を表27に示す。これによれば建造時代が遡るにつれてその値が大きくなる傾向が窺え、おおよその目安として19世紀中期が12.0尺、12.0尺以上であればそれより前、12.0尺以下であればそれより後といえる。

当建物の客間であるコザの桁行は1間半のため梁間2間の内法寸法をみると366.0cm(12.08尺)である。この長さは表27から推定すると18世紀中期となる。

#### (3) 構造



第2節 下之宮高尺遺跡の建築遺構

第114圖 礎石実測断面図(群馬県埋蔵文化財調査事業団作成)

## 第5章 総括

表24 玉村町の広間型

タイプ(括弧内は件数)	T 1 (2)	T 2 (1)	T 3 (1)
ナンド(梁行×桁行)	2.0×2.0	1.0×1.5	1.0×2.4
コザ(梁行×桁行)	2.0×2.0	2.0×1.5	2.0×2.0
ザシキ(梁行×桁行)	4.0×2.0	3.0×2.0	3.0×2.0
土間の桁行長さ	0.5, 0.53	0.36	0.31
コザの下屋の床の間・押入	有	有	有(土屋内)
ザシキの下屋の張り出し(仏壇・押入)	不明	不明	不明
ウマヤ	2件とも有り	無し	無し
コザ、ザシキの正面側(南側)土庇又は濡れ縁の縁側	2件とも無し	無し	無し
建造年代	17末 17末	19中	19末

表25 伊勢崎市の広間型

タイプ(括弧内は件数)	1 1 (4)	1 2 (1)	1 3 (2)	1 4 (1)
ナンド・ヘヤ(梁行×桁行)	1.5×2.0	1.0×1.5	1.0×2.0	2.0×2.0
オクリ・コザ(梁行×桁行)	2.0×2.0	2.0×1.5	2.0×2.0	2.0×2.0
ザシキ・ザスキ(梁行×桁行)	3.5×2.0	3.0×2.0	3.0×2.0	4.0×2.5
土間の桁行長さ	0.49(2)、 0.50, 0.51	0.54	0.46, 0.48	0.54
オクリ・コザの下屋の床の間・押入	4件とも有り	有り	2件とも土屋内に設置	無し
ザシキの下屋の張り出し(仏壇・押入)	3件は不明、 1件は土屋内に設置	不明	2件とも不明	不明
ウマヤ	4件とも有り	有り	2件とも有り	有り
コザ、ザシキの正面側(南側)土庇又は濡れ縁の縁側	2件は土庇、 1件は縁側、 1件は無し	土庇	土庇(2件)	無し
建造年代	2件は18中、 2件は18末	18末	18初、18末	17初

構造の年代指標となるのは階数(平屋か2階建か)、基礎の構法(掘り立てか、玉石か、切石か)、小屋組(椽首組におけるオダチ(棟木を支える小屋束)の有無)、柱間隔(半間か、1間か、2間か)、土台・納戸構え・差鴨居(有無)等がある。しかし、当建物で明らかなのは、石場建てで土台及び地覆を使用していないことである。

過去の民家調査によると石場建ては中之条町、高山村、黒保根村では19世紀初期まで、玉村町、伊勢崎市、境町、子持村、渋川市が19世紀中期まで、富岡市、藤岡市が19世紀末期まで、土台の使用は中之条では

18世紀末以降、子持村では19世紀初期以降、玉村町、伊勢崎市、藤岡市、境町、渋川市、高山村、黒保根村が19世紀中期以降、富岡市が19世紀末期以降である。このような調査結果であるが、おおよそ指標として石場建ては18世紀末期まで、土台の使用は19世紀初期以降とされている。

### (4)部材

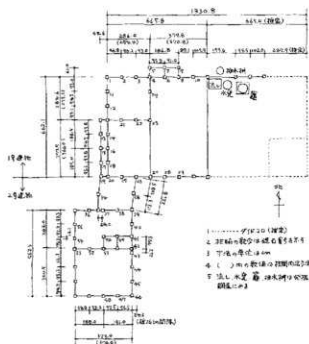
部材の材質、鴨居・敷居の溝数(2本か、3本か)、手斧仕上(給刃か、平刃か)等があるが、当遺跡からはこれらを確定できる部材は出土していない。

以上から、1号建物の建造年代は、ナンドの梁行が1間半であること<sup>14)</sup>、広間型の平面形式であること、コザやザシキの張り出しが土屋内でなく下屋である、それらの張り出し寸法が3尺未満であること<sup>15)</sup>、石場建てで土台や地覆を用いていないこと、これらと客間の桁行2間の柱間内法寸法の採寸誤差を考慮し18世紀前期と推定する。

2号建物は、1号建物との境の床下に土壁<sup>16)</sup>を設けて

表26 藤岡市の広間型

タイプ(括弧内は件数)	F 1 (7)	F 2 (3)	F 3 (1)	F 4 (1)	F 5 (1)	F 6 (1)
ヘヤ・ナンド(梁行×桁行)	1.0×2.0	1.5×2.0	2.0×2.0	1.4×2.0	1.7×2.0	1.5×2.0
デイ・デー(梁行×桁行)	2.0×2.0	2.0×2.0	2.0×2.0	2.5×2.0	2.5×2.0	2.5×2.0
ザシキ・ザスキ(梁行×桁行)	3.0×2.0	3.5×2.0	4.0×2.5	3.5×2.0	3.5×2.0	3.5×2.0
土間の桁行長さ	0.33, 0.45(3), 0.46(2), 0.48	0.46(2), 0.47	0.50	0.45	0.44	0.46
デイ・デーの下屋の床の間・押入	2件は無し、1件巾1間有り、1件は巾2間有り、3件は不明	1件は無し、2件は有り	無し	無し	有り	無し
ザシキの下屋の張り出し(仏壇・押入)	4件は有り、2件は無し、1件は不明	1件は無し、2件土屋内に設置	不明	土屋内に設置	土屋内に設置	不明
ウマヤ	7件とも有り	3件とも有り	有り	有り	有り	有り
コザ、ザシキの正面側(南側)土庇又は濡れ縁の縁側	1件濡れ縁の縁側、4件は土庇、2件は無し	2件は濡れ縁の縁側、1件は無し	無し	土庇	濡れ縁の縁側	無し
建造年代	18初(2)、18中、18末、19初(3)	17末、19初、19中	18初	19初	19末	18中



第115図 柱間寸法図

いることから、1号建物に後から増築されたものである。建造年代は石場建てであることから18世紀中期と推定する。

## 5 まとめ

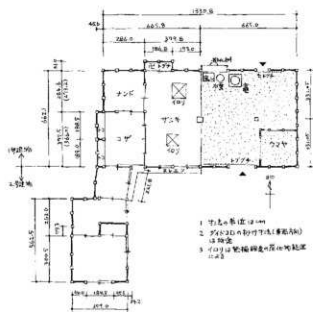
以上の考察及び県内の民家調査結果から推定する建築概要は次の通りである。

### (1) 1号建物

- ・用途 養蚕が本格化する前の農家の主家
- ・建造年代 18世紀前期
- ・平面形式 広間型(三間取り)
- ・規模 桁行1330.8m、梁行6.621m
- ・構造 木造平屋階建、屋根は草葺の寄棟造。石場建て、土台・地覆なし。
- ・柱間装置 普通鴨居の三本溝(床上の外回り)、12尺の間に中柱あり。
- ・柱間寸法 2間の内法寸法(梁行)3.660m(12.08尺)。
- ・その他 床の奥行柱心々寸法45.6cm(1.39尺)。天井はコザのみにあり。

### (2) 2号建物

- ・用途 主家に増築された隠居屋、若しくは隠居(北側)・納屋(南側)
- ・建造年代 18世紀中期
- ・規模 桁行5.625m、梁行3.790m。



第116図 復元平面図

[取り付きは桁行2.218、梁行2.386m]

- ・構造 木造平屋建、屋根は草葺の寄棟造。石場建て、土台・地覆なし。[取り付きは木造平屋建、屋根は草葺(もしくは板葺)の切妻造。石場建て、土台・地覆なし]
- ・柱間装置 普通鴨居の三本溝(外回り)。取り付きを除いて天井あり。

## あとがき

群馬県埋蔵文化財調査事業団で作図した礎石実測断面図は、建造年代推定において大変有効な資料の一つと考える。表27で示したように、近世民家のモジュールは固定したものでなく、時代の経過とともに変化している。柱心々寸法、柱の大きさか明らかになる場合は、平板測量での縮尺を記し実寸法が記されていない礎石平面図でなく、実寸法を記した実測図は必要不可欠なものと考えられる。

本調査において礎石実測断面図の作成に尽力していた関係者の方々に敬意を表したい。

特に近世以降の発掘調査及び歴史的建造物整備に係る建築調査においては、いずれの場合も、発掘の専門家と建築史の専門家の協力は不可欠なことであろう。今後は建築に関する具体的な調査目的、作成する図面、取るデータ等を事前に把握してから調査に着手すべきと考える。



表28 遺物観察表

## (1. 1面上位面)

## 1区

## 1号復旧溝群

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第108号 PL.23	1	鉄製品 不詳	破片	長 4.5 幅 0.9	厚 0.9 重 5.35		断面四角形の角棒状鉄製品で、端部はやや丸みを持つ角形で終わる。たの端部は劣化破損する。木質等の痕跡は見られない。	

## 2号復旧溝群

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第118号 PL.23	2	瀬戸・美濃 陶器蓋	1/2	口 6.9 底 3.6	高 1.3	淡黄	揃みほとんど欠損。口縁部開く。切り離し部右回転糸切無調整。口縁部内面から天井部外面錆色の鉄軸。天井部外面斑状に灰軸かかる。	

## 1面遺構外

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第28号	3	製作地不詳 磁器函飲み	口縁部一部欠	口 7.4 底 3.0	高 5.1	白	外面1箇所に黒色鉛具による富士山吹き絵。	近現代。
第28号	4	製作地不詳 磁器函飲み	口縁部1/4、底部完	口 8.0 底 3.5	高 4.4	白	体部と高台壇1重もしくは2重重線。口縁残存部1箇所、内外面に呉須を吹き付ける。内面から高台外面クロム青磁軸、口筋。高台内面から高台内無軸。	近現代。
第28号 PL.23	5	瀬戸・美濃 陶器徳利	上半	口 4.6 底 -	高 -	灰白	口縁部下方に折り返し、傘状を呈する。頸部内面から外面灰軸。	
第28号	6	肥前陶器 染付筒形碗	口縁部1/6、底部3/4	口 10.2 底 4.7	高 7.2	灰	口縁部外面磨略化した四方彫文。体部外面磨略化した東屋山水文。内面無文。貫入入る。	
第28号	7	肥前陶器 染付筒形碗	1/3	口 7.6 底 3.4	高 6.0	白	外面2重線区画内に格子文と草文?。高台輪にも染め付け。口縁部内面磨略化した四方彫文。底部1重線内に不明文様。軸白し、焼成不良。	
第28号	8	肥前陶器 染付碗	1/2	口 9.5 底 3.9	高 4.9	灰白	外面コンニャク印判による桐文と并拵内に桐文。両者を交互に施文が。内面無文。	
第28号 PL.23	9	瀬戸・美濃 陶器半 手裏袋	口縁部1/8	口 19.7 底 -	高 -	灰白	口縁部小さく内湾し、端部丁字状。端部上面窪む。外面口縁部下1条の横線。内外面磨軸。	
第28号 PL.23	17	銅製品 キセル・雁首	破片	長 1.8 幅 1.8	厚 1.0 重 2.12		キセルの雁首部分で、火皿部分のみの破片。火皿内部には黒色の残渣がこびりついている。	
第28号 PL.23	18	銅製品 キセル・吸い 口	ほぼ定形	長 7.7 幅 1.0	厚 1.0 重 12.94		キセルの吸い口部分で表面は深緑黒色で平滑だがメッキ・装飾等は確認できない。	
第28号 PL.23	19	鉄製品 刀子	破片	長 8.8 幅 2.4	厚 0.9 重 15.13		劣化した刀子破片で、棟・刃側共に刃面を持ち対刃側・茎とも劣化破損する。柄の本質等は見られない。	
PL.23	20	鉄製品 釘	ほぼ定形	長 3.2 幅 1.2	厚 0.6 重 1.43		断面正方形に近い角釘で、先端に向い薄くなり実る。先端から1cm程でく字に曲がる。頭は薄く広げ折り曲げる。	
PL.23	21	鉄滓	破片	長 5.4 幅 3.0	厚 1.5 重 27.63		表面は黒褐色で凹凸が有る。一部を茶褐色の酸化土砂が覆う。	

## 2区

## 復旧溝群

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第15号	22	肥前陶器 染付碗	1/6	口 底 -	高 -	白	外面丸文内にコンニャク印判による桐文が。内面無文。	
第15号	23	肥前陶器 染付皿	底部1/4	口 底 (9.1)	高 -	白	内面染め付け。外面高台輪1重重線。高台外面から2重重線。蛇の目凹型高台。	
第15号	24	製作地不詳 磁器 小杯	下半1/4	口 底 (3.0)	高 -	白	酸化コバルトによる染め付け。内面無文。	近・現代。

## 遺構外

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第28号 PL.23	25	在地系土器 皿	口縁部1/10、底部1/2	口 底 6.7	高 2.1	橙	外面体部下端外反し、体部中位内湾。底部内面左回転螺旋状装飾目。底部左回転糸切無調整。	
PL.23	26	鉄製品 不詳	破片	長 4.0 幅 1.2	厚 0.5 重 4.74		断面長方形の舌状をした鉄製品で、茎の可能性が有るが端部は破損し磨略化しているため詳細は不明。	

## 3区

## 1号土坑

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19号	27	瀬戸・美濃 陶器 クロム青磁 小碗	口縁部1/2、底部1/5	口 底 (7.4) (3.0)	高 4.1	白	外面飛び鉋。内面から高台外面クロム青磁軸。	近・現代。



遺物観察表

種 類 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第199 Pl. 23	28	鉄製品 釘	ほぼ完形	長15.1 幅6.3	厚2.6 重69.95	白	断面長方形の大型の釘。先端に向かい徐々に細くなり尖る。頭部分は錆化した板目材に覆われ詳細不明。
第199 Pl. 23	29	鉄製品 釘		長2.9 幅0.8	厚0.8 重2.13		断面円形の丸釘。現代物か
Pl. 23	30	鉄製品 不詳		長15.0 幅2.8	厚1.8 重47.43		断面長方形の厚い板状鉄製品で、端部は角型に終わり他の端部は酸化破損する。端部から破損部に向かい徐々に細くなるが破損のため全体形状は不明。

遺構外

種 類 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
Pl. 23	32	鉄製品 釘	破片	長3.6 幅1.2	厚1.0 重3.57		断面長方形の角釘。中央で浅くくねじれる様に曲がる。先端は細くなるが鋭利には尖らない。頭側は酸化破損する。
Pl. 23	33	鉄製品 釘	破片	長3.0 幅0.7	厚0.5 重1.62		断面はほぼ正方形の角釘。先端に向かい徐々に細くなり端部は酸化破損。頭側も酸化破損し詳細は不明。
第28回 Pl. 23	34	鉄製品 不詳	破片	長4.1 幅2.4	厚1.8 重41.93		断面三角形の鋳造鉄製品破片で両端とも酸化破損する。
第28回 Pl. 23	35	鉄製品 不詳	破片	長8.2 幅2.4	厚1.4 重14.60		断面長方形でややカーブする棒状の鉄製品破片で両端とも酸化破損する。
第28回 Pl. 23	36	鉄製品 不詳	破片	長6.7 幅1.1	厚0.4 重7.67		元部分断面三角形で先部分断面三角形の鉄製品で、表面は錆化剥落しているため型等は確認できない。
第28回 Pl. 23	37	鉄製品 不詳	破片	長5.2 幅1.3	厚1.2 重8.77		断面はほぼ正方形の角棒状鉄製品で、端部はやや細くなり角型に終わり、他の端部側は酸化破損する。木質等の痕跡は見られない。

4区

遺構外

種 類 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第28回 Pl. 23	38	瀬戸・美濃 陶器皿	口縁部1/3、底 部1/2	口径 底径	(12.2) (6.6)	高2.4	灰白	体部から口縁部内溝。外面口縁部以下回転施り。高台偏削り込む。内面から体部外面内底灰。底部内面重ね焼き痕。
第28回 Pl. 23	39	瀬戸・美濃 陶器 円盤状製品 (徳利)	完形	縦3.6 横3.7	厚0.8	灰白	胎輪徳利の体部下片の周囲を打ち欠いて円盤状に成形。外面下位を除き胎輪。内面無輪。	二次加工品。
第28回 Pl. 23	40	瀬戸・美濃 陶器 円盤状製品 (徳利)	完形	縦3.8 横3.4	厚0.7	灰白	胎輪徳利の体部片の周囲を打ち欠いて円盤状に成形。外面胎輪。内面無輪。	二次加工品。
第28回 Pl. 23	41	在地系土器 円盤状製品 (焙烙か)	完形	縦4.3 横5.6	厚0.9	黒	断面中央黒色。器表付近灰白色。器裏黒色。内面回転模焼で。外面型造。底部片の周囲を打ち欠いて円盤状に成形。	二次加工品。
第28回 Pl. 23	43	銅製品 キセル・雁 首	一部欠損	長5.4 幅1.1	厚1.2 重7.04		キセルの雁首部分の破片で火皿部分欠く。表面は酸化により荒れスッキ・装飾等は確認できない。	
第28回 Pl. 23	44	銅製品 キセル・雁 首	一部欠損	長4.0 幅1.0	厚1.1 重7.9		キセルの雁首部分の破片で火皿部分欠く。表面は酸化により荒れスッキ・装飾等は確認できない。鋭い口縁部内に扉印の木質が残存する。	
Pl. 23	45	銅製品 残貨	完形	縦2.299 横2.315	厚0.121 重2.48		寛水通貫。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明確。裏面は彫浅く外縁・郭ともやや不明。	
第28回 Pl. 23	46	鉄製品 火打金	ほぼ完形	長5.3 幅3.3	厚0.9 重11.08		三角形の火打金で中央上部に丸孔を持つ。縦線・木質等の痕跡は見られない	
Pl. 23	47	鉄製品 釘	破片	長3.9 幅1.5	厚1.3 重9.04		断面長方形の角釘。先端に向かい細くなり端部は酸化破損する。頭は幅広く折り返しと見られるが、土砂を巻き込んだ鋭い筋に覆われ本体は脆弱なため詳細は不明。	
Pl. 23	48	鉄製品 釘	破片	長2.5 幅0.9	厚0.6 重1.92		断面はほぼ正方形の角釘。先端に向かい徐々に細くなり端部は酸化破損。頭側も酸化破損し詳細は不明。	
第28回 Pl. 23	49	鉄製品 不詳	ほぼ完形	長5.2 幅1.6	厚1.1 重10.05		断面長方形の互状をした鉄製品で、錆化が進み土砂を巻き込んだ筋に覆われ詳細は不明。	
第28回 Pl. 23	50	鉄製品 不詳	破片	長3.4 幅1.1	厚0.8 重4.95		断面長方形の棒状鉄製品で、端部は丸みを持ち終わり。他の端部は酸化破損する。	

5区

遺構外

種 類 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考	
第28回 Pl. 23	51	銅製品 残貨	完形	縦2.381 横2.367	厚0.122 重2.88		寛水通貫。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明確。裏面は彫浅く外縁・郭ともやや不明。	
Pl. 23	52	鉄製品 釘	破片	長3.3 幅0.8	厚0.6 重2.21		断面はほぼ正方形の角釘。先側側は酸化破損。頭側は斜めに尖部に細くなり、折り返し部分が酸化破損したものと考えられる。木質等の付着は見られない。	
Pl. 23	53	鉄製品 釘	破片	長3.8 幅1.2	厚1.0 重3.55		断面はほぼ正方形の角釘破片。先側側は破損し、頭側は広げ折り返しと見られるが全体に鋭い筋に厚く覆われ本体脆弱なため詳細は不明。	

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
PL-23	54	鉄製品 釘	破片	長 2.5 幅 0.6	厚 0.4 重 0.67	断面四角の角釘破片、先端に向かい細くなり尖る、頭部は破損。	
PL-23	55	鉄製品 釘	破片	長 2.2 幅 0.9	厚 0.6 重 1.13	断面やや丸みをおびた角釘、先端側は劣化破損。頭は薄く広がる。	
第28回 PL-23	56	鉄製品 不詳	破片	長 4.3 幅 2.5	厚 0.8 重 11.31	断面は薄い長方形から狭三角形に変わり刀子の破片とも考えられるが、その間に同等の形状は認められない。木質等の痕跡も見られない。	
第28回 PL-23	57	鉄製品 不詳	破片	長 4.2 幅 1.1	厚 0.7 重 3.92	薄い板状の鉄製品で、両端とも劣化破損する。	
第28回 PL-23	58	鉄製品 不詳	破片	長 3.7 幅 1.2	厚 0.8 重 3.62	薄い板状の鉄製品で、端部は角の取れた角型で他の端部側は劣化破損する。	
第28回 PL-23	59	鉄製品 不詳	破片	長 3.3 幅 1.3	厚 0.9 重 4.80	断面長方形の角棒状鉄製品で、端部は角形で他の端部は劣化破損し全体形状は不明。	
PL-23	60	鉄製品 不詳	破片	長 3.4 幅 1.3	厚 0.9 重 4.09	断面長方形の角棒状鉄製品で両端とも劣化破損する。	

## 〔2. 1 面下位置〕

## 1 区(屋敷)

## 1・2号建物(礎石)

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第35回 PL-23	61	礎石	礎石1	長 38.0 幅 26.0	厚 24.8 重 36960	粗粒輝石安山岩	礎平坦部を上面に使用。柱当たり痕(15.6×13.2cm)あり。	第114回参照
第35回 PL-23	62	礎石	礎石2	長 40.4 幅 30.8	厚 23.6 重 40980	粗粒輝石安山岩	「六ノ六」の墨書、墨線あり。柱当たり痕(10.0×9.6cm)あり。	第114回参照
第32回	63	礎石	礎石3	長 35.0 幅 24.5	厚 19.0 重 23800	溶結凝灰岩	柱当たり痕(10.0×9.5cm)あり。	第114回参照
第32回	64	礎石	礎石5	長 25.0 幅 17.5	厚 14.5 重 10000	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.7×8.0cm)あり。	第114回参照
第32回	65	礎石	礎石6	長 27.5 幅 27.0	厚 13.5 重 14020	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.5×8.2cm)あり。	第114回参照
第32回	66	礎石	礎石7	長 28.5 幅 23.0	厚 10.8 重 10120	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.5×10.0cm)あり。	第114回参照
第35回 PL-23	67	礎石	礎石8	長 45.0 幅 32.5	厚 24.5 重 47480	粗粒輝石安山岩	「四ノ六」の墨書あり。柱当たり痕(11.9×11.0cm)あり。	第114回参照
第32回	68	礎石	礎石9	長 28.0 幅 25.0	厚 15.9 重 16360	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.7×8.2cm)あり。	第114回参照
第32回	69	礎石	礎石10	長 32.5 幅 24.0	厚 20.2 重 21680	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.7×10.0cm)あり。	第114回参照
第32回	70	礎石	礎石11	長 41.5 幅 26.0	厚 24.2 重 36380	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(12.8×11.3cm)あり。	第114回参照
第32回	71	礎石	礎石12	長 28.0 幅 28.0	厚 14.0 重 18160	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.5×9.0cm)あり。	第114回参照
第32回	72	礎石	礎石13	長 31.5 幅 30.0	厚 13.4 重 15000	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.4×8.5cm)あり。	第114回参照
第32回	73	礎石	礎石14	長 32.5 幅 24.0	厚 18.0 重 23880	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.2×9.3cm)あり。	第114回参照
第32回	74	礎石	礎石15	長 45.5 幅 29.5	厚 13.0 重 27160	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.0×9.2cm)あり。	第114回参照
第32回	75	礎石	礎石16	長 40.5 幅 26.5	厚 21.0 重 33880	ひん岩	柱当たり痕(10.7×9.0cm)あり。	第114回参照
第32回	76	礎石	礎石17	長 19.0 幅 16.5	厚 6.7 重 2640	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(7.8×7.2cm)あり。	第114回参照
第35回 PL-23	77	礎石	礎石18	長 28.0 幅 30.4	厚 13.6 重 17660	粗粒輝石安山岩	斜方向に墨線あり。柱当たり痕(10.0×9.6cm)あり。	第114回参照
第32回	78	礎石	礎石19	長 28.5 幅 20.0	厚 9.4 重 7960	石英閃緑岩	柱当たり痕(8.0×8.0cm)あり。	第114回参照
第32回 PL-23	79	礎石	礎石20	長 38.0 幅 32.0	厚 14.1 重 34220	粗粒輝石安山岩	礎平坦部を上面に使用。柱当たり痕(10.7×10.0cm)あり。	第114回参照
第32回	80	礎石	礎石21	長 45.0 幅 40.5	厚 24.5 重 46600	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(11.0×10.0cm)あり。	第114回参照
第32回 PL-23	81	礎石	礎石22	長 36.0 幅 27.0	厚 21.2 重 22160	粗粒輝石安山岩	礎平坦部を上面に使用。柱当たり痕(10.5×10.3cm)あり。	第114回参照
第35回 PL-23	82	礎石	礎石23	長 42.4 幅 32.8	厚 18.8 重 45180	粗粒輝石安山岩	墨痕あるが、判読不能。柱当たり痕(10.0×10.4cm)あり。	第114回参照
第32回	83	礎石	礎石24	長 36.0 幅 29.0	厚 19.7 重 33760	溶結凝灰岩	柱当たり痕(9.8×9.8cm)あり。	第114回参照
第32回	84	礎石	礎石25	長 41.0 幅 27.0	厚 16.3 重 29.38	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.0×9.5cm)あり。	第114回参照
第32回	85	礎石	礎石26	長 31.5 幅 24.0	厚 17.0 重 20440	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.0×9.0cm)あり。	第114回参照
第35回 PL-23	86	礎石	礎石27	長 39.6 幅 29.2	厚 20.8 重 36340	石英閃緑岩	礎平坦部を上面に使用。柱当たり痕(10.0×11.2cm)あり。	第114回参照

遺物観察表

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第328回 PL_23	87	礎石	礎石28	長32.0 幅27.0	厚重 27.0 34220	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.5×8.7cm)あり。	第114回参照
第328回 PL_23	88	礎石	礎石29	長38.8 幅28.8	厚重 18.8 28020	粗粒輝石安山岩	墨痕、十字の墨線あり。柱当たり痕(10.0×10.0cm)あり。	第114回参照
第328回	89	礎石	礎石30	長18.5 幅18.0	厚重 6.2 3220	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.3×7.5cm)あり。	第114回参照
第328回	93	礎石	礎石34	長19.0 幅18.5	厚重 5.2 3160	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.0×7.5cm)あり。	第114回参照
第338回	95	礎石	礎石36	長25.0 幅17.5	厚重 6.9 5240	アプライト	柱当たり痕(9.0×7.8cm)あり。	第114回参照
第338回	96	礎石	礎石37	長30.0 幅23.5	厚重 21.7 18080	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.0×8.8cm)あり。	第114回参照
第338回	97	礎石	礎石38	長24.0 幅23.0	厚重 6.5 5920	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.7×8.5cm)あり。	第114回参照
第338回	98	礎石	礎石39	長33.5 幅29.0	厚重 17.6 21320	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.5×9.4cm)あり。	第114回参照
第338回	99	礎石	礎石40	長22.5 幅17.5	厚重 11.5 8460	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.5×7.5cm)あり。	第114回参照
第338回	100	礎石	礎石41	長33.5 幅22.0	厚重 19.0 18300	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.8×9.0cm)あり。	第114回参照
第338回	101	礎石	礎石42	長17.5 幅18.0	厚重 7.0 2800	文象斑岩	柱当たり痕(8.5×8.0cm)あり。	第114回参照
第338回	102	礎石	礎石43	長28.5 幅18.0	厚重 8.6 6600	石英閃緑岩	柱当たり痕(8.3×6.9cm)あり。	第114回参照
第338回	103	礎石	礎石44	長34.0 幅29.0	厚重 15.4 18820	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.0×8.5cm)あり。	第114回参照
第338回	104	礎石	礎石45	長26.5 幅20.0	厚重 5.9 4420	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.5×8.5cm)あり。	第114回参照
第338回	105	礎石	礎石46	長34.5 幅23.0	厚重 22.0 27080	細粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.0×9.0cm)あり。	第114回参照
第338回	106	礎石	礎石47	長22.5 幅19.5	厚重 9.4 5180	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.5×8.0cm)あり。	第114回参照
第338回	107	礎石	礎石48	長33.5 幅26.0	厚重 16.8 16600	変はんれい岩	柱当たり痕(11.0×10.5cm)あり。	第114回参照
第338回	108	礎石	礎石49	長32.0 幅17.5	厚重 9.9 11000	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(8.7×8.0cm)あり。	第114回参照
第338回	109	礎石	礎石50	長32.0 幅29.5	厚重 18.5 18020	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(11.5×11.5cm)あり。	第114回参照
第338回	110	礎石	礎石51	長43.0 幅26.0	厚重 21.5 33360	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(10.0×10.0cm)あり。	第114回参照
第338回	111	礎石	礎石52	長22.5 幅19.5	厚重 15.2 9120	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(11.0×9.0cm)あり。	第114回参照
第338回	112	礎石	礎石53	長19.5 幅16.5	厚重 4.9 2740	石英閃緑岩	柱当たり痕(8.0×8.0cm)あり。	第114回参照
第338回	113	礎石	礎石54	長32.5 幅23.0	厚重 14.5 14920	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(9.5×9.3cm)あり。	第114回参照
第338回	114	礎石	礎石55	長19.0 幅16.0	厚重 6.3 2920	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(6.5×6.5cm)あり。	第114回参照
第338回	115	礎石	礎石56	長21.5 幅18.0	厚重 8.0 4200	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(7.8×7.6cm)あり。	第114回参照
第338回	116	礎石	礎石57	長20.5 幅16.5	厚重 5.7 3080	石英閃緑岩	柱当たり痕(7.2×7.0cm)あり。	第114回参照
第338回	117	礎石	礎石58	長36.0 幅34.0	厚重 25.4 58150	粗粒輝石安山岩	柱当たり痕(12.0×10.0cm)あり。	第114回参照
第338回 PL_23	118	礎石	礎石59	長31.0 幅23.5	厚重 14.8 16600	粗粒輝石安山岩	礎平坦部を上面に使用。柱当たり痕(9.0×9.0cm)あり。	第114回参照
第358回	124	礎石	定形 礎石112	長42.8 幅19.6	厚重 19.2 15520	二ツ房軽石	内側の上下面および側面の3面に平ノミ・丸タガネ工具により平坦面を造り出す。面は平滑。古墳石室の石を転用。	

1号建物(ダイドコロ)

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第368回 PL_24	127	鉄製品 釘	破片	長3.4 幅1.1	厚重 0.7 1.70		断面はほぼ正方形の内釘破片で先端に向かい細くなり尖る。頭部は劣化破損し形状不明。破損部付近に板目材の木質が顕微鏡で観察される。
第368回 PL_24	128	鉄製品 釘	破片	長3.1 幅1.3	厚重 0.6 1.35		断面はほぼ正方形の内釘破片で先端および頭部とも劣化破損する。全体に板目材の木質が顕微鏡で観察される。
第368回 PL_24	129	常滑陶器 甕	定形	口47.7 底20	高62.0	灰白	口縁部逆L字状を呈し、上面やや窪む。口縁部内面上方に小さく突き出る。

1号建物

挿入 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第368回 PL_24	130	肥前磁器 白磁小杯	口縁部1/4欠	口67.7 底2.7	高3.6	灰白	体部から口縁部顔状に開く。残存部無文。高台端部平坦に削る。

採 掘 PL. No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第368PL. 131	131	肥前磁器 染付小杯	定形	口 7.5 底 2.7	高 3.5	灰白	体部は膨らみ、口縁部は開く。外面一方に2文2つ、反対側に小さい皿状文の染付。	
第368PL. 132	132	肥前磁器 染付碗	口縁部一体部 1/4欠	口 10.1 底 4.4	高 5.0	白	外面2重網目文。高台盤1重圓縁。高台境2重圓縁。内面無文。	
第368PL. 133	133	肥前磁器 染付碗	口縁部一体部 1/4欠	口 10.5 底 4.1	高 5.0	白	外面梅の折れ枝文。高台盤1重圓縁。高台境2重圓縁。足込み蛇の目難直竝。輪割ぎ部白濁した状態アルミナ塗布。	
第368PL. 134	134	肥前磁器 染付皿	口縁部から体部 1/5	口 10.0 底 -	高 -	白	内外面コンチャク印印による染め付け。底部内面肉線圓縁。やや境成不良で貫入る。	
第368PL. 135	135	瀬戸・美濃 陶器鉄絵碗	口縁部から体部 1/4	口 9.0 底 -	高 -	灰	口縁部内面。残存部口縁部外面に1箇所の鉄絵。内面から高台脇戻。粗い貫入る。	
第368PL. 136	136	瀬戸・美濃 陶器鐵繪碗	口縁部から体部 1/5	口 9.0 底 -	高 -	灰	外面口縁部下襷状凹縁。内面以下鉄絵。内面から門縁部戻。戻縁に粗い貫入る。	
第368PL. 137	137	瀬戸・美濃 陶器鐵繪碗	口縁部1/4、底部 完	口 9.2 底 4.3	高 6.0	灰白	外面口縁部下襷状凹縁。内面から口縁部外面戻。戻縁に貫入る。門縁部から高台内錆色の鉄絵。高台端部無縁。	
第368PL. 138	138	瀬戸・美濃 陶器圓形香炉	1/7	口 10.8 底 (8.8)	高 -	淡黄	口縁部外面下門縁状に窪む。口縁部上面から体部外面下端輪。残存部わずかに鑿状工具による文様端部残存。	
第368PL. 139	139	瀬戸・美濃 陶器圓形香炉	口縁部1/5欠	口 10.8 底 8.2	高 5.8	灰白	体部外面下門縁部に鑿状工具による松文。口縁部内面から体部外面下端輪。脚3箇所取り付け。	
第368PL. 140	140	志戸呂陶器 灯火受皿	定形	口 8.3 底 4.8	高 1.8	にぶい赤褐	受け部1箇所にアーチ状取り。口縁部外面以下回転削り。内面から体部外面無調整。	
第368PL. 141	141	在地系土器 皿	底部1/2	口 -	高 -	黄橙	底部左回転糸切無調整。底部内面左回転襷状輪軸目。	
第368PL. 142	142	在地系土器 皿	口縁部片	口 -	高 -	灰白・黒	断面中央黒色。器表付近浅黄褐色。内面器表灰白色。外面器表煤付着により黒色。口縁端部外方に小さく折れる。口縁端部上面平坦。内面丁寧な回転横撫で。口縁部外面回転横撫で口縁部内面器表煤状に剥離。	
第368PL. 143	143	在地系土器 皿	口縁部片	口 -	高 -	黒～灰白	断面淡黄色。内面器表黒色。外面器表灰白色から黒色。外面部分的に煤付着。口縁端部外反し。内面は縁をなして上面を平坦にする。上面やや窪む。	
第368PL. 144	144	在地系土器 皿	1/4	口 -	高 -	黒～浅黄橙	断面灰白色。内面器表灰白色。外面器表黒色。外面煤付着。口縁端部加幅気味外反。端部内面は縁をなし、上面を平坦にする。上面やや窪む。	
第368PL. 145	145	在地系土器 焙烙	1/4	口 36.2 底 (32.0)	高 5.6	灰～黒	断面にぶい褐色。口縁部から体部外面黒色。底部外面褐色。内面灰白色から黒色。内面輪軸目残る。外面調整は丁寧で接合痕ほとんど擦で消す。外面下位の型崩れ一部の窪みを尻し削り取る。残存部端部に内耳取り付け痕の一部が残る。	
第368PL. 146	146	銅製品 銭貨	定形	縦 2.326 横 2.316	厚 0.115 重 2.44		質水通貨。表面は彫浅めたが錆化状況の違いにより外縁・文字・郭とも不明瞭。裏面は平坦で不明瞭。	
第368PL. 147	147	銅製品 銭貨	破片	縦 2.6 横 -	厚 0.193 重 1.57		質水通貨とみられるが寛の字部分を劣化破損する。表裏とも彫深く外縁・文字・郭とも不明瞭。	
第368PL. 148	148	銅製品 銭貨	定形	縦 2.418 横 2.406	厚 0.160 重 1.74		質水通貨。表面は彫深く外縁・郭とも不明瞭だが錆化のため文字一部不明瞭。裏面は平坦で不明瞭。	
第368PL. 149	149	銅製品 銭貨	ほぼ定形	縦 2.488 横 2.556	厚 0.209 重 1.98		質水通貨。表裏とも錆化により外縁・文字・郭とも不明瞭。	
第368PL. 150	150	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 2.485 横 2.476	厚 0.132 重 1.88		質水通貨。表面は彫深く外縁・文字・郭とも不明瞭だが寛一過部分の一部を劣化破損する。裏面は彫浅めたが外縁・郭とも不明瞭。	
第368PL. 151	151	銅製品 銭貨	ほぼ定形	縦 2.559 横 2.462	厚 0.166 重 2.18		質水通貨。表面は彫浅めたが外縁・文字・郭とも不明瞭。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。外縁の一部は劣化破損する。	
第368PL. 152	152	銅製品 銭貨	定形	縦 2.359 横 2.373	厚 0.116 重 2.06		質水通貨。表面は彫深く外縁・文字・郭とも不明瞭。裏面は平坦で外縁・文字・郭とも不明瞭。	
第368PL. 153	153	鉄製品 銭貨	ほぼ定形	長 2.659 幅 2.832	厚 0.684 重 5.57		鉄製寛永通寶と見られるが錆化が著しく詳細は不明。	
第368PL. 154	154	鉄製品 銭貨	ほぼ定形	縦 2.954 横 2.439	厚 0.924 重 9.84		複数の鉄銭化産物したものと考えられるが、錆化が著しく枚数等詳細は不明。	
第368PL. 155	155	銅製品 銭貨	定形	縦 2.449 横 2.438	厚 0.150 重 2.81		質水通貨。表面は彫深く外縁・文字・郭とも不明瞭。裏面も彫深く外縁・郭とも不明瞭。	
第368PL. 156	156	銅製品 銭貨	定形	縦 2.430 横 2.436	厚 0.135 重 2.30		質水通貨。表面は彫深く外縁・郭とも不明瞭文字は一部鉄錆びに覆われるが明瞭。裏面も彫深く外縁・郭とも不明瞭。	
第368PL. 157	157	銅製品 銭貨	定形	縦 2.394 横 2.404	厚 0.129 重 2.78		質水通貨。表面は彫深く外縁・郭とも不明瞭文字は一部鉄錆びに覆われるが明瞭。裏面も彫深く外縁・郭とも不明瞭。	
第368PL. 158	158	鉄製品 銭貨	ほぼ定形	縦 2.529 横 2.539	厚 0.294 重 2.22		鉄製寛永通寶と見られるが錆化が著しく詳細は不明。	
第368PL. 159	159	銅製品 銭貨	定形	縦 2.531 横 2.512	厚 0.159 重 3.19		質水通貨。表面は彫深く外縁・文字・郭とも不明瞭。裏面は平坦で一部鉄錆びが不明瞭。	
第368PL. 160	160	銅製品 銭貨	定形	縦 2.334 横 2.359	厚 0.148 重 2.66		質水通貨。表面は彫深く外縁・文字・郭とも不明瞭。裏面も彫深く外縁・郭とも不明瞭。	
第368PL. 161	161	銅製品 銭貨	定形	縦 2.214 横 2.243	厚 0.217 重 2.53		質水通貨。表面は硬く鉄錆びに覆われ外縁・文字・郭とも一部不明瞭。裏面も錆化のため外縁・郭とも不明瞭。	
第371PL. 24	162	銅製品 銭貨	定形	縦 2.513 横 2.500	厚 0.166 重 -		質水通貨。表面は彫深く外縁・文字・郭とも不明瞭。裏面は鉄銭が錆びけ付詳細不明。	

遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第37図 PL.24	164	古銭		縦 2.498 厚 0.158 横 2.496 重 3.14		寛永通寶。表面は形深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は形浅いが外縁・郭とも明瞭。永の字部分裏面より外力を受け変形破損する。	
第37図 PL.24	165	古銭		縦 2.275 厚 0.181 横 2.306 重 0.66		寛永通寶とみられるが寛の字一部と通の部分劣化破損する。表面は形深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は錆化により不明瞭。	
第37図 PL.24	166	金属製品 銭貨	破片	縦 - 厚 - 横 - 重 33.68		複数(5枚以上)の鉄銭および銅銭が錆化癒着したものと考えられるが、錆化が著しく枚数等詳細は不明。	
第37図 PL.24	167	金属製品 銭貨	破片	縦 - 厚 - 横 - 重 14.27		1枚の銅製寛永通寶と鉄銭3枚?が跡み癒着する。寛永通寶。表面は形深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で不明瞭。鉄銭は寛永通寶と見られるが錆化が著しく詳細不明。	
第37図 PL.24	168	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 2.396 厚 0.160 横 2.394 重 2.80		寛永通寶。表面は形深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で錆化により不明瞭。	
第37図 PL.24	169	銅製品 銭貨	完形	縦 2.335 厚 0.210 横 2.306 重 2.64		寛永通寶。表面は形深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は形浅いが外縁・郭とも明瞭。	
第37図 PL.24	170	銅製品 銭貨	完形	縦 2.384 厚 0.207 横 2.390 重 2.71		寛永通寶。表面は形深い錆化により外縁・文字・郭とも一部不明瞭。裏面は平坦で不明瞭。	
第37図 PL.24	171	銅製品 銭貨	完形	縦 2.329 厚 0.136 横 2.337 重 2.99		寛永通寶。表面は形深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。	
第37図 PL.25	172	銅製品 キセル・吸い口	破片	長 11.6 厚 0.9 幅 0.9 重 8.58		キセルの吸い口部分で、全体に竹を模した形状で3箇所に筋を作り出している。吸い口端部から1つ目の筋までが一体で筋部分で繋いで作られている。首首筋は破損しており本来一体造りの可能性も有るが破損により詳細不明。	
第37図 PL.25	173	銅製品 キセル・壺首	一部欠損	長 3.1 厚 2.0 幅 1.4 重 7.00		キセルの壺首部分。火皿の一部を考査破損する。吸い口側に11本の溝を廻り12段の模様を作り出している。	
第37図 PL.25	174	鉄製品 釘	一部欠損	長 3.8 厚 1.0 幅 1.2 重 1.69		断面ほぼ正方形の角釘で先端に向かい細くなるが先端部は劣化破損する。頭は薄く広く広がり直向に折り曲がる。木質等の痕跡は見られない。	
第37図 PL.25	175	鉄製品 釘	破片	長 5.1 厚 1.3 幅 1.7 重 5.40		断面ほぼ正方形の角釘で先端に向かい細くなり細くなるが先端部分は劣化破損する。頭部も劣化破損し形状不明。全体に木質が錆化残存する。	
PL.25	176	鉄製品 釘	破片	長 2.7 厚 0.5 幅 1.0 重 1.13		断面四角の角釘破片。全体に土砂を巻き込んだ錆に覆われ、詳細形状不明。	
第37図 PL.25	177	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 5.0 厚 1.5 幅 1.5 重 4.57		断面ほぼ正方形の角釘で先端に向かい細くなり尖る。頭は幅広く薄く広く折り曲がる。頭付近と先端から2.5cm付近に板目材木質等の痕跡が見られるが角釘の軸方向は90°近くになっている。	
第37図 PL.25	178	鉄製品 不詳	破片	長 6.9 厚 1.4 幅 1.9 重 11.53		断面長方形の板状鉄製品で、端部でやや幅広くなり横に曲がる端部は角形で終わる。他の端部は劣化破損し不明。全体に木質等の痕跡は見られない。	
PL.25	179	鉄製品 不詳	破片	長 2.4 厚 1.0 幅 1.0 重 2.39		断面四角から楕円形の棒状鉄製品で、両端とも劣化破損する。	
第37図 PL.25	180	鉄製品 不詳	破片	長 5.8 厚 0.7 幅 2.8 重 18.30		薄い板状の鉄製品で片側はやや薄くくびれる様に曲がっているが片とは判定できない。両側は錆びに覆われるが破損後錆化した可能性が有り全体形状は不明。	
第37図 PL.25	182	鉄製品 不詳	破片	長 5.9 厚 0.9 幅 5.1 重 21.44		薄い板状の鉄製品で181と同一個体と見られるが劣化破損し直接接合はできない。	
PL.25	184	石製品? 不明	完形	長 6.3 厚 0.6 幅 1.5 重 8.7	珪質頁岩	小形の棒状燧石。上部に横方向の溝が浅く刻まれている。正面左側縁に横穴のキズ。裏面右側縁に連続した微小割離面が残る。この部分が機能部と推定される。	

1号建物(掘り方)

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第37図 PL.25	185	在地形土器 皿	1/4	口 (9.7) 高 2.2 底 (5.8)	にぶい橙	口比にして器高や高い。底部右回転糸切無調整。底部内面右回転螺旋状模範目。	

2号建物(北部)

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第37図 PL.25	186	在地系土器 大酒壺か	1/8	口 径 (15.4) 高 1- 底 (14.0)	黒	断面中央暗灰色。器表付近暗灰色。器表黒色。蓋受け部付近の器表のみにぶい橙色。口縁部内面に蓋受け。内面回転模範で、外面磨き。底部に纏わり付く残存。底部外面型痕。	
PL.25	187	鉄製品 釘	破片	長 3.5 厚 0.8 幅 1.2 重 2.92		断面四角の角釘破片。先端部は破損。頭近くで曲がり端部は角形で終わる。	
PL.25	188	銅製品 キセル?	破片	長 2.7 厚 0.6 幅 0.8 重 0.71		断面円形の筒状銅製品で、キセルの吸い口側端部の可能性が有るが劣化が著しく詳細は不明。	

2号建物

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第37図 PL.25	189	瀬戸・美濃 陶器磁器 陶器磁器	口縁部1/2、底 部完	口 9.8 高 5.6 底 4.2	灰白	外面口縁部下縦長状凹線。内面から口縁部外面灰輪。灰輪に貫入する。凹線部から高台内側の鉄輪。高台部無筋部。	
第37図 PL.25	190	瀬戸・美濃 陶器 陶器水入れ	取っ手欠	口 4.8 高 2.7 底 3.6	灰白	取っ手取り付け部は口縁部内に認められ、移取取っ手であろう。底部周縁から底部外面回転模範削り。底部周縁面取り。内面から体部外面下端灰輪。	

種別 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第377図	191	瀬戸・美濃 陶器灯火皿	1/8	口 底 (10.8) (5.6)	高 2.0	灰	外面中位以下回転削り。踏輪軸後底部付近を拭う。
第377図	192	瀬戸・美濃 陶器十徳	基部片	口 底 -	高 -	浅黄橙	基部片で取っ手基部残る。内面から底部外面四縁踏輪。
第377図	193	瀬戸・美濃 陶器徳利	完形	口 底 3.8 5.5	高 18.7	灰白	蓋で肩に口縁端部を下方に折り返す。頸部内面から外面に 底踏輪軸後、体部下位以下位を拭う。
第377図	194	瀬戸・美濃 陶器すり鉢	口縁部片	口 底 -	高 -	淡黄	口縁部薄い玉縁状。踏輪。口縁端部の輪割線多く、使用痕か。
第377図	195	堺・明石 陶器すり鉢	下半1/3	口 底 (15.2)	高 -	赤橙	体部外面回転削り。体部内面下位以下使用により摩滅。
第377図	196	在地系土器 皿	1/2	口 底 (9.2) (6.7)	高 1.9	浅黄橙	底部右回転糸切無調整。底部外面右回転螺旋状輪軸目。
第377図	197	在地系土器 焙烙	口縁部から体部 片	口 底 -	高 -	黒	断面中央暗灰色。器表付近灰白色。口縁部器厚い。口縁 端部上面平坦。内面から外面上半回転横撫で。外面中位接 合痕残る。外面下位窪みに型痕残る。外面下端削削り。
第377図	198	在地系土器 焙烙	口縁部から底部 片	口 底 -	高 5.5	黒・灰褐	断面灰白色。器表灰色。底部内面灰白色。底部外面灰褐色。 内面に内耳1箇所。外面の左端割削口に焼成後の補修孔2箇 所残る。外面下端削削り。
第377図	199	銅製品 銭貨	完形	縦 2.360 横 2.375	厚 0.148 重 2.11		貫水通貫。表面は形深く外縁・文字とも明瞭。裏面は形浅 いが外縁・郭とも明瞭。
第377図	200	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 2.847 横 2.350	厚 0.171 重 4.66		貫水通貫(裏表)。表面は形深く外縁・文字・郭とも明瞭。 裏面は形浅くかつ跡が著しいため外縁・波・郭とも不明 瞭。
第377図	201	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 2.855 横 2.858	厚 0.145 重 3.74		貫水通貫(裏表)。表面は形深く外縁・文字・郭とも明瞭。 裏面は形浅いが外縁・波・郭とも明瞭。
第380図	202	鉄製品 鉄	一部欠損	長 16.0 幅 3.3	厚 1.2 重 33.44		握り鉢の破片で破先をあわせた形で片側先端を劣化破損す る。握り部分の半分も劣化破損する。
第380図	203	銅製品 キセル・吸い い口	一部欠損	長 7.9 幅 0.9	厚 1.0 重 9.96		キセルの吸い口部分で、断面表面に裝飾の痕と見られる 凹凸が残るが、劣化が著しく表面は有れているため識別困難。 断面内面に木質が残存する。
第380図	204	銅製品 不詳	破片	長 4.5 幅 1.0	厚 1.0 重 3.61		厚さ1mm程の板状銅製品で、端部で幅広くなり2つに分かれ 劣化破損する。他の端部も斜めに劣化破損し全体形状は不明。
第380図	205	鉄製品 釘	一部欠損	長 4.0 幅 1.4	厚 0.9 重 4.64		断面はほぼ正方形の角釘で、先端部分は劣化破損する。頭は 薄く広がり折り曲げる。頭から2cm付近まで木質が粘着状残 存する。
第380図	206	鉄製品 釘	破片	長 4.7 幅 1.1	厚 0.8 重 4.74		断面正方形の角釘と見られる鉄製品破片。頭側は角形で終 わり先端部は劣化破損する。木質等の痕跡は見られない。
第380図	207	鉄製品 釘	破片	長 2.3 幅 0.7	厚 0.5 重 1.38		断面やや丸みを帯びた角釘。先端部は劣化破損。頭は角形 で終わる。
第380図	208	鉄製品 不詳	破片	長 3.8 幅 0.8	厚 0.6 重 2.82		断面四角形でややカーブした棒状鉄製品で両端とも劣化破 損する。
第380図	209	鉄製品 不詳	破片	長 4.7 幅 1.2	厚 0.7 重 5.15		断面薄い長方形の鉄製品で、中央付近両面に間欠のくびれ を持つが両端とも劣化破損し全体形状は不明。木質等の痕 跡は見られない。
第380図	210	鉄製品 不詳	破片	長 5.0 幅 0.9	厚 1.0 重 3.63		断面薄い長方形の鉄製品で、端部は丸みを帯び持たらない他 の端部は劣化破損する。全体に木質等の痕跡は見られない。

## 2号建物(掘り方)

種別 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第388図	213	在地系土器 皿	1/5	口 底 (8.7) (5.1)	高 1.5	橙	体部緩く反し。口縁端部付近内湾気味に立ち上がる。底部 左回転糸切無調整。口縁端部灯芯1箇所。
第388図	214	在地系土器 四疊状製品	1/2	径 3.0	厚 0.4	灰・黒	焙烙か鍋の底部片を擇って内盤状に仕上げた。中央に直径 3mmの穿孔。

## ミソグラカ

種別 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第450図	215	銅製品 不詳	ほぼ完形	長 4.0 幅 0.5	厚 0.1 重 1.12		幅5mm厚さ1mm程の細長い板状の銅製品で両端近く四角形 の孔を持つ。裏表で表面の遺存状況が異なる。

## 建物一括

種別 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第450図	216	製作地不詳 磁器 ミニチュア	1/2	口 底 2.3 0.7	高 1.2	白	型押成形により高台盤に尊状の三角形文、口縁部外面から 体部外面に縦条線文。白磁。
第450図	217	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 2.3 幅 0.9	厚 0.8 重 0.81		断面はほぼ正方形の角釘で先端に向いへくになり尖る。頭は 薄く広がり折り曲げる。木質等の痕跡は見られない。
第450図	218	鉄製品 釘	破片	長 2.1 幅 0.8	厚 0.7 重 1.84		断面はほぼ正方形の角釘。先端部は劣化破損。頭側は角形だ が鋭い頭で覆われ不明瞭。

## 1号土器

種別 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第398図	224	肥前磁器 染付碗	口縁部1/4	口 底 (10.0)	高 1	灰白	外面コンニャク印判による染め付け。内面無文。

遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第398回	225	肥前陶器 陶胎染付碗	1/2	口 底	(10.4) (5.2)	高 7.4 灰	体部外面植物文。口縁部外面重圏線間に雲状文。内面無文。 高台胎1重圏線。高台外面2重圏線。		
第398回	226	肥前陶器 陶胎染付火 入か香炉	体部下位片	口 底	-	高 - 灰色	外面染め付け。内面無輪。		
第398回	227	瀬戸・美濃 陶器 筒形小香炉	口縁部1/8、体 部1/4	口 底	(5.7) -	高 - 灰白	口縁端部内側に折り曲げる。口縁端部内面から体部外面下 端灰輪。貫入入る。		
第398回	228	瀬戸・美濃 陶器 筒形小香炉	1/4	口 底	(6.0) -	高 - 灰白	口縁端部内側に折り曲げる。口縁端部内面から体部外面下 端灰輪。貫入入る。		
第398回	229	瀬戸・美濃 陶器 半割煮	底部1/4	口 底	(13.0) -	高 - 浅黄	高台胎面取り状に造削り。高台増小さく狭り込む。内面から 体部外面下位踏輪。底部内面目跡1箇所。		
第398回	230	瀬戸・美濃 陶器	体部下位以下 1/4	口 底	(5.0) -	高 - 灰白	外面回転造削り。内面から体部外面下位踏輪。底部内面目 跡1箇所。		
第398回	231	京・信楽系 陶器土絵 皿	口縁部片	口 底	-	高 - 灰白	外面赤、黄緑、青灰色の上絵。		
第398回	232	在地系土器 皿	1/4	口 底	(9.3) (6.3)	高 1.9 -	にぶい橙	底部回転糸切無調整。	
第398回	233	在地系土器 皿	1/4	口 底	(9.2) (5.5)	高 1.8 -	にぶい橙	口縁端部付近で内湾。	
第398回 PL.25	234	鉄製品 釘?	破片	長 幅	4.3 2.1	厚 重	0.9 2.58	断面はほぼ正方形のくの字状の鉄製品で、端部は細くなり尖 る他の端部側は劣化破損する。	
第398回 PL.25	235	鉄製品 不詳	破片	長 幅	7.3 1.9	厚 重	1.1 11.19	工具の茎付近と見られる鉄製品。茎との境には両側に大き く棘を持つ。茎には木質が錆化残存し端部は劣化破損する。 先端側は角形で終わりに錆に覆われるが、破損後錆化した可 能性がある。	
第398回 PL.25	236	石製品 砥石	破片	長 幅	(7.3) 3.4	厚 重	3.1 111.8	砥石	2面使用。左右側面と上端小口面に磨面タガネ痕が残る。

1号井戸

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考		
第44回 PL.25	237	木製品 井戸枠		長 幅	175 10.8	厚 重	10.5 11.300	ノコギリにより切断した丸木の枝を落として利用し、端部 より35cm付近に10cm程の幅で切り込みを施す。約120cm離 れた反対面にも切り込みの一部が見られるがその先は破 損・欠失し不明。	179頁	
第44回 PL.25	238	木製品 井戸枠		長 幅	229 15.2	厚 重	14.4 22.620	ノコギリにより切断した丸木の枝を落として利用。両端部 より42cm付近の表裏面にそれぞれ11cmおよび12.5cm程の幅 で切り込みを施す。片面の中ほどの二か所に逆方向に傾 形で幅9cm程の圧痕と見られる平坦な凹みがある。	179頁	
第44回 PL.25	239	木製品 井戸枠		長 幅	183 10.7	厚 重	10.5 11.100	ノコギリにより切断した丸木の枝を落として利用し、端部 より40cm付近に12cm程の幅で切り込みを施す。約120cm離 れた同一面にも11cm程の幅で切り込みが見られるがその先 は破損・欠失し不明。切り込み面の中ほどに逆方向に傾 形で二か所に圧痕と見られる平坦な凹みがある。	179頁	
第44回 PL.25	240	木製品 井戸枠		長 幅	228 13.4	厚 重	13.4 22.640	ノコギリにより切断した丸木の枝を落として利用。両端部 より40cm付近の同一面にもそれぞれ14cmおよび15cm程の幅で 切り込みを施す。極元縁部両面に切り込み面とそろえる 傾きに傾きが見られ、その切込近く二の字の痕跡が残る。	179頁	
第43回	241	肥前系磁器 染付碗	口縁部1/3、底 部完	口 底	6.7 3.3	高 重	5.1 -	白	高台胎水平に近く開き。体部端は縁をなす。残存部3方に 同じ丸文を一つずつ描く。配置からして4方であろう。内面 無文。	242・243と類 み物か。
第43回	242	肥前系磁器 染付碗	口縁部～体部 1/4	口 底	(7.8) -	高 重	- 白	白	外面に文様を線刻して濃みを入れ、輪郭線状に見せる。残存 部2方に簡略化した草文と花文を各1つ描く。内面無文。	241・243と類 み物か。
第43回	243	肥前系磁器 染付碗	体部1/2、底部 3/4	口 底	- 3.6	高 重	- 白	白	外面に文様を線刻して濃みを入れ、輪郭線状に見せる。残 存部1箇所に草文の一部が残る。内面無文。	241・243と類 み物か。
第43回	244	肥前磁器 染付筒形碗	体部下位以下	口 底	- 3.9	高 重	- 白	白	体部外面染め付け。体部下端と高台胎1重圏線。高台増2重 圏線。底部内面四輪2重圏線。見込み簡略化した五弁花。	
第43回	245	肥前磁器 染付筒形碗	口縁部1/2、底 部1/10	口 底	7.3 (3.8)	高 重	5.1 -	白	外面矢羽根文と井桁文を交互に描く。高台胎1重圏線。口 縁部内面2重圏線。底部内面四輪1重圏線。今や焼成不良で 貫入入る。	
第43回	246	肥前磁器 染付碗蓋	柄杓～天井部	口 底	- 4.3	高 重	- 白	白	天井部外面植物と麒麟が瘦文。柄杓不明字跡。天井部内 面盲文。	
第43回	247	肥前磁器 染付蓋物か	体部一部、底部 3/4	口 底	- 6.3	高 重	- 白	白	外面染め付け。残存部内面無文。口縁端部欠損。	
第43回	248	肥前磁器 染付碗反碗 蓋	1/3	口 幅	(8.8) (4.8)	高 重	2.6 -	白	天井部外面と口縁部内面短状文。天井部内面1重圏線。	
第43回	249	肥前磁器 染付碗	1/2	口 底	(8.8) (4.2)	高 重	5.1 -	灰白	外面梅の折れ枝文。高台胎1重圏線。高台増2重圏線。見込 み蛇の目輪軸蓋。輪軸蓋部内面した足状アルミナ律布。	
第43回	250	肥前磁器 染付小皿	口縁部一部、底 部1/4	口 底	(9.5) (5.9)	高 重	2.1 -	白	外面不明文様。高台胎と高台増1重圏線。口縁部内面から 底部四輪1重圏目文。	
第43回	251	肥前磁器 染付皿	口縁部1/8、底 部1/4	口 底	(14.0) (8.0)	高 重	3.6 -	灰白	外面無文。底部内面山と建物を描く。蛇の目型高台。	

種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第43図	252	肥前磁器 染付皿	底部1/4	口 底 (9.8)	高 -	白	体部外面不明文様。高台外面磨面状。底部内面2重磨面 文内に植物を描く。蛇の目型高台。	
第43図	253	肥前磁器 染付徳利	体部下位以下 1/4	口 底 (8.8)	高 -	灰白	体部外面下位1重磨線か。内面と高台端部無縁。	
第43図	254	瀬戸・美濃 陶器皿	口縁部1/6	口 底 (13.7)	高 -	灰白	内外面白上網毛塗り。内外面灰輪。細かい買入る。	
第43図	255	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	口縁部1/8、体 部下位以下4/4	口 (10.2) 底 (4.0)	高 5.4	白	外面中位と高台脇の文様。高台境の縁線は手描き。口縁部 外面素地に円線3線を刻み、濃みを入れる。体部下位は素 地に飛び駒を施し、濃みを入れる。口縁部内面飛び駒状の 染め付け。底部内面周縁1重磨線。見込み不明文様。	
第43図	256	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	口縁部1/10、底 部1/2	口 (10.3) 底 (3.8)	高 5.1	白	外面1重磨線内に花状文。高台脇1重磨線間に不明文様。高 台外面1重磨線。口縁部内面磨面化した四方唐文か。底部 内面1重磨線内に寿字文。	
第43図	257	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	口縁部1/10、底 部1/3	口 (10.1) 底 (3.3)	高 5.6	白	外面1重磨線内に草花文。高台外面2重磨線。口縁部内面磨 面化した雷文帯状文。底部内面1重磨線内に寿字文。	
第43図	258	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	口縁部1/8	口 (10.8) 底 -	高 -	白	外面松文。口縁部内面3重磨線。底部内面周縁2重磨線。	
第43図	259	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	体部1/3、底部 1/2	口 (3.6)	高 -	白	酸化コバルトによる染め付け。外面文と唐草文。高台脇1 重磨線。高台境付近2重磨線。口縁部内面不明文様部。底 部内面1重磨線内に寿字文。	
第43図	260	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	体部以下	口 底 3.6	高 -	白	酸化コバルトによる染め付け。外面履線区画内に3本線。 高台脇1重磨線間に不明文様と井桁文。口縁部内面3重磨線 か。底部内面1重磨線内に寿字文。	
第43図	261	瀬戸・美濃 陶器磨面鉢	口縁部下1/3	口 底 (4.1)	高 -	灰白	外面口縁部下窪め状凹線。腰部外面縦い線をなし、縁部分 に輪が弱まる。高台径小さく低い。内面に口縁部外面灰 輪。外面口縁部下から高台内側の鉄輪。高台端部無縁。	
第43図	262	瀬戸・美濃 陶器線鉢	底部1/4	口 底 (15.5)	高 -	白	内面から高台脇灰輪。底部内面団子状の目跡2箇所所残存。	
第43図 PL.25	263	瀬戸・美濃 陶器すり鉢	体部下位～底部 1/2	口 底 15.1	高 -	淡黄	体部外面から底部外面回転連なり。筋輪。体部内面下位か ら底部内面使用により若干干減。	
第43図	264	明・堺石 陶器すり鉢	口縁部片	口 底 -	高 -	橙	残存部の半分は片口部で口縁部を内側から外面側に押し込 げ、口縁部内面の突起は低く丸く、段差は凹線状となる 。無縁。	
第43図 PL.25	265	志戸呂陶器 灯火受皿	体部から底部 1/2	口 底 5.3	高 2.3	橙	残存部外面回転連なり。内面筋輪。残存部アーチ状折り認 められない。口縁部意図的な打欠き。	二次加工。
第43図	266	常滑陶器 甕	口縁部片	口 底 -	高 -	浅黄橙	断面浅黄から橙色。内面器表橙色。外面器表灰褐色。口縁 部内面は内側に大きく突き出る。端部外面は上方に丸め る。	
第43図 PL.25	267	在地系土器 焙烙	口縁部から底部 片	口 底 -	高 -	明赤黄	口縁部外面から底部外面煤付き。丸底。内耳1箇所所残存。 底部外面凹線。	
第43図 PL.25	268	在地系土器 焙烙	口縁部から底部 片	口 底 -	高 -	明赤黄	口縁部外面から底部外面煤付き。丸底。内耳1箇所所残存。 底部外面凹線。	
第43図	269	在地系土器 煎輪	破片	口 底 -	高 4.4	黒・ぶい橙	断面黒色。器表付近にぶい橙色。器表黒色。口縁部付近の 器表のみにぶい橙色。底部外面打書きによる文字か記号。 底部外面凹線。	底部に記号 か文字。
第43図	270	在地系土器 煎輪	破片	口 底 -	高 4.6	橙・黒	断面と口縁部外面から内面器表橙色。基部上面から底部外 面器表黒色。基部の器壁やや厚い。	
第43図	271	在地系土器 煎輪	破片	口 底 -	高 -	橙・黒	断面中央黒色。器表付近と口縁部外面から内面器表橙色。 基部上面から底部外面器表黒色。	
第43図 PL.25	272	瓦軒先	瓦頭部片	長 幅 -	厚 1.8	暗灰	断面灰白色。器表暗灰色。焼し焼成。唐草文。椀瓦の軒先 であらう。	
第43図 PL.25	273	鉄製品 不詳	破片	長 8.3 厚 2.3	厚 0.5 重 2.97		劣化の著しい棒状鉄製品で、表面は全体に錆化剥落し木 束の形状を留めない。	
第43図 PL.25	274	石製品 砥石	破片	長 11.7 幅 (4.4)	厚 4.2 重 226.9	ホルンフェルス	表裏面2面使用。砥面には縦状筋が多数残存。上面および 左側面は磨面しているものの、研面に使用していない。	
1号土坑								
種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第44図	275	在地系土器 内耳皿	口縁部片	口 底 -	高 -	灰	断面淡赤褐色。器表灰色。口縁部内面。器壁薄。口縁部 外面は丸く小さく突き出る。	
2号土坑								
種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第44図	276	在地系土器 皿	口縁部一部、底 部完	口 (6.7) 底 4.0	高 2.4	黒～ぶい橙	口縁部端わずかに外反。底部左回転糸切無調整。	
屋敷内								
種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第45図	277	肥前磁器 青磁染付碗	口縁部から体部 1/6	口 底 (8.1)	高 -	灰白	口縁部内面四方唐文。内面透明釉。外面青磁釉。	
第45図	278	肥前磁器 青磁染付碗	口縁部一体部 1/2欠	口 (11.7) 底 4.1	高 5.9	白	底部周縁太い2重磨線。見込み五弁花コンニャク印判。口 縁部外面から高台外面青磁釉。高台内と内面透明釉。見込 み蛇の目輪筋。輪筋が細かい彫付者。	



遺物観察表

採 掘 Pt.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第458	279	肥前磁器 染付碗	口縁部から体部 1/5	口 底	(10.0) 高 底	灰白	外面残存部コンニャク印刷による刷文。高台輪1重圍繞。	
第458	280	肥前磁器 染付小杯	口縁部から体部 1/6	口 底	(7.8) 高 底	灰白	口縁部付近外反。体部外面染付一部残存。	
第458	281	瀬戸・美濃 陶器 器底陶碗	体部3/3、底部 完	口 底	4.3 高 底	灰白	外面口縁部下端螺旋状凹線。凹線部から高台内筋輪に近い鉄輪。高台端部無輪。内面灰焼。灰焼に軽い貫入る。	
第458	282	瀬戸・美濃 陶器 器底陶碗	体部下位以下	口 底	4.7 高 底	淡黄	外面口縁部下凹線。内面灰焼。凹線部から高台内筋色の鉄輪。高台端部無輪。	
第458	283	瀬戸・美濃 陶器 器底陶碗	口縁部1/2、底 部完	口 底	(9.5) 高 底	灰白	外面口縁部下端螺旋状凹線。内面から口縁部外面灰焼。灰焼に貫入る。凹線部から高台内筋色の鉄輪。高台端部無輪。	
第458	284	瀬戸・美濃 陶器 器底陶碗	口縁部1/2、底 部完	口 底	(11.9) 高 底	灰白	外面一方に鉄輪具による較重刷文。内面から高台輪灰焼。貫入る。	
第458	285	瀬戸・美濃 陶器 灯火受皿	口縁部一部欠	口 底	(8.0) 高 底	灰白	受け部4箇所「コ」字状に伏る。外面口縁部以下回転磨削り。筋輪筋輪軸後、口縁部外面以下を拭う。	
第458	286	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	1/7	口 底	(9.8) 高 底	灰白	口縁部内面、断面三角形状に突き出る。体部内面から体部外面下端深井製品に似た灰焼。貫入る。残存部に磨削など認められない。口縁部外面に小丸磨削2箇所。火入れとして使用か。	
第458	287	堺・明石陶器 すり鉢	口縁部1/7	口 底	- 高 底	灰赤	断面暗灰色。器表灰赤色。口縁部内面突起は低く丸い。外面口縁部以下回転磨削り。	
第458	288	常滑陶器 鉢	口縁部片	口 底	- 高 底	橙	口縁部「T」字状をなし、端部外方は斜め上方に伸びる。	
第458	289	在地系土器 焙烙	1/5	口 底	(30.0) 高 底	黒	断面灰白色。器表黒色。中位の器厚や厚い。内外面輪軸目顕著。外面接合痕残らない。外面下部窪みに型痕残る。外面下端磨削り。	
第458	290	在地系土器 焙烙	1/4	口 底	(41.0) 高 底	黒・灰緑	断面中央暗灰色。器表付近灰褐色。口縁部から体部内外面器表黒色。底部内外面器表灰褐色。内外面輪軸目。残存部内面に内耳1箇所。外面下部型痕残る。外面下端磨削り。	
第458	291	在地系土器 壺か	口縁部1/5	口 底	(20.5) 高 底	黒	断面中央灰色。器表付近灰白色。器表黒色。内外面回転磨削り。外面斜部以下磨削り。	
第458	292	在地系土器 壺か	2/3	口 底	(14.7) 高 底	黒	落とし器。天井部内面磨削。天井部縁と端部磨削り。天井部外面回転磨削り。中央に横溝1箇所。天井部に焼成前の円孔6箇所。	
第458	293	土製品 人形	前面下部片	口 底	- 高 底	にぶい橙	型押し成形。下面は塞いでいない。意匠は不明。	
第458	294	銅製品 銭貨	完形	縦 厚	2.318 0.158		寛永通寶。表面は形深く外縁・郭とも明瞭だが錆化のため文字一部不明。表面には浅い外縁・郭とも明瞭。	
第458	295	銅製品 キセル		長 幅 厚	5.7 0.9 1.0 3.60		直径1cm厚さ3mmの筒状金属製品で両端とも劣化破損する。296とともにキセルの一部と考えられるが吸い口部・火皿等の接合痕跡・羅印等の痕跡も確認できない。	
第458	296	銅製品 不詳	破片	長 幅 厚	9.0 0.8 1.0 6.92		直径1cm厚さ1mm程の筒状金属製品で両端とも劣化破損する。キセルの一部と考えられるが吸い口部・火皿等の接合痕跡・羅印等の痕跡も確認できない。	
第458	297	銅製品 不詳	破片	長 幅 厚	3.8 2.0 0.3 7.36		厚さ1～2mm程の板状金属製品で、外形は劣化破損部分が多く本来形状は不明。片面は青緑色で比較的平滑反対面は灰緑色で錆化凹凸が多い。	
第458	298	鉄製品 釘	破片	長 幅 厚	5.5 0.6 0.6 3.64		断面長方形の角釘で、先端部は斜めに劣化破損し、頭部も僅かに広がり劣化破損するため全体形状は不明。木質等の痕跡は見られない。	
第458	299	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅 厚	3.2 1.4 2.5 5.57		断面正方形の角釘で「J」字状に折れ曲がる。先端付近で急に細くなり尖る。頭は薄く広げ浅く折り曲げる。木質等の痕跡は見られない。	
第458	300	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅 厚	2.2 0.7 0.7 0.63		断面はほぼ正方形の角釘で、先端に向かい細くなり端部は劣化破損する。頭は薄く広げ浅く折り曲げる。木質等の痕跡は見られない。	
第458	301	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅 厚	2.4 0.6 0.5 0.54		断面はほぼ正方形の角釘で、先端に向かい細くなり端部は尖る。頭は小さく広げ直向に折り曲げる。木質等の痕跡は見られない。	
第458	302	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅 厚	2.7 0.8 1.0 0.84		断面はほぼ正方形の角釘。先端に向かい細くなり尖る。頭は薄く広げ浅く折り曲げる。木質等の付着は見られない。	
第458	303	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅 厚	2.7 0.8 1.0 0.84		断面はほぼ正方形の角釘。先端に向かい細くなり尖る。頭は薄く広げ浅く折り曲げる。木質等の付着は見られない。	
第458	304	鉄製品 釘	破片	長 幅 厚	3.0 0.5 0.4 0.79		断面はほぼ正方形の角釘。先端に向かい細くなり尖る。頭は薄く広げ浅く折り曲げたところで劣化破損する。木質等の付着は見られない。	
第458	304	鉄製品 釘	破片	長 幅 厚	2.2 0.5 0.5 0.62		断面はほぼ正方形の角釘。先端に向かい細くなり尖る。頭部は破損し錆化する。	
第458	305	鉄製品 不詳	破片	長 幅 厚	2.9 1.4 0.6 2.67		断面長方形の鉄製品破片で、中央付近に頸状のくびれを持ち刀子の破片の可能性が有るが破損しているため対部を確認できない。	
第458	306	鉄製品 不詳	破片	長 幅 厚	3.2 1.4 1.0 3.06		薄い板状鉄製品で、上砂を巻き込み錆化し本体空洞化に脆弱で詳細形状は不明。	
第458	307	礫石器 磨石	完形	長 幅 厚	11.9 9.4 701.2		正面中央部に敲打痕および磨面、周辺部には敲打痕を有する。	
第458	309	石製品 石	完形	長 幅 厚	9.7 7.6 287.7		不整な楕円礫素材。正面中央部に厚み約1cmの凹み(長径4.8cm)をもつ。凹み内部と周辺は平滑である。凹み内部では、棒状工具による加工痕が平滑面を切っている。	

種 図 PL.No.	no.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第45図 PL.26	310	石製品 不明	不明	長 幅	(13.7) (11.9)	厚 重	6.5 790.9	角四石安山岩	形状は直方体である。表面および側面を研磨により整形。

## 1区(原敷外の遺構)

## 1号溝

種 図 PL.No.	no.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第46図 PL.26	312	在地系土器 内耳鍋	底部	口 底	- 4.1	高 -	-	楢	底部器壁厚く、底部は台状をなす。底部静止糸切無調整。底部内面不定方向の撫で。
第46図 PL.26	313	在地系土器 皿	口縁部1/4、底 部1/3	口 底	(8.7) (5.4)	高 -	2.8	にぶい楢	口縁部外反。口縁部歪む。口に比して器高高い。底部右回転糸切無調整。
第46図 PL.26	314	在地系土器 焙烙か	底部片	口 底	- -	高 -	-	灰黄	外面型痕。胎土、焼成から、江戸時代焙烙か銅底部の可能性高い。

## 17号溝

種 図 PL.No.	no.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第46図 PL.26	315	在地系土器 内耳鍋	口縁部から体部 片	口 底	- -	高 -	-	にぶい赤褐色	口縁部長く、内湾。口縁部外反。屈曲部内面横をなし、段差はゆるい。外面覆付着。
第46図 PL.26	316	在地系土器 内耳鍋	体部片	口 底	- -	高 -	-	灰	断面にぶい褐色。器表灰色。残存部下位1/3胎土中の夾雑物多く、異なった胎土を使用。外面覆付着。
第46図 PL.26	317	在地系土器 内耳鍋	口縁部1/5	口 底	- -	高 -	-	灰	断面にぶい褐色。器表灰色。器壁薄く、口縁下端で屈曲し、口縁部内湾。口縁端部内面横をなす。端部上面平坦。屈曲部内面低い段差。外面覆付着。

## 6号土坑

種 図 PL.No.	no.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第14図 PL.26	318	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.362 2.354	厚 重	0.139 2.28		表面は彫は深いが外縁・文字・郭とも不明瞭。裏面は彫は浅く外縁・郭ともやや不明瞭。文字は不明瞭だが○単元寶と読み取れる。

## 竹敷

種 図 PL.No.	no.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第51図	319	肥前磁器 染付小杯	1/4	口 底	(7.9) (2.0)	高 -	4.0	灰白	口縁部外反。底部器壁厚い。外面不明文様。
第51図	320	瀬戸・美濃 陶器徳利碗	口縁部1/8、体 部1/4	口 底	(9.8) -	高 -	-	灰白	外面口縁部下縁旋状内凹。内面から口縁部外面灰釉。外面口縁部下縁色の鉄釉。灰釉に粗い貫入入る。
第51図	321	瀬戸・美濃 陶器徳利碗	体部以下1/4	口 底	(5.2) -	高 -	-	淡黄	内面から高台胎釉。高台胎以下薄い胎釉。口縁部外面黄灰釉。
第51図	322	在地系土器 不詳	底部片	口 底	- -	高 -	-	浅黄楢	断面中央黒色。器表付近から器表浅黄褐色。内面底部境の調整やや粗く、焙烙でない可能性高い。底部外面型痕。

## 〔3.1・2面〕

種 図 PL.No.	no.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第51図	323	瀬戸・美濃 陶器片口鉢	1/7	口 底	(19.8) -	高 -	-	淡黄	口縁部肥厚し、内側に丸く突き出る。外面口縁部下凹線状に窪む。外面下半回転削り。体部内面中から外面灰釉。

遺物観察表

[4. 2面]

3号井戸

種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第61図 PL.26	326	石造物 破碑	略完形	長 18.5	厚 2.7 重 5000	緑色片岩	左下端部欠。碑面摩滅甚大。紀年銘不明。2条線・枠線なし。僅かに浅い丸形りの阿弗陀如来一尊種子(キリク)と蓮華の一部が残る。裏面左半部に横方向の工具(幅1.6cm程の平ノミ状)の連続刻突痕。	

4号井戸

種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第61図 PL.26	327	在地系土器 片口鉢か	口縁部片	口 底	高 -	灰白	断面黒色。器表灰白色。口縁部わずかに外反し。端部は稜をなして内側に突き出る。端部上面三角形に稜をなす。	
第57図 PL.26	328	石造物 破碑石材?	不明	長 17.5	厚 6.6 重 6700	緑色片岩	板状。破碑とするには非常に厚く、加工痕が見られないことから破碑石材?としたが、詳細は不明である。	

2号溝

種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第57図 PL.26	329	在地系土器 皿	底部/2	口 底	高 -	橙	底部器壁厚く、底部は台状をなす。底部糸切無調整。	
第57図 PL.26	330	在地系土器 内耳皿	口縁部片	口 底	高 -	黒	断面中央灰白色。器表付近褐色。内面器表暗灰色、外面器表黒色。内面口縁下部段無く曲がる。	
第57図 PL.26	331	鉄製品 不詳	破片	長 6.4 幅 1.5	厚 1.5 重 13.79		断面はほぼ正方形の角棒状鉄製品。端部はやや丸みを帯び、残り他の端部側は劣化破損し全体形状は不明。木質等の付着は確認できない。	
第57図 PL.26	332	石製品? 凹み石	完形	長 20.7 幅 16.7	厚 10.1 重 4693.3	粗粒輝石安山岩	楕円盤上面に長軸3.3cm、深さ5mm程度の不整形な凹みをもつ。凹み内側は平滑である。	

集合遺構(2号土塚上面)

種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第62図 PL.26	335	肥前磁器 染付皿	底部/3	口 底	高 -	灰白	底部内面2重線内に草花文か。外面無文。高台端部のみ無縁。	
第62図 PL.26	336	瀬戸・美濃 陶器 皿	底部	口 底	高 -	灰白	内面鉄軸。外面無縁。割れ口やや摩滅。	
第62図 PL.26	337	常滑陶器 片口鉢か	底部片	口 底	高 -	暗灰	内面斑状に自然釉かかる。内面平滑。常滑陶器片口鉢Ⅱ類か。	
第62図 PL.26	338	常滑陶器 皿	肩部片	口 底	高 -	灰～褐灰	断面中央黒色。器表付近褐色。器表灰色から褐灰色。外面自然釉かかる。軸は白っぽく濡る。	
第62図 PL.26	339	在地系土器 皿	底部/4	口 底	高 -	橙	底部左回転糸切無調整。	
第62図 PL.26	340	在地系土器 皿	底部/3	口 底	高 -	橙	底部左回転糸切無調整。	
第62図 PL.26	341	在地系土器 皿	口縁部1/8、底部1/4	口 底	高 -	橙	口縁端部油煙付着。底部回転糸切無調整。	
第62図 PL.26	342	在地系土器 内耳皿	口縁部片	口 底	高 -	黒	断面にぶい褐色。器表黒色。口縁端部外面水平に折り曲がる。端部上面平坦。器壁やや厚い。	
第62図 PL.26	343	在地系土器 内耳皿	口縁部片	口 底	高 -	灰	器壁厚く、口縁部短い。内面口縁部下段い段差。外面覆付着。	
第62図 PL.26	344	在地系土器 内耳皿	体部から底部片	口 底	高 -	暗灰	断面にぶい褐色。丸底。器壁やや厚い。	
第62図 PL.26	345	在地系土器 内耳皿か	口縁部片	口 底	高 -	灰	口縁部ゆるく内湾。口縁端部外面後をなし、上面平坦。	
第62図 PL.26	346	在地系土器 片口鉢か	口縁部片	口 底	高 -	黒	口縁端部内側に小さく突き出る。内面から口縁部外面回転横撫で。外面口縁部以下撫で。	
第62図 PL.26	347	在地系土器 火鉢	口縁部から体部片	口 底	高 -	暗灰	断面褐色。器表暗灰色。口縁部内面から端部上面器表褐色。外面突帯間に菱形スタンプ文。外面器表ほとんど剥離。外面器表粗い磨き。	
第62図 PL.26	352	石製品 凹み石	完形	長 21.0 幅 21.0	厚 15.0 重 386.8	二ツ岳軽石	上面に楕円状の凹みを丸タガネ状工具により穿つ。内面研磨の痕跡なし。底面及び側面の所々を平ノミ状工具により切削し、面を造り出す。	

洪水層

種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.26	355	鉄滓 流動滓?	破片	長 9.6 幅 6.5	厚 4.5 重 169.42		表面は黒色でなめらか、一部を茶褐色の酸化土砂が覆う。下面は灰黒色で凹みが有り炭痕などの凹みを伴う。	

2面遺構外出土遺物

種別 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第62図 PL.26	356	泉原窯系青 磁 碗	口縁部片	口 底	高 -	灰白	外面片彫りによる蓮弁文。残存幅狭く、残存部に認識められない。内外面内磁釉。	
第62図 PL.26	357	中国磁器か 染付皿	底部片	口 底	高 -	白	高台外面削る。高台内縁。高台端部外面から内面下半無縁。	

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第62回 PL.26	358	古瀬戸陶器 平碗か	体部下位片	口 底	- -	高 -	灰白	内面から残存部外面下位灰釉。細かい貫入入る。器厚、相 きから平碗であろう。	
第62回 PL.26	359	瀬戸・美濃 陶器 志野不詳	底部片	口 底	- -	高 -	淡黄橙	内面鉄絵。内面の志野釉厚い。外面の釉薄く、平坦であり 底部と推定される。	大窯4段階後 半～末。360 と同一個体 の可能性高 い。
第62回 PL.26	360	瀬戸・美濃 陶器 志野不詳	口縁部片	口 底	- -	高 -	淡黄橙	体部外反。口縁部屈曲して立ち上がり外反。内面鉄絵。内 外面厚い志野釉。胎土、釉調は359と同じ。	大窯4段階後 半～末。359 と同一個体 の可能性高 い。
第62回 PL.26	361	瀬戸・美濃 陶器 折縁皿	1/8	口 底	- -	高 2.5	灰白	口縁部外反し、端部上方に折り曲がる。体部内面丸盤状工 具で菊花状に削ぐ。残存部全面に灰釉。高台盤削り込むが 釉が溜まる。貫入入る。	大窯。
第62回 PL.26	362	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	- -	高 -	灰	器壁やや厚く、口縁部やや短い。口縁部下は段差なく外反。 口縁端部内外面丸味をもつ。430に比して器壁少し厚いが、 色調調整痕はきめてぬる。	430と同一個 体か。
第62回 PL.26	363	銅製品 鉄貨	完形	縦 横	2.351 2.366	厚 重	0.185 2.69	浜武通貨。表面は彫非常に深く外縁・文字・郭とも明瞭。 裏面も彫非常に深く外縁・郭とも明瞭。	
第62回 PL.26	364	銅製品 鉄貨	一部欠損	縦 横	2.454 2.403	厚 重	0.127 2.05	泉不通貨。表面は彫浅目だが外縁・郭とも明瞭。文字はや や潰れ気味。裏面は平坦で外縁・郭は不明瞭。	
第62回 PL.26	365	銅製品 鉄貨	完形	縦 横	2.444 2.394	厚 重	0.135 2.42	元符通貨。表面は彫深く外縁・文字・明瞭。文字は鋳化 のため不明瞭。裏面はやや彫浅い外縁・郭とも明瞭。	
PL.26	366	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅	4.5 1.7	厚 重	1.1 6.06	断面四角形の角釘で中央でくの字に曲がる。先端は細くな るが尖らない。頭は斜めに細くなるが折り返し等は確認で きない。	

遺物観察表

(5.3面)

2号土塁

種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第65図 PL.27	367	形象埴輪 人物(男子)	顔の左下から右 後頭部の一部。			粘土板を貼り付け顔から顔のふくらみを成形。左目左下と 口の切り込み、左耳孔の一部が残存。工具で切開している。 左顎下に粘土の割痕。耳環あるいは美豆良が装着されて いたか。右後頭部は上を右側に束ねた分け目を段で表現し ている。縦方向にハケメを施し髪毛を表現している。内面 はていねいなナデ。	
第66図 PL.27	368	形象埴輪 人物(女子)	内目から顔部分 の左側の一部が 残存		海輪骨針	上端は髪が欠損した様子が見られる。左右の目の切り込み の一部とその上には粘土板を貼り、眼窩上突起が表現される。 豆粒大の粘土粒は耳玉を表現したものでか。鼻が割離した痕 跡が認められる。内面は丁寧なナデ。	
第66図 PL.27	369	形象埴輪 人物(頭部)	着衣の襟首と首 飾り。			着衣の頭部は胴部本体に粘土板を貼り足し厚みをたせて いる。残存部下端には刺突文が並ぶ。首飾りは直径1.3 cmと大きい。	
第65図 PL.27	370	形象埴輪 人物(左手)	土腕部から肩部 にかけての破片			左手か。腕は中央の粘土棒を開口させた肩口に差し込んで 接合させており、胴部内に腕部端が輪状に延びている。肩 部は腕の粘土棒に粘土を貼り足して成形している。	
第65図 PL.27	371	形象埴輪 人物(左腕 か)	土腕部の残存		海輪骨針	左腕か。割離部分が多い。中央。	
第65図 PL.27	372	形象埴輪 人物	左下で美豆良の 下半部、中央			下端はし字状に屈曲。前方に突出する。幅1.1~1.3cmの 飾り紐が3条見られるが大平が割離している。	紐の外面に 赤色塗彩か。
第65図 PL.27	373	形象埴輪 人物	右手		雲母	粘土板を貼り手甲の装着を表現している。刺突文が重ねら れている。指は5本が個々に表現されていたと考えられる が、いずれも欠損している。手のひらは本体に接地してい た。	
第65図 PL.27	374	形象埴輪 盾か	盾か			外縁が弧状をなす板状品である。内外面ともハケメ。縁部 にのみナデ。	
第65図 PL.27	375	形象埴輪 家	入母造り土屋根 の流れ部分		海輪骨針	破面は妻側の端部を外側に折り返している。頂部には粘土 帯を貼りへら描きによる割面文を配している。流れの外 面にはへら描きによる横手文が配されている。刺突文が重ね られている。	
第65図 PL.27	376	形象埴輪 家	下屋根の破片			内面には壁面。基台部への接合部が見られる。軒先部分は 短く外反して延びる。外面にはハケメの上へへら描き、円 弧文が見られる。	
第65図 PL.27	377	形象埴輪 家	入母造りの土上 屋根縁部分			流れの傾斜は極めて強く、妻側から見た形状は極めて扁平 に映るものと考えられる。頂部には堅魚木が割離した痕跡 が見られ、本体を貫通する小孔が穿たれている。頂部直下 には横方向の粘土板がはりつき、縦割による文様が施され ている。	
第65図 PL.27	378	形象埴輪 家	入母造りの土上 屋根縁部分			377と同一個体。直径7.8~8.4cm間隔に堅魚木が配されて いたが割離している。割離部分には直径3.5×4.5mmの小孔が本 体を貫通している。頂部直下には両側に横方向の粘土板が 張り付く。内面は丁寧なナデ。	
第66図 PL.27	379	形象埴輪 家	土屋根の一部			内面に接合部が見られることから下部に近い部分と考えら れる。妻側の端部は短く屈曲外反させ破面を表現している。 流れにはハケメの上へへら描きによる区画文、円弧文が見 られる。	
第66図 PL.27	380	形象埴輪 家(屋根)	屋根流れ部分の 破片			外面にはハケメの上へへら描きによる割面文が施される。	
第66図 PL.27	381	形象埴輪 家	切妻造りの家の 土屋根の破片			破面は小さく折り返っている。破面の縁に刺突文を、端 面に線刻を施す。流れにはハケメを残した上に刺突文を伴う線 刻文が延びる。	
第66図 PL.27	382	形象埴輪 家	堅魚木の一部			中央の棒状粘土をへらで成形して端部としている。頂部 直下に直径6mmの円孔が貫通している。	
第66図 PL.27	383	形象埴輪 基台部	大型破片			形象部分は本体からスカート状で外反する。先端は欠損し ている。外面にへら描き。基台部には楕円形あるいは円形 と考えられる透孔の一部が残存する。外面は縦ハケ。内面 はナデ。	家形埴輪の 下屋根から 基部か。
第66図 PL.27	384	形象埴輪 不明	馬の鬣か。			横断面は弧をなす。幅4.8cm程の粘土帯が張り付き帯状に 肥厚する。外面にはハケが施され一部に割離痕が見られる。 馬の鬣か。	
第66図 PL.27	385	形象埴輪か 不明	基部片	底 17.4	細砂粒/良好/明赤 土		
第66図 PL.27	386	形象埴輪	胴部着衣の合わ せと結びの紐			合わせの縁は粘土を貼り厚みを表現している。粘土の方向 に沿って刺突文が2列並ぶ。蝶結びの紐にも刺突文を重ね ている。	表面に黒色 の付着物。 塗彩か。
第66図 PL.27	387	形象埴輪 不明			雲母	幅6.1cm、厚さ8mmの薄い粘土板の破片。本体から割離した もの。両縁に沿って刺突文が2列ずつ施される。	外面に赤色 塗彩。
第66図 PL.27	388	形象埴輪 不明				厚さ1.2cmの粘土板。本体から割離した痕跡が見られる。 三日月形となる縁部に沿って刺突文を伴う線刻文が配され ている。人物の胴部に装着された刀子を表現したものでか。 赤色塗彩が施される。	

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第66回 PL.27	389	形象埴輪 不明	鎌手あるいは着 衣の袖口か				雲母	厚さ5～7mmの薄い粘土板。本体から剥離したもので、横断面は強く彎曲。縦方向にへら書き線文が4本残る。天地左右不明。	
第66回 PL.27	390	形象埴輪					細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色		
第66回 PL.27	391	円筒埴輪	銅部片	凸 径	21.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい褐色		
第66回 PL.27	392	円筒埴輪	銅部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい褐色		
第66回 PL.27	393	円筒埴輪	銅部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/褐色		
第66回 PL.27	394	円筒埴輪	基底部片	底	17.6		細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/良好/にぶい 黄褐色		
第66回 PL.27	395	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 径	-	高 -	灰・黒	断面灰白、内面器表灰色、外面器表黒色。口縁部やや短く、やや厚い。	
PL.27	396	鉄製品 不詳	破片	長 幅	23.0 3.3	厚 重	2.2 63.87		534と接合。対部14cmと葉部6.5cmを有する鉄製刃物。葉には目釘孔は無く、木質も残存しない。棟部は対一葉へは間を持たず直線的で刃部はなで目状に葉に移行する。対部は幅2.5cm厚さ5.5cm程で大型の大きな大きさが、刃部は13.5cm程で細くなり両端に葉を持つせんの様な形状を示すが、刃部は跡に覆われ彫削のため詳細は不明。
PL.27	397	鉄製品 不詳	破片	長 幅	2.6 1.5	厚 重	1.0 3.11		鋳造鉄製品破片。全体に破損・錆化のため詳細不明。
第67回 PL.27	398	鉄製品 不詳	ほぼ定形	長 幅	4.3 1.4	厚 重	1.2 5.90		断面はほぼ正形で一端に向かいラッパ状に広がり端部は内側に凹む。他の端部はやや細くなるが尖らずに終わる。
第67回 PL.27	400	加工礫 定形		長 幅	39.2 29.6	厚 重	16.8 19460	二ツ岳軽石	円礫の上下面および側面の3面に平ノミ・丸タガネ状工具により平坦面を造り出す。面は粗削りと平滑の両状態有り。古墳石室の石を転用か。
第67回 PL.27	405	石造物 板碑	基部破片	長 幅	(33.9) (26.5)	厚 重	(3.1) 3520	緑色片岩	表面上斜方向の工具(幅1cm程の平ノミ状)の連続削突痕。標定幅26cmほどの中型板碑。
第67回 PL.27	407	石製品 凹み石	定形	長 幅	13.7 13.0	厚 重	5.5 866.8	角閃石安山岩	正面中央部に楕円状の凹み(直径約9cm)をもつ。裏面は中央部に最大径と整面が見られる。

## 門

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第67回 PL.27	411	礎石		長 幅	48.8 38.8	厚 重	10.8 30000	粗粒輝石安山岩	板状礎。柱当たり幅(12.8×11.2cm)あり。	東側礎石
第67回 PL.27	401	礎石		長 幅	47.6 31.6	厚 重	15.2 39700	粗粒輝石安山岩	上面門状を呈する。柱当たり幅(12.8×12.4cm)あり。上面左端が平滑である。	西側礎石

## 5号溝

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第68回 PL.28	413	形象埴輪 胴	一部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい褐色	胴		
第68回 PL.28	414	形象埴輪	形象埴輪の基部					本体基部は円筒本体から短くスカート状に延びる。外面は密着するが縞割による文様は配されている。		
第68回 PL.28	415	形象埴輪 家形か	一部片				細砂粒/良好/にぶい褐色			
第68回 PL.28	416	形象埴輪 軀か	板状の破片					外面はハケメを施した上に外縁に沿って2条1単位の刺突文が列をなす。		
第68回 PL.28	417	形象埴輪 人物	着衣の襟口、小破片				雲母	豆粒上の粘土が並ぶ。首飾りの一部と考えられる。		
第68回 PL.28	418	円筒埴輪	銅部片				細砂粒/良好/にぶい黄褐色			
第68回 PL.28	419	龍泉窯系内 福輪か	口縁部片	口 径	-	高 -	灰白	口縁端部外反し、外方に小さく肥厚。内外面青磁輪。		
第68回 PL.28	420	龍泉窯系内 磁 羅漢文文	底部1/3	口 径	-	高 -	灰白	体部外面片形りによる蓮弁文。内面から高台内周縁青磁輪。高台端部の輪は削らない。		
第68回 PL.28	421	古瀬戸陶器 平碗	体部1/4、底部 2/3	口 径	-	高 -	灰白	外面回転削削り。高台臨水平に削り込む。高台内浅く削り込む。内面から体部外面中位残存。体部内面下位目跡2箇所残存。		
第68回 PL.28	422	常滑陶器 甕か	体部片	口 径	-	高 -	暗灰・褐灰	断面から内面器表暗灰色、外面褐色灰色。外面本口状工具による斜位推で。内面推で。		
第68回 PL.28	423	常滑陶器 甕か	肩部片か	口 径	-	高 -	灰白	断面灰白色。内面器表明赤褐色、外面器表褐色灰色。外面自然焼くかあるが、白濁して剥離する。		
第68回 PL.28	424	在地系土器	1/2	口 径	(7.8) (3.9)	高 重	2.1	灰白	口縁部から体部内周。輪縁右回転調整。底部回転糸切無調整。底部から体部内周指推で。	
第68回 PL.28	425	在地系土器	底部	口 径	-	高 -	にぶい褐色・黒	断面から外面器表黒色、内面器表にぶい褐色。底部左回転糸切無調整。		

遺物観察表

種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第68Ⅷ PL.28	426	在地系土器 皿	1/2	口 7.4 底 5.2	高 2.0	椀	体部外面下位外反気味で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内面底部均不明。底部右回転糸切無調整。
第68Ⅷ PL.28	427	在地系土器 皿	口縁部一部、底 部完	口 13.5 底 6.5	高 3.3	にぶい椀	底部器壁厚い。体部外反し、口縁部内湾気味。底部内面右回転螺旋状軸轆目。底部右回転糸切無調整。
第68Ⅷ	428	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底 -	高 -	灰	断面灰白色、器表灰色。器壁やや厚く、口縁部長い。口縁部内面段差。口縁端部上面平坦。
第68Ⅷ	429	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底 -	高 -	灰	口縁端部上面平坦。口縁端部外面わずかに突き出る。残存部に内耳貼り付け時の窪み残る。
第68Ⅷ	430	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底 -	高 -	灰	器壁やや厚く、口縁部短い。口縁部下は段差なく屈曲。口縁端部内面縁をなすが、外面は丸い。外面保留着。
第68Ⅷ	431	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底 -	高 -	黒	断面灰白色、器表黒色。口縁部内湾。外面保留着。残存部端部に内耳貼り付け痕残る。貼り付け時に器形歪む。
第68Ⅷ	432	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底 -	高 -	灰	器壁薄い。口縁端部外面丸みを持つ。
第68Ⅷ	433	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底 -	高 -	にぶい椀・黒	断面にぶい椀色。内面器表にぶい椀色から黒色。外面器表黒色。口縁部わずかに内湾。口縁端部内傾。
第68Ⅷ	434	在地系土器 内耳鍋	体部下位から底 部片	口 底 -	高 -	黒・にぶい椀	断面灰白色。内外面器表黒色。体部外面下端から底部外面器表にぶい椀色。丸底。体部器壁厚く、外面の撫では丁寧。胎土中に片岩含む。
第68Ⅷ	435	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底 -	高 -	灰	内面丁寧な回転轆目で、口縁部外面強い回転轆目により口縁部下に低い段差。口縁端部上面丸みを持つ。端部内面折り返すように丸く突き出る。
第68Ⅷ	436	在地系土器 片口鉢	体部下位片	口 底 -	高 -	暗灰	断面椀色。器表暗灰色。胎土に片岩含む。内面使用により平滑。
第68Ⅷ	437	在地系土器 片口鉢	底部/4	口 底 (10.9)	高 -	灰	体部下位内湾気味に立ち上がる。体部下位と底部内面使用により平滑。内面底部端部湾曲が強く、すり粉木があたりず摩滅しない。底部板作りか。
第68Ⅷ	438	在地系土器 片口鉢	体部下位片	口 底 -	高 -	灰白・灰白	断面から内面器表灰白色。外面器表暗灰色。体部下位ゆるく外反。残存部すり目なし。
第68Ⅷ	439	在地系土器 片口鉢	体部下位片	口 底 -	高 -	にぶい椀	断面灰色。器表付近から器表にぶい椀色。器壁厚い。体部内面10本以上1単位のすり目。
第68Ⅷ	440	在地系土器 火鉢	口縁部から底部 片	口 底 -	高 14.2	灰	断面中央黒色。器表付近灰白色。器表暗灰色。内面撫で、外面回転轆目で、口縁端部上面平坦。脚間所残存。3脚である。
第69Ⅷ	441	在地系土器 火鉢か	底部片	口 底 -	高 -	暗灰・黒	断面黒色。器表付近にぶい椀色。内面器表褐色。外面器表黒色。器壁は1.6cmと厚い。内面撫で、外面磨れ砂付着。
第69Ⅷ	442	在地系土器 不詳	口縁部片	口 底 -	高 -	明暗灰～黒	断面黒色。器表付近から器表褐色。外面下位器表のみ黒色。体部やや内湾し、口縁部外反。口縁端部内面に突き出し、上面中央は明暗な縁をなす。内外面回転轆目で。
第69Ⅷ PL.28	454	石造物 破砕片?	基部破片	長幅 (15.0) (13.0)	厚重 (3.6) 1001.6	緑色片岩	厚さから大型破砕片か。側部を平坦にして転用。縁部に研痕。
第69Ⅷ PL.28	457	石製品 石臼(土白)	2/3	径 37.2 幅 13.0	厚重 11660	粗粒輝石安山岩	縁の高部も若干の摩滅。下面の地面はやや傾斜し溝が僅かに残る。側面に下面の孔の一部に細い丸タガネ状の工具痕を残す。
第69Ⅷ PL.28	461	石製品 石鉢	口縁部片	口 26.8 幅 8.7	厚重 582.9	粗粒輝石安山岩	口縁上面は研着。外面体部は丸タガネ状工具による削突成形後に研着。内面は使用により摩滅。
第69Ⅷ PL.28	463	石製品 凹み石	略定形	長 10.3 幅 9.7	厚重 6.0 224.2	角閃石安山岩	上面に盛り鉢状の凹み(直径7cm)を有し、凹み内側は平滑である。底面および側面には平ノミ状工具による整形痕が残る。
第69Ⅷ PL.28	464	石製品 凹み石	定形	長 16.7 幅 12.4	厚重 8.0 1242.6	角閃石安山岩	内面中央部に盛り鉢状の凹みを有する。凹みの直径は $\sim$ 8cmで、深さは1.7 $\sim$ 2.3cmである。
第69Ⅷ PL.28	465	石製品 凹み石	定形	長 14.3 幅 10.3	厚重 4.5 865.1	粗粒輝石安山岩	正面に長径6.2cmの浅い凹みを有する。凹み周辺には磨面が認められる。
第69Ⅷ PL.28	467	石製品 砥石	定形	長 13.2 幅 2.2	厚重 2.1 89.6	砥沢石	4面使用。細長い形状。正面および左右側面では片減りが認められる。
第69Ⅷ PL.28	468	石製品 砥石	定形	長 18.8 幅 4.8	厚重 4.0 472.6	砥沢石	4面使用。正面左上および右下が片減りしている。
第69Ⅷ PL.28	471	礫石器 凹み石	定形	長 8.7 幅 7.6	厚重 3.7 383.2	粗粒輝石安山岩	扁平楕円形の正面に長径2.2cmの浅い凹みをもつ。側面に敲打痕が残る。
第69Ⅷ PL.28	473	石製品 火打石	不明	長 4.7 幅 3.3	厚重 2.5 50.1	石英	縁線上に溝れが認められる。
第69Ⅷ PL.28	475	石製品 火打石	不明	長 4.4 幅 1.9	厚重 1.5 15.8	石英	下辺および側面に溝れが認められる。

6号溝

種 別 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第71Ⅷ	478	古瀬戸陶器 平碗	口縁部から体部 1/6	口 15.0 底 -	高 -	灰白	口縁端部尖り気味。内面から外面中位反傾。露胎部褐色。
第71Ⅷ PL.28	479	古瀬戸陶器 天目碗	口縁部1/3、底 部完	口 11.9 底 4.2	高 6.8	灰白	口縁部屈曲せず立ち上がる。底部回転糸切後、高台内を削る。内面から体部外面下位天目目。口縁部輪轉く錆色に発色。
第71Ⅷ	480	在地系土器 皿	底部/4	口 底 (7.0)	高 -	椀	底部器壁やや厚く、体部外面下端は外反して立ち上がる。底部回転糸切無調整。

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第71図 PL.28	481	在地系土器 皿	口縁部2/3欠	口 底 (7.3) 4.3	高 19.5	褐灰	体部から口縁部内湾。底部内面右側縦線状襷目。内外面油塗が滲り付着。
第71図	482	在地系土器 片口鉢	口縁部1/8	口 底 (26.5)	高 -	灰・橙	断面から外面器表の一部橙色。器表付近から器表灰色。口縁部下の外面肥厚。端部丸く内側に突き出る。残存部内面下位、使用によりやややや平滑。
第72図	483	在地系土器 片口鉢	口縁部1/5	口 底 (29.7)	高 -	灰	断面中央灰色。器表付近から器表灰色。片口箇所。口縁部内面突出部使用により摩滅。内面下位使用によりやや平滑。内面丁寧な回転横撫で。口縁部外面回転横撫で。外面口縁部下。成形時の凹凸残る。
第72図	484	在地系土器 片口鉢	1/7	口 底 (32.7) (16.1)	高 11.0	灰	断面中央灰色。器表付近にぶい橙色。器表灰色。体部から口縁部外反して開く。口縁部内面内側に小さく突き出る。残存部内面すり目なし。内面丁寧な回転横撫で。口縁部外面縦状凹凸横撫で。外面成形時の凹凸残る。外面体部下端隆撫で。体部内面下位使用により器表摩滅。中位は平滑。
第71図 PL.28	485	石製品 石鉢(片口)	口～底1/4	口 高 (33.0) 13.0	底 重 (15.4) 1828.5	粗粒輝石安山岩	丁寧な成形。口縁上面を研磨。内面の摩滅少。外面体部～底部に製作時の粗い丸タガネ状工具による刺突痕・筋状縦刺突痕を残す。

## 8号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第72図 PL.29	486	中国磁器 白磁皿	底部3/4	口 底 4.0	高 -	白	内面透明釉。細かい貫入。外面無釉。高台4方を挟む。高台接地部輪付着。
第72図	487	滑滑陶器 甕か	体部片	口 底 -	高 -	にぶい赤黒・赤灰	断面中央黒色。器表付近橙色。内面器表赤灰色。外面器表にぶい赤褐色。
第72図	488	在地系土器 皿	口縁部1/5	口 底 (12.1)	高 -	橙	口縁部内湾。
第72図	489	在地系土器 皿	底部	口 底 5.2	高 -	橙	底部左回転系切無調整。外面体部下端隅状に短く立ち上がる。
第72図 PL.29	490	在地系土器 皿	1/2	口 底 (7.4) 5.0	高 1.9	橙	体部から口縁部直線的に立ち上がる。底部左回転系切無調整。
第72図 PL.29	491	在地系土器 皿	底部	口 底 6.1	高 -	にぶい橙	体部外反して開く。底部左回転系切無調整。
第72図	492	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底 -	高 -	にぶい橙	断面淡赤褐色。器表にぶい橙色。口縁部長く。内湾。端部上面平坦。口縁部下内面明確な段差。
第72図	493	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底 -	高 -	灰・黒	断面にぶい橙色。器表灰色から黒色。器壁厚く。口縁部短い。口縁部と体部境不明瞭。内面貼り付け部は窪む。
第72図	494	在地系土器 すり鉢	底部片	口 底 -	高 -	灰白～にぶい黒	内面6本以上単位の手すり目。内面使用により器表摩滅。体部外面縦撫で。底部板作り。
第72図	495	在地系土器 片口鉢	体部下位から底 部1/4	口 底 (14.0)	高 -	褐灰	断面中央暗灰色。器表付近灰白色。器表褐色。残存部内面すり目なし。内面下半使用により器表摩滅。上半平滑。底部板作り。
第72図 PL.29	496	銅製品 鍍金?	破片	長 幅 3.7 1.3	厚 重 1.3 22.90		鍍金の破片と見られる金属製品で、上部は分枝部分で破損している。
第72図 PL.29	497	石製品 砥石	不明	長 幅 (7.4) 2.8	厚 重 2.7 72.5	砥沢石	4面使用。左側面には横方向の線状痕が多数残る。
第72図 PL.29	498	石製品 砥石	破片	長 幅 (7.7) 4.1	厚 重 4.1 200.8	砥沢石	4面使用。正面左縁辺には対置し復した縦線状痕が多数認められる。

## 9号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第72図 PL.29	500	形象輪胎 人物(左型)	左腕の付け部分	口 底 (7.5) (4.9)	高 1.6	橙	胴部に中央の粘土棒を差し込んでおり先端は胴部内に輪状に延びていて、砂粒多クがついた。
第72図	501	在地系土器 皿	1/4	口 底 (7.5) (4.9)	高 1.6	橙	体部から口縁部直線的。口縁部付油塗付着。
第72図	502	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底 -	高 -	灰～暗灰	断面中央灰色。器表付近にぶい橙色。器表灰色から暗灰色。体部外反し口縁部直線的。口縁部内面丸く突き出る。口縁部内面器表摩滅。使用痕あり。
第72図	503	在地系土器 片口鉢	体部下位片	口 底 -	高 -	灰白～暗灰	断面から残存部中位以下器表灰白色。上位器表褐色。内面中位以下使用により器表摩滅。上位平滑。外面撫でで凹凸残る。
第72図	504	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底 -	高 -	褐灰・黒	断面にぶい橙色。内面器表褐色。外面器表褐色。口縁部長く内湾。口縁部内面輪をなし、外面小さく突き出る。残存部側端部に内貼り付け痕。
第72図	505	在地系土器 内耳鍋	体部片	口 底 -	高 -	黒	断面にぶい橙色。器表黒色。器壁厚く。残存部外面上端口縁下の横撫で。体部外面塗削り。胎土中に片岩含む。
第72図	506	在地系土器 内耳鍋	体部下位から底 部片	口 底 -	高 -	灰白・灰	断面から内面器表灰色。外面器表褐色。体部外面下端塗削り。残存部外面上半塗削り。丸底か。
第72図 PL.29	507	銅製品 鍍金	一部欠損	縦 横 1.990 1.977	厚 重 0.130 1.42		半通元裏。表面は彫深く外縁・文字・部とも明確だが外縁周囲を破損する。裏面は平坦で外縁・部とも不明瞭。
第72図 PL.29	509	石製品 茶臼(下石)	1/2	径 高 10.6	厚 重 (197.1)	粗粒輝石安山岩	八分磨。換面は摩滅しているものの、約5mm間隔の溝はよく残る。底面にノミ状工具による整形痕を残す。受け部欠損。



遺物観察表

10号溝

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第707号 PL.28	510	在地系土器 片口鉢	口縁部1/8	口 底	-	高 -	灰	体部外反し、口縁部厚し、やや内湾。端部は上方に立ち上がる。口縁部使用により摩滅。残存部内面下位使用により平滑。	
第707号 PL.28	511	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底	-	高 -	灰	断面灰白色。器表灰色。口縁部外反。口縁部内外面小さく突き出る。内面丁寧な回転磨削で、口縁部外面幅広く回転磨削で、外面口縁部以下撫で成形時の凹凸残る。	
第707号 PL.28	512	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底	-	高 -	灰	口縁部やや肥厚し、わずかに内湾。口縁部上面小さく窪む。端部内面内側に突き出る。端部外面丸みを持ち小さく突き出る。口縁部内面器表使用により摩滅。	
第707号 PL.28	513	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底	-	高 -	にぶい橙	断面から外面器表にぶい橙色。内面器表褐色。器壁薄く、口縁部外反。端部内面内側に突き出る。端部外面幅広い突起状に突き出る。	
第707号 PL.28	514	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底	-	高 -	橙色	器壁薄い。口縁部内面折り曲げるように内側に突き出る。端部外面丸みを持つ。	
第707号 PL.28	515	銅製品 銭貨	完形	縦	2.418 2.459	厚 0.118 重 2.05		皇宋通寶。表面は彫深く外縁・郭とも明瞭。文字はやや濃れ気味。裏面は彫浅いが錆色の違いにより外縁・郭は明瞭。	
第707号 PL.28	516	銅製品 銭貨	完形	縦	2.468 2.489	厚 0.164 重 3.44		政和通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。孔はやや異形となる。	
第707号 PL.28	517	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅	6.9 1.5	厚 1.2 重 10.78		断面はほぼ正方形の角釘で先端は細くなるが鋭利に尖らない。頭は幅広い折り曲げる。木質等は確認できない。	
第707号 PL.28	518	鉄製品 釘	破片	長 幅	5.1 1.3	厚 1.4 重 9.01		断面はほぼ正方形の角釘で先端部は劣り使損する。頭は幅広い折り折り曲げる。木質等は確認できない。	

11号溝

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第707号 PL.28	522	形象埴輪 人物(體部)	一部片				細砂粒・良好/橙		
第707号 PL.28	523	円筒埴輪	胴部片	径	22.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙		
第707号 PL.28	524	円筒埴輪	基底部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙		
第707号 PL.28	525	円筒埴輪	胴部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙		
第707号 PL.28	526	円筒埴輪	胴部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙		
第707号 PL.28	527	円筒埴輪	胴部片				細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙		
第707号 PL.28	528	円筒埴輪 円筒か	口縁部～胴部片				細砂粒/良好/橙		
第707号 PL.28	529	中国磁器 白磁皿	完形	口 底	9.1 4.0	高 2.4 重 2.6	白	外面口縁部下。回転造りによりと考えられる稜線。内面から高台内白磁輪。高台4箇所アーチ状に拱る。削り残した高台接地部分のみ無縁。	
第707号 PL.28	530	瀬戸・美濃 陶器 天目鉢	口縁部から体部 片	口 底	-	高 -	灰白	口縁部屈曲して立ち上がり、端部は外反。内面から体部外面下位天目鉢。口縁部輪薄く、錆色に発色。古瀬戸か。	
第707号 PL.28	531	常滑陶器 甕	胴部片	口 底	-	高 -	灰泥・灰白	断面灰白色。内面器表灰褐色。外面器表白濁した自然釉斑状にかかるとはかか。	
第707号 PL.28	532	在地系土器 片	口縁部1/4欠	口 底	6.0 3.1	高 2.0 重 2.3	浅黄橙	体部から口縁部内湾気味に開く。底径小さく器高高い。底部回転軸角無調整。底部内面磨削。	
第707号 PL.28	533	鉄製品 釘	ほぼ完形	長 幅	6.9 1.5	厚 1.4 重 8.46		断面はほぼ正方形の角釘。先端に向かい徐々に細くなり尖る。頭は僅かに面がるが折れ曲り等は見られない。表面は錆びに覆われ木質等の痕跡は不明。	

40号土坑

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第827号 PL.29	536	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	7.3 1.2	厚 1.0 重 7.39		断面はほぼ正方形の角釘で先端に向かい徐々に細くなるが先端近くで劣化破損する。頭部は薄く広げ深く折り返す。木質等の痕跡は見られない。	
第827号 PL.29	537	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 横	2.411 2.454	厚 0.180 重 2.05		皇宋通寶。形は深い。劣化により外縁・文字・郭とも一部不鮮明。裏面は彫深く外縁・郭とも不明瞭。外縁の一部劣化破損する。	

45号土坑

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第827号 PL.29	538	石製品 石臼(下臼)	1/2	径 高	30.6 7.8	厚 重 469.2	粗粒輝石安山岩	上(横)面は偏威り長大。溝は僅かに残る。石材の空洞部が露出する。	
第827号 PL.29	539	石製品 石臼(下臼)	略完形	径 高	30.0 11.4	厚 重 10620	粗粒輝石安山岩	全体に磨滅大。溝は僅かに残る。石材の空洞部と含有礫が露出する。	

## 57-58号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第82号 PL.29	542	石製品 火打石	不明	長6.6 幅3.9	厚2.0 重39.2	石英	正面右側縁を中心に潰れおよび割離痕が残る。

## 62号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第81号 PL.29	544	石製品 硯	破片	長(2.2) 幅(6.3)	厚1.4 重23.1	頁岩	上部縁のみ残存。素材の切り出し時に節理を利用していることがわかる。上部小口面に縦状の整形痕が残る。

## 65号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第75号 PL.29	545	常滑陶器 甕	体部片	口- 底-	高-	暗灰	断面暗灰色、内面器表灰褐色、外面器表に深い赤褐色。体部下位片か。

## 122号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第78号 PL.29	547	鉄製品 不詳	一部欠損	長11.9 幅2.5	厚2.0 重45.64		断面内側に近く内部は空洞の貫状鉄製品。上側はやや細くなりめくれるように破損する。鉄脚に似た形状を持つ。
PL.29	548	鉄製品 刀子	破片	長11.0 幅2.5	厚1.6 重44.07		刀子先端破断片で型および鋸は破断のためか見られない。
第78号 PL.29	549	石製品 砥石	破片	長(6.0) 幅(2.2)	厚(0.9) 重15.0	珪質頁岩	板状。4面使用。正面が最も平滑で、左右側面には加工時の整形痕が残る。

## 128号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第74号 PL.29	550	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口底- 高-	高-	灰	断面に深い褐色。器表灰色。口縁部内湾し、端部内側に小さく突き出る。口縁端部内外面使用痕と推定される摩滅あり。
第74号 PL.29	551	在地系土器 片口鉢	体部下位から底部片	口底- 高-	高-	灰白・橙	断面中央から内面器表灰白色。断面中央から外面器表褐色。内外面器表剥離部分多い。
第74号 PL.29	552	在地系土器 すり鉢	体部下位片	口底- 高-	高-	黒	体部下端断面中央黒色。断面灰白色。器表黒色。内面丁寧な回転横撫で後、7本1単位以上のすり目。外面粗い撫でで、下縁は造削り。内面下端使用により器表摩滅。中位は平滑。
第74号 PL.29	553	石製品 砥石	破片	長8.4 幅4.8	厚4.5 重181.4	砥石	4面使用だが、正面が最も平滑で使用角度が高い。右側面には平ノミ状工具による整形痕が残る。
第74号 PL.29	556	石造物 板碑	下半左端部片	長(16.2) 幅(12.2)	厚2.3 重637.9	緑色片岩	碑面やや摩滅。浅い丸形の被供養者名「宅宗(宗) 碑」を刻む。裏面は横方向の工具(幅1.1cmほどの平ノミ状)の連続的突痕が残る。
第74号 PL.29	557	石製品 石臼(下臼)	1/4	径(36.0) 高12.3	厚582.0	粗粒輝石安山岩	挽面摩滅。放射状の溝が残る。
第74号 PL.29	558	石製品 不明	完形	長22.5 幅19.8	厚16.2 重6480	二ツ房輝石	上下面および側面に平ノミ状工具により面を造り出す。下面は加工により凹状を呈する。側面に黒色の表面変化が一透する。
第74号 PL.29	559	銅製品 銭貨	完形	縦2.509 横2.502	厚0.132 重2.38		永寧通寶。形非常に深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏面も形深く外縁・郭とも明瞭。
第74号 PL.29	560	銅製品 銭貨	完形	縦2.454 横2.500	厚0.126 重2.42		皇寧通寶。表面は形深く外縁・郭とも明瞭。裏面は形浅く外縁・郭はやや不明瞭。
第74号 PL.29	561	銅製品 銭貨	完形	縦2.447 横2.448	厚0.134 重2.76		〇〇元寶。表面は形深く外縁・文字とも明瞭だが文字の一部はつぶれ不明瞭。郭も不明瞭。裏面は全体に平坦で不明瞭。

## 133号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第74号 PL.29	562	常滑か瀬美 陶器甕	胴部片	口底- 高-	高-	灰	外面白濁した薄い自然輪かかる。頸部内面人為的に擦って器表摩滅。

## 141号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第70号 PL.29	563	在地系土器 すり鉢	口縁部1/5、底部1/3	口底(36.0) 幅(15.0)	高13.9	暗灰	断面灰白色。器表暗灰色。胎土中に片岩含む。口縁部丸みを持ち、端部は内側に丸めるように撫でる。端部内面小さく突き出る。内面器表摩滅するが、下半は使用痕であろう。すり目は放射状で6本以上1単位。底部外面も摩滅し、使用時の床擦れであろう。
第70号 PL.29	564	在地系土器 すり鉢	口縁部1/4	口底(36.0) 幅-	高-	暗灰	断面灰白色。器表暗灰色。胎土中に片岩含む。口縁部丸みを持ち、端部は内側に丸めるように撫でる。端部内面小さく突き出る。内面器表使用により摩滅。すり目は放射状で6本以上1単位。

遺物観察表

148号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第828号 PL.29	565	古瀬戸陶器 平碗か	口縁部片	口 底	- -	高 -	灰白	口縁部ゆるく外反。口縁部器壁や厚い。内外面灰釉。貫入入る。	
第828号 PL.29	566	在地系土器 片口鉢	底部1/4	口 底	- -	高 -	灰・にぶい橙	断面から外面器表にぶい橙色。内面器表付近灰白色。内面器表灰色。内面器表使用によりほとんど摩滅。底部砂底。	
第828号 PL.29	567	石製品 砥石	2/3?	長 幅	(10.8) 4.3	厚 重	(3.5) 146.8	砥沢石	4面使用。正面および左側面に鋭利な道具によると推定される断面V字状の軌状痕が横方向に多数見られる。

183号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第818号	568	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	- -	高 -	灰	口縁部やや短い。口縁部下内面丸みを帯びた段を有する。口縁部上面撫でて平坦に仕上げ。端部は内外面に小さく突き出る。	

195号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第828号 PL.29	569	石製品 磨か	破片	長 幅	(8.2) 4.3	厚 重	(3.5) 186.7	砥沢石	4面使用。左側面および正面に先端部の尖った工具による鋭突痕が残る。

198号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第768号	570	常滑陶器 磨か	体部下位片	口 底	- -	高 -	灰白	断面灰白色。器表赤褐色。内外面木口状工具による撫で。内面自然釉が現状にかか。	

204号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第848号	571	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	- -	高 -	灰	断面中央灰色。器表付近赤褐色。器表灰色。口縁部内面し器壁薄い。	572と同一個体の可能性高い。
第848号	572	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	- -	高 -	灰	断面中央灰色。器表付近赤褐色。器表灰色。口縁部内面し器壁薄い。	571と同一個体の可能性高い。

306号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第778号	573	瀬戸・美濃 陶器柳瀬	完形	口 底	12.3 4.3	高 -	5.2 灰白	体部から口縁部内面。外側一方に鉄釘具でしだけ柳。内面から高台脇灰釉。貫入入る。	
第778号	574	志戸地陶器 灯火皿	1/4	口 底	(8.4) (3.4)	高 -	1.5 にぶい赤褐	口縁部外反。底部回転糸切無調整。内面から口縁部外面鉛釉。口縁部油埴付着。	

308号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第778号	575	肥前磁器 染付仏龕器	口縁部1/4。底部3/4。脚部欠	口 底	(6.9) -	高 -	白	口縁部外面斜格文。脚部脇1重柳。内面無文。	

310号土坑または10号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第778号	576	在地系土器 皿	口縁部1/6	口 底	- -	高 -	にぶい橙	体部から口縁部直線的に開く。	

19号土坑または319号土坑

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第778号	577	龍泉窯系青 磁磁蓮弁文 碗	口縁部片	口 底	- -	高 -	灰	外面磁蓮弁文。内外面青磁釉。	

4号ピット

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第838号	578	在地系土器 皿	口縁部一部。底部1/4	口 底	(7.8) (5.4)	高 -	1.7 淡橙	体部から口縁部直線的に開く。底部重む。内外面中位以上油埴付着。	

33号ピット

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.29	579	在地系土器 香炉	口縁部1/8。底部1/4	口 底	(11.2) (6.5)	高 -	4.0 橙	体部外反し。口縁部強く内面。底部左回転糸切後、脚略り付け。脚1箇所残存。3脚であろう。	

河道路(10号溝東部)

種別 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第708号	580	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口 底	- -	高 -	灰	口縁部やや短い。口縁部下内面沈殿状の低い段差。	

## 3面遺構外

種別 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第858 PL.29	582	形象輪軸 不明						弧状の外縁部を有する板状品。底か。外面にへう描きによる文様が見られる。	
第858 PL.29	583	円筒輪軸	基底部～胴部	底	10.8			細砂粒/良好/橙	
第858 PL.29	584	中国磁器 白磁皿	体部下位から底 部1/4	口 底	(6.1) (3.4)	高 -	白	高台端部外面面取り、内面から高台幅白磁輪。釉かい貫入入る。やや焼成不良。	
第858 PL.29	585	中国磁器 青白磁小壺	口縁部1/16、体 部1/8	口 底	(6.1) (4.0)	高 -	白	肩部外面の半球状小嵌文と体部外面の縦位円筒状の筋。内面から体部外面下位青白磁輪。口縁端部内外面釉剥ぎ、口縁部突出。	
第858 PL.29	586	瀬戸・美濃 陶器 白天目碗	口縁部1/8	口 底	(10.8) (4.0)	高 -	灰白	口縁部面取りして立ち上がり、端部外反。体部外反。内外面灰輪。釉い貫入入る。	
第858 PL.29	587	瀬戸・美濃 陶器皿類	底部1/4	口 底	- -	高 -	灰白	内面から高台内灰輪。釉い貫入入る。	大空。
第858 PL.29	588	在地系土器 皿	完形	口 底	7.3 5.1	高 1.8~ 2.0	にふい橙	外面中位輪軸目により肥厚。底部左回転糸切無調整。口縁端部3箇所油煙付着。	
第858 PL.29	589	在地系土器 皿	1/4	口 底	(7.8) (4.0)	高 2.2	褐灰	体部ゆるく内湾。底部外面回転糸切無調整。	
第858 PL.29	590	在地系土器 内耳器	体部片	口 底	- -	高 -	灰	外面器表付近にふい橙色。口縁部内面段差なく外反。	
第858 PL.29	591	在地系土器 内耳器	口縁部片	口 底	- -	高 -	灰	器壁やや厚く。口縁部短く。内耳は器壁に孔を開けて通している可能性高い。口縁部外反。外反部内面後をなす。内耳取り付け部外面粘土貼り付け痕。	
第858 PL.29	592	在地系土器 内耳器	体部片	口 底	- -	高 -	黒	断面灰白色。口縁部外反し。口縁部内面下端ゆるい稜の段差。外面覆付着。	
第858 PL.29	593	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底	- -	高 -	暗灰	断面にふい橙色。器表暗灰色。体部外反し。口縁部ゆるく内湾。口縁端部内面斜め上方に突き出る。端部内面器表使用により摩滅。	
第858 PL.29	594	在地系土器 片口鉢	口縁部1/8、底 部1/4	口 底	(30.0) (11.0)	高 12.3	暗灰	断面中央灰白色。器表付近にふい黄橙色。器表暗灰色。体部外反し。上半直線的に開く。口縁端部内面内側に丸みを持って突き出す。体部内面下半から下半6本1単位のすり目。体部内面下位から底部内面、肩縁を除き器表摩滅。底部板作りか。	
第858 PL.29	595	在地系土器 片口鉢	口縁部片	口 底	- -	高 -	褐灰	体部外反し。口縁部内湾。口縁端部内面丸みを持って突き出る。口縁端部内外面摩滅。摩滅は使用痕か。	
第858 PL.29	596	銅製品 鏡	破片	長 幅	2.3 1.7	厚 重 0.3 4.48		鏡の外縁部小破片で、推定直径はcmで破断面は劣化後破損。表面は緑灰黒色で平滑小破片のため鏡の文様等詳細は不明。	
第858 PL.29	597	鉄製品 釘	一部欠損	長 幅	5.3 1.4	厚 重 1.3 8.48		断面はほぼ正方形の角釘で先端に向かい細くなるが先端近くで劣化破損する。頭部で幅を広げ端部は深く折り返す。木質等の痕跡は見られない。	
第858 PL.29	598	鉄製品 火打金	ほぼ完形	長 幅	8.8 3.1	厚 重 1.2 33.42		山型の火打金で両端は丸く中央は凸型だが孔等は見られない。	
第858 PL.29	599	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.524 2.517	厚 重 0.138 3.23		嘉祐元寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが文字の一部はつぶれる。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。裏面に鏝欠けと見られる小孔が開く。	
第858 PL.29	600	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 横	2.45 2.45	厚 重 0.137 1.59		太○通寶。表面は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。破損により下端の文字を欠く。裏面も彫深く外縁・郭とも明瞭。	

## 〔6.4面〕

## 28号溝

種別 PL.No.	No.	種類 種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
PL.36	608	鉄製品 不詳	破片	長 幅	2.9 1.7	厚 重 1.2 4.2		鋳造鉄製品破片、全体に破損・錆化のため詳細不明。	

遺物観察表

(7.5面)

1号住居

棟目 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第93R Pl.30	609	土師器 台付甕	口縁部～頸部	口 15	細砂粒/良好/明赤	口縁部は横ナデ、頸部は縦位のハケ目(1cmあたり4～5本)。	

2号住居

棟目 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第94R Pl.30	610	土師器 甕	胴部片		細砂粒/良好/ぶい	胴部上位に波状文。	
第94R Pl.30	611	土師器 甕	脚部	脚 8	細砂粒/良好/ぶい 黄粒	脚部は胴部に接合。端部は内側に折り返し、脚部上位はハケ目(1cmあたり6～7本)、下位はナデ。内面はナデ。	脚部内面底部側に多量の砂粒を含む粘土貼付。
第94R Pl.30	612	土師器 台付甕	口縁部～胴部上位	口 16.8	細砂粒/良好/ぶい 黄粒	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後、肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第94R Pl.30	613	土師器 台付甕	口縁部～胴部上位	口 14.1	細砂粒/良好/粒	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり4～6本)後、肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第94R Pl.30	614	土師器 台付甕	胴部中位～底部	底 5.8	細砂粒/良好/粒	胴部と脚部は接合。胴部・脚部ともハケ目(1cmあたり4～5本)。内面は胴部・脚部ともナデ。	

3号住居

棟目 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第96R Pl.30	615	土師器 高杯	杯身部～胴部上半片	口 14.3 底 8	細砂粒/良好/明赤	杯身部と脚部は接合。胴部に透孔が箇所。外面と内面杯身部はへら磨き。脚部内面はへらナデ。	
第96R Pl.30	616	土師器 高杯	杯身部	口 12.1 底 5	細砂粒/良好/赤粒	杯身部と脚部は接合。杯身部底部中央にホヅ状の突起をつくる。内外面ともへら磨き。	
第96R Pl.30	617	土師器 高杯	杯身部体部～脚部上半	底 9.1	細砂粒・粗砂粒/ 良好/粒	杯身部と脚部は接合。杯身部体部に4箇所、脚部に3箇所の透孔。外面はへら磨き。内面は杯身部にへら磨き、脚部はへらナデ。	
第96R Pl.30	618	土師器 高杯	脚部	脚 9.5	細砂粒/良好/粒	脚部に透孔が4箇所。外面の整形は器面磨減のため不明。内面はへらナデ。	
第96R Pl.30	619	土師器 高杯	脚部片	脚 11.9	細砂粒/良好/ぶい 黄粒	脚部に透孔が4箇所。外面はへら削りか、器面磨減のため単位不明。内面はへらナデ。	
第96R Pl.30	620	土師器 器台	口縁部片	口 19.2	細砂粒/良好/粒	受部に透孔が上段3箇所、下段2箇所。内外面ともへら磨きか。外面は器面磨減のため単位など不明。	
第96R Pl.30	621	土師器 鉢	1/2	口 9 底 2.8	6.5 細砂粒/良好/ぶい 黄粒	口縁部は横ナデ。体部は上半ナデ。下半はへら削り、底部は手持ちへら削り。内面は口縁部が横ナデ、体部から底部はナデ。	
第96R Pl.30	622	土師器 壺	胴部～底部片	底 3.4	細砂粒/良好/粒	底部・脚部ともへら磨き。内面はハケ目(1cmあたり8本)。	
第96R Pl.30	623	土師器 壺	胴部下位～底部	底 6.7	細砂粒/良好/粒	底部・脚部ともへら磨き。内面はハケ目(1cmあたり6～13本)。	
第96R Pl.30	624	土師器 壺	口縁部～頸部	口 17	細砂粒/良好/粒	外面はハケ目(1cmあたり4本)後、横ナデを施しているが、ハケ目が多く残る。内面も同様であるが、ハケ目はほとんどナデ消されている。	
第96R Pl.30	625	土師器 壺	口縁部～胴部上位片	口 13.4	細砂粒/良好/粒	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り後ナデ。内面胴部もナデ。	
第96R Pl.30	626	土師器 壺	口縁部～胴部中位片	口 14.2 脚 14.6	細砂粒/良好/ぶい 黄粒	口縁部は横ナデ。胴部はハケ目(1cmあたり13本)後へらナデ。一部はハケ目が残る。内面胴部はナデか。	
第96R Pl.30	627	土師器 壺	口縁部～胴部中位片	口 14.3 脚 14.3	細砂粒/良好/粒	口縁部は横ナデ。胴部はへら磨き。上位は器面磨減のため単位不明。内面胴部上半はへらナデか。	
第96R Pl.30	628	土師器 壺	2/3	口 12.7 底 3.7	10.7 細砂粒・粗砂粒/ 良好/黄粒	口縁部はハケ目(1cmあたり7本)、胴部はハケ目後ナデ。内面は口縁部がハケ目、胴部はへらナデ。	
第96R Pl.30	629	土師器 壺	口縁部～胴部上位片	口 12.4	細砂粒/良好/ぶい 黄粒	口縁部は横ナデ。胴部はハケ目(1cmあたり10～12本)。内面胴部はナデ。	
第96R Pl.30	630	土師器 壺	03/4	口 24.2 脚 27.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好/ぶい	底部は器面磨減。口縁部から胴部はハケ目(1cmあたり5本)後、口縁部上位に横ナデ。胴部下半へらナデ。内面は口縁部下半と胴部下位にハケ目、胴部上位・中位はへらナデ。	
第96R Pl.30	631	土師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 18.8	細砂粒/良好/ぶい 黄粒	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後、肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第96R Pl.30	632	土師器 台付甕	胴部下位片		細砂粒/良好/ぶい 黄粒	脚部は胴部に接合。胴部はへら削りか、脚部は横位のハケ目。一部ナデ。	
第96R Pl.30	633	土師器 台付甕	脚部	脚 7.4	細砂粒/良好/ぶい 黄粒	脚部は胴部に接合。外面は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後、端部を横ナデ。内面は底部がナデ。脚部は横位のハケ目。	
第96R Pl.30	634	土師器 台付甕	胴部底部～脚部	脚 8.3	細砂粒/良好/ぶい 黄粒	脚部と胴部は接合。胴部はへら削りか、脚部上半はへらナデ。下半は横ナデ。内面は胴部・脚部ともへらナデ。	
第96R Pl.30	635	土師器 台付甕	口縁部～胴部下位	口 34.5 脚 32.2	細砂粒/良好/灰黄 粒	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のハケ目(1cmあたり4～5本)後、肩に横位のハケ目。内面胴部はへらナデ。	
第96R Pl.30	636	土師器 台付甕	胴部一部欠損	口 15.9 脚 9.2	25.6 細砂粒/良好/灰黄 粒	脚部は貼付、脚部端部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部から脚部上位は縦位のハケ目(1cmあたり6～7本)後肩に横位のハケ目。脚部はへらナデ。内面胴部はナデ。	

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第97R2 PL.30	637	土師器 台付費か	脚部	脚	6.8		細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	脚部は脚部に貼付、外面は縦位。内面は斜めのハケ目(1cm あたり8～14本)。	
第97R2 PL.31	638	土師器 小型台付費	2/3	口	10.4	高	12	細砂粒/良好/浅黄 褐色	脚部と脚部は接合。口縁部は横ナデ、脚部はヘラナデ、脚 部はナデ。内面は脚部・脚部ともヘラナデ。
第97R2 PL.31	639	土師器 小型台付費	定形	口	12.3	高	15.9	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	脚部と脚部は接合。口縁部は横ナデ、脚部はヘラナデ、脚 部はナデ。内面は脚部・脚部ともヘラナデ。
第97R2 PL.31	640	石製品 砥石	破片	長	(7.1)	厚	(1.7)	珪質頁岩	表裏面に平滑面と擦痕が認められる。細片素材で、破損後 の再利用か。
第97R2 PL.31	641	礫石器 砥石	定形	長	10.1	厚	8.5	黒色頁岩	立方体に近い形状の礫の平坦面に敲打痕が認められる。下 面右側に平坦面を形成し、中央部に敲打痕をもつ。
第97R2 PL.31	642	礫石器 台石	定形	長	34.4	厚	12.4	粗粒輝石安山岩	大形扁平礫素材。表裏面に磨面を有し、正面中央部が最も 顕著。

4号住居

種 類 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
第97R2 PL.31	644	土師器 高杯	杯身部1/2	口	10.8			杯身部は内外面とも赤色塗彩。口縁部に3本の凹線が深る。 口縁部はへら磨き、底部はヘラナデ。内面は口縁部が横ナ デ、口縁部から底部はへら磨き。	
第97R2 PL.31	645	土師器 高杯	杯身部～脚部下 位片	口	12.8			杯身部と脚部は接合。杯身側面にホノ状の突起、杯身口 縁部は横ナデ。体部から底部はハケ目後へら磨き。内面は 杯身部からへら磨き。	
第97R2 PL.31	646	土師器 高杯	杯身部～脚部上 位片	口	11.8			杯身部と脚部は接合。杯身部・脚部ともへら磨き、器面磨 減のため単位不明。内面は杯身部がへら磨き、脚部はヘ ラナデ。	
第97R2 PL.31	647	土師器 高杯	杯身部底部～脚 部上位					外面は杯身部・脚部ともへら磨き。内面脚部はヘラナデ。	
第97R2 PL.31	648	土師器 高杯	杯身部底部～脚 部上位					杯身部と脚部は接合。内外面ともヘラナデか。	
第97R2 PL.31	649	土師器 高杯	脚部片	脚	17.2			脚部に上下各3箇所の透孔。外面はへら磨き、内面はヘラ ナデ。	
第97R2 PL.31	650	土師器 高杯	脚部片	脚	19.8			脚部に透孔3箇所。外面はへら磨き、内面はハケ目(1cmあ たり7本)。	
第97R2 PL.31	651	土師器 高杯	脚部片	脚	19.8			脚部に透孔3箇所。外面はへら磨き、内面は器面磨減のた め不明。	
第97R2 PL.31	652	土師器 高杯か	1/3	口	13			内外面とも全面的にへら磨き、外面口縁部は器面磨減のた め方向・単位不明。	
第97R2 PL.31	653	土師器 高杯か	脚部	脚	8.7			脚部と杯身部は接合。脚部に透孔が6箇所。脚部は外面が へら磨き、内面はヘラナデ。	
第97R2 PL.31	654	土師器 台石	脚部2/3欠損	口	6.8	高	8.4	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	脚部に透孔が3箇所。受部口縁部・脚部側面は横ナデ、そ の間にへら磨き。内面は受部がへら磨き、脚部はヘラナデ。
第97R2 PL.31	655	土師器 用	頸部～頸部上位 片					細砂粒/良好/明赤 褐色	頸部と脚部は接合。外面はへら磨き、内面はナデ。
第97R2 PL.31	656	土師器 小型皿か	口縁部～頸部片	口	5.4			細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	外面はへら磨き、内面はナデ。
第97R2 PL.31	657	土師器 小型皿か	頸部～脚部上平 片					細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	頸部は横ナデ、脚部中位はへら磨き、内面脚部はナデ。
第97R2 PL.31	658	土師器 蓋	口縁部片					細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	外面に輪楕が残る。外面は縄文(0段多条LR)が施文、 内面はへら磨き。
第97R2 PL.31	659	土師器 蓋	脚部片					細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	外面は縄文(0段多条LR)が施文、内面はへら磨き。
第97R2 PL.31	660	土師器 台付費	口縁部～脚部上 位片	口	11			細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部横ナデ、頸部から脚部はハケ目(1cmあたり6～7本)、 内面脚部はヘラナデ。
第97R2 PL.31	661	土師器 台付費	口縁部～脚部上 位片	口	16.4			細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部横ナデ、頸部から脚部はハケ目(1cmあたり6本)、内 面は頸部にハケ目、脚部はヘラナデ。
第97R2 PL.31	662	土師器 台付費	脚部上位片					細砂粒/良好/灰黄 褐色	脚部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後横位のハケ目。
第97R2 PL.31	663	土師器 台付費	脚部上位片					細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	脚部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後横位のハケ目。
第97R2 PL.31	664	土師器 台付費	脚部上位片					細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	外面は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後頸部や今下に横位 のハケ目。内面はナデ。
第97R2 PL.31	665	土師器 台付費	脚部上位					細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	外面はハケ目(1cmあたり5本)。内面脚部はナデ。
第97R2 PL.31	666	土師器 台付費	脚部上位～脚部 下位					細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	外面はハケ目(1cmあたり4～5本)。内面脚部はナデ。
第97R2 PL.31	667	土師器 台付費	脚部～脚部上位	底	6			細砂粒/良好/灰黄 褐色	脚部と脚部は接合。脚部から脚部はハケ目(1cmあたり7～ 8本)。内面は脚部・脚部ともナデ。
第97R2 PL.31	669	鉄製品 鏝		長	3.1	厚	0.1		無草の鉄鏝で、厚さ1mmほどと薄く表面には矢筈等の痕跡 は見られない。矢筈固定用の孔も認められない。

遺物観察表

5号住居

種 別 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第989R PL_31	670	土師器 台付甕	胴部～脚部	脚	4.9		細砂粒/良好/灰黄 胴部と脚部は接合。胴部から脚部はナデ。内面は胴部・脚部ともナデ。	
第989R PL_31	671	土師器 台付甕	口縁部～胴部上 位片	口	13.2		細砂粒/良好/灰黄 口縁部横ナデ。頸部から胴部はハケ目(1cmあたり6本)。内面胴部はヘラナデ。	
第989R PL_31	672	土師器 台付甕	口縁部～胴部上 位片	口	19.8		細砂粒/良好/灰黄 口縁部横ナデ。頸部から胴部はハケ目(1cmあたり4本)後側に横位のハケ目。内面胴部はヘラナデ。	
第989R PL_31	673	土師器 台付甕	脚部片	脚	10.6		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 脚部と胴部は接合。脚部内面端部は折り返し。脚部は上位・中位はナデ後下位ハケ目(1cmあたり6～7本)。内面はハケ目。	
第989R PL_31	674	土師器 甕	口縁部～胴部上 位片	口	13.6		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 口縁部は横ナデ。胴部はハケ目(1cmあたり9～10本)。内面は胴部がヘラナデ。	

6号住居

種 別 Pl.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第999R2 PL_31	675	土師器 高杯	杯身部底部				細砂粒/良好/橙 脚部は貼付。杯身部から脚部はヘラ磨き。内面は器面剥落のため不明。	杯身部欠損 後割れ口に 刺目目が5箇所。
第999R2 PL_31	676	土師器 高杯	杯身部底部～脚 部上位				細砂粒/良好/橙 杯身部は内面黒色処理。脚部と杯身部は接合。脚部内面は横ナデ。	
第999R2 PL_31	677	土師器 高杯	脚部片	脚	8.6		細砂粒/良好/橙 脚部は接合。透孔が3箇所。外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ。	
第999R2 PL_31	678	土師器 高杯	杯身部底部～脚 部上半				細砂粒/良好/明赤 濁 脚部に透孔が3箇所。杯身部と脚部は接合。杯身部底部はヘラナデ。脚部はヘラ削り後やや不定方向ヘラ磨き。内面は杯身部・脚部ともヘラナデ。	
第999R2 PL_31	679	土師器 高杯	杯身部～脚部上 半	口	15.9		細砂粒/良好/橙 杯身部と脚部は接合。脚部に透孔が3箇所。外面はヘラ磨き、一部器面削磨のため不明。	
第999R2 PL_31	680	土師器 高杯	1/2	口	12.7 高 8.2	8.7	細砂粒/良好/にぶ い黄粒 脚部に透孔が4箇所。杯身部と脚部は接合。外面は全面的にヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き。脚部はヘラナデ。	
第999R2 PL_31	681	土師器 高杯	杯身部片	口	23		細砂粒/良好/橙 口縁部は横ナデ。体部は放射状ヘラ磨き。内面は放射状ヘラ磨き。	
第999R2 PL_31	682	土師器 高杯	杯身部	口	22.6 底 7.2		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 杯身部と脚部は接合。杯身部は内外面とも放射状ヘラ磨き。	
第999R2 PL_31	683	土師器 高杯か	脚部	脚	6		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ。	
第999R2 PL_31	684	土師器 器台	脚部下位欠損	口	9.6		細砂粒/良好/橙 脚部に透孔が3箇所。口内面は内外面とも横ナデ。受部から脚部はヘラ磨き。内面は受部が放射状ヘラ磨き。脚部はヘラナデ。	
第999R2 PL_31	685	土師器 蓋	1/3	口	10 高 3.3	3.3	細砂粒/良好/明赤 濁 縁みはナデ。天井はヘラ削り、口縁部は横ナデ。内面は中央部がナデ。縁部はヘラナデ。	
第999R2 PL_31	686	土師器 鉢	1/5	口	13.4 底 5.1		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 口縁部から体部はヘラ磨き、底部はヘラ削りか。内面は放射状ヘラ磨き。	
第999R2 PL_31	687	土師器 鉢	1/2	口	10.7 高 4.6	6	細砂粒/良好/明赤 濁 口縁部は横ナデ。体部はハケ目(1cmあたり7本)。底部はナデ。内面は底部から体部下位にヘラナデ。	
第999R2 PL_31	688	土師器 小型壺	1/4	口	7 高 9.4	9.9	細砂粒/良好/橙 口縁部横ナデ。胴部は上半がナデ。下半から底部はハケ目(1cmあたり5～10本)後にナデ。内面は胴部がナデ。	
第999R2 PL_31	689	土師器 小型壺	口縁部～胴部片	口	7.2 脚 9.1		細砂粒/良好/橙 口内面はハケ目、口縁部横ナデ。胴部は上半がナデ。下半から底部はハケ目にナデ。内面は胴部がヘラナデ。	
第999R2 PL_31	690	土師器 埴	口縁部～胴部片	口	10.2 脚 13.6		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶ、橙 口縁部は横ナデ。頸部はヘラ磨き。胴部はハケ目(1cmあたり10本)後、上位をヘラナデ。内面は胴部がヘラナデ。	
第999R2 PL_31	691	土師器 埴	口縁部1/2	口	15.9		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶ、橙 外面は縦位のヘラ磨き、内面は口縁部がヘラナデ。頸部はヘラ磨き。	
第999R2 PL_31	692	土師器 埴	口縁部～胴部上 位	口	14.8		細砂粒/良好/橙 口縁部は縦位のヘラ磨き。胴部は細いヘラナデ。内面は口縁部から頸部にヘラ磨き。	
第999R2 PL_31	693	土師器 埴	口縁部片	口	13.6		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 外面に輪痕が残る。外面は縄文(LR)、内面は横位のヘラ磨き。	
第999R2 PL_31	694	土師器 埴	口縁部～胴部上 半	口	13.5		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 口縁部は横ナデ後ヘラ磨き。胴部はやや不定方向のヘラ磨き。内面は口縁部がヘラ磨き。胴部はヘラナデ。	
第999R2 PL_31	695	土師器 埴	口縁部～胴部中 位片	口	12.4		細砂粒/良好/明赤 濁 口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラナデ。内面胴部もヘラナデ。	
第999R2 PL_31	696	土師器 埴	口縁部～胴部上 位片	口	20		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 口縁部は横ナデ。胴部はハケ目(1cmあたり4本)。内面は口縁部から頸部がハケ目後横ナデ。胴部はヘラナデ。	
第999R2 PL_31	697	土師器 埴	口縁部～胴部上 位片	口	18.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙 口縁部は横ナデ。頸部から胴部は縦位のハケ目(1cmあたり7本)後側に横位のハケ目。内面胴部はヘラナデ。	
第999R2 PL_31	698	土師器 埴	口縁部～胴部下 位	口	17 脚 23.7		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 口縁部から頸部は横ナデ。胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	
第999R2 PL_31	699	土師器 埴か	口縁部～頸部片	口	14.2		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 口縁部は横ナデ。頸部はヘラナデ。内面は口縁部下半にハケ目(1cmあたり5本)、頸部はヘラナデ。	
第999R2 PL_31	700	土師器 小型台付甕	口縁部～胴部中 位片	口	10.8 脚 13.6		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 口縁部は横ナデ。胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5～7本)後上位に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第999R2 PL_31	701	土師器 小型台付甕	脚部	脚	5.1		細砂粒/良好/にぶ い黄粒 脚部と胴部は接合。底部は折り返し。胴部はハケ目、脚部はヘラナデ。内面はヘラナデ。	

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第99082 PL.32	702	土師器 台付甕	口縁部～胴部中 位片	口 14.2	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後肩に横位のハケ目。内面は頸部にハケ目、胴部はナデ。	
第99082 PL.32	703	土師器 台付甕	口縁部～胴部中 位片	口 14	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6～8本)後肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第99082 PL.32	704	土師器 台付甕	脚部	脚 7.6	細砂粒/良好/橙	脚部と胴部は接合。端部は折り返し。胴部は上位にハケ目(1cmあたり4本)下半部はヘラナデ。内面はナデ。	
第99082 PL.32	705	土師器 台付甕	脚部	脚 9.5	細砂粒/良好/橙	脚部と胴部は接合。端部は折り返し。胴部は上位にハケ目(1cmあたり5本)下半部はヘラナデ。内面はナデ。	
第99082 PL.32	706	土師器 台付甕	脚部	脚 10	細砂粒/良好/橙	脚部と胴部は接合。胴部は上位にハケ目(1cmあたり5本)下半部はヘラナデ。内面はナデ。	体部内面に多量の砂粒を含む粘土を貼付。
第99082 PL.32	707	土師器 台付甕	胴部～脚部	脚 6.8	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	脚部と胴部は接合。胴部はハケ目か。内面は脚部がヘラナデ。	
第99082 PL.32	708	土師器 台付甕	脚部片	脚 8.6	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	脚部と胴部は接合。胴部は上位にハケ目(1cmあたり5～7本)下半部はヘラナデ。内面はハケ目。	
第99082 PL.32	709	土師器 台付甕	脚部	脚 9.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄褐色	脚部は胴部に接合。脚部は内外面ともハケ目(1cmあたり6本)後端部をナデ。胴部内面はヘラナデ。	
第99082 PL.32	710	土師器 台付甕	脚部	脚 9.8	細砂粒/良好/橙	脚部は胴部に接合。外側はハケ目(1cmあたり4～7本)、内面もハケ目(1cmあたり4本)。	
第99082 PL.32	711	礫石器 砥石	略欠形	長 13.5 厚 5.5 幅 7.1 重 771.9	粗粒輝石安山岩	上面に割離痕。正面中央部に磨面が認められる。	
第99082 PL.32	712	礫石器 砥石	完形	長 9.5 厚 3.1 幅 4.5 重 199.1	アブライト	扁平な楕円礫素材。正面中央部に磨面、上端部に敲打痕がある。	

7号住居

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第100082 PL.32	713	土師器 高杯	杯身部下平～脚 部上半		細砂粒/良好/黄褐色	脚部と杯身部は接合。脚部に透孔が箇所。杯身部から脚部は外面がヘラ磨き、内面脚部はヘラナデ。	
第100082 PL.32	714	土師器 高杯	脚部片	脚 15.8	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	脚部に透孔が箇所。内外面とも横ナデ。	
第100082 PL.32	715	土師器 器台	小片	口 7.6 高 8.1 幅 11.1	細砂粒/良好/明赤 褐色	垂直口唇部は横ナデ。底部から胴部は上半は横位、下半は縦位のヘラ磨き。内面脚部は上半がヘラナデ、下半がハケ目後ヘラ磨き。	
第100082 PL.32	716	土師器 鉢	2/3	口 7.1 高 5 幅 4.3	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部から体部は器面磨減のため単位不明。底部はヘラ磨き。内面は底部から体部下位にヘラナデ。	
第100082 PL.32	717	土師器 甕	口縁部片	口 25	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部は縄文を施文後3本1対の棒状凸部を貼付と下端に刻み目。	
第100082 PL.32	718	土師器 甕	胴部上位片	頸 9	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	頸部は胴部に接合。胴部は外面がヘラ磨き、内面はハケ目(1cmあたり7～8本)後ヘラナデ。	
第100082 PL.32	719	土師器 甕	底部～胴部下平 片	底 7.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	底部はヘラ磨き。胴部はハケ目後ヘラ磨き。内面はヘラナデ。	
第100082 PL.32	720	土師器 甕	口縁部～胴部	口 14.6 脚 15.8 幅 15.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部はハケ目(1cmあたり4本)、内面胴部はヘラナデ。	
第100082 PL.32	721	土師器 甕	口縁部～胴部	口 13.6 脚 17.4 幅 17.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部はハケ目後横ナデ。胴部はハケ目(1cmあたり3本)。内面は口縁部がハケ目、胴部はヘラナデ。	
第100082 PL.32	722	土師器 甕	口縁部～胴部	口 16.5 脚 23.9 幅 23.9	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部はハケ目(1cmあたり3～5本)。内面胴部はヘラナデ。	
第100082 PL.32	723	土師器 甕	口縁部～胴部	口 17.8 脚 22.8 幅 22.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ。胴部はハケ目(1cmあたり5本)。内面は口縁部がハケ目後横ナデ。胴部はヘラ磨き、器面磨減のため単位不明。	
第100082 PL.32	724	石製品 砥石?	略欠形	長 9.2 厚 5.1 幅 6.0 重 67.4	軽石	表面内面および左右側面に幅約4mmの溝を有するため、砥石と考えた。溝は断面V字状を呈し、鋭利な道具によるものと推定される。	
第100082 PL.32	725	礫石器 砥石	破片	長 16.9 厚 2.1 幅 (3.1) 重 139.5	黒色片岩	右側縁に連続割離痕が認められ、加摩の際に生じたものと推定される。	
第100082 PL.32	726	礫石器 砥石	完形	長 11.9 厚 4.8 幅 5.4 重 461.4	変質玄武岩	棒状礫の下面に敲打痕を有する。	

8号住居

採 掘 PL.No.	No.	種 類 種 類	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第10108 PL.33	727	土師器 高杯	脚部下平	脚 12.3	細砂粒/良好/橙	脚部に透孔が4箇所。外面はヘラ磨き後縦位のヘラ磨き、内面はヘラナデ。	
第10108 PL.33	728	土師器 甕	口縁部/3	口 8.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐色	頸部と胴部と接合。口縁部は縦位のヘラ磨き。内面は口縁部が縦位のヘラ磨き、頸部はナデ。	
第10108 PL.33	729	土師器 甕	頸部～胴部中位 片	頸 5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄褐色	頸部は胴部に接合。胴部はヘラ磨き、器面磨減のため単位不明。内面胴部はナデ。	
第10108 PL.33	730	土師器 甕	頸部片	頸 5	細砂粒/良好/にぶ い黄褐色	口縁部から胴部上位に波状文が3段以上施文。	
第10108 PL.33	731	土師器 甕	口縁部片	口 23.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口唇部は内側に折り返し、凸部は貼付。内外面ともヘラナデ。	
第10108 PL.33	732	土師器 甕	口縁部片	口 23.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口唇部は内側に折り返し、凸部は貼付。内外面ともヘラナデ。	731と同一個体の可能性高い。



遺物観察表

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石 材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第10108 PL.33	733	土師器 台付裏	口縁部～胴部片	口 14.8 脚 22.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後、 肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第10108 PL.33	734	土師器 台付裏	胴部3/4	脚 9		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部は胴部に接合。端部は内側に折り返し。脚部上位はハ ケ目(1cmあたり8本)、下平はナデ。内面はナデ。	脚部内面底 部部に多量 の砂粒を含 む粘土貼付。
第10108 PL.33	735	礫石器 敲石	略定形	長17.9 幅6.7 厚重 765.1	4.9	砂質頁岩	正面および上部部に最打痕が認められる。左上部の割離面 は最打による衝撃割離の可能性がある。	

9号住居

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石 材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第10292 PL.33	736	土師器 高杯	胴部1/2	脚 16		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部に透孔が3箇所。外面はハケ目(1cmあたり7～8本)後 端部を横ナデ。上平をナデ。内面は上平がナデ。下平はハ ケ目。	
第10292 PL.33	737	土師器 高杯	胴部1/3	脚 15.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部に透孔が3箇所。外面はヘラ磨き。一部器面磨滅のた め不鮮明。内面はヘラナデ。単位不鮮明。	
第10292 PL.33	738	土師器 皿	口縁部1/3	口 7.8		/明褐色		
第10292 PL.33	739	土師器 壺	口縁部片	口 15.4		細砂粒/良好/橙	口唇部は横ナデ。棒状凸部を貼付。単位不明。口縁部はハ ケ目。	
第10292 PL.33	740	土師器 台付裏	口縁部～胴部上 位片	口 14.6		細砂粒/良好/灰黄 相	口縁部は横ナデ。胴部はハケ目(1cmあたり5本)後横方向に 2本の浅い凹線が通る。	
第10292 PL.33	741	土師器 台付裏	口縁部～胴部上 位片	口 17.6		細砂粒/良好/灰黄 相	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のハケ目(1cmあたり4～5本) 後肩に横位のハケ目。	
第10292 PL.33	742	土師器 台付裏	口縁部～胴部上 位片	口 15.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のハケ目(1cmあたり4～5本) 後肩に横位のハケ目。	

1号竪穴

種 類 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石 材・素材等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第10508 PL.34	743	土師器 高杯	杯身部	口 13.8		細砂粒/良好/橙	胴部とは接合が割落。内外面とも丁寧なヘラ磨き。内面は 器面磨滅のため一部単位など不明。	
第10508 PL.34	744	土師器 高杯	ほぼ定形	口 20 脚 11.1	高 13	細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。脚部に透孔が3箇所。杯身部・脚部 ともヘラ磨き。内面は杯身部がハケ目後ヘラ磨き。脚部は ヘラナデ。	
第10508 PL.34	745	土師器 高杯	ほぼ定形	口 19.7 脚 11.6	高 12.2	細砂粒・粗砂粒/ 泥粘/良好/明黄相	杯身部と脚部は接合。脚部に透孔が3箇所。杯身部・脚部 ともヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き。脚部はヘラナデ。	
第10508 PL.34	746	土師器 高杯	ほぼ定形	口 21.7 脚 11.2	高 14.2	細砂粒/良好/灰黄 相	杯身部と脚部は接合。脚部に透孔が3箇所。杯身部・脚部 ともヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き。脚部はヘラナデ。 一部器面磨滅のため単位不明。	
第10508 PL.34	747	土師器 高杯	ほぼ定形	口 21 脚 12.8	高 14.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	脚部に杯身部を接合。脚部に透孔が3箇所。外面と内面口 縁部はヘラ磨き。器面磨滅のため単位不明。内面脚部は ヘラナデ。	
第10508 PL.34	748	土師器 高杯	ほぼ定形	口 21.5 脚 12	高 13.9	細砂粒/良好/橙	脚部に杯身部を接合。脚部に透孔が3箇所。杯身部口縁部 は内外面ともヘラ磨き。一部器面磨滅のため不鮮明。底部 はヘラ削り。脚部は内外面ともヘラナデ。	
第10508 PL.34	749	土師器 高杯	ほぼ定形	口 21.4 脚 13.6	高 14.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	脚部に杯身部を接合。脚部に透孔が3箇所。外面は杯身部 から脚部までヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き。脚部は ヘラナデ。	
第10508 PL.34	750	土師器 高杯	定形	口 12.6 底 5.8	脚 20.6 高 12.2	細砂粒・粗砂粒/ 泥粘/良好/橙	杯身部と脚部は接合。脚部に透孔が3箇所。杯身部口縁部 と脚部がヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き。脚部は上平 がヘラナデ。下半はハケ目。	
第10508 PL.34	751	土師器 高杯	定形	口 14.9 底 7.8	脚 19.1 高 13.5	細砂粒・粗砂粒/ 泥粘/良好/にぶ い橙	脚部に杯身部を接合。脚部に透孔が上下各3箇所。杯身部 口縁部と脚部までヘラ磨き。一部器面磨滅のため不鮮明。 内面は杯身部がヘラ磨き。脚部は上平がヘラナデ。下半は ハケ目後ヘラナデ。	
第10608 PL.34	752	土師器 土師	ほぼ定形	口 9.2 底 4.1	高 16.6 脚 13	細砂粒/良好/橙	口縁部は放射状。胴部は横位。胴部は縦位のヘラ磨き。底 部はヘラ削り。内面は口縁部が斜放射状ヘラ磨き。	
第10608 PL.34	753	土師器 土師	定形	口 9.6 底 3.7	高 20.4 脚 15.8	細砂粒/良好/橙	口縁部はハケ目後放射状ヘラ磨き。胴部底部ともヘラ磨き。 内面は口縁部が横位のヘラ磨き。	
第10608 PL.35	754	土師器 土師	定形	口 9.1 底 3.3	高 19 脚 15.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は放射状ヘラ磨き。胴部と底部ともヘラ磨き。内面口 縁部はヘラ磨き。器面磨滅のため単位不明。	
第10608 PL.35	755	土師器 小型壺	ほぼ定形	口 10 底 2.2	高 8.9	細砂粒/良好/橙	口縁部と胴部は縦位。胴部は横位。底部は不方向のヘラ 磨き。内面は口縁部が斜放射状。胴部は横位のヘラ磨き。	
第10608 PL.34	756	土師器 土師	胴部一部欠損	口 17.1 底 6	高 27.1 脚 24.8	細砂粒/良好/橙	口唇部は傾斜目。頸部から胴部はハケ目後ヘラ磨き。底部 はヘラ削り。内面は口縁部がヘラ磨き。胴部はヘラナデ。	
第10608 PL.34	757	土師器 壺	ほぼ定形	口 14.9 底 2.9	高 16.5 脚 16.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	頸部から口縁部は放射状。胴部は横位。胴部は縦位のヘ ラ磨き。内面は口縁部がヘラ磨き。器面磨滅のため単位不 明。頸部にハケ目が残る。	
第10608 PL.35	758	土師器 土師	ほぼ定形	口 14.8 底 4.3	高 22.4 脚 19.2	細砂粒/良好/橙	口縁部・胴部ともヘラ磨きであるが、大部分は器面磨滅の ため単位等不明。底部と胴部最下部はヘラ削り。内面は胴 部がヘラナデ。	
第10608 PL.35	759	土師器 壺	口縁部3/4欠損	口 16.2 底 4.3	高 22.9 脚 20	細砂粒/良好/橙	口縁部・胴部・底部ともヘラ磨きであるが、大部分は器面 磨滅のため単位等不明。内面は胴部ヘラナデ。	

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第10698 PL.34	760	土師器 小型甕	ほぼ完成形	口 11.2 高 11.9 底 3.9 底 12.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面胴部に輪筋が残る。口縁部は横ナデ、胴部上半はハケ目(1cmあたり9～11本)、下半から底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第10698 PL.34	761	土師器 小型甕	ほぼ完成形	口 11.3 高 9.5 底 11.8 底 11.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第10698 PL.34	762	土師器 小型甕	ほぼ完成形	口 11.9 高 10.7 底 3.3 底 12.1	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第10698 PL.34	763	土師器 小型甕	ほぼ完成形	口 12.2 高 9.3 底 4.2 底 12	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から底部までヘラ磨き。内面は口縁部と底部にハケ目、胴部はナデ。	
第10698 PL.34	764	土師器 小型甕	完成形	口 10.4 高 9.7 底 4 底 13.2	細砂粒/良好/にぶい黄	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ磨き。底部は器面磨滅のため不明。内面は口縁部がヘラ磨き、胴部上半はハケ目(1cmあたり7～9本)、下半はヘラナデ。	
第10698 PL.34	765	土師器 小型甕	完成形	口 13.7 高 13.4 底 4.1 底 13.8	細砂粒・粗砂粒・ 石英他/良好/にぶい黄	口縁部は横ナデ、胴部はナデ、一部にハケ目(1cmあたり6～9本)が残る。底部はヘラ磨き。内面は口縁部がハケ目後、上半を横ナデ、胴部はヘラナデ。	
第10698 PL.34	766	土師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 19.4	細砂粒/良好/橙	口縁部上半は横ナデ、下半から胴部はハケ目(1cmあたり11～12本)一部はナデ消されている。内面は口縁部がハケ目、胴部はナデ。	
第10698 PL.35	767	土師器 甕	4/5	口 15.3 高 15.3 底 5 底 16	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり3～5本)、底部はヘラ削り。内面は口縁部から頸部まで横ナデ、胴部上半はハケ目、下半はヘラ磨き。	
第10698 PL.35	768	土師器 小型台付甕	完成形	口 11 高 13.8 脚 6.5 脚 12.6	細砂粒/良好/にぶい黄	頸部と胴部は接合、胴部上部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後側に横位のハケ目、脚部は上半がハケ目、下半はナデ。内面は胴部が脚部ともナデ。	
第10698 PL.35	769	土師器 小型台付甕	ほぼ完成形	口 9.8 高 15.4 脚 6.6 脚 13.4	細砂粒/良好/浅黄橙	頸部は接合、胴部上部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり7本)後側に横位のハケ目、脚部は上半がハケ目、下半はナデ。内面は胴部上半がナデ、底部から下半はハケ目、胴部はナデ。	
第10718 PL.35	770	土師器 台付甕	脚部～胴部下位	脚 8.6	細砂粒/良好/灰白	脚部は接合、胴部上部は内側に折り返し。胴部から脚部上位はハケ目(1cmあたり5～7本)、脚部下半はナデ。内面は胴部がナデ、底部付近はヘラナデ、胴部はハケ目が残る。	
第10718 PL.35	771	土師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 14.2	細砂粒/良好/浅黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり7～8本)後、横位のハケ目、内面は胴部がナデ。	
第10718 PL.35	772	土師器 台付甕	口縁部～胴部	口 12.7 高 15.9 脚 15.9 脚 15.9	細砂粒/良好/にぶい黄橙	頸部は接合。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後上位に横位のハケ目、内面胴部はナデ。	
第10718 PL.35	773	土師器 台付甕	脚部/2欠損	口 11.3 高 19.2 脚 7.1 脚 15	細砂粒/良好/灰黄橙	頸部は接合、胴部上部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後、側に横位のハケ目、脚部は上半がハケ目、下半はナデ。内面は胴部がナデ、脚部もナデ。	脚部内面底部側に多量の砂粒を含む粘土貼付。
第10718 PL.35	774	土師器 台付甕	一部欠損	口 12.8 高 20.3 脚 7.4 脚 17	細砂粒/良好/にぶい黄橙	頸部は接合、胴部上部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり8本)後、側に横位のハケ目、脚部は上半がハケ目、下半はナデ。内面は胴部がナデ、脚部もナデ。	
第10718 PL.35	775	土師器 小型台付甕	3/4	口 9.8 高 15.8 脚 6.8 脚 13.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	頸部は胴部に接合。胴部上部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部から脚部上位はハケ目(1cmあたり7～9本)。	脚部内面底部側に多量の砂粒を含む粘土貼付。
第10718 PL.35	776	土師器 台付甕	脚部欠損	口 12.5 高 17 脚 17	細砂粒/良好/にぶい黄橙	頸部は貼付。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり4本)後上位に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第10718 PL.35	777	土師器 台付甕	一部欠損	口 14.1 高 23.9 脚 8.3 脚 19.5	細砂粒/良好/にぶい黄橙	頸部は接合、胴部上部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後上位に横位のハケ目、脚部は上半にハケ目。内面胴部はナデ。	脚部内面底部側に多量の粘土貼付。
第10718 PL.35	778	土師器 台付甕	ほぼ完成形	口 18.1 高 25.8 脚 9.5 脚 21.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	頸部は接合。口縁部は横ナデ、胴部から脚部は縦位・斜め・横位のハケ目(大部分は粗い目であるが、一部細かい部分あり)。内面も胴部・脚部にハケ目。	

## 1号掘立柱建物

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第10498 PL.33	779	土師器 鉢	1/4	口 21.8 高 7 底 5.5 底 6.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から体部はハケ目後ナデ、底部はヘラ削り。内面もハケ目後ナデ、口唇部にハケ目が残る。	
第10498 PL.33	780	土師器 甕	口縁部～胴部上位片	口 18	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部はナデ、頸部から胴部はハケ目後ナデ。内面は口縁部から頸部はハケ目(1cmあたり13～15本)、胴部はナデ。	
第10498 PL.33	781	土師器 甕	胴部片		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	胴部上半はハケ目(1cmあたり11～13本)、下半はヘラナデ、一部はヘラ磨き。内面はヘラナデ。	
第10498 PL.33	782	土師器 甕	底部～胴部下位	底 6.9	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	底部はヘラ磨き、胴部はヘラナデ後やや鈍なヘラ磨き。内面はハケ目(1cmあたり13～15本)後ヘラナデ。	

## 5号遺構外

採 掘 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第10598 PL.36	783	土師器 高杯	杯身底部～脚部中位		細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合、脚部に透孔が3箇所。外面はヘラ磨き、一部器面磨滅のため不鮮明。	

遺物観察表

種 別 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第10996 PL.36	784	土師器 高杯	脚部片	脚	18.1		細砂粒/良好/にぶい肌	脚部に杯身部を接合。脚部に透孔が4箇所。外面はへう磨き、器面磨減のため単位不鮮明。内面はへうナデ。	
第10996 PL.36	785	土師器 器台	受部片				細砂粒/良好/粗	受部に透孔。内外ともへう磨き。器面磨減のため詳細不鮮明。	
第10996 PL.36	786	土師器 脚付鉢	鉢身部1/2	口	15		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい肌	脚部と接合。口縁部上半は横ナデ、下半から底部はへう磨き。内面は全面へう磨き。	
第10996 PL.36	787	土師器 台付甕	1/3	口 脚	9.2 5.7	高 13.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい肌	脚部は胎付、脚部端部は内側に折り返し。口縁部は横ナデ、胴部から脚部上位はハケ目(1cmあたり5~7本)。脚部はへうナデ。	

(8. 縄文時代の出土遺物)

分類	特 徴	
A	中量の石英粗砂や黒・灰色礫粗砂と繊維を含むやや粗雑な胎土。	
B	少量の石英・結晶片岩・灰色礫・粗砂を含むやや緻密な胎土。	
C	多量の石英・結晶片岩の粗砂と少量の赤・灰色粗砂を含む緻密な胎土。	
D	多量の石英・結晶片岩の粗砂と少量の赤・灰色粗砂を含む緻密な胎土。	
E	多量の石英・角閃石粗砂と少量の灰色礫粗砂を含むやや緻密な胎土。	
F	中量の灰色粗細砂と少量の石英粗砂を含む緻密な胎土。	
G	中量の石英・角閃石・灰色礫粗砂を含む緻密な胎土。	
H	少量の石英、黒・灰色細砂を含む緻密な胎土。	
I	中量の石英、赤・灰色礫粗砂を含む緻密な胎土。	

種 別 PL.No.	No.	種 類 種 別	出土位置 残 存 率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第10996 PL.36	788	縄文土器 深鉢	口縁部片				A	L R 縄文を横位施文。内面横磨ぎ。	有尾式
第10996 PL.36	789	縄文土器 深鉢	口縁部片				A	附加条第1種 R L + R と L R + L を横位施文して羽状構成。内面横磨ぎ。	有尾式
第10996 PL.36	790	縄文土器 深鉢	胴部片				A	788 と同一個体。	有尾式
第10996 PL.36	791	縄文土器 深鉢	胴部片				A	附加条第1種 R L + L を横位施文。内面磨きに近い横磨ぎ。	有尾式
第10996 PL.36	792	縄文土器 深鉢	口縁部片				B	R L 縄文を横位施文。内面やや風化。	諸磯b式
第10996 PL.36	793	縄文土器 深鉢	口縁部片				C	波状口縁。R L 縄文を横位施文し、半截竹管の集合沈線文を施す。内面やや風化。	諸磯b式
第10996 PL.36	794	縄文土器 深鉢	口縁部片				C	波状口縁。半截竹管の集合沈線文を横位や渦巻状に施文。内面横磨ぎ。	諸磯b式
第10996 PL.36	795	縄文土器 深鉢	口縁部片				D	波状口縁。R L 縄文を横位施文し、半截竹管の集合沈線文を横・斜位に施す。内面横磨ぎ。	諸磯b式
第10996 PL.36	796	縄文土器 深鉢	胴部片				C	浮線文を横位多段に施し、その上面を含めて L R 縄文を横位施文。内面横磨ぎ。	諸磯b式
第10996 PL.36	797	縄文土器 深鉢	胴部片				C	R L 縄文を横・斜位に施文。内面やや風化。	諸磯b式
第10996 PL.36	798	縄文土器 深鉢	胴部片				C	794 と同一個体。	諸磯b式
第10996 PL.36	799	縄文土器 深鉢	口縁部片				C	波状口縁。半截竹管の集合沈線文を横位や渦巻状に施文。内面横磨ぎ。	諸磯c式
第10996 PL.36	800	縄文土器 深鉢	口縁部片				E	口縁に無文部を置き、単沈線により文様構成。内面磨き状の横磨ぎ。	堀之内1式
第10996 PL.36	801	縄文土器 深鉢	胴部片				E	単沈線による区画文を施す。内面磨き状の横磨ぎ。	堀之内1式
第10996 PL.36	802	縄文土器 深鉢	胴部片				E	単沈線による区画文を施す。内外面やや風化。	堀之内1式
第10996 PL.36	803	縄文土器 深鉢	胴部片				E	単沈線による区画文を施す。内面横磨ぎ。	堀之内1式
第10996 PL.36	804	縄文土器 深鉢	底部/4				F	L R 縄文を縦位施文し、沈線垂重文を施す。底面に木葉痕。内面横磨ぎ。	堀之内1式
第10996 PL.36	805	縄文土器 深鉢	口縁部片				G	口縁に8字状胎付文を施し、単沈線による区画文を施文。内面口縁に捻転胎付文と横位沈線文を施文。内面横磨ぎ。	堀之内2式 やや風化。
第10996 PL.36	806	縄文土器 深鉢	口縁部片				G	口縁に8字状胎付文を施し、沈線区画内に L R 縄文を充填。内面口縁に捻転胎付文と2条の横位沈線文を施文。内面横磨ぎ。	堀之内2式
第10996 PL.36	807	縄文土器 深鉢	胴部片				G	粗製土器。体部上半に斜位同輪状の粗い縦溝を調整痕を残す。内面風化。	堀之内2式
第10996 PL.36	808	縄文土器 深鉢	胴部片				G	沈線区画内に L R 縄文を充填。内外面風化。	堀之内2式
第10996 PL.36	809	縄文土器 深鉢	胴部片				G	いわゆる体部屈曲鉢。三角形区画内に L R 縄文を充填。内面横磨ぎ。	堀之内2式

挿入 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第10990 PL.36	810	縄文土器 深鉢	底部1/8				G	底面に副刻痕。内外面共に横走磨き。	堀之内2式
第10990 PL.36	811	縄文土器 深鉢	頸部片				G	横位の羽状沈線文を多段に構成。内面横走磨き。	加曾利B2式
第10990 PL.36	812	弥生土器 甕	口縁部片				H	口唇上面～口縁に細密なR L縄文を横位施文。内面丁寧な横走磨き。色調は黒灰色。	弥生中期
第10990 PL.36	813	弥生土器 甕	胴部片				I	L R縄文を横位施文。内面横走磨き。色調は鈍い黄褐色。	弥生中期
第10990 PL.36	814	割片石器 石鏃	略完形	長 (2.8)	厚 1.8	0.5 1.3	珪質頁岩		
第10990 PL.36	815	割片石器 石鏃	略完形	長 (2.8)	厚 2.8	0.3 2.1	黒色安山岩	先端部欠損。両面に押圧割離による2次加工を施し整形。	凹基有茎鏃
PL.36	824	割片石器 打製石斧	完形	長 14.7	厚 7.5	2.2 229.4	黒色頁岩	大形。撥形を呈する。両側縁および基部を丁寧に加工する。	
PL.36	825	割片石器 打製石斧	完形	長 8.9	厚 6.0	2.0 108.8	砂岩	対部は急斜度の2次加工を施し。片対状を呈する。側縁の一部の磨滅が顕著。裏面に自然面を大きく残す。	
PL.36	826	割片石器 打製石斧	完形	長 11.0	厚 6.3	1.6 102.7	黒色頁岩	両側縁に挟りもち、分銅形を呈する。対部やや磨滅。	
PL.36	827	割片石器 打製石斧	完形	長 9.9	厚 7.2	2.8 217.4	黒色頁岩	両側縁に挟りもち、分銅形を呈する。挟り内部に潰れと磨滅が見られる。	

遺物観察表

表29 非掲載遺物集計表

(g)

区	層位・面	遺物番号	遺物種	土師器				須恵器				埴輪		灰持陶器				
				小型製品	中型製品	大型製品	不明	小型製品	中型製品	大型製品	不明	円蓋類	形象	椀皿	瓶類	不明	瓦	
1-1	1面	1	建物跡下				2											
1-1	1面	1	灰持土師			10												
1-1	1面	1	カマド															
1-1	1面	1	建物排水片															
1-1	1面	1	建物礎															
1-1	1面	1	建物扉方															
1-1	1面	1	建物															
1-1	1面	1	灰持				37											
1-1	1面	1	土器															
1	3面	1	溝			37	31					448	55					
1	3面	1	溝(溝内(東))				10											
1	3面	2	溝			115	163	30			46							
1-1	1面	17	溝								8							
1-1	1面		灰口															
1-1	1面		灰口溝群															
1-1	1面	1	壺															
1-1	1面	6	壺															
1-1	1面	9	壺															
1-1	1面	12	壺															
1-1	1面	18	壺															
1-1	1面	19	壺															
1	3面	21	壺群															
1-1	1面	23	壺															
1-1	1面	1	切敷															
1-1	1面		A形溝															
1-1	1面		縁石面															
1-1	1面							5										
1-1	2面	2	壺穴					8										
1-1	2面	3	坪															
1-1	2面	10	土版															
1-1	2面	21	溝					3										
1-1	2面		溝群					9										
1-1	2面		土版上集石															
1-1	2面	2	土版															
1-1	2面		土版										243					
1-1	2面		土版										62					
1-1	2面		土版										409					
1-1	2・5面					10	12	70										
1-1	3面	2	土版															
1-1	3面	2	土版															
1-1	3面	2	土版			5	317	83	151	26		605	5932	744				
1-1	3面	2	土版門柱ノビット										37					
1-1	3面	2	土版門柱															
1	3面		虎口S.P.2			3		4										
1-1	3面	5	溝				16											
1-1	3面	6	溝			22	28											
1-1	3面	7	溝					3										
1-1	3面	8	溝				14											
1-1	3面	9	溝			58	171	9				154						
1-1	3面	10	溝			9	53	4										
1-1	3面	11	溝			6	39	6				42						
1-1	3面	14	溝			5												
1-1	3面	15	溝			11	158	50										
1-1	3面	23	溝			8	150	439	185	48		158	678	60				
1-1	3面	25	溝				76	19			34		1564	69				
1	3面	301(1)	土版			6		8					81					
1	3面	302(2)	土版					9										
1	3面	303(3)	土版					4										
1-1	3面	304(4)	土版															
1	3面	305(5)	土版					3	8									
1	3面	305・306	土版															
1-1	3面	306(6)	土版															
1	3面	306(8)	土版															
1-1	3面	306(9)	土版															
1	3面	310(10)	土版					6										
1	3面	317(17)	土版					4										
1-1	3面	20	土版					26	9									
1-1	3面	40	土版						3									
1-1	3面	42	土版					30	63									
1-1	3面	52	土版						13									
1-1	3面	59	土版						27									
1-1	3面	62	土版								41							
1-1	3面	65	土版					8										
1-1	3面	69	土版															
1-1	3面	71	土版							46								
1-1	3面	101	土版					6										
1-1	3面	105	土版					3										
1-1	3面	106	土版				17											
1-1	3面	121	土版			4		11										
1-1	3面	126	土版				2	7										
1-1	3面	133	土版					22										
1-1	3面	141	土版															
1-1	3面	148	土版				83	61	14			70						
1-1	3面	154	土版					4	2									
1-1	3面	157	土版				18											
1-1	3面	203	土版								78							
1-1	3面	204	土版															
1-1	3面	205	土版				61	6										
1-1	3面		土版				5											

遺物観察表

区	掘出 面	遺物番号	遺物種	土器類				須恵器				漆輪		其他陶器				
				小型 製品	中型 製品	大型 製品	不明	小型 製品	中型 製品	大型 製品	不明	円筒類	形 象	椀 皿	瓶 類	不明	瓦	
1-1	3面	207	土灰			163	22											
1-1	3面	208	土灰			12												
1-1	3面	209	土灰		20													
1-1	3面	211	土灰		9	26	8											
1-1	3面	212	土灰			93	33											
1-1	3面	17-19	土灰			33	14											
1-1	3面	202-209	土灰			20	8											
1-1	3面	221	土灰				6											
1-1	3面	27	ビッド															
1-1	3面	36	ビッド			4												
1-1	3面		B型土	18														
1-1	3面		B型土				2											
1-1	3面		北下土		14	128	5											
1-1	3面		縄文土				8											
1-1	3面		前平土	4			2											
1-1	3面		前平土中				5											
1-1	3面						68	28										
1-1	4面	28	溝				1		1									
1-1	4面		As-4上			102	28	7		45	3							
1-1	4面		B群石下			18	6	5			2							
1-1	4面		北部			29	10											
1-1	4面					203	86		33					1				
1-1	4面					215	51						33					
1-1	5面	1	住居		28	433	92											
1-1	5面	2	住居		35	969	203											
1-1	5面	3	住居		542	4923	1874											
1-1	5面	4	住居		355	3271	1304											
1-1	5面	5	住居		243	1660	985			38								
1-1	5面	6	住居		708	3435	724											
1-1	5面	7	住居		663	3100	1115											
1-1	5面	8	住居		118	1120	718											
1-1	5面	9	住居		231	2397	594											
1-1	5面	1個立	掘立(P 2)			72												
1-1	5面	1個立	掘立(P 2・3)				16											
1-1	5面	1個立	掘立(P 8)			83												
1-1	5面	1	掘立(P 9)															
1-1	5面	1	竪穴		18	220	101											
1-1	5面		S.D			42	48											
1-1	5面	201	土灰			10	8	18										
1-1	5面	213	土灰			130	187	17										
1-1	5面	219	土灰			8	47	66										
1-1	5面	220	土灰			3	7											
1-1	5面	202・208	土灰			21	52											
1-1	5面	59	ビッド			8												
1-1	5面	64	ビッド			63												
1-1	5面	1	焼土			23												
1-1	5面		縄文土	148	1133	512												
1-1	5面		東c 土灰上			8	6											
1-1	5面		東c 前平土	27	233	26												
1-1	5面		南c 前平土			88	5											
1-1	5面		前東			324	79											
1-1	5面					587	58					13						
1-1	5面			9	336	1435	369											
1-1			土原							127								
1-1			土原新石期			1												
1-1			新石期															
1-1			S-c 土															
1-1			土															
1-1			土															
1-1			土	3	101	114	119	53		22		292						
1-2	1面		掘立1															
1-2	1面		掘立2															
1-2	1面		As-A下															
1-3	1面		掘立4															
1	1面		As-A下 灰土層			17	1											
1	4面		As-B下 黒色土	4														
1	3面	4	ビッド				1											
1	3面		縄文土			88	22	3		76								
1	3面		縄文土			11		2										
1	3面		調査区 西側トレンチ				6			67		103						
1			掘立															
1			全体			16												
2-1	1面		掘立5															
2-1	1面		土															
2-2	1面		土															
2-2	2面		土									47						
2	1面		土				9											
2	1面		土				4											
3	1面		土				51	4										
3	1面		前東															
3	1面		武蔵															
4	1面	4	堀															
4	1面	1	土															
5	1面	1	溝															
5	1面		土															
5		試掘18	トレンチ	48.13		28.61	91	19.27										
5			北壁6															
			計	122	4,517	28,665	10,293	278	0	1,365	5	9,760	873	1	0	0	0	0



# 写真図版



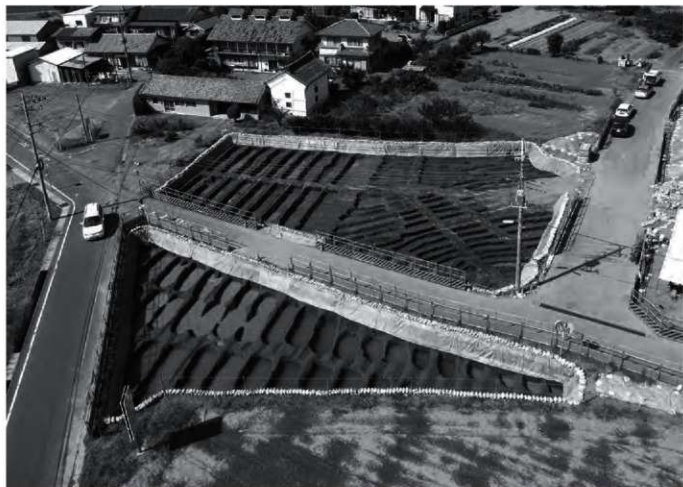




1 1-1区東部1面(上側東)



2 1-1区中～南西部1面(上側東)



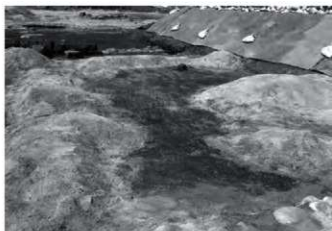
1 1-2・3区1面復旧溝群(南より)



2 1-1区東部1面(北より)



3 1区1号屋敷(上側東、As-A上面)



4 1区1号屋敷庭As-A清掃状況(南より)



5 1区1・2号建物土壁遺存状況(北西より)



1 1区1号建物(西より)



2 1区1号建物南壁遺存状況(北西より)



3 1区1号建物竈と排水升(北より)



4 1区1号建物竈と水裏(南西より)



5 1区1号建物礎石(49)出土状況



6 1区1号建物ダイドコロ付近遺物出土状況



7 1区2号建物全景(北西より)



8 1区3～5号土坑全景(南より)



1 1区1号井戸付近全景(南より)



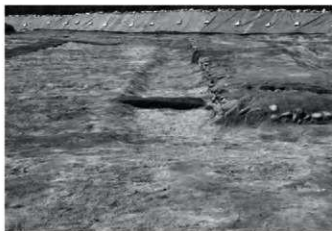
2 1区1号井戸底部枡材出土状況(西より)



3 1区3号建物全景(西より)



4 1区1号土塁全景(西より)



5 1区1号道路(南より、As-A上)



6 1区1号溝全景(北より)



7 1区1号畑全景(南より)



8 1区1号畑足跡(南東寄り)



1 1-1区中・北西部全景(東より)



2 1区32号畑と9号復旧溝群(横位)(北より)



3 2区東部全景(西より)



4 2区1号復旧溝群と1号畑(軽石部)(北東より)



5 2-2区全景(北東より)



1 2区1号復旧畑全景(南西より)



2 2区2号復旧畑全景(東より)



3 3区全景(東より)



4 3区北西部(南西より)



5 3区1号土坑全景(東より)



1 4区全景(東より)



2 4区2号復旧畑As-A残存状況(西より)



3 4区2号復旧畑全景(西より)



4 4区5号復旧畑西部(南より)



5 4区5号復旧畑東部(南より)





1 4区6号復旧畑(東より)



2 4区7号復旧畑(南より)



3 5区全景(東より)



4 5区3号復旧畑(東より)



5 5区1・2号道路、2号溝全景(南より)



1 1-1区東部・北部2面(上側東)



2 1-1区南西寄り2面(上側東)



1 1区2・3号溝全景(西より)



2 1区19号溝全景(東より)



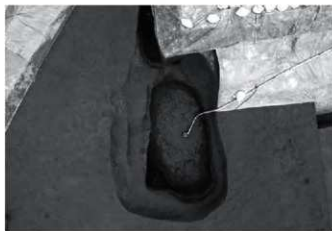
3 1区23号畑全景(南より)



4 1区3号井戸全景(西より)



5 1区4号井戸全景(東より)



6 1区2号竈穴全景(上側東)



7 1区2号土塁上土層断面(北東より)



8 1区2号土塁近世面表出状況ビ(東より)



1 1-1区東部・北部3面(北西より)



2 1-1区中・西南部3面(南西より)



1 1区館北部(東より)



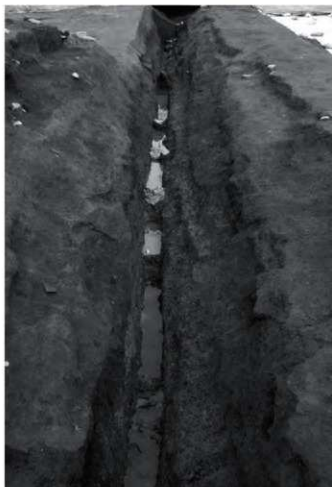
2 1区館中央・中西部(東より)



3 1区館東部(西より)



4 1区館中南・南西部(東より)



5 1区5号溝中部全景(西より)



6 1区5号溝西部と橋脚柱穴(東より)



1 1区5号溝・土塁土層断面(東より)



2 1区5号溝南壁除土層断面(東より)



3 1区10号溝(左)・11号溝(右)全景(西より)



4 1区11号溝埋戻土橋(西より)



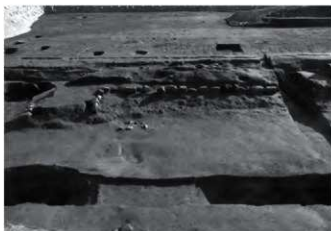
5 1区11号溝白磁皿出土状況(南東より)



6 1区12号溝全景(南より)



1 1区2号土塁全景(南より)



2 1区2号土塁中東部(北より)



3 1区2号土塁と土塁痕跡(手前)(東より)



4 1区2号土塁中東部礎崩落状況(西より)



5 1区2号土塁石列(北西より)



6 1区2号土塁突出部(北西より)



7 1区2号土塁土層断面(北東より)



8 1区館門(西より)



1 1区館虎口全景(上側北)



2 1区館門(北より)



3 1区館門下部ビット(西より)



4 1区館北部土坑・ビット群(上側南)



5 1区館中央・中西部土坑ビット群(北より)





1 1区館南東部土坑ピット群(上側南)



2 1区館南部東寄りピット群(東より)



3 1区41号土坑周辺土坑・ピット群(東より)



4 1区106・107号土坑土層断面(西より)



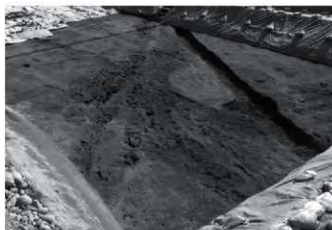
5 1区148号土坑全景(南より)



6 1区306号土坑周辺土坑ピット群(北より)



7 1区52・53号土坑全景(南より)



8 1区29号溝全景(北西より)



1 1-1区東部4面全景(南より)



2 1区27号溝全景(北西より)



3 1区40号畑全景(西より)



4 1区41号畑全景(北より)



5 1-2区4面全景(南より)



1 1-1区中央・中南部5面全景(南南東より)



2 1-1区南東隅部5面(西より)



3 1区1号住居掘り方全景(南より)



4 1区2号住居遺物出土状況(西より)



5 1区2号住居炭化材出土状況(南西より)



1 1区2号住居全景(西より)



2 1区2号住居掘り方全景(南より)



3 1区3号住居遺物出土状況(北より)



4 1区3号住居遺物出土状況(南西より)



5 1区3号住居全景(西より)



6 1区3号住居土坑1土層断面(西より)



7 1区3号住居掘り方全景(西より)



8 1区4・5号住居出土遺物(西より)



1 1区4号住居全景(北より)



2 1区4号住居掘り方全景(西より)



3 1区5号住居全景(北西より)



4 1区5号住居掘り方全景(南より)



5 1区5号住居床上・床下土層断面(西より)



6 1区6号住居遺物出土状況(西より)



7 1区6号住居灰遺存状況(北東より)



8 1区6号住居中北部灰堆積状況(西より)



1 1区6号住居全景(西より)



2 1区6号住居貯蔵穴付近(北東より)



3 1区6号住居掘り方全景(西より)



4 1区7号住居遺物出土状況(南東より)



5 1区7号住居境土面分布状況(北西より)



6 1区7号住居全景(南東より)



7 1区7号住居掘り方全景(南西より)



8 1区8号住居南半部全景(北より)



1 1区8号住居北半部全景(南東より)



2 1区8号住居南半部掘り方等全景(東より)



3 1区9号住居遺物出土状況(南より)



4 1区9号住居全景(南より)



5 1区9号住居掘り方全景(北より)



6 1区1号掘立柱建物全景(南より)



7 1区1号竪穴遺物出土状況(東より)



8 1区1号竪穴遺物出土状況(東より)

1区1面1号復旧溝



1 (1/3)

1区1面2号復旧溝



2 (1/4)

3区1面1号土坑



28(1/3) 29(1/3) 30(1/3)

1区1面上遺構外



5 (1/5)



17(1/3)



20(1/3)



9 (1/5)



18(1/3)



19(1/3)



21(1/3)

2区1面上遺構外



25(1/4)

26(1/3)

3区1面上遺構外



32(1/3)

33(1/3)

34(1/3)



35(1/3)



36(1/3)

37(1/3)

4区1面上遺構外



38(1/4)



43(1/3)



44(1/3)



39(1/3)



40(1/3)



41(1/3)



46(1/3)



45(2/3)

47(1/3)



48(1/3)



49(1/3)



50(1/3)

5区1面上遺構外



51(2/3)

52(1/3)



53(1/3)



54(1/3)



55(1/3)



56(1/3)



57(1/3)



58(1/3)



59(1/3)



60(1/3)

1区1面1号建物(1) 礎石



61(1/9)



62(1/9)



67(1/9)



77(1/9)



79(1/9)



81(1/9)



82(1/9)



124(1/9)



86(1/9)



88(1/9)



118(1/9)

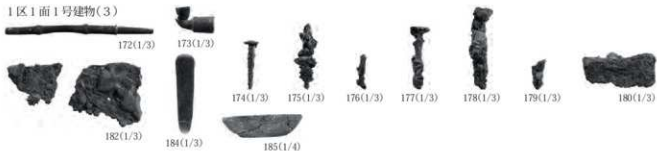


# PL.24

1区1面1号建物(2)



## 1区1面1号建物(3)



## 1区1面2号建物



## 1区1面ミソグラカ



## 1区1面建物一括



## 1区1面1号土器



## 1区1面1区1号井戸



# PL.26

## 1区1面屋敷内



285(1/4)



283(1/4)



290(1/5)



292(1/5)



286(1/4)



293(1/3)



294(2/3)



295(1/3)



296(1/3)



297(1/3)



305(1/3)



298(1/3)



299(1/3)



300(1/3)



301(1/3)



302(1/3)



303(1/3)



304(1/3)



306(1/3)



307(1/3)



309(1/3)



310(1/4)

## 1区1面6号土坑



318(2/3)

## 1区1面1号溝



313(1/5)



312(1/4)

## 1区2面2号溝



332(1/4)

## 1区1面17号溝



315(1/5)



317(1/5)

## 1区2面3号井戸



326(1/7)

## 1区2面4号井戸



328(1/7)

## 1区2面集石



344(1/5)



347(1/5)



352(1/7)

## 1区2面洪水層



355(1/3)

## 1区2面道構外



356(1/4)



357(1/4)



358(1/4)



359(1/4)



360(1/4)



361(1/4)



362(1/5)



363(2/3)



364(2/3)



365(2/3)



366(1/3)

## 1区3面2号土翠



385(1/4)



391(1/4)



392(1/4)



393(1/4)



394(1/4)



397(1/3)



396(1/3)



370(1/4)



371(1/4)



372(1/4)



373(1/4)



374(1/4)



375(1/4)



376(1/4)



377(1/4)



378(1/4)



379(1/4)



367(1/4)



368(1/4)



380(1/4)



381(1/4)



383(1/4)



369(1/4)



382(1/4)



386(1/4)



387(1/4)



384(1/4)



388(1/4)



389(1/4)



398(1/3)



407(1/4)



400(1/9)



405(1/7)



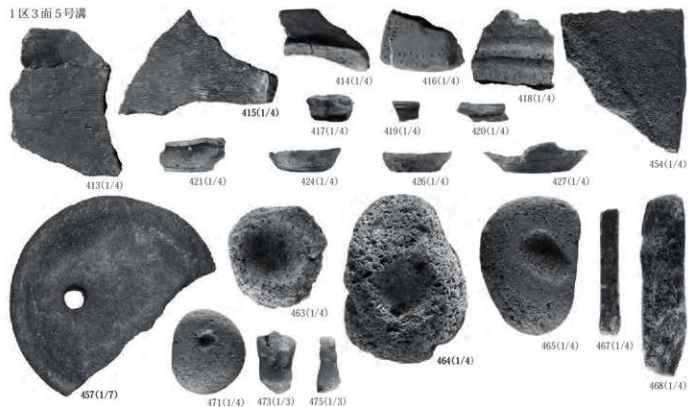
401(1/9)



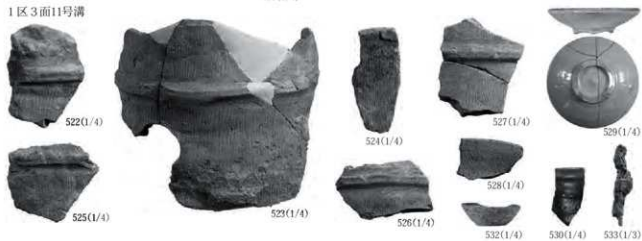
411(1/9)

## 1区3面門

1区3面5号溝



1区3面11号溝



1区3面6号溝



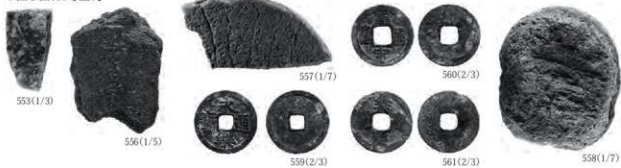
1区3面8号溝



1区3面9号溝



1区3面128号土坑



1区3面141号土坑



1区3面122号土坑



1区3面62号土坑



1区3面33号ピット



1区3面40号土坑



1区3面57・58号土坑



1区3面45号土坑



1区3面148号土坑



1区3面195号土坑



569(1/3)

1区3面遺構外



# PL.30

1区5面1号住居



609(1/4)

1区5面2号住居



610(1/4)



611(1/4)



613(1/4)



614(1/4)



612(1/4)

1区5面3号住居(1)



615(1/4)



616(1/4)



617(1/4)



618(1/4)



619(1/4)



620(1/4)



621(1/4)



622(1/4)



623(1/4)



624(1/4)



625(1/4)



626(1/4)



630(1/4)



627(1/4)



629(1/4)



628(1/4)



632(1/4)



631(1/4)



635(1/4)



636(1/4)



633(1/4)



634(1/4)

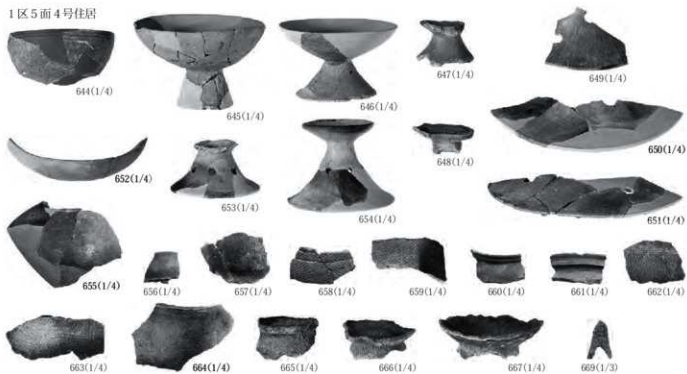


637(1/4)

1区5面3号住居(2)



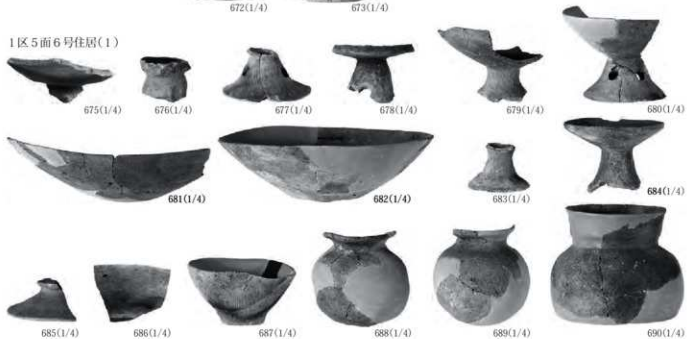
1区5面4号住居



1区5面5号住居



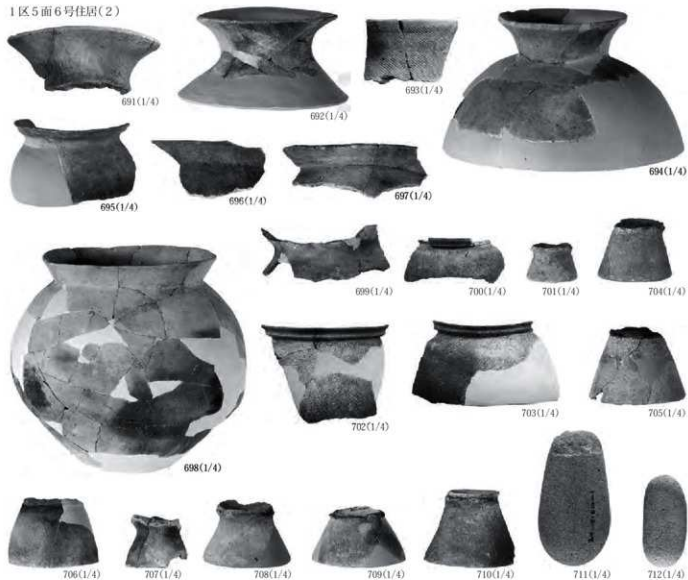
1区5面6号住居(1)



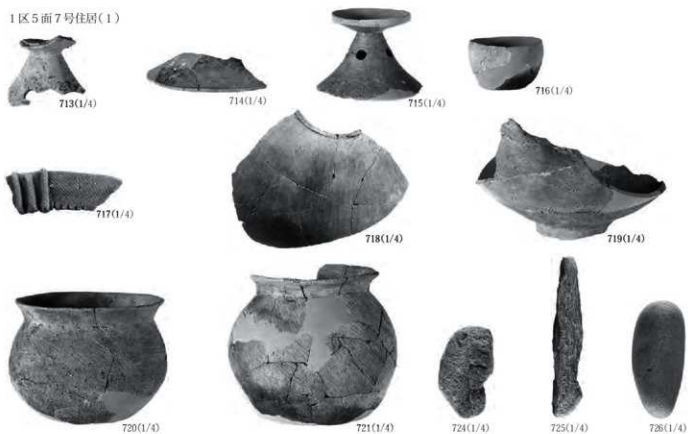


# PL.32

## 1区5面6号住居(2)



## 1区5面7号住居(1)



## 1区5面7号住居(2)



## 1区5面8号住居



## 1区5面9号住居



## 1区5面1号掘立柱建物



# PL.34

1区5面1号整穴住居(1)



## 1区5面1号竖穴住居(2)



# PL.36

1区5面遺構外



783(1/4)



784(1/4)



785(1/4)



786(1/4)



787(1/4)

1区4面28号溝



608(1/3)

縄文・弥生時代



788(1/4)



789(1/4)



790(1/4)



791(1/4)



792(1/4)



793(1/4)



794(1/4)



795(1/4)



796(1/4)



797(1/4)



798(1/4)



799(1/4)



800(1/4)



801(1/4)



802(1/4)



803(1/4)



804(1/5)



805(1/4)



806(1/4)



807(1/4)



808(1/4)



809(1/4)



810(1/5)



811(1/4)



812(1/4)



813(1/4)



814(1/2)



815(1/2)



824(1/4)



825(1/4)



826(1/4)



827(1/4)

## 抄 録

書名ふりがな	しものみやたかままいせき
書名	下之宮高俣遺跡
副書名	国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	619
編著者名	石守 晃・長谷川博幸・大木紳一郎・村田敬一
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20160318
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	しものみやたかままいせき
遺跡名	下之宮高俣遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんざわぐんたまむらまちおおあざしものみや
遺跡所在地	群馬県佐波郡玉村町大字下之宮11-2、12-1・2、15-1・5~11、29-1・4~6、32-1~8、33-1、43、45、46、48-2、238、239、240、241、242、230・233・234、245、246、247番地
市町村コード	10464
遺跡番号	玉村町 0704
北緯(世界測地系)	361812
東経(世界測地系)	1390854
調査期間	20101001-20130430
調査面積	18,386
調査原因	道路建設
種別	生産/集落/館/屋敷
主な時代	古墳時代/平安/中世/近世
遺跡概要	弥生・縄文・土器・石器/古墳-竪穴住居9+掘立柱建物1+溝12+土坑5+ピット15+焼土1-土師器・石製品/平安-溝4+土坑1+畑11-石製品・金属製品/中世-館1+土塁1+溝10溝53+橋脚1+土橋1+門1土坑93+ピット188+段差1-土器・陶磁器・石製品・金属製品/近世(天明3年以前)-竪穴2+溝8+井戸2+土坑1+畑23+集石1-/近世(天明3年)-屋敷1+礎石建物2+建物痕1+土塁1+溝3+道路2+土坑5+畑49+竹藪1+集石1-土器・陶磁器・金属製品+石製品+礎石/近世(天明3年以降)-溝7+道路4+土坑4+復旧溝群15+復旧畑2-土器・陶磁器・石製品・鉄製品
特記事項	古墳時代前期の初段を主体とした灰が厚く堆積した竪穴住居や32個体の土師器を出土した祭祀遺構と認識される竪穴遺構、15世紀と判断される中世館の明確な構造を示す虎口遺構群、天明3年の屋敷を含む集落景観を把握し得る遺構群を調査した。
要約	本遺跡は利根川右岸の前橋台地上に立地する。古墳時代前期の現利根川の位置に在った中小河川の自然堤防上に構築された集落址、平安時代末の畑群、15世紀の館跡等の中世遺構群、寛保2(1742)年の大洪水等の洪水砂等で覆われた畑や復旧畑、天明3(1783)年の浅間山の大量火に伴う軽石や泥流で覆われた畑、竹藪等の遺構群や、その復旧等に伴う復旧溝群や復旧畑等の遺構群を調査した。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第619集

## 下之宮高俣遺跡

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備  
(活力創出基盤整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成28(2016)年3月8日 印刷

平成28(2016)年3月15日 発行

編集・発行/公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田1784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/株式会社開文社印刷所

---